兵庫県文化財調査報告　第363冊

揖保郡太子町所在

鵤石田遺跡

2009（平成21）年3月

兵庫県教育委員会

揖保郡太子町所在

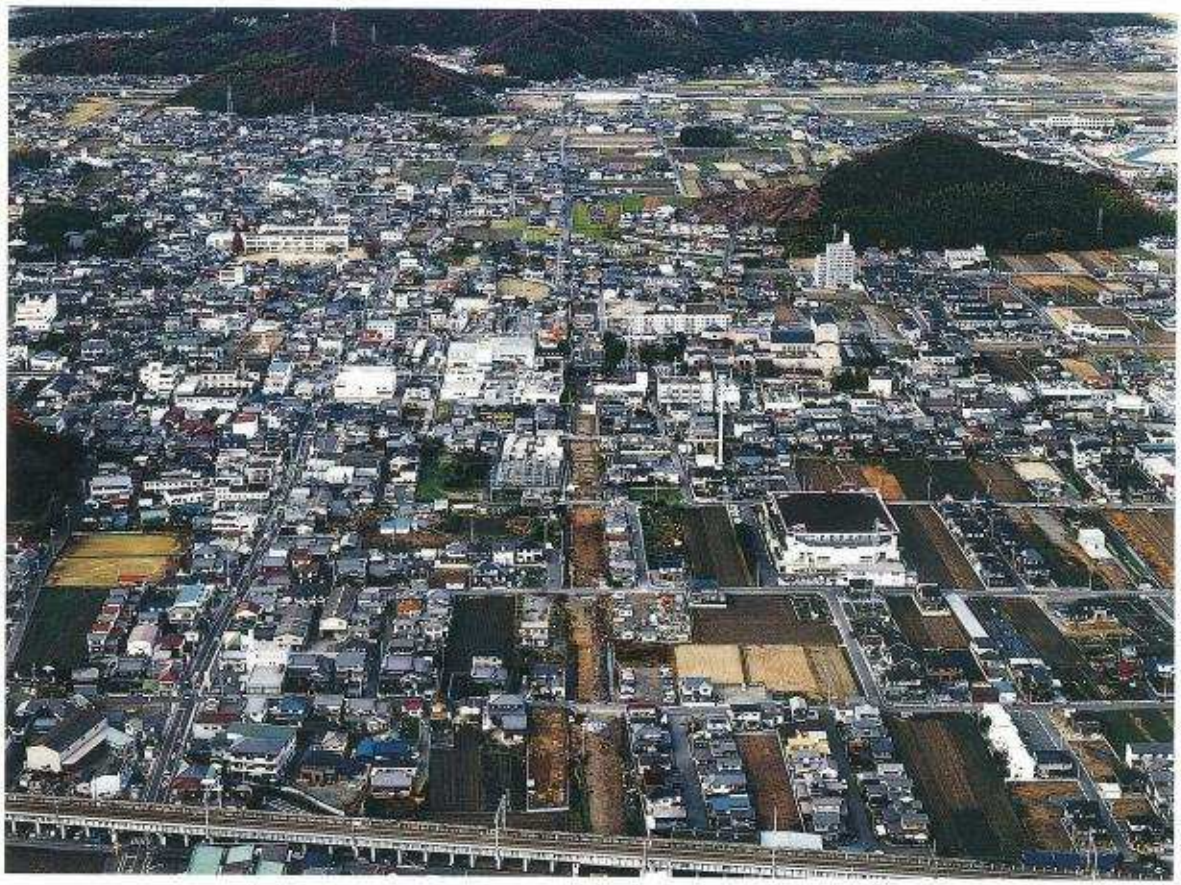
鵤石田遺跡

－主要地方道太子御津線（街路龍野線）都市計画街路事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ－

2009（平成21）年3月

兵庫県教育委員会

遺跡遠景（南西から）



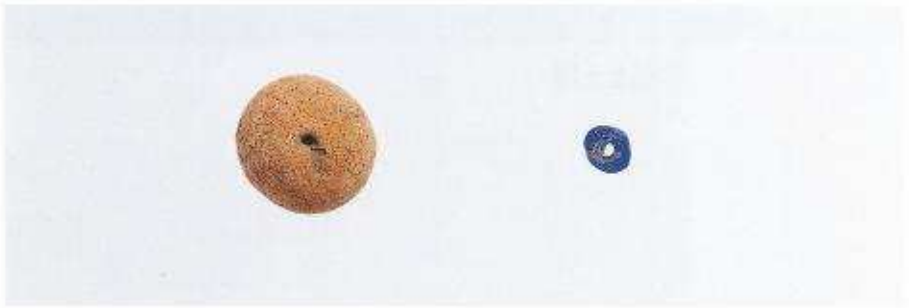
遺跡遠景（南から）

1区全景（北から）

出土土器

出土土器

鵜石田庄内式土器



出土玉類

例　言

1．本書は揖保郡太子町鵤に所在する鵤石田遺跡の発掘調査報告書である。

2．鵤石田遺跡の調査は、兵庫県西播磨県民局県土整備部龍野土木事務所が計画・施工する主要地方道太子御津線（街路龍野線）都市計画街路事業に伴うものである。

3．分布調査は平成５年度に、確認調査は平成12年度に、本発掘調査は平成13・14年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査担当した。

4．本発掘調査は、平成13年度は渡辺　昇・松岡千寿が、平成14年度は平田博幸・長濱誠司が担当した。

5．調査で使用した方位は国土座標第Ⅴ系を使用し、水準は国土交通省設定の２級基準点を使用した。

6．基準点の測量ならびに平面図の図化は㈱エイトコンサルタント神戸営業所に委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。

7．遺構写真は調査担当者が撮影した。図版１の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。それ以外の空中写真は㈱エイトコンサルタント神戸営業所に委託して撮影したものである。

8．整理作業は、平成19・20年度の２ヵ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。

9．執筆は平成14年度の調査経過と調査結果を長濱が、第Ⅴ章は奥田　尚氏に玉稿を賜った。それ以外は渡辺が行い、編集は前山三枝子・加藤裕美の協力を得て渡辺が行った。

10．本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館（加古郡播磨町大中500）ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館（明石市魚住町清水立合池の下630－１）に保管している。ご活用ください。

11．発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご指導を得ました。感謝致します。（敬称略）

太子町教育委員会・三村修次・海野浩幸・奥田　尚

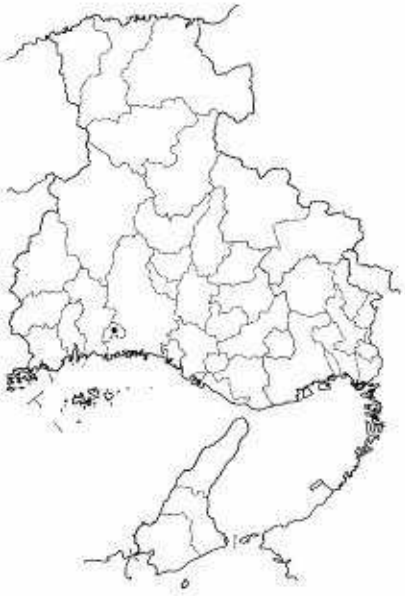


図１　太子町の位置

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1
1．調査に至る経緯
2．確認調査の経過と結果
3．平成13年度本発掘調査の経過
4．平成14年度本発掘調査の経過
5．整理作業の経過
Ⅱ　位置と環境……6
Ⅲ　調査結果……11
1．平成13年度の調査結果
2．平成14年度の調査結果
Ⅳ　遺物……13
Ⅴ　土器の表面にみられる砂礫……40
Ⅵ　おわりに……44

挿 図 目 次

図1　太子町の位置……i
図2　調査風景……2
図3　調査風景……3
図4　整理作業風景……4
図5　確認作業地点と本調査の範囲……5
図6　上構遺跡溝と出土庄内甕……6
図7　鵤石田遺跡の位置と周辺の遺跡……7
図8　黒岡神社古墳と石棺……8
図9　宝林寺北遺跡……10
図10　太子町周辺の庄内甕出土遺跡の分布……45
図11　姫路平野の庄内甕出土遺跡の分布……46
図12　播磨南西部の庄内期集落と前期古墳……47

表 目 次

表1　周辺の遺跡一覧……9
表2　土器の表面にみられる砂礫種……42
表3　遺物観察表……49

図 版 目 次

図版 1	13年度調査区平面図
図版 2	13年度調査区土層断面図
図版 3	西壁遺構土層断面図
図版 4	SD06土層断面図
図版 5	SD08実測図
図版 6	SD06土器出土状態実測図
図版 7	14年度調査区平面図
図版 8	14年度調査区土層断面図
図版 9	土器実測図（1）
図版10	土器実測図（2）
図版11	土器実測図（3）
図版12	土器実測図（4）
図版13	土器実測図（5）
図版14	土器実測図（6）
図版15	土器実測図（7）
図版16	土器実測図（8）
図版17	土器実測図（9）
図版18	土器実測図（10）
図版19	土器実測図（11）
図版20	土器実測図（12）
図版21	土器実測図（13）
図版22	土器実測図（14）
図版23	土器実測図（15）
図版24	土器実測図（16）
図版25	土器実測図（17）
図版26	土器実測図（18）
図版27	土器実測図（19）
図版28	土器実測図（20）
図版29	土器実測図（21）
図版30	土器実測図（22）
図版31	石器実測図

写真図版目次

巻頭図版 1	上	遺跡遠景（南西から）
	下	遺跡遠景（南から）
巻頭図版 2		1区全景（北から）
巻頭図版 3		出土土器

巻頭図版4	上	出土土器
	中	鵜石田庄内式土器
	下	出土玉類
写真図版1		空中写真（国土地理院撮影）
写真図版2		鵜石田遺跡空中写真（平成13年度調査地区）
写真図版3	上	遺跡遠景（南西から）
	下	遺跡遠景（北東から）
写真図版4	上	遺跡遠景（北から）
	下	遺跡遠景（南から）
写真図版5	上	遺跡遠景（南西から）
	下	遺跡遠景（北西から）
写真図版6	上	遺跡空中写真（北西上空から）
	下	遺跡空中写真（南東上空から）
写真図版7	上	1区全景（南、東南遺跡から）
	下	1区全景（北から）
写真図版8		1区全景（北から）
写真図版9	上	1区全景（南から）
	下	1区全景（北から）
写真図版10	上	1区調査区北壁
	中	瓦窯跡（南から）
	下	瓦窯跡（東から）
写真図版11	上	SK02断面（東から）
	中	SK03（南から）
	下	SX03アゼ（南から）
写真図版12	上	SD06　1－2区間アゼ（南から）
	中	SD06　2－3区間アゼ（南から）
	下	SD06西壁
写真図版13	上	SD06全景（南から）
	下	SD06全景（北から）
写真図版14	上	SD06土器出土状態（南から）
	下	SD06土器出土状態（北東から）
写真図版15		SD06遺物出土状態
写真図版16		SD06遺物出土状態
写真図版17	上	SD08（南西から）
	中	SD12（南から）
	下	調査風景
写真図版18	上左	調査区全景（1）（北から）
	上右	調査区西壁（南東から）
	下左	調査区全景（2）（南から）
	下右	流路とSD01（1）（南から）
写真図版19	上上左	流路とSD01（2）（南から）
	上上右	SD02（南から）

	上下左	流路・SD01断面（南から）
	上下右	SD02断面（南から）
	下	流路内土器出土状況
写真図版20		出土土器（1）
写真図版21		出土土器（2）
写真図版22		出土土器（3）
写真図版23		出土土器（4）
写真図版24		出土土器（5）
写真図版25		出土土器（6）
写真図版26		出土土器（7）
写真図版27		出土土器（8）
写真図版28		出土土器（9）
写真図版29		出土土器（10）
写真図版30		出土土器（11）
写真図版31		出土土器（12）
写真図版32		出土土器（13）
写真図版33		出土土器（14）
写真図版34		出土土器（15）
写真図版35		出土土器（16）
写真図版36		出土土器（17）
写真図版37		出土土器（18）
写真図版38		出土土器（19）
写真図版39		出土土器（20）
写真図版40		出土土器（21）
写真図版41		出土土器（22）
写真図版42		出土土器（23）
写真図版43		出土土器（24）
写真図版44		出土土器（25）
写真図版45		出土土器（26）
写真図版46		出土土器（27）
写真図版47		出土土器（28）
写真図版48		出土土器（29）
写真図版49		出土土器（30）
写真図版50		出土土器（31）
写真図版51		出土土器（32）
写真図版52		出土土器（33）
写真図版53		出土土器（34）
写真図版54		出土土器（35）
写真図版55		出土石器（36）

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯

兵庫県揖保郡太子町鵤は旧国道2号線と国道179号線の合流する交差点である。また、東西方向の主軸となる2号線と南北方向の基軸となる県道太子御津線の交点となり、渋滞することが多々あった。そのことから、兵庫県土木部龍野土木事務所（現兵庫県西播磨県民局県土整備部龍野土木事務所）では、道路改良事業が計画された。現道東側に新たな路線が計画された。

計画に伴って平成5年度に龍野土木事務所から調査依頼があり、分布調査が実施された。本事業計画地は法隆寺領鵤荘の範囲内に含まれており、周知の埋蔵文化財包蔵地になっている。分布調査の結果、広範囲に遺物が採集された。調査は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査主体となり、調査第3班長濱誠司・高井治巳が担当した。

分布調査の結果を基に平成7年度に調査可能な地点について確認調査が行われ、全面調査の範囲が確定した。この時点では鵤石田遺跡の範囲は条件が整っておらず、確認調査は実施されていない。鵤石田遺跡の南側に位置する東南遺跡の調査範囲が示され、平成11・12年度に本発掘調査が実施されている。平成12年度の本発掘調査時に未確認調査地点の用地が解決したので、本調査に合わせて確認調査が実施された。調査は埋蔵文化財調査事務所が調査主体となり、調査第4班　村上泰樹・篠宮　正が担当した。確認調査の結果、東南遺跡が面的に広がっており、国道2号線まで遺跡の存在が確認された。

平成13年度に東南遺跡として本発掘調査を実施した。北側から1区2区3区として調査を行ったところ、1区と2区で遺跡の性格が大きく異なることが判明した。旧西国街道の南北で変わっており、これは周知の埋蔵文化財包蔵地の遺跡範囲と合致する。そのことから、平成13年度の1区についてのみ鵤石田遺跡と改めることとした。

鵤石田遺跡はさらに北側に延びているが、用地買収の都合から翌平成14年度に国道2号線までの本発掘調査を実施した。

2．確認調査の経過と結果

平成7年度の確認調査では、用地買収などの理由から町道南側までを対象としていた。その結果を受けて、平成11・12年度に東南遺跡として本発掘調査を実施してきた。北側は周知の埋蔵文化財包蔵地でもあり、分布調査の結果からも確認調査の必要性が考えられていた。

そのことから、用地が解決した平成12年度に確認調査を実施した。東南遺跡の本発掘調査と平行して確認調査を行った。調査の結果、全域で遺構面・包含層が確認されたので、本発掘調査を実施することとなった。調査は平成12年7月18日から8月17日までの間行った。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長		寺内幸治
企画調整班	主任調査専門員	井守徳男
	主査	高瀬一嘉

		課付	稲田　毅
	総務課	課長	森　俊雄
	調査第４班	調査専門員	西口和彦
調査担当	調査第４班	主査	村上泰樹
		主査	篠宮　正
		調査参加者	小谷義男・森崎由起子・覚野郁子・山内千夏

作業委託　株式会社神崎組

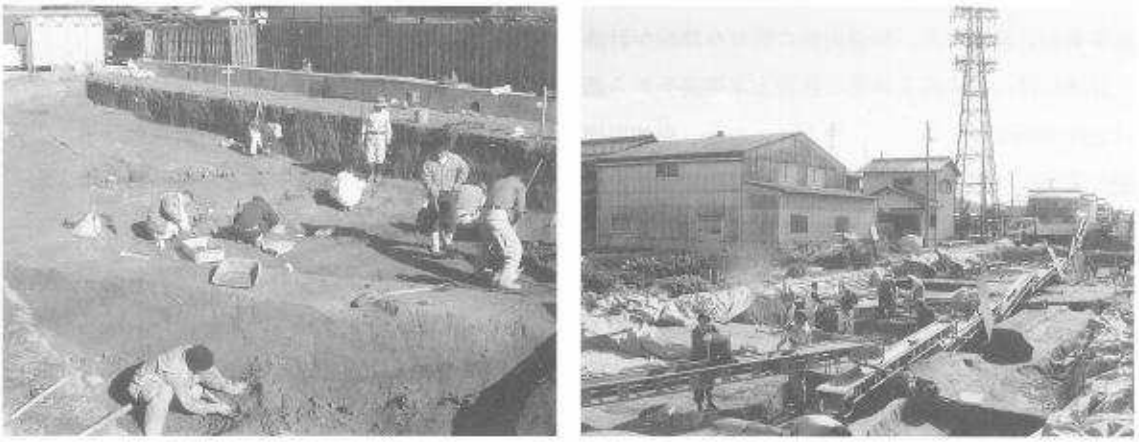


図２　調査風景

３．平成13年度本発掘調査の経過

前記したように、当初東南遺跡として本発掘調査を実施した。町道によって３区に分かれており、その南側の３区から調査を行った。震災復興事業は減少したものの、通常事業の震災復興事業優先による後送りとなった通常事業は多くあった。さらに埋蔵文化財調査事務所調査員の減少によって、調査に追われることとなった。別の遺跡と調査期間の前後は重複することが多くなっていた。東南遺跡についても、調査着手時には１人は前の伊丹市有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査終了段階を担当しており、逆に東南遺跡の終了時には１人は次の丹波市（当時は氷上郡市島町）十の貝遺跡の調査準備に入っていた。

調査工事は平成13年11月２日に入札を行い、太子開発株式会社が落札した。11月６日（火）に現地で打ち合わせを行ったのち、11月８日（木）から調査を開始した。３区の調査範囲を確定し測量作業を行うなどの調査準備に着手した。本格的には11月12日（月）に３区の機械掘削から手掛け、３区の人力掘削に入るとともに、２区の機械掘削を平行して実施した。

鵯石田遺跡である３区は11月19日（月）から機械掘削をはじめる。22日（木）まで４日間壁面精査などを平行しつつ機械掘削を行い、23日から人力掘削も実施する。上層で現代瓦窯跡があり、瓦と焼土・炭が検出された。写真撮影だけ行い、包含層上面まで機械で下げる。遺構面は２面あり、12月４日（火）に２・３区（東南遺跡）とともに第１面の空中写真を撮影した。撮影終了後から下層の掘り下げを行い、溝を中心とした遺構を検出する。12月18日（火）に全景写真を撮影し、遺物出土状態や部分写真の記録を取り、遺物の取り上げを行いつつ清掃作業を行い、27日（木）に第２面の空中写真を撮影し年内の調査を終える。年末年始の休暇を経て、１月７日（月）から調査再開する。土層断面図実測し、断ち割り作業などを行い、９日に作業終了する。１月29日（火）に中間検査を行い、２月４日（月）に兵庫県龍野土木事務所担当者と管理引き継ぎを行って、鵯石田遺跡（東南遺跡）の調査終了する。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

	所長		大村敬通
	企画調整班	主任調査専門員	井守徳男
		主査	高瀬一嘉
		課付	稲田　毅
	総務課	課長	森　俊雄
	調査第４班	調査専門員	西口和彦
調査担当	調査第４班	主査	渡辺　昇
		技術職員	松岡千寿
		調査参加者	小谷義男・前田陽子・森崎由起子・野田希和子
			覚野郁子・山内千夏

作業委託　太子開発株式会社

図３　調査風景

４．平成14年度本発掘調査の経過

調査区は旧国道２号の南側から、平成13年度調査区の北端までを対象とし、調査区は南北に細長い形状となる。ただし、盛土が厚いため、民家や店舗が隣接する東側は安全を考慮して控えをとって掘削している。また、調査対象地内を水道管が横断しているため、調査区は南北２地区に分断されている。

調査面積は331㎡と狭小であるが、通常の受託調査で行った。機械掘削、人力掘削、遺構検出・掘り下げを経て、最後に個別遺構の写真撮影・実測、足場からの全景写真撮影、航空写真撮影を行い、調査状況の記録につとめた。

調査の組織

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

	所長		藤本修三
	企画調整班	主任調査専門員	井守徳男
		主査	高瀬一嘉
	総務課	課長	森　俊雄

		主査	若林洋子
	調査第１班	調査専門員	吉田　昇
調査担当	調査第１班	主査	平田博幸
		主任	長濱誠司
		調査参加者	森崎由起子
			覚野郁子

5．整理作業の経過

整理作業は発掘調査段階から順次行っていた。現場事務所では一部の土器洗浄と台帳作成を実施した。それ以降の作業は平成19年度と平成20年度の２カ年に渡って兵庫県立考古博物館で行った。平成19年度は水洗いから実測作業までを、平成20年度は遺物の写真撮影とトレース作業と原稿執筆・レイアウトを行い、報告書を刊行した。

調査主体　兵庫県教育委員会

調査事務　兵庫県立考古博物館

	館長	石野博信
埋蔵文化財調査部長		若生晃彦
総務課	課長	若狭健利
	主査	橋本弘昭（平成19年度）・山下裕美（平成20年度）
整理保存班	調査専門員	西口和彦（平成19年度）・森内修造（平成20年度）
	担当課長補佐	岡田章一
	主査	菱田淳子　・篠宮　正（平成20年度）
調査担当	担当課長補佐	渡辺　昇
	主査	長濱誠司
	嘱託員	前山三枝子・岡崎輝子・佐伯純子・加藤裕美・吉田優子・宮野正子
		又江立子・三好綾子・小野潤子・嶺岡美見

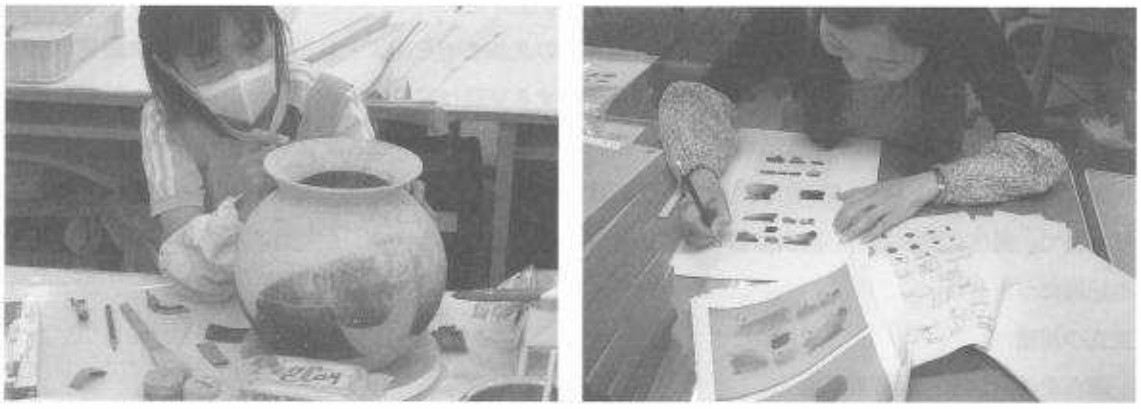


図４　整理作業風景

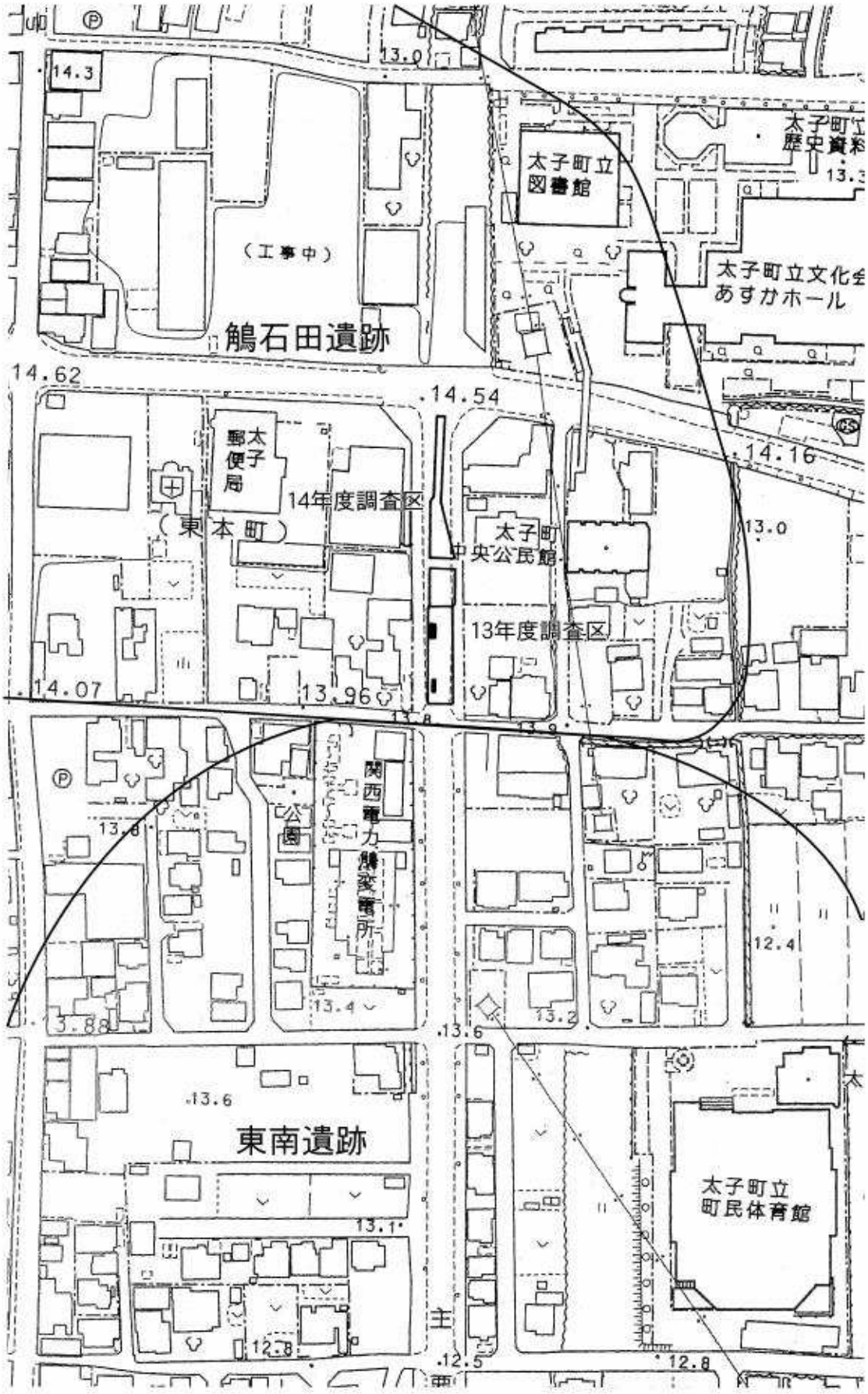


図５　確認作業地点と本調査の範囲（S＝1：2,000）

Ⅱ　位置と環境

鵤石田遺跡は揖保郡太子町鵤に所在する遺跡である。太子町の中心部の平野に所在している。この平地は揖保川の最大の支流である林田川と独立する小河川である大津茂川に挟まれた沖積平野であり、法隆寺領鵤荘の範囲として知られている。荘園域は推定されているだけでなく、荘園絵図が残されている。さらに境界を示す傍示石が現地で確認できることなどから、全国的にも代表的な荘園遺跡として著名である。

太子町域北側には山塊が延びており、町境となっている。中国山地の南縁部分に相当し、山裾に沿って断層が走っている。南斜面や南に延びる支尾根には多くの遺跡が存在している。残る３方は低地や河川となっており、その中に独立丘陵が多く認められる。それぞれに古墳や弥生遺跡などの遺跡が構築されている。この独立丘陵は法隆寺領鵤荘絵図と比較対象するのに便利である。山裾には麓屑面が広がっており、遺跡も多く立地している。遺跡は扇状地・氾濫原にも広がっている。

旧石器時代の遺跡は少ない。近隣では春日七日市遺跡や板井寺ケ谷遺跡のように面的な層的な調査は行われていない。播磨特有の溜池を中心に石器が確認されている。太子町でも同様で、広坂向池遺跡・原新池遺跡・北山池遺跡・下山池遺跡・山田峠遺跡が知られている。また、坊主山遺跡では段丘面での発掘調査で石器が出土している。広坂向池遺跡・坊主山遺跡では有舌尖頭器も出土しており、次代まで継続していることが明らかである。たつの市皿池遺跡では姶良火山灰層が確認されており、層序的な石器検出の可能性が期待される。姫路市御津町碇岩遺跡では比較的まとまって石器が出土している。

縄文時代になると鵤石田遺跡に接した東南遺跡が太子町を代表する遺跡である。後晩期を中心とする遺跡で埋甕や配石墓・土壙墓など墓域の調査が1970年代に調査されたが、最近の調査では焼土や焼けた礫群があり、体育館西側で検出された竪穴遺構とともに居住域になる地域である。沈線と磨消縄文を主体とする文様が施されており、土偶も1点出土している。遺構は確認されていないが、縄文土器が出土している遺跡はある。大津茂川沿いの川島川床遺跡・姫路市丁柳ケ瀬遺跡、その西側で鵤石田遺跡の南側の立岡遺跡・常全遺跡、北側の丘陵裾に広がる城山遺跡が知られている。僅かに中期末の土器があるが、後晩期の土器が出土している。矢田部遺跡でも中期の土器が確認され、林田川の対岸にある片吹遺跡では前期の住居跡が検出されている。東南遺跡で良好な墳墓資料があるが、それ以外にも常全遺跡・立岡遺跡と後期から晩期にかけての埋甕例が太子町に確認されていることは注目される。また、晩期突帯文土器が数多く検出されていることも、次代に引き継ぐ集落が多いことが指摘できる。これが弥生前期の遺跡が多い母体となったことは明らかである。古

図６　上構遺跡溝と出土庄内甕

図７　黒岡神社古墳と石棺

い早期～前期の遺跡は林田川西岸のたつの市片吹遺跡で良好な資料が得られている。中国山地に近い宍粟市・神河町で古い遺跡は多く知られている。

弥生時代になると遺跡数は増加する。縄文時代の遺跡の多くは継続（断続）している。前期の遺跡が多く知られていることが特徴であろう。拠点集落と考えられている遺跡は２つある。斑鳩寺遺跡と平方遺跡である。ともに全時期にまたがる集落である。前期の遺跡は、縄文晩期から続く遺跡以外に母集落の２遺跡、福地相坂遺跡、枝重・助久遺跡がある。福地相坂遺跡は中期まで継続するが後期には継続しない。逆に枝重・助久遺跡は中期が欠落し断続して後期に再度集落を営んでいる。近くでは大津茂川下流の丁柳ケ瀬遺跡で多量の前期土器と木器が出土している。木器に赤色顔料で木葉文を塗布した精製鉢などの優品も出土している。この遺跡でも縄文晩期の土器が多くみられる。中期になると川島遺跡、鵤遺跡、鵤石田遺跡、上構遺跡、川島川床遺跡、亀田遺跡、山田峠遺跡と高地性集落である檀特山遺跡がある。川島遺跡は中期編年の基礎資料となっている遺跡で、早い段階に検出された方形周溝墓として知られている。瀬戸内海東部の弥生時代の代表的遺物である分銅形土製品が鵤遺跡・山田峠遺跡・亀田遺跡で出土しており、周辺地域では出土遺跡が多い。後期になると、前半の遺跡は蓮常寺北遺跡や歴代遺跡であるが、後半になると急増する。さらに大きな特徴は今回調査した鵤石田遺跡でも代表される庄内式甕が多量に出土していることである。出土量からみて中心は鵤遺跡に移動したと思われ、上太田茶屋ノ前遺跡・亀田遺跡・川島遺跡・上構遺跡・鵤石田遺跡で庄内併行期の遺物が多く出土している。その中で川島遺跡は庄内甕を有さずに讃岐系甕を主体とする興味深い遺跡である。太子町という狭い地域で保有土器が異なるという特色がある。上構遺跡・鵤石田遺跡は、ともに小面積の調査ながら非常な高率で庄内土器を保有している。

太子町域に所在する独立丘陵や北縁の丘陵上には比較的多くの墳丘墓が築かれている。墳丘墓は養久山墳墓群で代表されるように揖保川流域に多く分布し、初期墳丘墓研究をリードしていた。太子町もその一部で多くの遺跡が確認されている。檀特山・立岡山・黒岡山と松尾・広坂に遺跡が分布している。南側の山戸から丁にかけても墳丘墓が広がっている。

揖保川下流域は墳丘墓から古墳発生にかけての鍵を握る地域とも言われてきた。養久山墳墓群をはじめ龍子三ツ塚古墳群・権現山古墳群などに代表される。養久山墳墓群では墳丘墓は楕円形・不定形か長方形で木棺・土器棺・石棺を主体としている。養久山1号墳は前方後円墳で竪穴式石室を内部主体としている。初期の古墳で、その後は鳥坂峠を隔てた尾根筋の龍子三ツ塚古墳に続く。南側に派生する尾根上の赤山墳墓群は墳丘墓である。その南側の独立丘陵である神戸北山にも墳丘墓が築かれている。養久山墳墓群では中期の古墳は確認されていない。後期の横穴式石室まで断絶がある。中期の古墳は、養久山墳墓群と龍子三ツ塚古墳群の間の鳥坂峠西側の鳥坂古墳群に存在する。１号墳・２号墳は前期と考えられ、３号墳が中

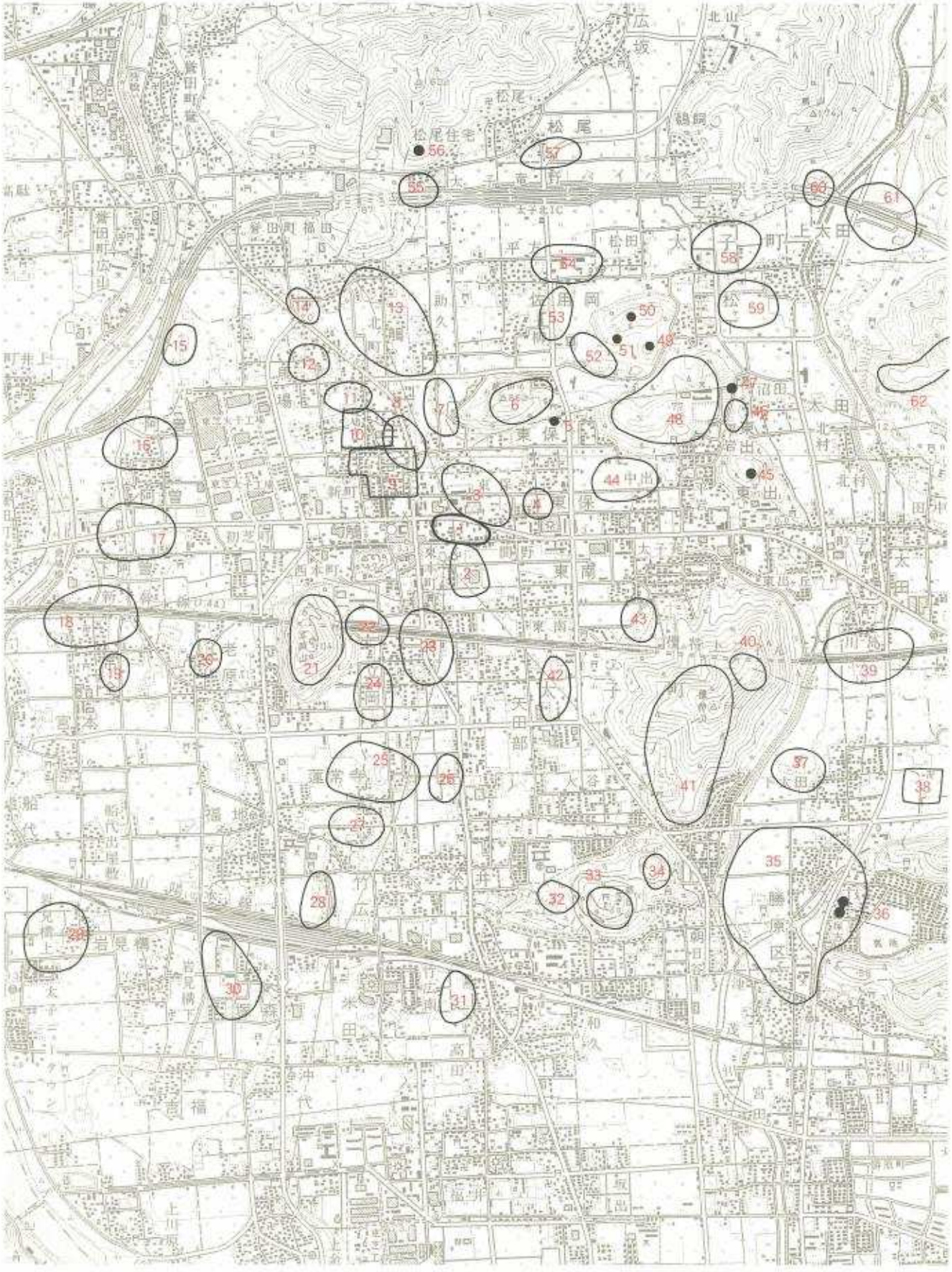


図 8　鵤石田遺跡の位置と周辺の遺跡（S = 1：25,000）

表1　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	所在地
1	鵤石田遺跡	揖保郡太子町鵤石田
2	東南遺跡	揖保郡太子町東南佐田
3	鵤遺跡	揖保郡太子町鵤久治田
4	東保高田遺跡	揖保郡太子町東保高田
5	キツネ岩遺跡	揖保郡太子町東保神田
6	東保山古墳群	揖保郡太子町佐用岡前山
7	五反畑遺跡	揖保郡太子町佐用岡五反畑
8	斑鳩小学校遺跡	揖保郡太子町鵤斑鳩寺
9	鵤構居跡	揖保郡太子町鵤上ノ町
10	斑鳩寺遺跡	揖保郡太子町鵤斑鳩寺
11	斑鳩寺北遺跡	揖保郡太子町鵤長福寺
12	馬場遺跡	揖保郡太子町馬場稗田筋
13	城山遺跡	揖保郡太子町鵤城山
14	樋ノ上遺跡	揖保郡太子町馬場樋ノ上
15	阿曽丁田遺跡	揖保郡太子町阿曽東丁田
16	阿曽北遺跡	揖保郡太子町阿曽高屋堂
17	阿曽南遺跡	揖保郡太子町阿曽五反田
18	常全遺跡	揖保郡太子町常全後畑
19	常全日蓮寺遺跡	揖保郡太子町常全日蓮寺
20	老原遺跡	揖保郡太子町老原北畑
21	立岡山古墳群・遺跡	揖保郡太子町立岡立山
22	立岡遺跡	揖保郡太子町立岡山ノ下
23	立岡東遺跡	揖保郡太子町立岡大町
24	立岡南遺跡	揖保郡太子町立岡山崎
25	蓮常寺北遺跡	揖保郡太子町蓮常寺一宮
26	蓮常寺東遺跡	揖保郡太子町蓮常寺下坪
27	蓮常寺西遺跡	揖保郡太子町蓮常寺西ノハナ
28	福地宮ノ前遺跡	揖保郡太子町福地宮ノ前
29	上構遺跡	揖保郡太子町岩見構上
30	福地相坂遺跡	揖保郡太子町福地相坂
31	鍛冶田遺跡	揖保郡太子町糸井鍛冶田

No.	遺跡名	所在地
32	朝日山北遺跡	揖保郡太子町糸井朝日山
33	朝日山遺跡	姫路市勝原区朝日谷
34	朝日山古墳群	姫路市勝原区朝日谷
35	丁柳ケ瀬遺跡	姫路市勝原区丁
36	丁瓢塚遺跡	姫路市勝原区丁
37	下太田遺跡	姫路市勝原区下太田
38	下太田廃寺	姫路市勝原区下太田
39	川島遺跡	揖保郡太子町太田茶ノ木
40	檀特山遺跡	揖保郡太子町東南檀特山
41	檀特山古墳群	揖保郡勝原区下太田
42	矢田部遺跡	揖保郡太子町矢田部才ノ上
43	栗原遺跡	揖保郡太子町東南栗原
44	東保遺跡	揖保郡太子町東保中の壺
45	東出遺跡	揖保郡太子町東出丹生山
46	沼田遺跡	揖保郡太子町沼田西山
47	沼田古墳	揖保郡太子町沼田西山
48	丹生山古墳群	揖保郡太子町東保丹生山
49	防主山古墳	揖保郡太子町佐用岡西光寺山
50	松田山古墳	揖保郡太子町佐用岡東山
51	柳山古墳	揖保郡太子町佐用岡西光寺山
52	南柳遺跡	揖保郡太子町佐用岡南柳
53	平方遺跡	揖保郡太子町佐用岡平方
54	平方高田遺跡	揖保郡太子町佐用岡高田
55	坊主山遺跡	揖保郡太子町佐用岡岡ノ下
56	松尾古墳	揖保郡太子町松尾本堂
57	松尾遺跡	揖保郡太子町松尾吉良
58	王子遺跡	揖保郡太子町王子前田
59	松ケ下遺跡	揖保郡太子町松ケ下上丁田
60	上太田茶屋前遺跡	揖保郡太子町上太田茶屋前
61	亀田遺跡	揖保郡太子町上太田亀田
62	城山古墳群	揖保郡太子町太田城山

期の古墳である。埋葬施設は粘土槨で四獣鏡をはじめ多くの副葬品が出土している。

太子町での前期古墳は佐用岡に所在する松田山古墳が上げられる。岩盤を刳り貫いた墓壙に竪穴式石室を構築している。墳形は不明である。出土遺物は神獣鏡・筒形銅器・銅鏃・鉄剣・鉄鏃・鉄斧と玉類がある。武器が多いのが特徴である。黒岡山古墳も前期の古墳で箱式石棺から多くの遺物が出土している。だ龍鏡・鉄剣・鉄鏃・刀子が出土している。

後期の古墳は特徴的な古墳が多い。典型的な横穴式石室を主体部とする代表的な古墳は黒岡神社古墳である。黒岡神社の境内にあり、周辺に10数基の古墳が存在し、その盟主墳と考えられる古墳である。径16

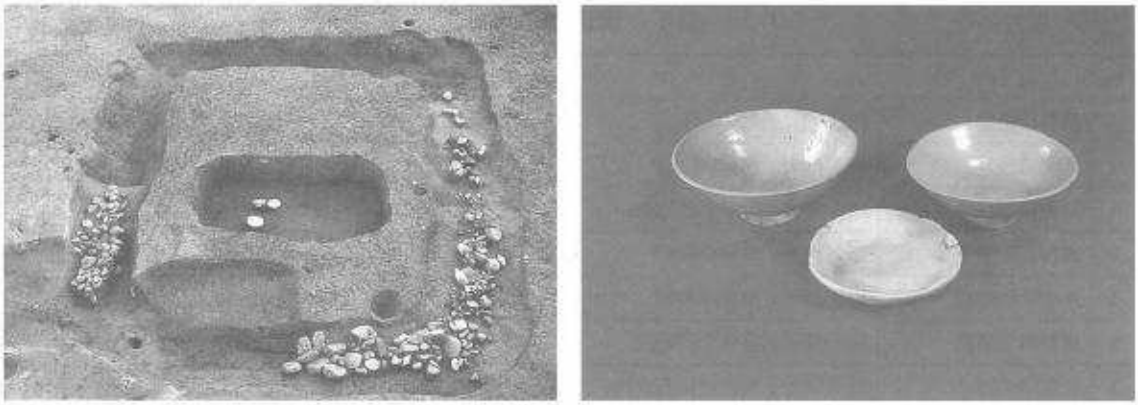


図９　宝林寺北遺跡

ｍの円墳で右片袖式の横穴式石室である。奥壁の幅2.0m、全長8.3m（玄室長3.3m）を測る。玄室内には竜山石製の石棺が存在しており、石室前にも石棺蓋が立てられている。縄掛突起が長辺に２対あるもので、退化したタイプである。黒岡神社古墳上方の古墳からは子持ち器台が出土している。太子町域には後期の古墳群は多く、大半は横穴式石室を主体部としている。数基で構成されるものが多く、10数基の古墳群が幾つかあるだけで、100基近いような群集墳は見られない。揖保川対岸の権現山古墳群が前期から継続しているが大古墳群である。また、北側の姫路市域に所在する西脇古墳群も100基を越す後期に限られた大群集墳である。特徴的な古墳としては朝鮮半島の影響を強く受けた古墳が存在することである。白毛山古墳群で玄室が羨道より低くなっている。同様に天井石も玄室が低くなっており石槨になっている。玄室は長方形で幅の方が長さより大きい。横口式石槨に近い古墳は上太田古墳群に見られる。石室内に箱式石棺を設ける例もあり、新しい要素と思われる。

古墳時代の集落は鵤石田遺跡の以前の調査（太子郵便局建設）で５棟の方形プランの竪穴住居跡が調査されている。竈も敷設されたもので、今回調査の土器の時期とは異なり６世紀前半の住居跡である。この時期の集落は太子町では多く検出されている。鵤石田遺跡北方の枝重・助久遺跡で２棟以上の竪穴住居跡と土坑が検出されている。古墳時代前期の庄内期から布留期の竪穴住居跡も確認されており、鵤石田遺跡と似た消長をたどっていることが理解される。南側の川島遺跡でも1棟だけ後期の竪穴住居跡が確認されている。亀田遺跡・平方遺跡でも多くの遺構が検出されている。

歴史時代になると、町名が示すように早くから聖徳太子の初期荘園として開発された鵤荘が存在する。遺跡名の鵤はこれに起因するもので鵤周辺の広い範囲が荘域である。絵図（法隆寺領播磨国鵤荘絵図）が残されていることと四至を画するための傍示石が存在することから、荘園研究の代表遺跡となっており、各方面からの調査研究が進んでいる。中心に位置する斑鳩寺は奈良時代から継続する寺院で、境内から古瓦も出土している。太子町域には奈良時代の寺院跡は確認されていないが、大津茂川下流には姫路市下太田廃寺が建立されている。塔心礎が残されており、多くの礎石も出土している。遺物も通有の瓦類以外に鴟尾・瓦塔と珍しい遺物が出土している。軒瓦も数種に分けられ、長期間継続していたようである。古代山陽道は太子町域を通らず、その北側を東西に走っている。姫路市太市（大市駅家）から槻坂を越えて中井廃寺の南を通って揖保川を越える。小神廃寺の南側で揖保郡衙推定地の北側を西に進み中垣内廃寺の南から布勢駅家である小犬丸遺跡に至るルートをたどっている。福田片岡遺跡で元寇の際の筑紫大道が確認されているように鎌倉時代に整備される前から太子町を通るルートも存在したことは十分に予測される。鵤荘以外に弘山荘・小宅荘・浦上荘など多数の荘園が展開している。

Ⅲ　調査結果

1．平成13年度の調査結果

調査は2面行ったが、上面では中世の明瞭な遺構は確認されなかった。近世以降の瓦窯跡・粘土採掘坑を検出しただけであった。当調査地から南側の東南遺跡にかけて多くの粘土採掘坑がみられた。瓦業者は戦後まで営業しており、表土直下の焼土は現代のものと思われる。粘土採掘は地山シルトを対象とするものである。遺構面となる明黄褐極細砂ではなく、その下の灰白～褐灰シルトを採取している。そのことから、採掘された部分には遺構は残存していない。調査面積は264㎡と小面積である。

上面の遺構は不定形の土坑と落ち込みを検出しただけで、攪乱坑として扱った粘土採掘坑が面積の多くを占める。土坑・落ち込みともに明瞭な遺構ではない。堆積過程の変化と考え、下層に掘り下げを行った。

下面の遺構は弥生時代末～古墳時代前期の遺構である。検出した遺構は、土坑を3基検出している以外はすべて溝に限られている。土坑は性格の明らかなものはない。すべて不定形の土坑である。溝などの大形遺構の肩部が後世削平されたものと思われる。SK03は長楕円形で最大長0.8m、深さ0.3mを測る。SD06の上層にある。他の2基は、さらに不明確で深さ10cmにも満たない。すべて単独の遺構ではないと考えている。

SD06は長さ23m、幅2.5～4.2m、深さ1.0mで、調査区中央をほぼ南北に北側から延びており、途中で弧を描いて西側に向きを変えている。溝の底部は砂と礫が互層になっており、自然堆積と思われる。自然堆積部分でも下層は土師器が含まれているものの、多量ではない。部分的に底面が深くなっているところがあり、数個体の土器が含まれている。自然堆積の上層である礫を多く含んだ層に多量の土器が包含していた。ほとんどの土器が大きな磨滅を受けていないことから、遠くから流されたとは思われないので、近くの北西付近から流れたものと思われる。

SD07の北半はSD06の東側肩部を拡張した位置に存在する。SD06の上層にあり、一段階新しい遺構である。一部深い部分もあるが、大半はSD06の底面のレベルの方が低くなっている。規模は長さ20m以上で南北に走っている。幅は3.1～5.0m、深さ0.5～1.0mを測る。南側にいくほど深くなっている。底面は大きな凹凸が認められ、底付近の堆積は砂層と礫層が互層になっている。底の窪みには完形品やそれに近いものが多く出土している。SD07は自然堆積で人工的な遺構ではないと思われる。

SD08とSD12は南側にある溝で、SD08はSD07が南側に延びた部分かもしれない。ただ調査区内では浅く深度が異なっている。自然堆積の溝と思われ、南西方向に延びている。SD12は幅0.8mの長さ3mの短い溝である。深さも0.15mと浅いものである。調査区北東から延びており、調査区内で終結している。

SD09～SD11は調査区南側に位置する溝である。すべて北側はSD06によって切られており、それより古い時期の遺構と考えられるが、出土土器からはほとんど時期差は認められない。北から南に流れており、すべて自然の溝と思われる。SD09は幅0.5～0.7m、深さ0.2～0.45mで、長さ9mを測る。部分的に細い箇所もあるが、ほとんど幅は一定している。SD10は幅0.5～0.8m、深さ0.2～0.4mで、長さ10mを測る。SD09・SD12に切られており、一段階古い溝である。北側は幅が広いが南側に向かって急に狭くなっている。SD11は南端で僅かに検出している溝で、幅1.1m、深さ0.4mである。

2．平成14年度の調査結果

調査区は旧国道２号の南側から、平成13年度調査区の北端までを対象とし、各種の制約から南北に細長い形状となる。また調査対象地内を水道管が横断しているため、調査区は南北２地区に分断されている。

調査区の基本素序は、１．現代の盛土、２．旧耕土、３．黄灰色系シルト質砂層、４．地山である。第３層は遺物包含層であり、弥生時代末から中世の遺物が出土し、特に北半部は顕著である。遺構は４層より切り込んでいるが調査区内、特に北半部は近代以降の粘土採掘による攪乱が多数あり、遺物包含層や遺構面は大きくその影響を受けている。攪乱内からは多量の土器片が出土しているが、これは攪乱の埋め戻しに近隣の埋蔵文化財包蔵地（鵜遺跡の遺構埋土・遺物包含層と推定される）の土を用いたためと思われる。

検出できた遺構は多くなく、流路１本、溝２本である。

流路

調査区南半部で検出した。南側の平成13年度調査区へ続くもので、南北方向にのびる。中央付近で北東側へ蛇行し調査区外へ続いている。埋土は粗砂が堆積し、最終埋土はラミナ状の堆積をみせる。以上から常時流水があり最終的に洪水により埋没したものと推定する。埋土上層の粗砂内からは弥生時代末から古墳時代初頭の土器片を多く包含していた。これらの土器はローリングの度合いが少なく、深く的近い場所から流れてきたものと思われる。

SD01

調査区南半部、流路の東肩付近で検出した。流路と平行して南北方向にのびる。断面観察では流路と切り合い関係にあり、本溝が流路埋没後に掘り込まれている。埋土は最下層に粗砂が堆積し、中層にシルトの堆積が認められる。上層は極細砂から粗砂がラミナ状に堆積し、一気に埋没している。出土遺物は多くないが、流路と同時期の土器片が出土している。

SD02

調査区北端で検出したが、攪乱の影響により検出長は１ｍにとどまる。北側は調査区外へ続くが、南側へののびは攪乱のため不明である。出土遺物は流路やSD01と同時期の土器片が少量出土している。

Ⅳ　遺物

2カ年の本発掘調査で出土した遺物はコンテナ（セキスイTS28タイプ）で90箱になる。ほとんどの遺物は古墳時代はじめの時期に限られている。第1面で中世から近代の遺物が少量出土しており、第3面で数点の縄文土器が出土している。第2面が古墳時代の遺構面で、大半の遺物はここから出土している。弥生土器も少量出土しているが、弥生土器だけの純粋な層ではなく、古墳時代の土器と同一層から出土している。第3面の遺構・遺物は東南遺跡として扱ったので、本書では記述せず「東南遺跡」に譲ることとする。

（1）弥生時代の遺物

弥生土器は磨滅しているものが多い。出土遺物は土器と石器が出土している。前期から後期にかけての遺物が認められる。

前期の遺物は磨滅が他よりも著しい。(353)（354）は貼り付け突帯を有する壺の胴部破片である。(353）は3条、(354）は5条の突帯を持つ。ナデで調整しており、胎土には多くの砂粒を含んでおり、前期末のものと思われる。

(364)（365）は前期の甕口縁部である。ともにL字形の口縁部で（364）は端部に刻み目を有する。4条以上の沈線が施されている。上部の沈線は終息部が残り、2条1単位で施文したものと思われる。L字形口縁の内面の稜線は明瞭で、口縁部は厚く短い。胎土には小石粒を含み、色調は外面黒褐～にぶい黄橙、内面にぶい黄橙を呈する。(365）は口縁部が外側にやや開き端部は尖りぎみである。体部は外傾し9条以上の沈線が施されている。色調は橙～浅黄橙で砂粒少量である。

(458）は壺頸部で12条の沈線が施されている。頸部径10.1㎝、残存高11.1㎝を測る。色調は外面にぶい橙、内面にぶい黄橙で、砂粒を多く含んでいる。外反する口縁部をナデで仕上げている。外面はミガキかもしれない。

中期の遺物も少量ながら出土している。(360)～(363)・(367)～(370)・(459）が該当する。(360）は甕口縁部で古相を示している。口縁部は断面三角形になる短いタイプで僅かに内湾する体部につながる。口径13.0㎝に復原され、残存高は4.1㎝を測る。ユビ成形からナデ仕上げを行っている。(361)（362）は中期後半の甕である。(361）は直線的に外側に開く口縁部で体部は僅かに内湾するが直線的である。ハケ整形ののちナデで調整を加え、口縁部はヨコナデで仕上げている。口径15.0㎝、残存高4.95㎝を測る。器壁は薄く精緻に仕上げられている。色調は浅黄橙～灰黄褐である。

石器は4点図化している。それ以外にも磨石かと思われる円礫はあるが、明瞭でないことから図化していない。出土地区はすべて庄内期の大溝からである。石鏃2点と楔形石器1点、敲石1点である。

（S1）は石鏃で凹基無茎式のもので僅かに欠失している。両側から作り出しており、端部にはリンクが見られる。重さは1ｇと軽量で、長さ23.0㎜、幅15.5㎜、厚さ4.0㎜である。サヌカイト製。（S2）も石鏃で僅かに凹むが平基に近い。先端を欠いている。大剥離面を残して縁は細かい作業をしている。現存での重さ0.6ｇ、長さ14.5㎜、幅16.0㎜、厚さ3.5㎜を測る。（S3）は楔形石器で、重さ8.7ｇ、長さ46.0㎜、幅32.5㎜、厚さ9.0㎜である。（S4）は重さ1059.6ｇ、長さ171.0㎜、幅90.0㎜、厚さ46.0㎜を測る。幅の広い方の端部に敲打痕が見られる。平たい側面中央付近も僅かに磨りへっているように見え、磨石としても利用されたかもしれない。形状から（S2）は縄文時代の石鏃であろう。隣接する東南遺跡の時期と考

えるのが妥当であろうか。

（2）弥生時代末から古墳時代の遺物

弥生時代末から古墳時代はじめにかけての遺物は土器に限られる。今回調査した遺物の大半はこの時期にあたる。

甕（1～184）最も出土量の多い器種である。11種に分けられる。

甕A（1～7・30～33）

口縁端部を上方につまみ上げるタイプで丹波系と考えているものである。丹波系と考えられるものをA1、近江の影響を受けて丹波系となったものをA2とする。

A1　（1）は右上がりのタタキののち口縁部を作り出している。内面はユビ成形ののちナデで仕上げている。端面になっており、1条の凹線がある。にぶい黄橙で小石粒を含んでいる。

（2）は平行か僅かに右上がりのタタキから口縁部を作りだしている。内面はユビ成形からナデそして板ナデで仕上げている。端面には浅いくぼみが凹線状になる。砂粒を僅かに含み内面は灰白、外面は浅黄橙を呈している。

（3）は表面磨滅しており成形技法は不明である。端面は凹線状になり、にぶい橙から橙をしている。

（4）は右上がりのタタキから折り曲げて口縁部を作りだしている。内面はナデ仕上げており、口縁部外面はハケ整形ののちヨコナデを施している。端部のつまみ上げが顕著である。にぶい黄橙で砂粒を含む。

（5）も右上がりのタタキ成形から折り曲げて口縁部を作っている。端面には2条の凹線を有する。小石粒と砂粒を多く含み、にぶい橙を呈する。内面はナデ仕上げである。

（6）は右上がりのタタキで口縁部をその後作る技法は同様である。端部は細くつまみ出している。内面はケズリののちナデで仕上げる。にぶい橙で小石粒を含む。粘土紐の継ぎ目が看取され、タタキは逆時計周りに施工している。

（7）も右上がりのタタキから折り曲げて口縁部を作っている。内面はユビ成形からナデている。にぶい橙で砂粒含む。

（30）は表面磨滅が顕著である。チャートなどの小石粒を多く含んでおり、内面は灰白で外面はにぶい黄橙である。

（31）は右上がりのタタキで内面はナデである。タタキから口縁部を作り、化粧土が塗布されているのか赤みがかる。にぶい黄橙で砂粒多く含む。

（32）は磨滅が顕著で技法不明である。クサリ礫を多く含む。外面にぶい橙で内面浅黄橙である。

（33）は内面ユビ成形からナデ、外面は磨滅している。頸部短く直立ではないが角度を持って立ち端部つまみ出す。丹後のものであろうか。外面橙で内面にぶい橙で砂粒多く含む。

（70）はややタイプが異なる。甕D1とした方がよいかもしれない。内湾する体部で外面は右上がりの粗いタタキで折り返して口縁部を作っている。内面は斜め方向のヘラケズリを行い、頸部の稜線は甘い。口縁部は外反し端部を内側上方につまみ出している。細く付き出るように引っ張っており、丸く納める。ヨコナデ仕上げである。浅黄橙で砂粒多く含む。

（73）は内面ヘラケズリで、外面ハケ整形であるが表面磨滅顕著である。口縁部はヨコナデで橙～にぶい橙を呈し、砂粒多く含む。口縁部屈曲部の器壁が厚くなっている。

（74）は内湾する体部から外反し二重口縁になってさらに外反する。端部丸く薄くなっている。内面は斜め方向から横方向のヘラケズリで頸部内面の稜線明らかになっている。口縁部は強いヨコナデで浅黄橙

～橙をしている。

（83）は外面水平方向のタタキから口縁部を作り出しており、ユビ痕跡が残っている。ナデ仕上げを行う。内面は縦方向から横方向のヘラケズリを行っている。横方向のケズリによって頸部内面稜線シャープになっている。口縁部は強いヨコナデで外反し、さらに外反するが内側は僅かな変化である。口径が最大腹径より大きい。外面は浅黄橙～にぶい橙、内面は橙～黄橙で、砂粒多く含む。

（97）はやや肩の張るもので、頸部内面の稜線は強く、口縁部は外傾するが中央に変化点がある。内面下半は縦方向、上半は横方向のヘラケズリである。外面は縦方向のハケ整形を行っている。外面は浅黄橙、内面はにぶい橙を示している。

（122）は底径1.2cmの小さな上げ底で倒卵形の体部で、頸部は外反し二重口縁となり外反する。端部は反りぎみで丸い。内面はユビ成形からハケ整形しなで調整を加えている。外面は不明だがナデかと思われる。口縁部はヨコナデ。粗砂や砂粒多く含み、内面は橙～灰白、外面は浅黄橙である。

（394）は内傾する体部から外反し変化点を持って小さく外反する。端部丸く、口縁部ヨコナデである。内面ケズリで橙をし、砂粒含む。

（395）は内湾する体部で外面細かい平行タタキが施されている。内面はケズリからハケ整形しナデ仕上げである。口縁部は外傾してから短く外反し端部角張る。強いヨコナデで仕上げる。にぶい橙で砂粒含む。

（399）は内湾する体部からやや外反し端部内側上方につまみ出す。端面に擬凹線がありヨコナデ。浅黄橙。

（400）は外反し斜め上方につまみ出された端部で、凹線がある。内面はケズリ、外面はハケで、口縁部はヨコナデで仕上げる。にぶい橙で小石粒・砂粒含む。

A２　（50）は右上がりから上部は平行タタキで口縁部は端部全体を上に曲げている特殊なタイプである。内面ナデ仕上げで、色調は橙、砂粒多く含む。

（56）も端部を上げている。口縁端部は内湾ぎみに上方にあがる。右上がりのタタキで内面は板ナデである。浅黄橙で砂粒含む。丹波などで近江の影響を受けた器形・口づくりではないかと予測している。

甕B（８・９・28）

東四国からの搬入品もしくはその模造品と考えている甕である。（８）は觜石田遺跡周辺で作成した讃岐の模倣品で、それ以外は搬入品である。搬入品の中には頸部稜線がシャープで口縁部がバチ形になるＢ１と短いくの字で甘い稜線のＢ２と口縁部が水平に近いくの字になるＢ３に分けられ、模倣品をＢ４と細分する。

Ｂ１　（９）は器壁が薄く仕上げられている。外面はハケ整形で内面はナデ仕上げで口縁部は強いヨコナデを行っている。にぶい褐で細砂を含むが胎土は精良である。

（133）は内傾し明瞭な稜線を持って外傾し端部内外に肥厚する。体部内外面ともにナデである。口縁部は短く強いヨコナデである。にぶい赤褐で砂粒含む。体部がやや外反ぎみに延びている。

Ｂ２　（57）は内面ユビ成形でにぶい黄橙、外面はナデでにぶい橙から黄灰、口縁部ヨコナデで小石粒・砂粒やや多く含む。口縁部は短く内湾ぎみ。

（132）は内傾し大きく屈曲して水平ぎみに開く口縁部である。端部は角張り僅かに内外に肥厚する。薄く仕上げられており、体部内面はユビ成形からナデている。外面は細かい縦方向のハケ整形で、公園はヨコナデである。にぶい褐を呈し、砂粒少量含む。口つくりが水平でカーブが甘いことからＢ２にしたが、Ｂ１かもしれない。

（134）は内傾する体部から逆L字状に水平ぎみに開き、端部角張る。内面はユビ成形後ナデ、外面はナデ整形で、口縁部はヨコナデである。にぶい褐で砂粒多く含む。

（135）は内傾する体部で頸部内面の稜線は鋭く水平気味に僅かに内湾する。口縁部は短く、端部は丸い。体部はナデ、口縁部はヨコナデで仕上げる。内面にはヘラ状工具痕が残る。明黄褐で砂粒含む。

（136）は体部下半は残っていないが下膨れの倒卵形になり口縁部は短く折り曲げている。水平ぎみに開き端部は僅かに肥厚する。内面はケズリからユビ成形をしナデで調整する。外面は縦方向のハケ整形である。口縁部はヨコナデである。内面はにぶい橙、外面はにぶい褐で砂粒含む。

B3　（28）は頸部内面が甘く口縁部はくの字で水平ぎみに外傾する。外面は2方向のハケ整形で内面はヘラケズリである。口縁部内面はハケ整形からヨコナデを施す。灰黄褐から褐灰で小石粒を僅かに含む。

（137）は頸部内面の稜線明瞭で外傾し端部近くで上方につまみ出している。内面は橙で、外面はにぶい橙である。砂粒多く含む。口縁部はヨコナデ。

B4　（8）は頸部内面の稜線は甘く、口縁端部も明確に肥厚していない。内面は板ナデでヨコナデが施されている。にぶい黄橙で小石粒多く含む。

甕C（10）

直口壺に近い口縁部を有する甕で外反し端部は外側につまみ出すものである。右上がりのやや粗めのタタキで、折り曲げて口縁部を形成している。内面はヘラケズリからハケ整形しナデている。端部は面となり中央がややくぼんでいる。にぶい黄橙からにぶい橙で胎土は小石粒を少量含むものの精良である。

甕D

畿内第Ⅴ様式の系譜を引くくの字甕である。外面タタキのものをD1、それ以外をD2と細分する。

D1　（11）は口縁部がやや短く大きく屈曲させたイレギュラーなタイプである。右上がりの粗いタタキがなされている。内面はユビ成形からナデで、口縁部はヨコナデが施されている。浅黄橙からにぶい橙で長石などの砂粒を多く含む。

（12）は典型的な甕だが、やや小型である。にぶい橙から橙を示し砂粒を含んでいる。外面は平行かやや右上がりのタタキであ、タタキののちに口縁部を折り曲げている。比較的細めのタタキである。内面はユビ成形からナデている。内面の稜線は鋭い。

（13）も細めの右上がりのタタキで内面はユビ成形からナデ仕上げである。ヨコナデは強く頸部が凹んでいる。浅黄橙で砂粒多く含む。

（14）は細い幅の広い右上がりのタタキから口縁部を折り曲げている。内面はユビ成形からナデている。小石粒・砂粒含みにぶい黄橙である。

（16）は細い右上がりのタタキからナデで調整する。内面はヘラケズリからナデ。内面はにぶい黄橙、外面は浅黄橙で砂粒含む。端部下にユビ痕跡残る。

（17）は口縁部だけであるがハケ整形ののちヨコナデ。外面はにぶい黄橙、内面は浅黄橙で砂粒・小石粒多く含む。端部内側にヨコナデによる浅い段が見られる。（18）は右上がりのタタキから折り曲げている。内側の稜線は明瞭で、内面はヘラケズリである。外面にぶい黄橙、内面浅黄橙で砂粒・小石粒多く含む。（19）も右上がりのタタキ成形から口縁部を折り曲げて作っている。内面はヘラケズリ。にぶい橙で小礫含む。（21）は右上がりのタタキ成形をナデで調整している。口縁部は折り曲げ、内面はヘラケズリで口縁部はヨコナデを施す。内面浅黄橙で外面橙、胎土には砂粒含む。（22）は右上がりのタタキで上部は平行タタキを施し、それから口縁部を作りハケ整形しヨコナデを行う。内面はヘラケズリで色調は浅黄橙、砂粒多く含む。（23）は体部が残存していないことから、分類は明確ではない。内面はハケ整形から

ヨコナデ。クサリ礫多く含み、外面はにぶい橙、内面は浅黄橙から黄褐を示す。(29) は右上がりのタタキで口縁部をその後折り曲げる。口縁端部をつまみ出している。内面はユビ成形からナデ。内面は灰白で外面はにぶい黄橙で一部黒褐で、砂粒を含む。

(55) は外面水平から右上がりのタタキで口縁部は外反し端部上方につまみ上げ気味である。口縁部は折り曲げて作っており、その際のユビ痕跡が認められる。内面はユビ成形からハケ整形しており、橙～にぶい黄橙をしている。外面はにぶい橙で砂粒含んでいる。口縁部内面はハケ整形からナデ・ヨコナデをしている。

(59) は右上がりのタタキで端部が薄くなり外側上方につまみ出している。体部内面はナデ調整し、口縁部はヨコナデ仕上げ。頸部に粘土紐の継ぎ目が見られる。内面は灰白、外面は浅黄橙で砂粒多く含む。甕Ａ２に類似する形態でもある。

(61) は口縁部が残存していない底部であるが形状からここに入れた。ラセン状のタタキで尖り底である。体部は平行かやや右上がりのタタキである。内面はヘラケズリで浅黄から浅黄橙、外面は浅黄橙からにぶい橙で黒斑が認められる。

(62) は右上がりのタタキから口縁部を作る。内面ナデで口縁部強いヨコナデ。にぶい黄橙で砂粒多く含む。

(63) は球形の体部で水平のタタキに縦方向のハケ整形を加える。口縁部は折り曲げて作られ、やはりハケ整形を行いヨコナデで仕上げている。内面は斜め方向のヘラケズリで頸部下はハケ整形である。稜線は比較的シャープで、タタキが細かいことも甕Ｅに近い。口縁部が外反する点が異なっており、端部は丸い。外面橙～にぶい橙で内面は浅黄橙～にぶい黄橙である。砂粒多く含む。

(64) は右上がりのタタキから折り曲げる。細めのタタキで外面浅黄橙、内面は斜め方向のヘラケズリで浅黄、口縁部ヨコナデで外反するが途中で僅かに変化する。

(69) は水平のタタキからナデ調整している。内面はユビ成形からヘラケズリを、ハケ整形からナデ調整である。口縁部は外反しハケ整形からヨコナデである。頸部下は凹んでおり稜線は明瞭になっている。色調は内面にぶい橙、外面橙～褐灰で砂粒多く含む。

(94) は不安定なかわずかに底がわかる程度の平底から球形に近い倒卵形の体部になり、頸部の稜線を持って外傾する口縁部になる。端部は尖りぎみに外反する。口縁部の器壁が厚めであることから尖っているようにみえる。内面は縦方向のヘラケズリで頸部まで及んでいない。頸部下はハケ整形である。外面は右上がりのタタキから斜め方向のハケで整形している。頸部にもタタキの痕跡が認められ、タタキ上げてから折り曲げて口縁部を形成していることが理解される。口縁部も斜め方向の細かいハケ整形ののちヨコナデで仕上げている。色調は浅黄橙～にぶい黄橙で砂粒多く含み焼成良好である。口縁部の一部を欠くが下半は完形で、最大腹径が口径を上回っており、器高と近い数値を示している。全体的に見て新しい要素が強いと思われるが、形態・技法からここに入れておく。

(387) は内湾し頸部稜線明瞭で短く外反する。にぶい黄橙で平行タタキからハケ整形しナデる。内面にも当て具の痕跡が残る。口縁部はハケ整形からヨコナデ。

(393) は直線的に広がる体部から外反する口縁部で端部肥厚している。頸部外面のみハケ整形見られ、ナデ・ヨコナデで消している。内面ケズリでにぶい橙をしている。

Ｄ２　(15) は体部内湾し口縁部外反する。頸部の稜線は甘い。外面はハケ整形でにぶい橙、内面はヘラケズリののちハケ整形で灰黄褐。小石粒多く含む。(25) は外面ハケ整形で端部が角張る。橙からにぶい橙をし、小石粒・砂粒を含む。(26) は体部内湾しヘラケズリによって薄くなっている。浅黄橙で砂粒多

く含む。外面は褐灰でハケをナデで消している。口縁部は厚く体部と比べてアンバランスである。

(51) は口縁部が内湾ぎみの新しい要素を有する甕で端部は丸くなっている。体部は下膨れで、外面ハケ整形からナデ仕上げし橙をしている。内面はナデ調整かと思われ橙～浅黄橙である。口縁部はヨコナデで砂粒多く含んでいる。表面磨滅顕著。

(52) はやや古相を示すもので内湾する体部から短く外反する口縁部になる。端部は角張り外側につまみ出しており、端面中央が凹んでいる。内面はヘラケズリかと思われ、その後ナデで調整している。口縁部から外面はヨコナデである。にぶい黄橙で小石粒・砂粒を含む。

(60) は口縁部が内湾ぎみで特に端部近くで内湾の度合が強くなり丸く納める。外面は灰白から浅黄、内面は灰白でクサリ礫多く含む。内面ハケ整形からナデ仕上げ。口縁部の形態は丹波の影響を受けたと考える (56) に似るが頸部下の段差が異なる。

(98) は大形の甕の体部下半である。肩部から上を欠いていることから分類することは無理であるが、一応ここにはめておく。平底から緩やかに内湾して延び緩やかに内傾する。器高の高いもので、外面はハケ整形で内面はヘラケズリからナデで調整する。底面もハケ整形している。下部に大きな黒斑がある。にぶい橙～橙で砂粒多く含んでいる。

(141) は新しい要素を持つ甕で、今回の出土土器のなかで最も新しいと思われる甕である。肩の張る球形で内面は斜め方向のヘラケズリである。外面はタタキをハケ整形で仕上げ、口縁部はヨコナデで外傾し端部尖っている。器高と最大腹径が近い数値を示す。外面は浅黄～にぶい橙、内面は浅黄橙～灰白である。

(371) は内湾する体部から外傾する口縁部になる。内面ケズリで浅黄橙、外面はハケ整形で褐灰である。口縁部はヨコナデで砂粒含む。

(386) は粘土紐看取でき磨滅顕著。内面浅黄橙で外面にぶい赤褐～浅黄橙で砂粒含む。

(388) は内湾する体部から稜線を持たずに口縁部内湾し端部尖る。外面ハケ整形で明赤褐である。内面ケズリ。口縁部内湾しているのは新しい傾向か。

(389) は外傾する口縁部で端部やや肥厚して丸い。ハケ整形からヨコナデ。胎土から讃岐からの搬入品かと思われる。内面にぶい褐、外面褐である。

(390) は僅かに内湾する体部から外傾する短い口縁部になる。頸部は内側に突出する。内面はケズリで外面はナデ仕上げ。口縁部はヨコナデで橙を呈する。

(391) は肩が張るが銃身の低い倒卵形で口縁部外傾し端部丸い。内面はケズリ、外面は縦方向のハケ整形である。浅黄橙で砂粒含む。口縁部内面は横方向のハケである。口縁部に黒斑がある。

(392) は内傾する肩部から外反する口縁部で端部角張る。外面平行タタキをナデで消している。内面ケズリ、口縁部ヨコナデ。橙をしている。

甕E

庄内型甕で外面タタキ成形のものを甕Eとする。

(20) は右上がりのタタキをハケで整形している。内面はヘラケズリで薄く仕上げ頸部の稜線も明瞭である。その後部分的にナデている。灰白から灰黄褐で砂粒含んでいる。体部が球形に近く口縁部が薄くやや反るなど新しい要素を持っている。

(34) は径2.3cmと小さな平底を残す尖りぎみとなる球形の体部から外傾する口縁部になる。外面は右上がりのタタキをハケで整形している。内面は縦方向のヘラケズリで頸部下は横方向で稜線を作っている。ハケ整形も一部なされている。端部は角張り端部内側下に段を持つ。内面は灰から黄灰、外面はにぶい黄橙で長石などの砂粒含む。

(35) は右上がりのタタキをハケ整形している。タタキから折り曲げて口縁部を作る。内面は横方向に近い斜め方向のケズリである。器壁は非常に薄く仕上げている。口縁部内面はハケ整形ののちヨコナデ。直線に広がり端部は内外に肥厚する。(端部下が凹んでいる) 端面が凹線状になる。浅黄橙で砂粒多く含む。口縁部に黒斑がある。

(36) は僅かな右上がりのタタキから縦方向にハケ整形する。外面はにぶい黄橙で煤が付着している。内面はにぶい黄橙から灰黄褐でヘラケズリからハケ・ナデ整形する。頸部下は横方向にケズリ稜線を鋭くしている。口縁部はハケののちヨコナデで仕上げる。端部直下は強いヨコナデによって凹んでいる。端部は面になり凹線が認められる。体部はやや肩が張る形態である。タタキ細かく薄く仕上げられている。

(37) は平行から僅かな右上がりのタタキから体部下半は縦方向のハケ整形を行っている。内面はヘラケズリのままである。頸部下は横から斜め方向のケズリがなされるが、稜線は甘い。口縁部は折り曲げてユビ成形して内外面ともハケ整形からヨコナデをする。端部下はやや凹んでおり、端面には凹線がある。にぶい橙から浅黄橙で砂粒含む。

(42) は平行のタタキで内面はヘラケズリからハケ整形している。球形の体部上半の破片である。ケズリは下方向から横方向にする。頸部内面は稜線が明瞭である。口縁部はヨコナデで外傾し端部内側につまみ出しており、面になっている。口縁部中央付近がやや厚くなっている。浅黄橙～橙で砂粒を多く含む。

(43) もやや扁平な球形の体部から僅かに内湾する口縁部になる。端部は角張り内側に肥厚する。外面は浅黄橙で右上がりのタタキで下半のみ縦方向のハケで調整している。内面は斜め方向のヘラケズリで頸部近くは横方向に近づくが確実に水平ではなく、稜線も甘い。色調はにぶい黄橙～浅黄橙で砂粒多く含む。口縁部内面はハケ整形からヨコナデである。

(44) は水平方向のタタキから縦方向のハケ整形を加えている。表面磨滅著しい。内面ユビ成形から斜め方向のヘラケズリののち斜め方向のハケ整形を行う。頸部下は横方向のケズリで段状になっており、頸部の器壁厚く稜線は甘い。頸部上にも僅かな段があり、口縁部は外傾し端部は内側に肥厚する。強いヨコナデによって段状になったものと思われる。外面は淡橙、内面は浅黄橙で砂粒多く含む。

(45) は水平の細かいタタキで下半はハケ整形を行う。内面は下半は下から斜め方向のケズリで最大腹径付近は縦横両方向のケズリがなされている。頸部下は横方向のケズリによってシャープな稜線を作っている。内面はハケ整形とナデも施される。口縁部は僅かに外反するもので端部は角張らせ端面に1条の凹線が見られる。内面はハケ整形からヨコナデをする。残存高は23.6cmであるが器高は27cm余りと思われ、最大腹径25cmと近い数値となるが、全体的には倒卵形の器高が高い印象を受ける。尖り底になろうかと想像される。体部下半には煤付着し、内面にも有機質が残っている。浅黄橙で一部内面は黒褐、外面は黒を呈しており砂粒多く含む。

(46) は右上がりのタタキでハケ整形をしている。口縁部は折り返して作り外傾し端部付近で反っており丸く納めている。内面は横方向のヘラケズリで稜線鋭くなっている。口縁部内面ハケ整形からヨコナデで仕上げている。粘土紐の痕跡が口縁部にも残っている。外面にぶい黄橙～明褐、内面浅黄橙～にぶい橙で長石・チャートなどの砂粒多く含む。

(47) は体部上半が比較的直線的で下がった位置で肩が張りぎみになるものと思われる。本来は球形の体部になるものが頸部近くのタタキが強いことによってそのような印象を受けるものであろう。水平なタタキで下半のみハケ整形を行いナデを加える。内面は斜め方向のヘラケズリで稜線は明確である。頸部下は強くケズっている。口縁部は外傾し端面となり、端面下側に凹線が存在する。ハケ整形ののちヨコナデを行う。外面に粘土紐の継ぎ目が残っている。口縁部内面はハケ整形からヨコナデを施す。浅黄橙で外面

には黒斑があり、砂粒多く含む。

（48）は口縁部だけの破片で甕Eか甕Fか判然としないが、一応ここで扱う。内湾する口縁部で端部は肥厚し端面に1条の凹線がある。端部下の外面に爪痕が残っている。ヨコナデで仕上げる。外面は淡黄～灰白、内面は浅黄橙で砂粒多く含む。

（53）は水平方向のタタキで内面はハケ整形である。口縁部は反りぎみで端部は面となり浅い凹線が1条認められる。端部は肥厚しており、端部下が強いヨコナデによって凹んでいる。外面は浅黄橙～灰、内面は浅黄～灰を示し砂粒含んでいる。

（54）の外面は水平から右上がりのタタキでハケ整形を加えている。内面は斜め方向から横方向のヘラケズリで頸部内面の稜線は明瞭である。口縁部はハケ整形からヨコナデを行い、端部は内側のつまみ出している。外面には粘土紐継ぎ目看取できる。浅黄～灰白で砂粒多く含む。

（63）は右上がりから平行のタタキから口縁部作り出し、ハケ整形している。内面はヘラケズリからハケ整形し浅黄橙からにぶい黄橙、外面は橙からにぶい橙で砂粒多く含む。外反ぎみの口縁部。

（84）は小型の甕で水平方向のタタキがなされている。体部下半はハケ整形で尖りぎみの丸底である。内面はユビ成形から斜め方向のヘラケズリがなされ薄く仕上げられている。頸部内面の稜線は明瞭で、直線的に広がる口縁部に続く。端部は内側につまんでおり端面になっている。内面は橙、外面は浅黄橙で砂粒多く含む。肩がやや張っている。

（385）は内湾する球形の体部で平行のタタキが見られ、部分的にナデで調整している。内面はケズリからヘラ状工具で調整する。口縁部は外傾し端部内側上方につまみ出し端面となる。ヨコナデで端面窪む。内面は橙、外面はにぶい黄橙～灰黄褐で胎土精良、焼成良好である。

甕F

庄内型甕で外面にタタキがないものや、ハケ整形などで消しているものをFとする。

（38）は外面ハケ整形で内面斜め方向のヘラケズリである。内湾する体部で頸部の稜線は鋭くない。口縁部はヨコナデで直線に延び内側につまみ出して端面にしている。橙から浅黄橙で砂粒多く含む。長石・チャートのクサリ礫である。黒斑認められる。

（39）は外面浅黄橙からにぶい橙で縦方向から横方向のハケ整形をしている。内面は横方向のヘラケズリからナデを施し、にぶい橙からにぶい褐をしている。小石粒と砂粒含む。口縁部は外傾し端面になり外側につまみ出している。内面は横方向のハケ、外面も横方向のハケののちヨコナデを施している。

（41）は球形の体部で最大腹径と体部の器高がほぼ近い数値を示す。ほぼ完形で良品である。外面はハケ整形で、内面はユビ成形からヘラケズリをしている。頸部下は横方向のケズリで稜線を作り出している。口縁部は反りぎみの外傾で端部は丸く肥厚しているがヨコナデによって端部は面になっている。内面は横方向のハケ整形からヨコナデを施している。浅黄橙を呈するが部分的に灰白で小石粒含む。

甕G

庄内型甕で河内からの搬入品である。

（40）は看取できないような僅かに底が認められるものの尖り底に近い形状である。ほぼ完形品の甕であり、河内からの搬入品としての好資料である。体部は丸みのある倒卵形をしており、外面は右上がりのタタキののち下半は縦から斜め方向の丁寧なハケ整形を加えている。内面下半は縦方向に大きくケズリ上げ、上半は横方向にケズリをしている。頸部内面の稜線は内面に凹んだ印象を受ける下の方が明らかになっている。口縁部は外傾するがやや丸みを有する。端部は僅かに肥厚し端面となり上方につまみ出している。にぶい赤褐から黒褐を呈し砂粒少量含む。

（58）は表面磨滅のため技法不明であるが、内面はヘラケズリ、外面はナデ調整されている。端部下に浅い段を有し、薄く仕上げられている。

甕H

口縁端部に刻み目のある淡路の甕

（27）は外反する口縁部でヨコナデ。端部に刻み目が見られる。内面は灰白でヘラケズリ。外面は浅黄橙でタタキメが残るものの磨滅している。

甕I

二重口縁のもので山陰系の土器。

（85）は完形でやや高い球形の体部である。尖りぎみの丸底で外面は浅黄橙～明赤褐で黒斑がある。体部上半は磨滅しており、明確でないが下半にはヘラミガキが観察される。内面はにぶい黄橙で斜め方向のヘラケズリが行われ、薄く仕上げられている。頸部内面の稜線はさほど鋭くない。口縁部は小さめで外傾してから直立ぎみに外反する。口縁部はヨコナデで端部丸い。赤っぽく焼成されており、化粧土が塗られたものと思われる。砂粒多く含む。

（87）は口縁端部を欠いている。内傾する体部から短く外反し端部の稜線を持って直立する二重口縁である。端部はまるくなっているか、尖りぎみに僅かに反るものと思われる。頸部内面の稜線は鋭く、内面の横方向のヘラケズリによって生じたものである。口縁部中央の変化点は突帯状に突出している。口縁部は強いヨコナデ。外面は灰白～浅黄、内面は浅黄橙である。

（88）は短い外反する頸部から内側に向かってやや外反する口縁部で端部が反りぎみである。外面は縦方向のハケ整形で内面は横方向のヘラケズリである。頸部付近の器壁が厚くなっている。口縁部はヨコナデで浅黄橙を呈し、砂粒多く含む。

（89）は肩部に4条以上が1帯となる波状文を描いている。ハケ整形からナデ調整している。内面は横方向のヘラケズリが行われているが軽侮までには至っていない。頸部は短く外反し擬似口縁となって内傾する口縁部となる。下の口縁部上にはヨコナデによる沈線が1条見られる。口縁部はヨコナデで端部は反りぎみで砂粒多く含む。にぶい橙～橙をしている。

（90）は水平から右上がりのタタキで、ナデ調整している。内面は横方向のヘラケズリであるが頸部までには及んでいない。そのことから頸部の稜線は甘い。口縁部はヨコナデで端部は肥厚ぎみに丸い。外面は浅黄橙、内面は橙～灰白で砂粒多く含む。

（93）は端部を僅かに欠いているが、ほぼ推定できる。外面はユビ成形からナデでにぶい黄橙である。内面は斜め方向から横方向のヘラケズリで灰白～にぶい黄橙をしている。頸部内面の稜線は強くはない。頸部は短く強く外反し擬口縁部は突き出ており、直立ぎみに外傾する。口縁部はヨコナデで砂粒含む。

（96）は短く外反する頸部から外傾する口縁部になる。体部内面は横方向のヘラケズリで口縁部はヨコナデで、一部ナデ調整を加えている。

（101）は頸部短く大きく外反し突帯状に突き出た擬口縁部から僅かに外反する口縁部になる。端部は肥厚ぎみに丸く納める。内面は横方向のヘラケズリであるが、稜線は甘い。体部外面はハケ整形で、口縁部は強いヨコナデで、外面に浅い擬凹線が認められる。内面はにぶい黄橙、外面は橙で小石粒・砂粒を含む。

（102）は扁平ぎみの球形体部で内面は斜め方向のヘラケズリで、頸部付近は横方向に近くなる。外面は磨滅が顕著でナデのみ看取できる。口縁部はヨコナデで二重口縁と下部は短く外反し上部の長く外反する口縁部になる。端部は尖っている。内面は浅黄橙で、外面はにぶい橙で、砂粒多く含む。

（103）も球形の体部で内面斜め方向のヘラケズリで、にぶい黄橙～灰を呈する。頸部下は横方向のケ

ズリで内面凹んでいる。頸部内面の稜線を待たないが突き出ている。頸部は短く外反し直立ぎみに延びて端部は外側に丸くなっている。外面は磨滅しており、灰白～浅黄橙をしている。口縁部は強いヨコナデによって屈曲している。擬口縁部の稜線は鋭く突き出ている。

(104) は内面斜め方向のケズリをしており、薄く仕上げている。頸部は短く外反しており、器壁が厚めである。稜線は有さない。口縁部は外傾し端部が反りぎみで丸くなっている。口縁部から肩部にかけて強いヨコナデによって擬凹線状になっている。色調は浅黄橙で砂粒多く含む。

(105) は二重口縁の上半を欠く。球形の体部から短く外反し直立ぎみになるものと思われる。体部内面は橙～にぶい黄橙で斜め方向のヘラケズリを行っている。外面はにぶい黄橙で縦方向のハケ整形から横方向のハケ整形を加える。肩部に2条のヘラ描き波状文を施している。口縁部はユビ成形から強いヨコナデを行っている。

(106) は内面横方向のヘラケズリでにぶい橙を呈する。外面は磨滅しており浅黄橙である。口縁部はヨコナデで頸部は短く鋭く湾曲し内面稜線は明瞭である。上部は外反し端部丸い。

(107) も同形の甕で精製品で薄く仕上げられている。口縁部は短く外反し外面に稜をもって外反し端部丸い。口縁部は強いヨコナデによって擬凹線状になっている。色調は灰白で胎土は精良であるが、僅かに砂粒を含む。内面のヘラケズリは横方向で、そののちナデを加えている。頸部内面の稜線は甘い。

(108) は短い頸部で内面は面のようになっている。体部は直線的に開き、橙をしている。内面は横方向のヘラケズリからナデで調整し、外面はナデである。口縁部は強いヨコナデで擬凹線状になっている。口縁部下半は外傾し三角形の突帯状に突き出てから外反する。端部は丸く尖りぎみである。

(112) は肩の張る体部で倒卵形に近くなるのであろうか。内面は斜め方向のヘラケズリで、外面は細かい縦方向のハケ整形である。口縁部はヨコナデで仕上げており、頸部は短く外反し上半は外反しているが直立ぎみになっている。内面はにぶい黄橙、外面は明黄褐で砂粒を少量含んでいる。

(113) は短く強く屈曲する頸部で突帯を持って外反する。口縁部は強いヨコナデで擬凹線状になっている。体部内面は斜め方向のヘラケズリでにぶい橙、外面はナデ仕上げでにぶい黄橙である。

(114) は内面横方向のヘラケズリで体部内面やや窪んでいる。外面はナデで、口縁部はナデとヨコナデである。色調は浅黄橙～にぶい黄橙で砂粒多く含む。

(115) も短く大きく湾曲する頸部で稜線は甘い。僅かに擬口縁部は突き出し、上半は直立し端部のみ外側に反る。内面は斜め方向のヘラケズリでのちナデを加える。外面は横方向ハケ整形からナデている。口縁部は強いヨコナデを施す。にぶい黄橙で砂粒多く含む。口縁部の高さのある甕で頸部の径も大きめである。

(116) はやはり頸部は大きく湾曲してから口縁部は外反する。端部付近でより外反し端部は丸い。磨滅が顕著であるが、ナデ仕上げかと思われる。口縁部はヨコナデである。内面はにぶい橙、外面は浅黄橙で砂粒多く含む。

(117) は口縁部上半が外傾し端部が反っている。頸部はくの字状に外湾するが稜線は甘い。口縁部は強いヨコナデで擬凹線状になっている。態度は小石粒を少量含むものの精良で、外面にぶい橙、内面灰白である。体部内面はケズリと思われるが磨滅している。

(118) は口縁端部を欠いているが、復原可能である。体部内面は橙で斜め方向のヘラケズリがなされている。外面はにぶい橙～橙でナデである。口縁部はヨコナデで、湾曲する頸部から外傾する。砂粒やや多く含んでいる。

(119) はやや肩の張る小型の甕である。内面は横方向のヘラケズリで外面はユビ成形からナデで仕上

げる。頸部は外湾し口縁部上半は比較的短い。擬口縁部は突帯となり、端部は丸い。口縁部はユビ成形からヨコナデでナデ調整も行っている。外面は橙～にぶい黄橙、内面は浅橙～橙で砂粒多く含む。

(120) は端部を欠いている。肩の張る球形の体部から外反し擬口縁部は突帯になって直立ぎみに延びる。内面は横方向のヘラケズリで浅黄橙で、外面はナデでにぶい黄橙である。口縁部はヨコナデ。

(121) は内面斜め方向から横方向のヘラケズリで口縁部はヨコナデである。頸部は短く大きく湾曲し、口縁部は外傾し端部丸い。

(124) ～ (127) は山陰系の大形甕である。(124) は短く湾曲する頸部から大きく三角形に突き出た擬口縁部から外傾し端部角張って内外に肥厚している。口縁部は強いヨコナデである。内面は橙で外面はにぶい橙～橙で粗砂～細砂多く含む。

(125) は外傾する口縁部で、端部反りぎみで丸い。外反する頸部から外傾する。(124) と同様に口縁部はヨコナデによって凹凸がある。にぶい黄橙で砂粒含む。

(126) は肩の張るもので内湾する体部内面は斜めから横方向のヘラケズリで、外面はナデである。口縁部はヨコナデで頸部内面は面になっている。短く湾曲する頸部は尖った突帯状の強い稜線を持ち直立する。端部は丸い。擬口縁部内面は凹んでいる。

(127) は内湾する体部から短く大きく屈曲する頸部になり、口縁部は外傾する。端部は角張って端部内外に肥厚する。内面は横方向のヘラケズリであるが頸部内面は甘い。外面はハケ整形からナデで調整している。ハケ原体は5本／cmと粗いものである。口縁部は強いヨコナデである。内面はにぶい橙、外面はにぶい黄橙～黒である。

(128) は内湾する体部で外反する頸部から擬口縁部となり外傾する口縁部になる。端部は丸く、端面に3条の擬凹線が施される。体部内面は横方向のヘラケズリで明褐～にぶい赤褐、外面はハケ整形でにぶい赤褐～黒褐である。

(396) は頸部内面の稜線鋭い。外傾市屈曲して外傾し端部下やや膨れて端部丸い。強いヨコナデで端面擬凹線かもしれない。内面はケズリからナデでにぶい褐で、外面はにぶい黄橙である。

(397) は僅かに内湾する体部で下のほうが薄くなっている。頸部大きく外反し稜線を外面に持って外反する。端部丸く強いヨコナデである。内面ケズリで外面ハケである。橙で砂粒含む。

(398) は頸部短く外反し突帯状に突き出た稜線から外傾し端部角張り外側に出る。内面は灰白をしケズリで口縁部はヨコナデである。外面は浅黄代々で粗砂多く含む。

(428) は大形の甕で短く外反する頸部から稜線を持って外傾する。端部丸く強いヨコナデである。

(429) は内湾する体部から短く外反する頸部で内傾する口縁部。強い余暇ナデで、内面はケズリからナデである。頸部には絞り目になっている。内面灰白、外面浅黄橙で砂粒多く含む。

甕J

二重口縁のもので山陰系以外の甕。

(65) は上が短い二重口縁で端部は短く外反し丸い。外面は縦方向の平行タタキが見られる。内面はユビ成形からナデ・板ナデで口縁部はヨコナデを施す。淡黄で砂粒多く含む。

(66) は内面ヘラケズリで口縁部ヨコナデのやや厚手で有機質が付着している。表面には化粧土を塗っている可能性が高い。外面にぶい赤褐、内面浅黄橙で砂粒多く含む。口縁部全体は短い。

(67) は右上がりのタタキからハケ整形を加える。内面はヘラケズリ、口縁部は強いヨコナデによって端部肥厚ぎみに丸くなる。浅黄橙からにぶい黄橙で砂粒多く含む。口縁部の器壁やや厚め。頸部内面の稜線はシャープで口縁部短い。

(68) は右上がりのタタキ成形から曲げて口縁部作る。内面はにぶい黄橙でユビ成形から板ナデ。外面は橙から黄褐で口縁部はヨコナデで仕上げる。外反してから直立する二重口縁。

(71) は短く二重に外反する口縁部で、橙～にぶい橙を呈し砂粒多く含む。表面磨滅著し明確でないがハケ整形からヨコナデをしていると思われる。

(72) は外傾し直立ぎみに外反するもので端部は丸い。内面は横方向のヘラケズリで頸部内面の稜線は明確である。口縁部の屈曲する部分が器壁厚くなっている。外面はナデ調整で口縁部はヨコナデである。にぶい橙で砂粒多く含む。

(75) は水平ぎみに外傾し稜線を持って短く外反する。ヨコナデで仕上げ端部は丸い。器形から器台の可能性も十分に考えられる。浅黄橙～にぶい黄橙をしている。

(76) は器壁が厚めで二重口縁に近い形態である。頸部内面の稜線も甘いことから、ここに扱ったが甕Iと甕Aとの折衷様式ではないかと思われる。外面は水平のタタキをナデで調整している。内面はヘラケズリであるが、磨滅のため幅や単位は不明瞭である。口縁部は強いヨコナデで端部に稜が生じており、擬凹線状になっている。内面は橙で外面はにぶい橙で、砂粒多く含む。

(77) も (76) と似たタイプであるが、やや薄く稜線もシャープである。外面は右上がりのタタキをナデ調整し、内面はヘラケズリである。頸部下は横方向で、それによって稜線が際立っている。口縁部はヨコナデで、端部には稜線が見え擬凹線状になっている。内面は浅黄橙で外面はにぶい黄橙をし小石粒や砂粒多く含む。

(78) は外反してから稜線になり、外傾し丸く納める端部になる。ヨコナデで仕上げ、橙を呈して砂粒含んでいる。化粧土を塗布しており、外面に有機質付着している。

(79) は頸部内面の稜線明瞭で内面にヘラケズリを横方向に施している。二重口縁部で端部は丸くヨコナデで仕上げている。にぶい橙で砂粒多く含む。

(80) は磨滅が著しい甕であるが、外面はハケ整形がなされ浅黄橙をしている。内面はユビ成形（口縁部を作る際の痕跡かもしれない）が行われているがヘラケズリは明らかではない。淡黄を示す。口縁部はヨコナデで頸部内面の稜線比較的顕著である。

(81) はほぼ完形で僅かに平底を残す。全体のプロポーションは肩の張る倒卵形で尖り底である。外面は右上がりのタタキを主体に頸部近くは左上がりも認められる。その後ハケ整形とナデによってタタキがある程度消されている。内面は板ナデで仕上げている。頸部周辺の器壁が厚くなっている。頸部は外反し口縁部は外傾し端部は丸い。体部下半に黒斑がある。色調は内面は明赤褐～橙、外面は橙～灰白を呈している。化粧土を塗布しており、砂粒少量含んでいる。丹後の土器であろうか。

(82) は左上がりのタタキが残るもので、内面はヘラケズリである。横方向のもので、それによって頸部内面の稜線を際立たせている。外反してからさらに外反し端部丸い。口縁部はヨコナデで仕上げ、橙で砂粒多く含む。

(86) は体部ほとんど残っていないが肩が張りそうな甕である。口縁部ユビ成形ののち、外面は縦方向のハケ整形、内面は板ナデを施す。口縁部はヨコナデで外反してから稜をもって直立ぎみに短く外反する。端部は丸く、擬凹線が見られる。外面浅黄橙にぶい黄橙で、内面にぶい黄橙である。砂粒多く含む。

(91) は頸部が外反し稜線を持って内傾する口縁部になる。内外面ともナデで仕上げている。口縁部はヨコナデである。橙で砂粒僅かに含む。化粧土塗布している。吉備の土器かと想定している。

(92) は内傾する体部で外面はユビ成形からナデ仕上げで、内面は斜め方向のヘラケズリである。口縁部はヨコナデで擬口縁部分に沈線状に残っている。口縁部は直立ぎみに外傾し端部は丸く納めている。

(95) は口縁部の破片である。頸部の稜線は比較的強く外反してから直立する二重口縁となる。口縁部には擬凹線かもしれない沈線が3条存在する。ヨコナデで、内面は橙、外面は黒褐で小石粒・砂粒を含む。頸部下内面は斜めから横方向のヘラケズリを施す。丹後方面からの搬入品であろうか。

(110) は全体的に外傾する口縁部でユビ成形からヨコナデを加える。外面は突帯状に出ているが内面は僅かに窪んでいる程度である。内面はヘラケズリでにぶい黄橙、外面は橙である。山陰地方（甕Ⅰ）かとも思われたが、外反していなくて外傾していることややシャープさに欠けることから、甕Jとした。

(111) は強いヘラケズリによって内面が薄くなり頸部の稜線を明瞭にしている。頸部は短く外反し上部は外反する。端部は丸く肥厚ぎみで、2条の凹線が施されている。体部外面はハケ整形である。色調は橙。

(123) は器形的には甕Ⅰのものであるが、外面に縦方向のタタキメが残っていることから甕Jとした。頸部は緩やかに湾曲し擬口縁部から外傾し端部近くで角度をさらに変える。端部は尖りぎみである。体部内面はヘラケズリで外面はタタキののちナデている。口縁部はヨコナデである。色調は橙～浅黄橙で砂粒多く含む。

(129) は内湾する体部から外反する頸部になり端部は大きな二重口縁状の面となって外傾する。端部は丸く、端面には4条の擬凹線が施されている。体部内面は横方向のヘラケズリで、外面はハケ整形からナデている。色調は橙～明褐で砂粒多く含む。北近畿のものであろうか。

(130) は口縁端部を僅かに欠いている。内湾する体部から外傾する口縁部になり、端部は上方につまみ上げている。内面ユビ成形からナデ、外面はハケ整形で、口縁部はヨコナデである。頸部内面の稜線は鋭い。橙をしており、外面の一部は黒褐を呈する。砂粒多く含む。口径が大きいことから丹波の土器（甕A）かとも思われるが、一応ここに入れておく。

(131) も丹波の影響が強いと想定（甕A3）しているが、一応ここで扱う。内傾する体部内面は斜めから横方向のヘラケズリで、口縁部はヨコナデである。端面に1条の沈線がある。にぶい橙で砂粒多く含む。

(138) は二重口縁ではないが、該当するところがないのでここで扱う。山陰の影響を受けた口つくりと思われる。外反する口縁部で端部を上方に大きくつまみ出している。端面となり2条の沈線を施している。体部はタタキから口縁部を作り出しヨコナデで仕上げている。内面はにぶい黄橙、外面は浅黄橙である。

(140) は内湾する体部から頸部短く大きく屈曲し外傾する口縁部になる。端部は丸い。磨滅しているが、ナデ仕上げで、口縁部はヨコナデである。化粧土を塗布している。外面は橙～浅黄、内面は灰白を呈する。

甕K (138)

吉備産の甕で搬入品である。

(138) は内湾する体部から外傾し擬口縁部となって直立する口縁部で端部丸い。体部内面は斜め方向のヘラケズリで、口縁部はヨコナデである。端面には擬凹線が施されている。にぶい橙である。

甕L (49)

口縁部が内湾する布留傾向甕である。

(49) は器高22.7㎝を測る図上で完形の甕である。体部は尖りぎみの倒卵形である。外面は縦方向のハケ整形から横方向のハケで調整し、頸部下外面に1条のヘラ描きやや蛇行する直線文が施される。内面はユビ成形ののち上半は斜めから横方向のヘラケズリを行う。屈曲して内湾する口縁部となり、頸部は丸く

稜線はない。口縁端部は内外に肥厚し端面となる。外面は浅黄橙～褐灰、内面はにぶい黄橙を呈し細砂を含む。体部下半には煤付着している。

甑

（24）の器形は甕であるが底部に穿孔が見られることから甑とする。小さな平底を持つ倒卵形の体部で外面は橙で丁寧にハケ整形している。内面は橙から灰白で縦方向のヘラケズリで頸部下の横方向は見られない。口縁部は内面にハケ整形が見られるがヨコナデで仕上げ、端部尖りぎみである。砂粒多く含む。底部の円孔は外側から内側に向けての穿孔で最大径8㎜を測る。

底部（142～184）

多くは甕底部であるが、形態から（152）は壺で、（153）なども壺の可能性もある。底面は平底のもの（153など）、突出平底（144など）、上げ底（155など）、脚台風のもの（182など）、尖り底（169）があり、図化していないが丸底もある。ドーナツ状や円板状に粘土を補填した底部再成形のものも複数ある。底部の整形はナデが大半であるが、タタキ底のものもある。底面に木葉痕が残るものもある。外面の成形はタタキが多い。（165）は通有のタタキで、（164）は格子状にタタキが施されている。（144）は体部の器壁が薄ければ脚台式の製塩土器かとも思える器形である。（168）は内面がくもの巣状のハケになっている。（405）の底面は通常の突出平底であるが、格子タタキになっている。（413）も格子状タタキでナデで消している。突出平底で体部は水平のタタキ成形である。

壺

壺は6種に分けられる。壺Aはくの字のもの、壺Bは口縁部が外反しおもに端部が肥厚するもの、壺Cは直口するもの、壺Dは二重口縁のものである。壺Eは長頸壺、壺Fは讃岐からの搬入品である。

壺A（190・200・212・213・416・419～22）

（190）は内傾する体部に頸部大きく屈曲し、口縁部外傾し端部角張る。端部上方につまみ出し、端面に1条凹線がある。体部内面はユビ成形ののち横方向のヘラケズリで器壁に凹凸がある。外面はハケ整形をナデで仕上げる。浅黄橙で砂粒多く含む。

（200）は球形の体部から外傾する口縁部である。底部は丸くなっていたものをユビ押さえによって凹ませ（上げ底）底部としている。内面はユビ成形からハケ整形を何回か行っている。粘土紐の継ぎ目が残っており、分割成形の痕跡であろう。外面は右上がりから水平方向のタタキをし、ハケ整形を行い、ヘラミガキで仕上げている。軽侮内面の稜線は鋭く、口縁部は内湾ぎみで新しい要素と思われる。端部は丸い。口縁部内面はハケ整形からヘラミガキである。にぶい黄橙～褐灰を呈しており、黒斑がある。

（212）は球形の体部から短く外反する口縁部になる。端部は尖りぎみである。磨滅著しいが、内面はユビ成形からハケ整形を行い、板ナデ・ナデ仕上げである。外面は板ナデ、口縁部はヨコナデである。浅黄橙～にぶい黄橙で、砂粒多く含む。

（213）も球形の体部から外傾する口縁部になる。端部は外側につまみ出す方形である。内面は黄灰～淡黄でユビ成形から斜め方向のヘラケズリを行い、板ナデで仕上げる。外面は浅黄橙～褐灰でナデと板ナデを行っている。口縁部はハケ整形からヨコナデをしている。

（416）は内傾する体部から外反する口縁部になり端部角張る。ハケ整形からヨコナデ。内面ケズリからナデでにぶい橙で砂粒含む。

（419）は内湾する体部から直立ぎみに延び外反して端部上方につまみ出す。ヨコナデで体部はハケ整形。灰白で砂粒多く含む。

（420）は単純に外反する大形の口縁部で端部角張る。橙～にぶい橙である。

（421）は口縁端部を欠いている。倒卵形の体部に突出平底が付く。頸部は外反する。底面はタタキ底でナデで調整を加える。内面はハケ整形、外面はタタキからナデそしてミガキで仕上げる。橙～淡橙で黒斑がある。

（422）も口縁部を欠く大形品である。肩の張る球形で底面も大きく木葉痕が残っている。内外ともハケ整形からナデている。浅黄橙～橙である。

壺B（187～189・191～194・197・201・202・211・415・417・418）

（187）は外反し端部が内外に大きく肥厚している。外面はハケ整形からナデ、内面はナデである。口縁部はヨコナデで、橙をしている。丹を塗っている。

（188）は直立する頸部から外傾し端部下方に折り曲げ肥厚したようになっている。体部にはタタキメが認められる。ユビ成形で頸部と口縁部下にはユビ痕跡が認められる。にぶい橙～にぶい黄橙で砂粒多く含む。

（189）は内湾する体部で内面はナデで、外面はハケ整形をナデている。頸部は外湾し端部近くで外側に開き端部肥厚し4条の凹線が施される。内面は灰白、外面は浅黄橙で、砂粒含む。

（191）は外反し端部内外に肥厚する。内面はハケ整形で、口縁部はヨコナデである。内面は橙で、外面はにぶい橙である。

（192）は内傾する体部から外反する長めの頸部になり端部は内外に肥厚する。特に上方に大きくつまみ出している。端面中央が窪んでおり凹線状になっている。内外面ともにハケ整形で、ヨコナデで仕上げている。色調は橙で砂粒含む。

（193）は直立ぎみの頸部から外反する口縁部で端部角張る。端面に竹管文が巡らされている。全体にヨコナデで外面は細かいヘラミガキがなされている。内面もヘラミガキと思われる。内面は明赤褐～にぶい黄橙、外面はにぶい黄橙～橙の精製品である。

（194）は外反する口縁部で端部は角張る。端部周辺を強くヨコナデすることによって肥厚したようになっている。内外面ともにハケ整形からナデで仕上げる。口縁部はヨコナデ。内面はにぶい橙～褐灰で外面は浅黄橙である。頸部は湾曲しており、内面は段が付いて薄くなっている。ユビ成形によるものであろう。

（197）は外反する口縁部から端部近くで屈曲し水平ぎみにつまみ出す。端部は尖っており上方に延ばす。端部のつまみ出し方から丹波系と思っている。ヨコナデからヘラミガキで丁寧に仕上げている。外面はハケ整形から縦方向のミガキ、内面は横方向のミガキを施す。

（201）は端部を欠いている。内湾する球形の体部から外反する頸部になる。表面磨滅が顕著であるが、外面はタタキ成形と思われる。頸部にも水平から僅かに右上がりのタタキが認められる。にぶい黄橙～オリーブ黒を呈している。砂粒多く含む。

（202）は内湾する肩が張ると思われる体部から頸部は直立し、変化点を持って外傾する口縁部になる。端部は角張りヨコナデで仕上げている。ヨコナデは強く端部下が沈線状になっている。外面は7本／㎝の細かいハケ整形からナデている。内面はナデ調整である。内面はにぶい黄橙、外面はにぶい橙で砂粒含む。

（211）は長く外反する口縁部で端部は内外につまみ出され肥厚したようになっている。内外面ともにハケ整形からナデ調整である。口縁部はヨコナデ。内面は橙～浅黄橙、外面は橙であり、砂粒多く含む。

（415）は外反し端部角張り上につまみ出す。肺白で砂粒含む。ヨコナデ。

（417）も外反し端部内外に大きく肥厚する。端面に3条の凹線が施される。外面はタタキからハケ、内面は粗いハケ整形からナデ。口縁部ヨコナデでにぶい橙をしている。

（418）は直立する頸部から水平ぎみに外反し端部内外に肥厚する。端面に2条の凹線がある。ヨコナデでにぶい橙をしている。

壺C　（185）

（185）は頸部内面の稜線は明瞭で直立する頸部で端部は外反し尖る。外面はハケ整形からナデで、全体にヨコナデで仕上げる。にぶい橙～浅黄橙で砂粒含む。

壺D（99～100・186・195・196・203・209・210・423）

（99）は二重口縁の壺で緩やかに大きく外反する頸部から外傾する口縁部で、擬凹線が巡らされている。端部は角張っている。内面は灰白で外面は浅黄橙で砂粒多く含む。

（100）は頸部が長いもので外反している。内面には絞り目が見られる。口縁部は二重口縁で大きく外反しており、面に擬凹線が施されている。端部は反りぎみに丸い。ヨコナデで仕上げる。浅黄橙～にぶい橙で砂粒含む。

（186）は二重口縁であるが、稜線は甘く崩れている。軽侮外面にはヘラ先刺突文が巡らされている。外面はユビ成形からヨコナデしてヘラミガキで仕上げている。端部は角張っており、端面に1条の沈線が認められる。内面はにぶい橙～明褐灰、外面はにぶい褐である。

（195）は内湾する体部から外反している。口縁端部は残っていないが、頸部の屈曲状態から二重口縁と想定している。残存部端上面に剥離痕があるのが、上部口縁部の接合部であろう。体部内面はヘラケズリで外面はナデ。頸部はハケ整形からナデ調整である。色調は褐灰～灰白である。

（196）も上半口縁部を欠いているが剥離痕は明瞭である。外反する頸部からさらに外反し、直立ないしは外傾するようである。擬口縁部は強いヨコナデによって凹線状に凹んでいる。外面はハケ整形からナデている。橙で砂粒多く含む。

（203）は外反する頸部から擬口縁部となり外傾する口縁部になる。端部は角張り内側につまみ出す。内面の頸部稜線はやや甘い。磨滅しているが、ユビ成形からナデと思われ、口縁部はヨコナデで仕上げている。内面は浅黄橙、外面はにぶい橙である。粗砂含んでいる。

（209）は緩やかに屈曲しているものの直立する頸部から外傾し突帯を有して外反する口縁部になる。端部は角張りぎみである。内外面ともにハケ整形からナデを行っている。粘土紐の継ぎ目も見られる。色調は浅黄橙～淡橙である。口縁部はヨコナデ仕上げ。

（210）は外反する頸部が擬口縁部となり突きだしており、そこから外反する。端部は角張りぎみに丸く、外側にややつまみ出している。頸部内面には絞り目が残っており、ナデ調整を行っており浅黄橙である。外面はナデ仕上げで灰白をしている。口縁部は強いヨコナデで器面に凹凸があり凹線状になっている。砂粒多く含む。

（423）は直立する頸部から外傾し緩やかに曲がりさらに外傾する。外面はハケ整形で内面には工具痕跡が残っている。橙である。口縁部はヨコナデ。

壺E（198・199・204～208・426）

長頸壺の中で比較的頸部が短く外傾して終わるものをＥ１、口縁部が開くものをＥ２と細分する。

E１

（198）は小さな平底から球形の体部から外傾する口縁部に続く。端部は丸く、内側につまんでいる。ハケ整形からナデている。頸部下はユビ成形の痕跡が残る。体部中央に焼成後の穿孔があるが、意図的な

ものかどうか不明である。被熱によって薄くなっているので、劣化によるものの可能性が高い。黒斑が認められる。浅黄橙～赤を呈する。

（199）は口縁端部を欠いているが長頸壺に復原できる。ドーナツ状の稜線を持たない平底に肩の張る球形の体部から外反する口縁部になる。板状工具で内面をナデ上げている。外面も同じ工具による板ナデ調整かと思われる。色調は浅黄橙～橙となる。

E 2

（204）は頸部が内湾ぎみに僅かに外傾し端部近くで外反している。端部は上へつまみ上げており端面が凹線状に凹んでいる。外面は縦方向のハケ整形からナデ、内面は板ナデ・ナデで仕上げる。口縁部はヨコナデで大きめの石粒や砂粒多く含む。内面は浅黄橙、外面は灰白である。

（205）は頸部が短めであるが、ここに入れておく。時期がやや遡るものかと思われる。内傾した肩部から外傾し端部下から外反する。端部は内外に肥厚し、端面に２条の凹線を有する。外面はタタキ成形からハケ整形、そしてナデで仕上げている。口縁部はヨコナデである。色調は浅黄橙で、砂粒含んでいる。

（206）は長く外反する頸部で口縁部はさらに外反し端部丸い。口縁部はヨコナデで、内外面はナデ仕上げである。口縁部は歪んでいる。浅黄橙で砂粒多く含む。

（207）は内湾する体部から直立する頸部で屈曲して外傾する口縁部になる。口縁部の多くを欠いている。ユビ成形ののちハケ整形で、さらにナデで調整している。体部内面には指圧痕が残っている。にぶい黄橙で砂粒含む。口縁部にハケ状工具の痕跡が１列に刺突文状に残っており、口縁部が大きく外反していたことが推測される。

（208）は内傾する体部から外傾する長い頸部になる。頸部内面の稜線は甘い。ここから外反するものと思われるが、残存していない。上方の残存部近くにヘラ描きの沈線が1条あり、頸部と口縁部の境を示すものであろうか。外面はハケ整形ののちヘラミガキで仕上げている。にぶい橙である。内面は板ナデと思われる工具痕が多く見られ、にぶい黄橙～橙をしている。

（426）は古相を示す長頸壺で磨滅しているがヨコナデであろう。にぶい黄橙で外傾し端部肥厚する。

壺F（214～220）

甕と同じく搬入品をＦ１、模倣したものをＦ２に細分する。

F 1（216～220）

（216）は頸部から上の破片である。頸部は内傾しており、口縁部は大きくＬ字形に屈曲し、端部は角張り内外に肥厚する。強いヨコナデによって端部から口縁部中位までは凹凸が生じている。頸部内面はユビ成形の痕跡が明瞭にみられる。にぶい赤褐で砂粒多く含む。

（217）は頸部から肩部にかけての破片である。体部上半は外反する特徴的なプロポーションをしている。内面には指圧痕が明瞭に認められる。外面はヘラミガキがなされている。頸部はくの字に大きく曲げられ、稜が明らかである以上に内面が突出しており、頸部は外傾する。内面には剥離痕がみられる。色調はにぶい黄橙～灰黄褐で砂粒多く含む。

（218）も頸部から肩部にかけての破片である。内湾する体部から内湾ぎみに直立する頸部である。体部内面はほとんどユビ成形のままで、一部ナデている。下部にはヘラケズリが行われている。外面はハケ整形からナデている。頸部に断面台形の突帯が巡らされ、頂部に刻み目が入れられている。頸部内面は横方向の、外面は縦方向のハケ整形からナデている。にぶい橙で砂粒多く含む。

（219）（220）は大形となる二重口縁となる壺の口縁部である。（219）は外傾しており、端部は上方につまみ出している。下端は擬口縁部で剥離している。ヨコナデで調整されており、端面は強いヨコナデに

よって擬凹線状になっている。(220) は短く大きく外反する頸部から直立ぎみに外傾する口縁部で端部は角張り内外に肥厚する。強いヨコナデによって口縁部には凹凸が認められる。擬口縁部は三角の突帯状に鋭く突き出ている。両者ともに橙で砂粒多く含む。

(424) は山陰からの搬入品で化粧土を塗っている。外反する頸部からさらに外反し端部尖りぎみでヨコナデである。黄橙～浅黄橙で砂粒多く含む。

(425) は讃岐からの搬入品である。外傾する口縁部で二重口縁になるものだが、口縁部を欠いている。内面の粘土接合部に刻み目を入れている。接合強化のためであろうか。内面褐灰、外面灰黄褐で砂粒多く含む。

F 2 (214～215)

(214) はやや内傾ぎみに直立する頸部から外反する口縁部である。内面は横方向のハケ整形からナデている。外面は縦方向のハケ整形からナデを加える。口縁部はヨコナデである。色調はにぶい橙。

(215) は内傾する体部がそのまま頸部に延び、頸部上部で稜線を持って外傾する口縁部になる。端部は尖っている。内面はヘラケズリで、外面は縦方向のハケ整形である。口縁部はユビ成形からハケ整形を行い、ヨコナデで仕上げている。浅黄橙で砂粒多く含む。内面の技法がヘラケズリと搬入品とは異なっている。

底部 (221～232・430・431)

壺と思われる底部である。体部下半までの破片なので壺の分類できない。図化したものの多くは底部再成形の突出平底である。(221) (231) だけが上げ底である。底面に木葉痕が残るものが多く、(223) (225) (227) (229) に残されている。それ以外はナデ仕上げである。体部外面はタタキ成形が多く、タタキは (232) の粗めのものもあるが、再成形されていることもあってほとんどは細かいタタキである。タタキ成形以外では (224) が内面も含めてヘラミガキで丁寧に仕上げられている。底径は3.1cmと小さく、底面もナデで仕上げられた精製品である。(226) も外面はヘラミガキがなされている。底部は平底だが、底面が平坦でない不安定なものである。にぶい橙を呈し、内面はユビ成形からハケ整形である。(231) にはタタキは見られるが、ナデてからヘラミガキで調整している。(228) はタタキ成形の可能性が高い凹凸があるが、現状ではタタキ目は確認されずハケ整形である。内面にはくもの巣状のハケが見られる。平底だが平たい安定した底部である。内面は褐灰、外面は浅黄橙をしている。くもの巣状ハケは (225) にも見られる。

小形壺 (233～239・242・243・427)

(233) は壺E1の小形で甕にも似るものである。平底から倒卵形の体部となり頸部は短く直立し口縁部は外傾する。端部は上側に尖らせるもので端面を形成しており、そこに2条の擬凹線が施されている。口縁部はヨコナデで、体部外面はハケ整形からナデ、内面はユビ成形からナデで、底面はナデで仕上げている。浅黄橙～にぶい橙を呈し、砂粒多く含む。

(234) は口縁部が長く発達していることから、ここで報告するが、甕に近い器形である。口径が体部最大径より上回っている。球形の体部で内面は粘土紐がそのまま残されている。ナデ調整もみられる。外面はハケ整形でナデ仕上げを行う。口縁部はヨコナデで、にぶい橙をしている。

(235) は球形の体部から外傾する口縁部が付く。外面は灰白～浅黄橙で横方向から縦方向のハケ整形ののちナデ調整を加える。内面は浅黄橙～褐灰でユビ成形からナデである。頸部下の内面は窪んでいる。口縁部は僅かに湾曲しており、内外面ともにハケ整形でナデ仕上げである。端部は残存していない。黒斑が認められる。

（236）は外傾する口縁部で精製土器である。頸部で剥離しており、端部は丸い。明赤褐で細砂を少量含むが胎土は精良である。口縁部は完存している。

（237）は内傾する肩部から直立ぎみに延びる頸部に続く。頸部に断面三角形の突帯が付き、刻み目を施している。肩部には工具痕がきれいに文様のように残っている。外面はハケ整形ののちナデ・ヘラミガキで橙、内面はハケ整形ののちナデでにぶい黄橙～褐灰をしている。

（238）は精製の小形台付長頸壺である。扁平な球形の体部から頸部は直立するか。脚台は内湾している。口縁部・脚台部とも端部は残存していない。体部内面はユビ成形からナデ、外面は細かいハケ整形からヘラミガキがなされている。頸部外面に細いヘラ描き沈線が1条認められる。内面の稜線は明瞭である。にぶい橙～灰褐で胎土焼成ともには良好である。

（239）は球形の体部で丸底で、口縁部は内湾ぎみに外傾する。端部は丸い。磨滅顕著であるが、体部外面はハケ整形で、内面はユビ成形からナデである。口縁部はヨコナデ。浅黄橙～橙で砂粒多く含む。底部に黒斑が存在する。新しい要素の多い土器である。

（242）は丸底で内面にハケ整形からナデ、外面はタタキからハケ整形ののちナデ、口縁部はヨコナデである。全体的に強く被熱している。内面は灰白、外面は橙～明赤褐で、砂粒含む。

（243）は典型的な小形丸底壺である。球形の体部に外傾する口縁部が付き端部近くでやや反って尖る。内面はユビ成形からナデ、外面はハケ整形からナデ、口縁部は横ナデである。内面は橙、外面はにぶい橙。

（427）は装飾性のある壺で脚台は欠いている。肩の張る球形で内面はユビ成形からナデである。口縁部は短く直立し端部丸い。２個１対の円孔がある。灰白で砂粒多く含む。

鉢（241・244～263・439・445～448）

（241）は底部を欠く。内湾する体部に外反する口縁部が付き、端部は内外に肥厚している。内面はユビ成形からナデている。外面は右上がりのタタキで、やはりナデで仕上げている。口縁部はヨコナデである。内面は橙、外面はにぶい橙～灰黄褐で砂粒を含む。

（244）は判断しにくいようなユビで押さえることによって作られた小さな平底から内湾する体部になる。僅かに凹む頸部から内湾する口縁部で端部は尖る。外面は右上がりのタタキをナデで調整している。内面はユビ成形をナデ調整している。内面は灰白、外面は浅黄橙である。

（245）は半球形の体部から外傾する口縁部になり端部角張る。内面は橙～にぶい橙でユビ成形を板ナデで調整する。外面は橙で板ナデで調整する。口縁部内面はハケ整形である。砂粒多く含む。底部から体部下半に煤付着している。

（246）は手捏ねのミニチュア壺である。扁平な球形の体部から僅かに外湾する口縁部。端部は尖る。口縁部のみヨコナデ。橙で砂粒を含む。

（247）は内湾する体部から浅い頸部となり、僅かに外傾する口縁部で、端部は丸い。体部は胴長で外面はハケ整形からナデを行う。灰白～浅黄橙を呈する。内面は浅黄橙でナデ仕上げ、口縁部はヨコナデ。

（248）は粗雑な作りの鉢である。口径10.4㎝が最大径になるもので緩いＳ字状に屈曲して体部につながる。端部は肥厚ぎみで、頸部は僅かに凹むだけである。ユビ成形から内外面ともにヘラケズリをし板ナデで調整し、口縁部はヨコナデである。外面はにぶい黄橙、内面は橙で砂粒多く含む。

（249）はにぶい黄橙を呈し、外傾する口縁部で端部両側から尖らす。器壁は厚めである。体部に７条の沈線が巡らされている。同じ位置からすべて１周しており、つなぎ目が明瞭である。端部には刻み目が認められる。ユビ成形からナデで調整する。

（250）は内湾する半球形で端部丸い。ハケ整形からナデで仕上げる。一部ヘラミガキも見られるが、粘土紐の継ぎ目も残っている。外面に黒斑残る。浅黄～にぶい黄橙をしている。

（251）は小さな平底から内湾し端部丸くなる。やや高さのある半球形である。外面は多方向のハケ整形を行っている。内面はナデで丁寧に仕上げている。化粧土を塗っている。内面は橙で、外面は橙で一部にぶい黄橙で、黒斑が見られる。

（252）は口縁部が開くタイプで端面に擬凹線を施す。外傾する体部から屈曲する口縁部で端部は丸い。ヨコナデで仕上げ、橙～浅黄橙をしている。

（253）は口径が最大径になる浅鉢で扁平に内湾する体部から頸部短く外傾し屈曲して口縁部外反する。頸部内面の稜線は鋭く端部は尖る。ハケ整形からナデ、口縁部はヨコナデである。全体的に磨滅して明確ではないが、外面タタキ成形かと思われる。チャートや石英の小石粒多く含む。浅黄橙～にぶい橙である。

（254）は内湾する体部で器高高く、外面はユビ成形からタタキ、内面はハケ整形で、端部周辺のみヨコナデを施している。浅黄橙～橙で砂粒多く含む。

（255）は僅かに底が認められるような底で丸底からナデによって底を作ったと思われる。底はやや厚く内湾する体部で口縁部は丸く納める。外面はタタキ成形からナデ調整を加える。内面はヘラケズリからナデとヘラミガキを行う。分割成形の下半であろう。砂粒多く含み、橙である。

（256）も分割成形の底部を利用した鉢である。外面はタタキ成形で下半は縦方向になっている。内面はハケ整形で端部周辺はヨコナデである。内湾する体部で端部上方につまみ出している。小さな平底を持つ。ナデ調整によるもので、外面に黒斑が認められる。外面黄橙で、内面浅黄橙で砂粒多く含む。

（257）は小形の鉢である。底部は通有の大きさであるが器高が低く口径も復原すると10㎝くらいと小さい。底部はユビ成形で作っており上げ底である。外面はタタキで灰黄褐、内面はナデ仕上げでにぶい黄橙。口縁部は外反しハケ整形からヨコナデを施す。端部を欠いている。

（258）は底面に特徴がある完形の小形鉢である。径2.8㎝と小さ目の平底から内湾し端部は外側に尖らす。外面はタタキからナデ、内面は丁寧なハケ整形で端部周辺のみヨコナデで仕上げる。底面にヘラによる調整痕がヘラ記号のように残っている。底面から外面に大きな黒斑がある。胎土は小石粒含むものの全体では精良である。にぶい黄橙を呈している。口縁部やや歪んでいる。

（259）は僅かに上げ底となった平底で、体部は内湾し端部丸い。ユビ成形から内面はヘラケズリを施し、内外面ともハケ整形しナデ仕上げである。橙で砂粒多く含む。

（260）は内湾する半球状で端部丸い。器壁厚めで僅かな底がみられる。外面はタタキ成形で内面はくもの巣状のハケメが施される。ハケ原体の痕跡か、内面に放射状の刺突が残る。橙～にぶい橙で砂粒多く含む。

（261）は内湾する体部から短く外反する口縁部で端部角張り肥厚する。端面は凹線状に窪む。外面はタタキで内外面ともにナデ・ミガキを施す。頸部は緩やかで外面に窪みがある。口縁部はヨコナデで砂粒含む。外面は浅黄橙、内面はにぶい橙である。大形で丁寧な作りである。

（262）は片口の付く大形の鉢で、底部とわかる丸底で内湾する体部となり、大きく外傾する口縁部となる。頸部は短く内面の稜線は明確で強いヨコナデによって頸部外面は窪んでいる。外面はハケ整形、内面は頸部付近は横方向のヘラケズリをし、ハケ整形からヘラミガキで仕上げている。口縁部はヨコナデで端部は角張る。片口部はユビ成形しナデている。底部両側に黒斑がある。明赤褐～赤に焼き上げられている。

（263）は一見縄文土器浅鉢と思われるものである。表面磨滅が著しく技法を明らかにしがたい。平底から内湾し口縁部は上方に外傾する。口縁部は段々になり端部外側に尖りぎみに丸い。片口を有する。出

土層位は大半の土器と同じSD06であることから土師器としたが不明である。内外面ともヘラケズリからハケ整形し内面はミガキを行っている。縄文土器なら条痕文になる。内面はにぶい黄橙で外面はにぶい赤褐～にぶい橙で細砂を含むが緻密である。底面もナデ調整している。

（439）は平底で内湾する体部になり端部丸い。ナデ仕上げで内面にぶい黄橙、外面明黄褐である。

（445）は内湾する体部から水平に短く開く口縁部で端部角張る。ハケ整形からナデ仕上げ。橙～赤橙。

（446）も内湾する体部から頸部近くで直立し緩やかに外反する頸部となる。口縁部は短く外傾し端部角張り内外に肥厚する。体部はナデ仕上げで口縁部はヨコナデ。浅黄橙～淡橙で、平底が付くか。

（447）は杯で時代の下る土師器であろうか。内湾し端部尖る。体部はナデで口縁部周辺はヨコナデで明赤褐。

（448）は内湾し端部外側につまみ出す。体部はナデで器壁厚めである。口縁部はヨコナデで仕上げ橙。

低脚杯（264）

内湾する体部で端部は丸い。脚部は外反し端部は尖り気味である。橙を呈し、砂粒多く含む。脚台はユビ成形して接合しナデ仕上げ。杯部はヨコナデで内面はヘラミガキで丁寧に仕上げる。

台付鉢（240・265・267・432・433）

（240）は丹後方面からの搬入土器であろうか。丹塗りの土器で、内湾する扁平な体部に短く直行する口縁部が付く。外面はタタキののちナデで整形・調整する。内面はハケ整形ののちヘラミガキをしている。脚部も直に下がっている。脚部が長くなると高杯になる。脚部にもタタキが見られる。体部底は円板充填で作っている。器肉は浅黄橙～灰白、表面は橙である。砂粒多く含む。

（265）は内湾する体部で端部は外側につまみ出して尖らす。脚台部との接合は中実で高くなっており、水平ぎみに広がりはじめるが、大半を欠く。橙で砂粒含む。ハケ整形ののちナデ仕上げ。

（267）は表面をヘラミガキで丁寧に調整している。半球形に内湾する体部に外傾する脚部が付く。内外面ともにハケ整形からミガキで、脚台内面はくもの巣状のハケ整形だけである。内面はにぶい黄橙～橙、外面はにぶい橙である。胎土は精良だが黒色小石粒含む。

（432）は台部を欠く。内湾する体部から尖る端部になり、薄く仕上げられている。脚台との接合はユビ成形で行いナデ調整を加える。さらにミガキで仕上げる精製品である。橙で黄肉は黒褐。

（433）は内湾する体部で端部尖りぎみで脚台も内湾する。ユビ成形からナデで仕上げる。にぶい橙～浅黄橙で細砂含む。

脚台（268～274・434～436・440）

（268）は甕底部と思われる。内湾する底部に短く外に開く高台状の脚台が付く。ユビ成形ののちナデ仕上げ。脚台部もユビ成形で形成している。にぶい橙で砂粒含む。

（269）は台付き甕で、器高のある内湾する体部は内面ヘラケズリ、外面はナデ調整である。脚台は外反し端部丸い。ユビ成形で脚台を作り指圧痕が残っている。脚台は歪で平面形も楕円形である。明黄褐で一部オリーブ黒になっている。砂粒多く含む。

（270）は大形の脚台である。ユビ成形によって脚台を付けている。その後ナデ調整を加える。浅黄橙で砂粒を含む。低い中実で外側につまみ出している。体部は低く内湾するのであろう。

（271）は中実の脚台で高杯の可能性もある。外反する脚部で裾広がりになり端部丸い。体部（杯部）

は内湾する。ハケ整形ののちナデ調整。内面はにぶい黄橙、外面は浅黄橙で砂粒含む。器肉は黒っぽい色で断面サンドイッチ状になる。

(272) は上げ底の甕であろうか。内湾する底部に高台状に付く。脚台部はユビ成形で作っている。ナデ仕上げ。にぶい橙で砂粒含む。

(273) は外傾する脚台で端部丸い。中実で内湾する体部が付く。ハケ整形からナデ・ヘラミガキで仕上げる。内面はにぶい橙、外面は浅黄橙～にぶい橙で砂粒多く含む。

(274) は大形土器の脚台で外傾するが端部近くで外反ぎみになり端部角張る。体部も外傾する。外面にはタタキが僅かに見られる。タタキからハケ整形をし、ナデ仕上げする。接合部周辺はユビ成形。にぶい黄橙で一部オリーブ黒となっている。砂粒多く含む。

(327) は低い脚台で内湾する底部が付く。外反する脚部で端部尖りぎみに反る。3方透孔で内面ケズリで、外面ハケ整形からヘラミガキをしている。

(434) はユビ成形で脚台を付けナデで仕上げる。内湾する体部に外反する脚台となる。にぶい橙～橙でミガキも加えた丁寧な製品である。脚台内面には工具痕が残る。

(435) はナデで丁寧に仕上げた小さく外傾する脚台で内湾する体部に続く。体部はタタキをナデで消している。砂粒多く含み、橙である。

(436) は大きめの脚台で外反し端部丸く、体部内反する。内面は浅黄橙でナデで仕上げている。外面は灰白でハケ整形からミガキを施している。体部内面もナデで細砂含む。黒斑がある。

(440) は器種不明であるが、脚台から内湾する体部になる。内面は貝殻状工具で粗く整形している。脚台は上げ底でユビ成形からナデている。にぶい橙を呈する。

甑 (275～278・441～444)

(275) は尖り底中央を穿孔している。体部は内湾している。内面はハケ整形からナデ調整し浅黄橙を呈している。外面はナデ調整で橙である。砂粒含む。

(276) は丸底で内外面ともハケ整形からナデ調整である。外面に黒斑がある。砂粒多く含み、内面は灰白～明黄橙、外面は灰白である。接地面の大きい丸底中央に穿孔がある。

(277) は不安定な平底中央に焼成前に穿孔をしている。外面は浅黄橙で黒斑があり、タタキ成形からナデている。内面はにぶい橙でユビ成形後ヘラケズリをしナデで仕上げている。砂粒多く含む。

(278) はほぼ完形で厚い器壁の平底で中央に上下から穿孔している。体部は内湾し端部丸い。外面は右上がりのタタキをナデで調整している。下半はタタキによって面になっている。内面はハケ整形からナデで、底面もナデ調整を加えている。色調は橙で砂粒僅かに含む。

(441) は底部中央を欠くが高さのあるベタとなる底部で甑の可能性を考えている。さらに形態などから貴船神社遺跡出土の製塩に伴う土器ではと想定している。内湾する体部でナデで仕上げている。内面褐灰で外面は橙～灰白である。

(442) ～ (444) は底部の形状は異なるが、焼成前に穿孔している。

蓋 (279～290)

(279) は小形でつまみ部は外側に延び端部丸い。体部は僅かに外反し端部内側に尖らし接地部を多くしている。ユビ成形から丁寧にナデ調整し、外面はミガキもみられる。にぶい橙で砂粒多く含む。

(280) は外反する体部で端部丸い。器高高く、つまみ部は小さく外側に開き端部丸い。つまみ部はユ

ビ成形後ナデ。体部はハケ整形からナデ。浅黄橙で砂粒多く含む。

（281）はやや外側に開く高台状のつまみ部を持つ蓋で端部丸い。体部外傾し端部尖る。つまみ部はユビ成形からナデ。体部外面はにぶい橙でハケ整形からナデで、内面は橙で板ナデによって仕上げる。

（282）は斜め上方に延びるつまみ部でユビ成形からナデであるが、指圧痕が明瞭に残る。体部は外傾している。外面は灰白で面取りをしたような浅い稜線が残る。内面はハケ整形からナデでにぶい橙である。砂粒多く含む。

（283）の小さなつまみ部はユビ成形で作っており端部丸い。体部は僅かに外反している。外面は細かいハケ整形で内面はナデ仕上げ。色調は内面橙、外面にぶい橙で砂粒多く含む。

（284）は短い直立ぎみのつまみ部から外側に開いている。外面はにぶい橙でハケ整形、内面は橙でナデ仕上げ。

（285）はユビ成形によるつまみ部で上方に短く延び端部丸い。体部は水平ぎみに外傾する。ハケ整形からナデ仕上げであろうが、表面磨滅顕著である。浅黄橙で砂粒多く含む。

（286）は短く外側に延びるつまみ部で端部丸い。体部は外傾し端部に向かって器壁が薄くなり、端部尖りぎみ。内面天井部は凹んでいる。ケズリが見られる。外面ハケ整形である。橙で砂粒多く含む。

（287）は直立する筒状のつまみ部で端部丸く外側に延びる。体部外傾し端部丸い。ハケ整形からナデ。つまみ部は面になっている。橙で砂粒含む。

（288）は径4㎝と大きな短いつまみ部で端部突出させている。端部に向かって薄くなる体部で外反する。ハケ整形からナデ調整。内面はにぶい橙で外面は浅黄橙で砂粒多く含む。

（289）は外反する体部で端部丸い。つまみ部はユビ成形で作り出し端部丸い。外面はハケ整形からナデ、内面はナデ仕上げで灰白を呈する。外面は淡橙～浅黄橙で砂粒多く含む。

（290）は器高の低いつまみ部の大きい蓋である。つまみ部は外反しユビ成形で作り指圧痕残る。体部は外傾し端部近くでやや反り端部尖る。体部は指成形からナデ、ヘラミガキで丁寧に仕上げる。橙で砂粒多い。

高杯

筒状になるものを高杯A、中実のものを高杯B、中空になるものをCとする。杯部についても椀形と通常で分類すべきであろうが、鵤石田遺跡では1点しか椀形高杯が出土していないので、椀形高杯を高杯Dとする。

高杯A（295）

（295）は筒部タタキ成形後板ナデ杯部ならびに裾部内面はナデ・板ナデである。色調は橙～浅黄で砂粒含む。

高杯B（291～294・304・330）

（291）は裾部を欠き筒部は広がる。杯部底は内湾し稜線を持って大きく外反する。口縁部は二重口縁状に短く外反し端部丸い。内外面ともにヨコナデとヘラミガキで丁寧に仕上げる。浅黄橙～明赤褐に焼き上げられ、砂粒少量含むが緻密である。化粧土塗布している。

（292）の筒部内面はヘラ状工具で削り取っている。筒部は外傾し裾広がりになるものと思われる。杯部は外傾し大きく外反する。内外面ともにヘラミガキで仕上げる。内面は赤褐、外面は明赤褐である。

（293）は両端部を欠いている筒部の破片である。筒部は広がり、裾部は内湾ぎみである。4方透孔で、外面は橙でタタキからナデである。内面はヘラケズリで灰白を呈する。杯部は外傾する。ユビ成形の痕跡

残る。砂粒含む。

(294) は小形の筒部で裾は広がり、杯部は内湾する。外面は橙でヘラミガキである。筒部内面はにぶい橙で絞り目がありヘラケズリを施す。杯部内面はナデである。

(304) は低脚の高杯で内湾しており4方透孔である。内面には絞り目が残りミガキで仕上げている。杯部も内湾する。にぶい黄橙で砂粒含む。

(330) は口縁部を欠いている。外傾する筒部から水平に開く杯部から直立する。ハケ整形からナデで橙～明赤褐である。筒部内面には絞り目が残る。

高杯C (296～303・305・306・331)

(296) は外反する裾部で端部を欠く。内面ヘラケズリでそれ以外はヘラミガキで仕上げる。杯部に裾部を付けている。内面はヘラで調整している。にぶい赤褐で砂粒含む。

(297) の杯部底は内湾し稜線を持って外反する。口縁部は残存していない。丹塗りで内外面ともにヘラミガキで仕上げている。裾部は外反し端部は丸い。4方透孔で外面はミガキ、内面はユビ成形からナデで端部周辺はヨコナデである。器肉は灰白で、器表は橙である。チャートなどの砂粒多く含む。

(298) は外反する裾部で端部丸く、4方透孔である。内面ユビ成形からヘラケズリでナデている。外面はタタキからハケ整形で、端部周辺はヨコナデである。杯部は内湾しており、形状から円板充填と思われる。にぶい橙～橙をしており、砂粒多く含む。

(299) は杯部だけの破片で、内湾ぎみに外傾してから、甘い稜線から外反し端部丸い。筒部を欠いていることから確実ではないが、中空になると思われる。表面磨滅しているが、外面は歪な山形の波状文を施している。ヘラ描きは1本単位で施文している。内面は細かい縦方向のヘラミガキである。橙で砂粒含む。

(300) は緩やかに開く筒部から直線的に裾広がりになる。内湾する杯部で薄く仕上げている。透孔は1ヶ所しか残存していないが3方かと思われる。橙で砂粒含む。内面はナデ、外面はミガキである。杯部底に穿孔がある。

(301) は外反してから屈曲し内湾する裾部で端部は角張りぎみである。内面上部はユビ成形、下半はヘラケズリで、黒斑が見られる。端部周辺のみヨコナデで内湾する杯部である。外面は浅黄橙～にぶい橙で内面はにぶい黄橙～灰黄褐で砂粒多く含む。焼成やや甘い。透孔がなく異形であることから脚台かもしれない。

(302) は裾広がりとなり歪な円形の3方透孔が高い位置にある。内外面はハケ整形で外面だけミガキをしている。にぶい黄橙で砂粒含む。

(303) は口縁部が欠失しており器台のようになっている。内湾する杯部で口縁部が取れている。脚部は外反し杯部に付けている。4方透孔でヘラミガキで仕上げる。にぶい橙をしている。

(305) は外反する裾部で端部丸く、器壁厚めである。円板充填で接合している。内面は浅黄橙～にぶい黄橙で上部はヘラで成形し下部はハケ整形からナデ。端部はヨコナデ。外面は灰白～にぶい黄橙でタタキからハケで整形する。磨滅顕著でチャート・長石の砂粒含む。

(306) は全体的に外反する筒部で内湾する脚部が付く。杯部底がないが、円板が取れたものと思われるので高杯とした。内湾する裾部である。内面はヘラケズリ、外面はヘラミガキである。浅黄橙で砂粒多く含む。

(331) は外反する裾部で端部尖りぎみ。端部反り接地面広い。内面はケズリからナデ。外面はハケ整形。

高杯D（449）

（449）は内湾する体部で端部は丸い杯部である。脚部は外反し4方透孔がある。杯部内面には放射状に工具痕が残る。脚部外面はミガキで仕上げる。にぶい橙である。

器台（307～326・328・329・332・337・452・455～457）

大形のものと小形のものがある。鼓形器台など搬入品もあり、小形丸底壺に伴う小形精製器台も出土している。

（307）は外傾する下台で端部角張る。4方透孔で筒部は直線的だが、内面には稜線がある。筒部内面はヘラケズリで端部周辺はヨコナデ。橙で砂粒多く含み、焼成不良。

（308）は外反する下台で4方透孔で浅黄橙～灰白をしている。外面はタタキ成形からハケ整形で内面はケズリ。

（309）の上台は外傾し端部近くで上方につまみあげて面になっており、浅い凹線3条を施す。外面はハケ整形からナデ・ミガキ、内面はハケ整形からナデ。筒部内面はケズリで外面はナデである。口縁部に黒斑があり、内面は浅黄だいだい、外面は灰白で砂粒多く含む。

（310）は上台だけで外反ぎみに延び端部近くで屈曲し端面に4条の凹線を施す。浅黄橙～橙で砂粒多い。

（311）は外傾する上台で端部屈曲して肥厚し面となり3条以上の凹線を有する。端部はヨコナデで内面にはミガキで丁寧に仕上げている。にぶい橙～橙で砂粒多く含む。

（312）は8条の擬凹線を施す口縁部で壺の可能性もある。残存部全体にヨコナデである。外傾してから屈曲し端面となる。僅かに垂下する。内面明黄褐で、外面浅黄橙で砂粒含む。

（313）は大きく外反し変化して外反する上台で、下台は外傾しかかり内面に段となる稜線がある。筒部は内面ケズリで上台はハケ整形からナデで、端部はヨコナデである。橙で砂粒多く含む。

（314）は外反し口縁部は内外に延び外反する。筒部に3方透孔がある。内面はハケ整形で灰白～橙、外面は細かいヘラミガキを行い赤橙～橙である。端部はヨコナデで砂粒含む。

（315）は水平に開く上台口縁部で端部内側に肥厚し角張る。2条の凹線がありヨコナデ、にぶい橙である。

（316）は鼓形器台で強いヨコナデで部分的に凹線状になっている。上下台に個々に突帯があり、上台は外反し端部丸い。下台は直線的で内面ケズリである。橙で化粧土塗布か。砂粒多く含む。

（317）は外反する筒部がさらに大きく反り、突帯状になって外反する。端部は残存していないが、端部近くと思われる。突帯部に刻み目を施し、その上にヘラ描きの3条沈線がある。接続部分のみ4条になっている。上台外面は放射状のヘラミガキをし、内面も丁寧なミガキで刷痕が残る。筒部内面はケズリで外面はミガキである。化粧土を塗布しており、橙で砂粒多く含む。

（318）は外反しており3方透孔を有する。絞り目があり、ハケ整形からミガキで仕上げる。にぶい黄橙。

（319）は脚台で高杯かもしれない。外反し、内面はケズリ、外面はミガキで、橙を呈する。

（320）は外反しており3方の大きめ透孔を持つ。内面はケズリ、外面はナデとミガキで仕上げる。橙である。

（321）は直線的な下台で上台は外反する。内面は鋭い稜線となり、その下に3方透孔を配する。外面はタタキから粗い板ナデとナデ調整する。橙で砂粒多く含む。

（322）（323）は同形の小形器台下台である。ともにハケ整形ののちナデ仕上げである。外反し丸い。

筒部内面はケズリで、砂粒多く含む。(322) は丹塗りで橙となる。(323) は浅黄橙で内面に稜線を有する。

(324) は外反する筒部で垂下する外反する端面で端部丸い。にぶい橙で砂粒多く含む。対象の位置でない4方透孔で内外面ともミガキで仕上げる。端部下に凹線が1条ある。

(325) (326) は筒部から外反する下台で砂粒多く含む。(325) は内面ケズリからナデ、外面はミガキでにぶい黄橙である。(326) は間隔不均等な3方透孔で内面粗いハケ整形をナデている。にぶい橙である。

(328) の下台端部は上方に肥厚する。端面に凹線状の窪みがある。外反して筒部に続く。にぶい褐で砂粒含む。ヨコナデで仕上げる。

(329) は外反する下台で端部尖る。内面ハケ整形で筒部はケズリで、灰褐をしている。外面はヘラミガキでにぶい橙である。上台は明瞭な稜線を持たずに外傾する。砂粒多く含む。

(332) は直立する筒部で短く外反し端部内外に肥厚する。2条の凹線があり、端部周辺はヨコナデ。外面はヘラで調整しミガキも施す。橙で砂粒含む。

(333) は大きく外反する。下台端部は下方につまみ出しており丸い。端面強いヨコナデで凹んでいる。内面ヘラケズリからナデ調整。外面はハケ整形からミガキ。内面にぶい橙で外面は橙で砂粒多く含む。

(334) は直立する筒部で丹塗りである。下台は外傾し端部内外に肥厚し端面外反する。内面橙でケズリ、外面赤橙でハケ整形からミガキである。

(335) は皿状の浅い上台で器壁厚く、端部角張り凹線を有する。裾部は外反し間隔不均等の4方透孔である。内面はにぶい橙、外面はにぶい黄橙でミガキで仕上げる。

(336) も小形器台で図上完形になる。上台は皿状に内湾し端部肥厚し上方につまみ出す。下台は外傾し端部尖る。内面はにぶい黄橙、外面はにぶい橙で砂粒含む。4方透孔で外面はハケ整形からミガキをする。

(337) は丹塗りで上台はやや深い精製土器である。内湾し端部角張る。下台は外傾し薄くなって端部に向かい丸い。色調は橙～にぶい黄橙、ミガキで仕上げる。3方透孔で焼成やや甘い。

(452) は水平に伸び端部が上下に大きくつまみ出されて端面となる上台部で端面に波状文が施されている。上下端部近くに1条ずつ凹線がある。内面はにぶい黄橙、外面は橙をしている。

(455) は外反する筒部で両端部を欠いている。4方透孔があり、外面はハケ整形からミガキである。明赤褐。

(456) は外反する下台で4方透孔がある。内面には工具痕残り、外面はヘラミガキで仕上げる。上台は外反し端部上につまみ出しヨコナデである。浅黄橙。

(457) の外面は屈曲して段を作り端部丸くつまみ出す。器壁は厚めでにぶい橙をしている。

製塩土器 (266・339～344・372・373・384)

脚台式のものに限られる。脚台Ⅳ式が (342) (343) (373) で、それ以外は脚台Ⅲ式である。にぶい黄橙かにぶい橙を呈しており、砂粒を含んでいる。脚台部ならびに一部の内面はケズリがなされ、体部内面はユビ調整である。(266) は体部は内湾し、内外面ともにハケ整形からナデ調整となる。脚台は外反し端部丸い。接合部は工具痕跡が見られ、ハケ整形からナデ仕上げである。橙で砂粒含む。

(344) のみ外面にタタキが認められ、内面はハケ整形で内外面ともナデ仕上げである。(372) は橙で砂粒含む。(373) は胎土から讃岐からの搬入品と思われる。にぶい赤褐で砂粒少量含む。小さい脚台で短く外反する。(384) も搬入品であろうか。支脚のように長く延びている。先端は残っていないが尖るものであろう。浅黄橙で砂粒含む。上部は体部との接合部で割れている。

ミニチュア土器（338・345～350・438）

（338）は平底で底部から内側にくびれてから外傾する。製塩土器の脚台かとも思われたがミニチュアとしておく。底部は歪であり、ケズリからナデ調整する。内面は橙で外面はにぶい黄橙で精良な胎土。

（345）は底部が突き出したもので底部が厚い。壺底部か鉢のミニチュアと思われる。体部は内湾しており、ハケ整形からナデ仕上げである。外面の半分くらいが黒斑になっている。にぶい黄橙で砂粒含む。

（346）は鉢で手捏ねにナデ仕上げである。不安定な丸底から内湾し端部肥厚ぎみである。底部に黒斑があり、橙である。砂粒少量含む。

（347）はやや大きめのミニチュア鉢である。端部は残っていないが、残存部はほぼ端部に近い部分と思われる。平底から屈曲する内湾である。手捏ねで内面はハケ整形する。底面は平滑にし丁寧な作りで黒斑が認められる。にぶい黄橙で薄く仕上がっている。

（348）は鉢である。平底から外傾している。端部付近でやや内湾し細くなっている。やはり外面に黒斑がある。底面はナデ仕上げで体部はハケ整形からナデ。内面は黒褐で外面は浅黄橙である。

（349）は高杯脚部上部のような形状をしているが、底面に仕上げられている。平底から外反している鉢ミニチュアとしておく。ハケ整形ののちミガキで丁寧に仕上げている。ミガキは下半は縦方向、上半は横方向である。内面には絞り目状の痕跡がある。大きな黒斑があり、にぶい黄橙をしている。

（350）は器台である。内湾する上台で端部角張り、内湾する下台となり端部丸い。全体の形状は臼のようである。内面はハケ整形からナデ、外面はさらにミガキで仕上げる。橙～にぶい黄橙である。

（438）は鉢で大き目の平底から僅かに内湾する体部から口縁部になる。端部丸い。手捏ねで、内面はケズリをナデで仕上げる。底近くに工具痕残る。にぶい橙で砂粒含む。

玉（351・352）

（351）は土玉で1.65×1.9cmと歪な球形をしている。中央に両側から穿孔した小さな穴がある。ナデ整形でにぶい橙をしている。砂粒含む。（352）はガラス製の玉で管玉の割れたものか明らかでない。青色をしており、穿孔は認められない。端部割れている。

（3）古墳時代以降の遺物

古墳時代須恵器

（464）（465）は杯蓋で稜線のしっかりした製品である。（464）は内湾し端部は外側につまみ出しており、薄くなっている。灰白で稜線上に凹線があり、ロクロナデである。（465）は天井部は丸く鋭い突帯状の稜線から内湾する口縁部になる。端部は外側だけ直につまみ出している。灰～灰白でロクロナデである。（466）は瓦泉で生焼けである。内面はユビ成形からハケ整形ののちナデであり、外面にはタタキが見られる。球形の体部で穿孔がある。（467）は外傾する甕口縁部で端部内外に肥厚する。ロクロナデで灰白～灰をしている。（468）（469）は波状文が施された須恵器破片である。

古墳時代以外の須恵器

（376）は杯で高台のない杯Aであろう。内湾ぎみに外傾し端部丸い。灰色で砂粒含む。ロクロナデである。（377）は椀になるか。屈曲して外側に広がっている。ロクロナデで端部丸い。灰白で砂粒含んでいる。

V　土器の表面にみられる砂礫

奥田　尚

太子町鵯石田遺跡から出土した一部の土器の表面にみられる砂礫を肉眼で観察した。観察は土器全体を裸眼で行い、観察良好な部分を倍率25倍の実体顕微鏡で観察した。観察結果・砂礫の特徴と類型採取推定地について述べる。

砂礫の特徴

土器の表面で識別できた砂礫種は、花崗岩、閃緑岩、流紋岩、玄武岩、砂岩、泥岩、片岩、蛇紋岩、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。これら砂礫種の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大4㎜である。石英・長石、石英・黒雲母が噛み合っている。

閃緑岩：色は灰色で、粒形が円、粒径が最大0.7㎜である。長石・角閃石が噛み合っている。

流紋岩：色は灰白色、灰色、暗灰色、黒色、褐色、赤褐色、茶褐色、淡茶色、茶色、赤茶色、淡桃色、桃色と様々で、粒形が角、亜角、亜円、粒径が最大6㎜である。石基はガラス質で、石英や長石、黒雲母の斑晶がみられるものがある。凝灰岩質や溶結しているものもある。

玄武岩：色は茶褐色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大4㎜である。石基はガラス質で、長石と橄欖石の斑晶がみられる。資料番号092の資料にみられる。

砂岩：色は灰色、褐色、茶褐色、赤褐色で、粒形が亜円、粒径が最大4㎜である。細粒砂からなる。

泥岩：色は灰色、暗灰色、黒色、褐色、茶褐色、赤茶色、茶色で、粒形が亜角、亜円、円、粒径が最大0.7㎜である。微かに片理がみられるものや白雲母がみられるものがある。古期層の泥岩である。

片岩：色は灰色、茶色、赤茶色、灰緑色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大4㎜である。泥質片岩、絹雲母片岩、石英質片岩である。

蛇紋岩：色は暗灰色、暗灰緑色で、粒形が亜角、亜円、粒径が最大1.5㎜である。資料番号086、095の資料にみられる。

火山ガラス：無色透明、黒色透明、粒形が貝殻状、フジツボ状、板状、束状で、粒径が最大0.5㎜である。

石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大3㎜である。複六角錐あるいはその一部が認められるものがある。

長石：灰白色、灰白色透明、淡桃色で、粒形が角、粒径が最大5㎜である。

黒雲母：金色、板状で、粒径が最大1㎜である。

角閃石：黒色、茶褐色で、粒形が角、亜角、粒径が最大6㎜である。短柱状、粒状をなし、自形をなすものや結晶面がみられるものがある。

輝石：黒色、黒色透明、青銅色透明で、粒形が角、粒径が最大1㎜である。粒状、柱状、短柱状で、自形をなすものがある。

類型区分

土器の表面にみられる砂礫を砂礫種構成をもとに源岩を推定し、類型に区分すれば、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする1類型、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とする2類型、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする4類型、安山岩質岩起源と推定される5類型となる。更に、少量の砂礫をも

とに細区分すれば、1類型は1b類型、2類型は2a類型、4類型は4a・4ae・4aeg・4be・4d・4e・4eg・4egh・4egx・4g・4gn・4gx・4hn・4n類型、5類型は5dfgh類型となる。これら類型の特徴について述べる。

1b類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

2a類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

4a類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

4ae類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、自形をなす輝石を僅かに含む砂礫からなる。

4aeg類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・砕屑岩起源と推定される砂礫、自形をなす輝石を僅かに含む砂礫からなる。

4be類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、自形をなす輝石を僅かに含む砂礫からなる。

4d類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫からなる。

4e類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、自形をなす角閃石や輝石を僅かに含む砂礫からなる。

4eg類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砕屑岩起源と推定される砂礫、自形をなす角閃石や輝石を僅かに含む砂礫からなる。

4egh類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、片岩起源・砕屑岩起源と推定される砂礫、自形をなす輝石を僅かに含む砂礫からなる。

4egx類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、蛇紋岩起源・砕屑岩起源と推定される砂礫、自形をなす輝石を僅かに含む砂礫からなる。

4g類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砕屑岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

4gn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砕屑岩起源と推定される砂礫、他形をなす角閃石を僅かに含む砂礫からなる。

4gx類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、蛇紋岩起源・砕屑岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

4hn類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、片岩起源と推定される砂礫、他形をなす角閃石を僅かに含む砂礫からなる。

4n類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、他形をなす輝石を僅かに含む砂礫からなる。

5dfgh類型：安山岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩質岩起源・玄武岩質岩起源・砕屑岩起源・片岩起源と推定される砂礫を僅かに含む砂礫からなる。

砂礫の採取推定地

太子町鳥石田遺跡の西方には揖保川と林田川、東方には夢前川がある。これら河川の砂礫には、流紋岩質岩の砂礫が非常に多く含まれ、変成度が高い超塩基性の片岩の砂礫が比較的に多くみられることから、観察した土器に含まれている砂礫構成とは異なる。また、揖保川・林田川の河原礫には角閃石と輝石が目

立つひん岩礫が目立つ。しかし、当遺跡付近の山地では中生代白亜紀後期（9000万年前頃）の火成活動によって形成された流紋岩質岩が広く分布する。この流紋岩質岩の砂礫は石英が比較的少なく、輝石がごく僅かに含まれる場合が多い。また、観察した多くの資料には火山ガラスが含まれている。火山ガラスは河川砂礫にみられないことから、土器原料である粘土に含まれていたものであると推定される。

観察した土器の砂礫構成と同じような砂礫構成を示す砂礫を近距離で採取できる地を砂礫の採取地とし、以下に砂礫の採取推定地を述べる。

流紋岩を主とし、泥岩や砂岩の砕屑岩、花崗岩、閃緑岩、片岩を僅かに含む砂礫は、砂礫構成と砂礫種の特徴から觜石田遺跡付近の沖積地の砂層や粘土層に含まれる砂礫と推定される。この砂礫構成には4a・4ae・4aeg・4be・4e・4g・4gn・4hn・4n類型が含まれる。これら類型の主をなす流紋岩には石英や長石の斑晶が殆どみられなく、色が多種におよぶ。

4egh・4egx・4gx類型の砂礫には玄武岩質岩や蛇紋岩のような塩基性の岩石を含み、古期層起源の砕屑岩が含まれることから、但馬中部から北部にかけての付近の砂礫と推定される。また、5dfgh類型の砂礫は但馬北部付近の砂礫と推定される。

4eg類型と4e類型で因幡とした砂礫は鳥取市付近の砂礫と推定される。

2a類型で河内恩智とした砂礫は八尾市恩智付近の砂礫と推定される。

1b類型の砂礫は花崗岩類分布地の砂礫と推定され、近くでは相生や牛窓、淡路北部付近の花崗岩が分布する地が推定される。

表2　土器の表面にみられる砂礫種

図番号	器種	石																礫								鉱								物								類型と砂礫の採取推定地
		花崗岩		閃緑岩		流紋岩		砂岩		泥岩		チャート		片岩		火山ガラス		石英		長石		黒雲母		角閃石		輝石																
		模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍	模断	30倍														
図017	甕					M－中 亜角	M 多 亜角				M 稀 亜円						M 僅 貝フ		M－中 E 多	M 稀	M－微				M－僅 E 多																4ag類型 在地
図018	甕					M－多 亜円	M 多 亜角										M 中 貝フ	M－微	M－僅 E 多						S 微 EF 中		S 稀														4e類型 在地
図019	甕					M－中 亜角	M－中 亜角				M 稀 亜角						M 僅 貝フ		L－僅 E 多	M－微					S 微																4gn類型 在地
図020	壺					L－多 亜角	L－多 亜角											M－微 E 多	M－稀 E 僅	M－稀	M－稀																				4d類型 在地
図021	壺					L－中 亜角	L－中 亜角										M 中 斜束	M－微	M 微 E 多																						4d類型 在地
図022	甕					M－中 亜角	L－僅 亜角											M－稀 E 多	L－微 E 中	S 微	M 稀																				4n類型 在地
図023	甕		M 稀 角			M－多 亜角	L－僅 亜角										M 中 貝フ	L－微	L－中 E 中	M－中	M－多																				4ac類型 在地
図024	壺					L 僅 亜円	L－中 亜角										M 微 貝板	M－並	M 僅 E 多	M－微	M 稀																				4e類型 在地
図025	甕					L－中 角	L－中 亜角										M 中 貝フ		M－微 E 多	M－僅																				4n類型 在地
図026	壺					L－多 亜角	L－中 亜角		M 稀 亜円								M 中 貝フ		L－微 E 多		M 稀																				4ag類型 在地
図027	甕		L 稀 角			L－中 亜角	L－中 亜角										M 僅 貝フ	L－微	M 稀		M 稀																				4a類型 在地
図028	甕					L－中 亜角	L－僅 亜角				M 稀 亜角								M－中 E 多	M－中	M－僅																				4eg類型 在地
図029	壺					L－中 亜角	L 僅 亜角										M－僅 貝束	M－微	M－僅 E 多		M 稀																				4n類型 在地
図030	甕					L－多 亜角	L－中 亜角		L 稀 亜角								M－中 貝束		S 僅 E 多		S 微																				4eg類型 在地
図031	甕					L－中 亜角	L－僅 亜角										M－中 貝束		L－中 E 多	M－稀	M 微																				4d類型 在地
図032	壺					L－中 亜角	L－僅 亜角										M－僅 貝		M－並 E 中	L－稀																					4e類型 在地
図033	壺					L－多 亜角	L－中 亜角										M 僅 貝		M－並 E 多	M－僅	M－僅																				4e類型 在地
図034	壺					M－中 亜角	M 中 亜角				M 稀 亜角						M 僅 貝	M－微	M 微 E 多	M 微	M 稀				M 微 EF 多																4eg類型 在地
図035	壺					M－中 亜角	M－中 亜角				M 稀 亜角						M 僅 貝フ	M－僅	M－中 E 僅		M－僅	M 稀 板																			4eg類型 在地
図036	壺					M－中 亜角	L－中 亜角										M 僅 貝	M－微	M－中 E 多		M 稀																				4e類型 在地
図037	壺					L－中 亜角	L－多 亜円										M 稀 貝	M－僅	M－並 E 多	M－微	M 稀																				4e類型 在地
図038	壺					M－多 亜角	L－中 亜角										M－中 貝フ	S 稀	M－微 E 中	M－微																				4e類型 在地
図039	壺					M－稀 亜角	M 微 亜角												M－僅 E 多																				4e類型 因幡付近
図040	壺																		M 稀	L－中	M 稀		L－僅 板	L－多	L－非														2a類型 河内恩智
図041	壺					M－多 亜角	L－多 亜角											S 微	M 微 E 非	S 稀	M 微																			4e類型 在地
図043	壺					L－多 亜角	L－多 亜角												M－微	M－微																				4n類型 在地

図043	甕					M－多 亜角	L－中 亜角											M－微	M 稀		M 稀						M 微 E 非	4e類型 在地
図044	甕					L－多 亜角	L－多 亜角				M 稀 亜円							M－微	M－微								M－僅 E 非	4eg類型 在地
図045	甕					M－多 亜角	M 多 亜角											M－僅	M 微 E 多		M 稀						S 稀 E 非	4e類型 在地
図046	甕					L－中 亜角	L－中 亜角										M－僅 貝		M 僅 E 非								M－微 E 非	4e類型 在地
図047	甕					M－中 亜円	L－多 亜角											M 稀	M 僅 E 多	M 稀	M 微						M 僅 E 非	4e類型 在地
図048	甕					L－微 角	L－微 亜角										M－多 貝フ		M－僅 E 多		M－微						M－微 E 多	4e類型 在地
図049	甕					M－僅 亜角	M 多 亜角											M－中	M 微 E 非		M 稀							4d類型 在地
図050	甕					L－多 亜角	L－中 亜角				L 稀 亜円						M 微 貝フ		M－僅 E 多								M－微 E 非	4eg類型 在地
図052	甕					L－僅 角	L－微 亜角			L 稀 亜角	L 稀 亜角						M－中 貝フ		S 微 E 中						M－微 E 多			4eg類型 在地
図053	甕					L－多 亜角	L－中 亜角				M 稀 亜角							M－微	M－中 E 多	M－微	M－微				M－微 E 多		M－微 E 多	4eg類型 宍粟付近
図054	甕					L－多 亜角	L－中 亜角								M 稀 亜角		M－中 貝フ	S 稀	M－僅 E 多		M－稀				M－稀			4hn類型 在地
図062	甕					L－多 亜角	L－多 亜角										M－僅 フ		L 稀	L－僅							M 稀 E 中	4a類型 在地
図065	甕		L 稀 角			L－多 亜角	L－中 亜角												M 微 E 非	M－僅	M－微							4a類型 在地
図067	甕					L－多 亜角	L－多 亜角												M 微 E 非	M－稀								4a類型 在地
図068	甕		L－微 角			L－中 亜角	L－中 亜角		L 稀 亜角								M 中 フ	L 稀		M－微	M－僅						M－微 E 多	4aeg類型 在地
図069	甕					L－多 亜円	L－中 亜角										M 微 貝フ	M 稀	L－僅 E 中	M－微							M－稀 E 非	4e類型 在地
図070	甕					L－中 亜円	L－中 亜角										M 稀 貝		M－微 E 非	L－稀							M 微 E 非	4a類型 在地
図071	甕					M－中 亜角	L－僅 亜角												M－微 E 中	M－微	M－微						S 稀 E 非	4a類型 在地
図072	甕					L－多 亜角	L－中 亜角										M 稀 フ		M－微 E 非	M－微	M 稀							4d類型 在地
図073	甕					L－中 亜角	L－中 亜角													M－僅	S 僅				M－微 E 非			4e類型 在地
図074	甕					L－中 亜角	L－中 亜角											L－稀	M 稀 E 多	M－微	M 稀						S 稀	4n類型 在地
図075	甕					M 稀 亜角	L－僅 亜角										M 多 貝フ		M－微 E 多		S 微						S 稀	4n類型 在地
図076	甕					L－多 亜角	L－多 亜角		L 稀 亜角		L 稀 亜角								M 微 E 中	M 稀								4g類型 在地
図077	甕					L－多 亜角	L－中 亜角											M 僅	M－僅 E 僅	M－微	M－微						M 稀 E 非	4e類型 在地
図078	甕				M 稀 円	M－僅 亜角	M－僅 亜円										M－中 貝板	M 稀	M－僅 E 多		M 稀						M 稀 E 非	4be類型 在地
図079	甕					L－微 角	L－僅 亜角	L 稀 角	L 稀 亜角										M－微 E 微	M 稀							M－僅 E 多	4eg類型 在地
図080	甕					M－多 亜角	L－多 亜角											M 微	M－僅 E 多								S 稀 E 非	4e類型 在地
図082	甕					L－多 亜角	L－中 亜角										M 微 貝	M－稀	M 微 E 多	M－稀	M 稀						M－稀	4n類型 在地
図083	甕					L－中 亜角	L 中 亜角										M 微 貝	M－稀	M 稀 E 非	M 稀	M 稀						S 稀	4n類型 在地
図086	甕					L－中 角	M 微 亜角	L 微 亜円	M 微 亜円								M 非 貝フ		M－微 E 非									4gx類型 但馬付近
図087	甕					M－中 亜角	L－多 亜角											S 僅	M 微 E 多	M 稀	M 稀						M－微 E 多	4e類型 在地
図089	甕					L－多 亜角	L－中 亜角											M－僅	M－僅 E 多	M－僅	M－微				M－微		S 稀 E 非	4e類型 在地
図090	甕					L－僅 亜角	L－多 亜角											S 微	M－微 E 僅		M－微						S 稀	4n類型 在地
図091	甕	L 稀 角	L－僅 角																M－僅	M－僅	M－微			M－中	L－多			3a類型 産地不明
図092	甕					L－僅 亜角	M－中 亜角	L－微 亜円						L 微 亜円	L－微 亜円		M 微 貝		M－僅 E 中	S 稀	M 僅						M－中 E 多	5dfgh類型 但馬付近
図093	甕					L－多 亜角	L－中 亜角										M 僅 フ	M－微	M－中 E 多	M－微	M 稀						M－僅 E 多	4e類型 在地
図095	甕					L－中 亜角	L－多 亜角		L－微 亜円										M－僅 E 多	M－僅	S 微					M 微	M－僅 E 非	4agx類型 但馬付近
図097	壷					L－中 亜角	L－中 亜角	L 僅 亜円	L 微 亜円						L－僅 亜円			S 稀	M－僅 E 多	L－稀	S 僅						S 微 E 多	4agh類型 但馬付近
図137	甕					L－多 亜角	L－多 亜角		M 稀 亜角									S 稀	L－微 E 非	M－微	M 稀						M－稀 E 非	4eg類型 在地
図262	鉢	L－稀 角	L－僅 角															S 稀	M－中	L－中	M－多		M 稀 板		S 微			1b類型 備前か淡路
図310	高坏					L－多 亜角	L－多 亜角										M－僅 貝フ	M－稀	M－僅 E 中								M 稀	4n類型 在地
図314	器台					L－微 角	M 僅 亜角										M 微 貝フ		M－僅 E 中						M 稀			4n類型 在地
図316	鼓形器台					L－中 亜角	L－中 亜角											M－微	M－僅 E 中	L－僅	M 稀						S 稀 E 非	4e類型 在地
図422	壷					L－多 亜角	L－多 亜角											M－稀	M 微	L－微	M 稀						M 稀	4n類型 在地
揖保川の砂礫 龍野市日山新龍野橋						L－多 亜角	L－中 亜角							L－多 亜円	L－中 亜円			L－稀	L－僅 E 稀		L－稀		M－稀 板		M－僅 E 稀		M－微 E 稀	8de類型
林田川の砂礫 姫路市口佐見			L－稀 角			L－非 亜角	L－非 亜角							L－僅 亜円	L－僅 亜円				L－僅 E 中		M－微		M－稀 粒板		M－微		M－微	4ahn類型
夢前川の砂礫 姫路市玉田		L－稀 亜角	L－稀 角			L－非 亜円	L－非 亜角							L－僅 亜角	L－僅 亜角			L－微	L－中 E 多		L－稀		M－微 板		M－微		M－稀	4ahn類型
市川の砂礫 姫路市[illegible]						L－非 亜円	L－非 亜角		L－僅 亜角		L－僅 亜円			L－僅 亜角	L－僅 亜角				M－僅 E 僅		M－微		M 稀 板				S 稀	4ghn類型

裸眼＝裸眼観察　裸眼による観察：L＝粒径が2㎜以上　M＝粒径が2㎜未満0.5㎜以上　S＝粒径が0.5㎜未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中
僅＝量が僅か　微＝量がごく僅か　稀＝量がごくごく僅か　30倍＝実体顕微鏡の倍率が30倍　実体顕微鏡による観察：L＝粒径が1㎜以上　M＝粒径が1㎜未満0.3㎜以上
S＝粒径が0.3㎜未満　－＝以下の粒径がある　E＝自形　EF＝結晶面がある　W＝白雲母が含まれる　板＝板状　貝＝貝殻状　フ＝フジツボ状　パ＝軽石状　球＝球状
類型区分は奥田の区分（1992）《庄内式土器研究2》を参照。

VI　おわりに

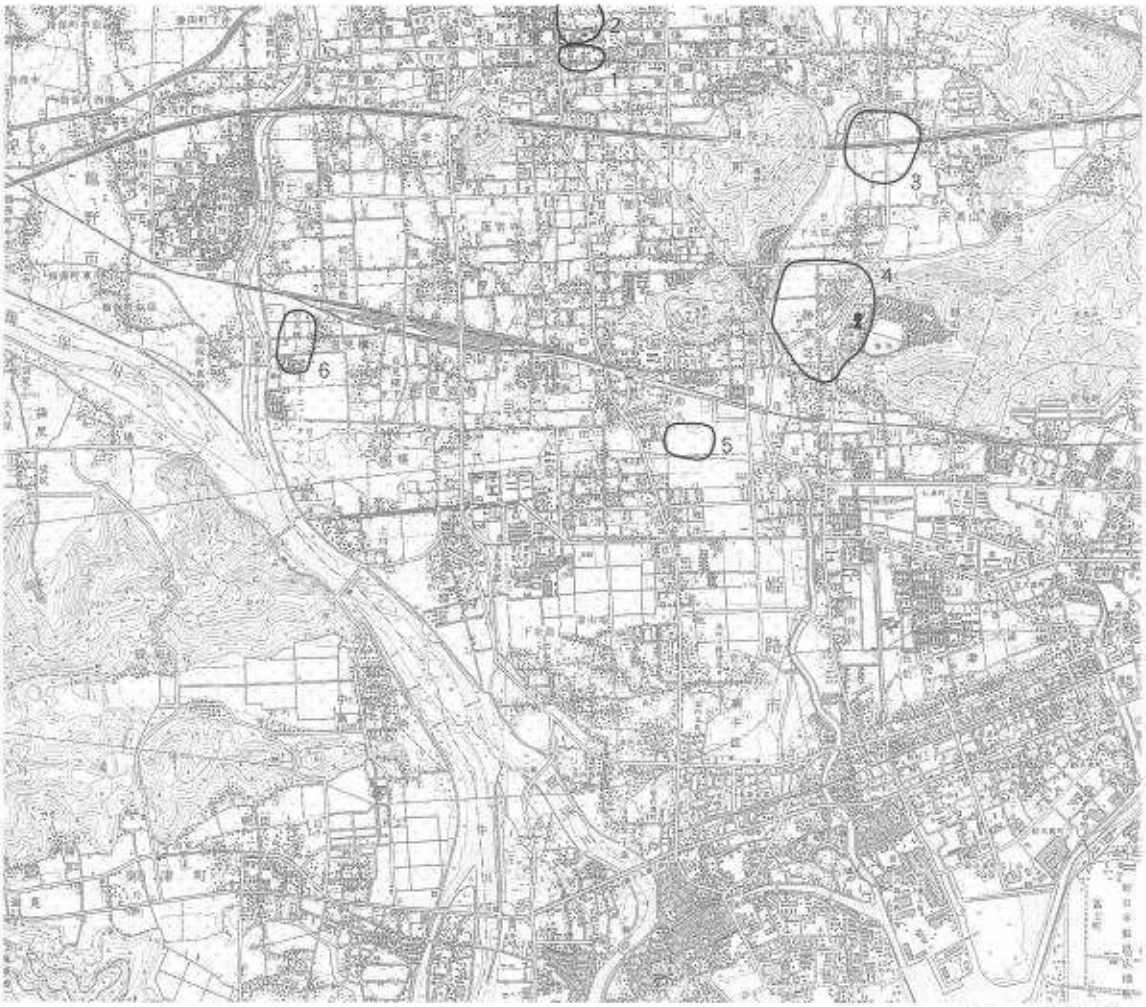
鵤石田遺跡は揖保郡太子町鵤に所在する遺跡で、弥生時代末の拠点集落である斑鳩遺跡の南側に広がる遺跡である。鵤遺跡の後半期の分村の１つとも想定されていたが、西に接する調査地点の成果では古墳時代後期の集落であろうと考えられていた。今回調査地点の結果では、古墳時代でも初頭に限られた遺跡であることが明らかとなり、その時期の大規模な集落が近接して存在している可能性が高いと判断された。西側の調査成果とは異なる所見となった。今回の調査区近接部（西側既調査地点を除く）は斑鳩遺跡の分村かもしれないが、斑鳩遺跡に近い規模の集落を構えている可能性が高まってきた。それは出土土器の豊富さと各地の土器を保有しているからである。

今回の調査では溝だけを確認し、多量の弥生時代末から古墳時代初頭の土器が出土している。僅かながら弥生時代前期から後期にかけての弥生土器を保有しているが、残存状態に大きな差があった。磨滅していることから、やや離れた地点から流されてきたか、非常に大きな洪水によって堆積したかと思われた。それに対して古墳時代初頭の一群にはほとんど流されたような磨滅痕はなく、非常に近いところに本体の集落があったと想定される。

溝出土の土器群で層位的に時期差を分別することはできなかった。出土遺物の特徴は庄内甕を多量に保有していることと各地からの搬入品が多く含まれることにある。以前に調査した太子町上構遺跡では７割近くの他地域の土器もしくは影響を受けた土器が出土している。非常に高率であるが、今回調査した鵤石田遺跡以上の比率である。後述するが、太子町域の庄内期の遺跡の大きな特徴かと思われる。すなわち、鵤石田遺跡でも搬入土器や影響を受けた土器がそれに近い比率を示すようである。

調査面積は２ヵ年併せても520㎡余りと狭小である。それにも係わらず多量の古式土師器が出土しているのは特徴的である。竪穴住居跡などの遺構が検出されなかったことは惜しまれるが、大溝からの土器量を考慮すると、遺跡の規模が想像できるような気がする。

出土土器の器種は壺・甕・鉢・高杯・器台・蓋・脚台・低脚杯・ミニチュア・製塩土器・甑と変化に富んでいる。搬入土器の分別が可能な甕を中心に見ていく。図化した甕160点の内訳は甕Ａ 23点、甕Ｂ 10点、甕Ｃ １点、甕Ｄ 40点、甕Ｅ 17点、甕Ｆ ３点、甕Ｇ ２点、甕Ｈ １点、甕Ｉ 35点、甕Ｊ 26点、甕Ｋ １点、甕Ｌ １点である。地域ごとに分類すると、庄内甕13%、丹波（甕Ａ）14%、讃岐（甕Ｂ）６%、因幡（山陰）（甕Ｉ）21%、伝統的Ｖ様式甕（甕Ｄ）25%、河内（甕Ｇ）1.2%、吉備（甕Ｋ）・淡路（甕Ｉ）各0.6%である。図化していない口縁部の数を加えると、分類可能な総点数は206点となる。図化したものと合わせると甕Ａ 31点、甕Ｂ 16点、甕Ｃ １点、甕Ｄ 52点、甕Ｅ 20点、甕Ｆ ３点、甕Ｇ ２点、甕Ｈ １点、甕Ｉ 35点、甕Ｊ 26点、甕Ｋ １点、甕Ｌ １点である。地域ごとに分類すると、庄内甕11%、丹波15%、讃岐７%、因幡（山陰）24%、伝統的Ｖ様式甕（地元産）25%、河内と吉備各0.9%、淡路0.4%となる。その他で山陰以外の二重口縁甕（甕Ｊ）が26点・12%存在する。すべてが地元産とは断定出来ないかもしれないが、地元産である確率は高いものと思われる。伝統的Ｖ様式甕も同様の考えが成り立ち、両方合わせて37%が地元産ということになる。この数値は上構遺跡と近い数値であり、感覚的ではあるが、鵤遺跡とも似通っていると思われる。しかし、他地域とした中には胎土から奥田氏の分析でも地元産とされる土器があり、模倣もしくは形式を継承して鵤石田遺跡で作製したと考えられるものが多く存在する。河内から搬入された庄内甕２点以外は播磨産と考えており、さらに丹波・因幡としたものの多くは胎土から地元産の可能性が高くなる。それらを合わすと、胎土からも確実に搬入されたと出来る比率は２割前後



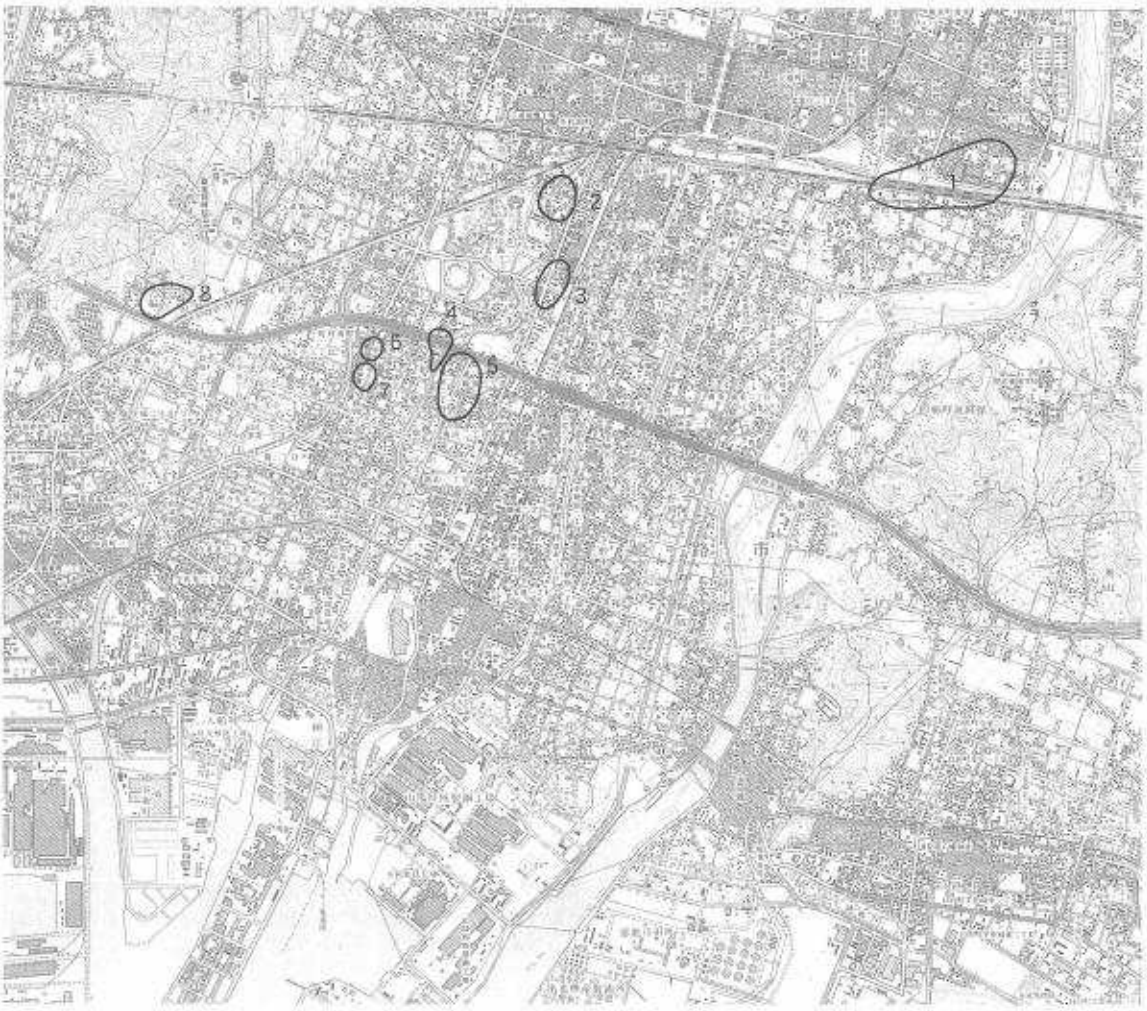
(S＝1:50,000)

1 鵤石田遺跡　3 川島遺跡　5 和久遺跡
2 鵤遺跡　4 丁柳ヶ瀬遺跡　6 上構遺跡

図10　太子町周辺の庄内甕出土遺跡の分布

になろうかと思われる。

次に庄内甕を中心にみてみると、206点のうち23点が播磨産の庄内甕である。比率は11%となる。これが高率と言えるのか低率とみるのかは意見の分かれるところであろう。同じ太子町に所在する上構遺跡が48%の高率であることを考えれば、非常に低い数値である。ただ、太子町域の弥生時代末期から古墳時代初頭の遺跡での庄内甕の保有を見てみると、非常にばらつきがあることが指摘できる。上構遺跡と対極にあるのが川島遺跡である。確実な庄内甕を持たない集落である。鵤遺跡は鵤石田遺跡と似たような印象で、斑鳩寺遺跡・亀田遺跡は鵤石田遺跡の半数以下の保有と考えられる。逆に上太田茶屋ノ前遺跡は太子町史によると外来系特に山陰系土器が多く出土している。庄内甕も多く含まれており、鵤石田遺跡と比べると高率になるかもしれない。さらに大津茂川下流の丁柳ヶ瀬遺跡でも古式土師器が出土している。図化された甕63点のうち6点が庄内系の甕であり、9%の保有率になる。庄内甕の搬入品はなく、播磨型と影響を受けた甕である。丁柳ヶ瀬遺跡は弥生時代前期から古墳時代後期そして律令期に断続的ながら生活を続けている集落である。そして遺跡内に丁瓢塚古墳が築造されている。外来系では因幡の影響が強いようである。丁柳ヶ瀬遺跡のさらに南西に位置する姫路市和久遺跡でも庄内甕が出土している。遺跡は弥生時代中



(S＝1:50,000)

1 市之郷遺跡　4 長越遺跡　7 権現遺跡
2 橋詰遺跡　5 船場川東区整遺跡　8 英賀保駅周辺遺跡
3 小山遺跡　6 天神遺跡

図11　姫路平野の庄内式土器出土遺跡の分布

期後半から古墳時代前期まで継続している。ただ、離れた地点では前期の土器も出土しており、古墳時代中期の遺物もあり、前後に遺跡消長期が延びる可能性は高い。100棟以上の竪穴住居跡が限られた地域に何度も建替えられている。切り合い関係が多数で居住地域に執着しているような状況である。庄内甕は保有しているものの量は多くはない。鵯石田遺跡の半数以下と思われる。搬入土器および影響を受けた土器は多い。因幡・讃岐・阿波・河内・淡路の土器があり、山陰の影響が強いのは周辺他遺跡と同じである。太子町周辺の庄内甕の保有をみると、上構遺跡が50%近くの保有率ととび抜けて多い。次に鵯石田遺跡・鵯遺跡・太田茶屋ノ前遺跡と丁柳ケ瀬遺跡が１割前後で続き、斑鳩寺遺跡・亀田遺跡・和久遺跡が５%前後で、川島遺跡は０%である。小地域の中で変化のあることが理解されるが、それ以上に庄内甕が多数出土していることが注目される。

同じように庄内甕を出土する遺跡が集中している地域がもう１つ播磨にある。姫路市船場川流域である。長越遺跡・船場川東区整遺跡・小山遺跡・橋詰遺跡の遺跡が並んでいる。さらに北東に市之郷遺跡が西側に英賀保駅周辺遺跡が存在する。長越遺跡は兵庫県で最初に多量の庄内甕が出土した遺跡である。また、

(S＝1:65,000)

▲1 龍子三ツ塚・養久山(1・18号墳)
2 宝記山(12号墳)
3 権現山古墳群(50・51・105号墳)
4 壇特山(1～3号墳)
5 丁・瓢塚
6 山戸(4号墳)
7 奥塚古墳
8 綾部山古墳群(39号墳)

●1 鵤石田遺跡
2 川島遺跡
3 和久遺跡
4 長越遺跡

図12 播磨南西部の庄内期集落と前期古墳

保有率も高い遺跡と考えられていた。それでも図化した点数からは35%が庄内甕である。破片数は目立つものの、全点数からの比率は下がるものと思われる。上構遺跡の5割近くには及ばず、3割弱の保有率になろうかと思われる。それでも庄内甕の占める率は高く庄内甕発生説の1つの論拠となった由縁である。庄内播磨型の生産地であることは問題のないところであろう。搬入品も河内をはじめ讃岐・阿波・吉備・因幡・淡路・丹波とあるが、鵤石田遺跡と比べると因幡・丹波のものが少ないことがわかる。長越遺跡は庄内甕周辺の時期だけに生活を営む短期間の集落である。それに比べて、長越遺跡の南東側に広がる船場川東区整遺跡(第6地点)は弥生中期から古墳後期まで継続する遺跡である。弥生時代後期の長越遺跡より一段階早い時期の中心集落で墓域と居住域を分けている可能性が高い。庄内甕は持っているものの保有率は低いようである。小山遺跡・橋詰遺跡は古くに出土しており、保有率は明らかにしがたいが、特別多いということはない。ただ、感覚的には船場川東区整遺跡と同じか、高いのではないかと予測される。いずれにしても小河川である船場川流域に庄内甕を持つ遺跡が集中することは特記されよう。

庄内期の遺跡と前期古墳の位置を考えてみると、鵯石田遺跡周辺（大津茂川流域）と長越遺跡周辺（船場川流域）では大きく異なっている。大津茂川流域には多数の前期古墳が築造されているのに対して、船場川流域では明確な前記古墳が存在しないことである。手柄山南丘に箱式石棺があり、これだけが該当する可能性があるものの規模からいくと大きな差である。庄内甕を見ると、船場川流域の長越遺跡の方が一段階早く（庄内Ⅱ－長越Ⅱ式）に導入されている。この時期から庄内甕の生産がはじまっているようである。大津茂川流域では鵯石田遺跡で河内からの搬入品が同時期のものが１点あるが、生産は次の段階からと考えている。船場川流域は庄内甕を早くに生産したにもかかわらず、前期古墳を築造していないことになる。

大津茂川流域では、それに引き換え周辺の山塊に多数の前期古墳が見られる。丁柳ケ瀬遺跡の範囲内にある丁瓢塚古墳をはじめ檀特山古墳群・山戸４号墳が築造されている。丁瓢塚古墳は箸墓古墳との墳形が類似していることがしられるバチ形前方後円墳である。鵯石田遺跡の北東の佐用岡の松田山古墳が築かれている。鵯石田遺跡に最も近い前期古墳である。円墳で竪穴式石室を主体部とし、多数の遺物が出土している。神獣鏡・筒形銅器・銅鏃・鉄鏃・鉄剣・鉄斧・玉類が出土している。小規模古墳ながら豊富な副葬品である。鵯石田遺跡の周辺には墳丘墓もあり、中期になっても黒岡山古墳群に継続する。松田山古墳は鵯石田遺跡・鵯遺跡に近いが他の３古墳は下流部にあり、遺跡の消長の長い和久遺跡に近い位置にある。大津茂川流域は揖保川下流部と相まって河口に奥塚古墳を築造したと思われる。鵯石田遺跡の位置付けは庄内甕の保有にあり、庄内甕を保有した集団が勢力を拡大していく集落であったろうと思われる。上構遺跡とともに庄内播磨型を長越遺跡の次に生産した集落と考えている。

表3　遺物観察表

番号	種別	器種	遺構	技法　他	形態の特徴	法量（cm）			残存	備考
						口径	器高	底径		
1	土師器	甕	SD06	タタキ・ケズリののちナデ、口縁部ヨコナデ	外反する口縁部で端部立ち上がる	(15.90)	(3.80)		口縁1/12	
2	土師器	甕	SD06　3区	タタキ・ユビ成形から板ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(13.80)	(6.00)		口縁1/4	
3	土師器	甕	SD06　3区	ナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(14.40)	(7.60)		口縁1/12	丹波
4	土師器	甕	SD06　3区	タタキ成形から折り曲げ、ナデ・ヨコナデ	口縁端部つまみ上げる	(12.90)	(4.50)		口縁1/5	
5	土師器	甕	SD06	タタキののちナデ、口縁部ヨコナデ	外反し端部上につまみ上げ尖る	(14.90)	(5.90)		口縁1/16	
6	土師器	甕	SD06　3区	タタキののち口縁部作るヨコナデ	僅かに外反し端部付近つまみ上げ	(12.80)	(2.90)		口縁1/2	
7	土師器	甕	SD06　2区	タタキ・ユビ成形からナデ・ヨコナデ	内湾する体部から外反しつまみ出す	(14.80)	(8.50)		口縁1/6	
8	土師器	甕	SD06　3区	タタキののち板ナデ、口縁部ヨコナデ	緩やかに外反し端部肥厚	(14.00)	(3.80)		口縁1/6	
9	土師器	甕	SD06　3区	ユビ成形からハケ・ナデ、ヨコナデ	内傾し端部肥厚するﾊﾟﾁ形の口縁部	(15.60)	(2.60)		口縁1/12	讃岐
10	土師器	甕	SD06　2区	タタキ・ケズリののちナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(13.60)	(5.20)		口縁1/6	
11	土師器	甕	SD06	右上がりのタタキ、内面ユビ成形	内湾する体部から短く外反する口縁部	(12.70)	(5.50)		口縁1/6	
12	土師器	甕	SD06	タタキ・ユビ成形からナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(12.00)	(6.70)		口縁1/3	
13	土師器	甕	SD07	ユビ・タタキ成形からナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(11.80)	(5.90)		口縁1/3	
14	土師器	甕	SD06	タタキののち口縁部作る、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(13.90)	(4.10)		口縁1/3	
15	土師器	甕	SD06	ハケ整形ののちヨコナデ	外反する口縁部で端部丸い	(15.70)	(4.40)		口縁1/5	
16	土師器	甕	SD06	外面タタキからナデ、口縁部ヨコナデ	外反する短い口縁部で、端部丸い	(14.80)	(4.55)		口縁1/5	
17	土師器	甕	SD06　2区	ハケ整形からヨコナデ	外反する口縁部で端部丸い	(15.50)	(2.80)		口縁1/4	
18	土師器	甕	SD06　3区	タタキ・ケズリ成形からナデ、ヨコナデ	鋭い頸部で口縁部外反し端部尖る	(13.70)	(2.50)		口縁1/6	
19	土師器	甕	SD06　3区	タタキ・ケズリ成形からナデ、ヨコナデ	外反する口縁部、端部丸い	(11.80)	(3.40)		口縁1/3	
20	土師器	甕	SD06	タタキ・ケズリからハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(12.90)	(8.30)		小片	
21	土師器	甕	SD06　2区	タタキ・ケズリ成形からナデ、ヨコナデ	外反する口縁部で端部丸い	(14.00)	(3.30)		口縁1/5	
22	土師器	甕	SD06　3区	タタキからハケ整形、口縁部ヨコナデ	外反する口縁部で端部丸い	(16.50)	(4.60)		口縁1/9	
23	土師器	甕	SD06　4区	内面ハケ整形からヨコナデ	外傾し端部角張る	(16.70)	(2.00)		口縁1/5	
24	土師器	甑	SD06	内面ケズリ、ハケ整形、口縁部ヨコナデ	倒卵形の体部から外反する口縁部	(15.40)	20.70	(17.90)	ほぼ完	底部穿孔
25	土師器	甕	SD06	ユビ成形からケズリ、ナデ	直線的なくの字、端部角張る	(15.70)	(4.75)		口縁1/9	
26	土師器	甕	SD06	内面ケズリ、外面ハケ・ナデ口縁部ヨコナデ	内湾する体部、厚く外傾する口縁部	(15.70)	(5.55)		口縁1/5	
27	土師器	甕	SD06　3区	外面タタキ、内面ケズリ、ヨコナデ刻み目	外反する口縁部	(14.80)	(3.10)	頸（11.80）	口縁1/5	
28	土師器	甕	SD06　3区	ユビ・ケズリ成形からハケ・ナデ整形	くの字で直線的、外傾する口縁部	(17.00)	(5.65)	－	口縁1/6	
29	土師器	甕	SD06　3区	タタキ・ユビ成形からナデ、ヨコナデ	外反し端部上につまみ上げる	(14.00)	(3.30)		口縁1/7	2次焼成
30	土師器	甕	SD06　3区	ヨコナデ	外反し外方につまみ出す端部	(14.80)	(2.90)		口縁1/6	
31	土師器	甕	SD06　3区	タタキ・ユビ成形からナデ、ヨコナデ	外反し端部上につまみ上げる	(13.80)	(3.10)		口縁1/5	化粧土塗布
32	土師器	甕	SD06	ナデ整形、口縁部ヨコナデ	外反し端部上につまみ上げ尖る	(13.80)	(3.30)		口縁1/3	

33	土師器	甕	SD06	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外傾しつまみ出す	(11.60)	(6.20)		口縁1/4	
34	土師器	甕	SD06	タタキ・ケズリ成形からハケ整形、ヨコナデ	球形の体部から僅かに反り角張る	(16.10)	(20.50)	2.30	底部完	
35	土師器	甕	SD06	タタキ・ケズリからハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(15.90)	(10.90)		口縁1/4	
36	土師器	甕	SD06	タタキ・ケズリからハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(16.90)	(13.30)		口縁1/4	
37	土師器	甕	SD06 3区	タタキ・ケズリ成形からハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(16.00)	(11.20)	頸 (12.80)	口縁3/4	
38	土師器	甕	SD06	ケズリ成形からハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(16.10)	(15.10)	頸 (12.90)	口縁1/3	
39	土師器	甕	SD06	ハケ整形からナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(15.20)	(5.90)		口縁1/4	
40	土師器	甕	SD06	タタキ・ケズリからハケ、口縁部ヨコナデ	球形の体部から外傾し、端部肥厚	17.10	22.80	腹径22.20	口縁1/6	
41	土師器	甕	SD06 2区	内面ユビ・ケズリ、ハケ整形、ヨコナデ	球形の体部から外反し端部肥厚	16.20	23.90	腹径22.80	ほぼ完	
42	土師器	甕	SD06 3区	ヨコ方向の細かいタタキ、内面ケズリ・ハケ	球形の体部から外傾、稜線明瞭	(11.00)	(7.40)		口縁1/4	
43	土師器	甕	SD06	タタキ・ケズリからハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(15.10)	(11.70)		口縁5/6	
44	土師器	甕	SD06	外面タタキ、内面ケズリからハケ・ナデ	球形の体部から僅かに内湾する口縁部	(14.30)	(13.60)		口縁1/6	
45	土師器	甕	SD06	タタキ・ケズリからハケ・ナデ、ヨコナデ	球形の体部から僅かに外反し角張る	(19.0)	(23.60)	−	口縁1/4	
46	土師器	甕	SD06 4区	タタキ・ケズリののちナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部で稜線鋭く外反	(18.50)	(7.20)		頸部1/6	
47	土師器	甕	SD07	タタキ・ケズリからハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(15.10)	(11.7)		口縁1/3	
48	土師器	甕	SD06	ユビ成形後ナデ、ヨコナデ	内湾する口縁部で端部肥厚し窪む	(21.90)	(1.95)		口縁1/9	
49	土師器	甕	SD06	内面ユビ・ケズリ、外面ハケからナデ	倒卵形の体部に内湾する口縁部	(14.20)	22.70		口縁2/3	
50	土師器	甕	SD06 3区	タタキ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反し端部直立	(19.60)	(10.50)		口縁1/8	
51	土師器	甕	SD07	ハケ整形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部、口縁部やや内湾し丸い	(13.90)	(11.20)		口縁1/3	
52	土師器	甕	SD06	内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	外反する口縁部で端部外側に肥厚	(12.60)	(3.90)		口縁1/6	
53	土師器	甕	SD06	外面タタキ、内面ハケ、口縁部ヨコナデ	直線的なくの字、端面凹線状	(12.80)	(5.80)		口縁1/2	
54	土師器	甕	SD06	細かいタタキからハケ整形、内面ケズリ	くの字口縁で端部つまみ上げる	(14.20)	(6.80)		口縁1/3	
55	土師器	甕	SD06	タタキ・ユビ成形からハケ・ナデ	外反する口縁部で端部つまみ上げる	(13.70)	(5.45)		頸部1/4	
56	土師器	甕	SD06 3区	タタキ成形から板ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から短く屈曲する口縁部	(14.10)	(6.50)		口縁1/10	
57	土師器	甕	SD06	ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から短く外傾する口縁部	(13.00)	(5.00)		口縁1/4	
58	土師器	甕	SD06	ケズリののちナデ	直線的なくの字、端部尖る、薄い	(15.20)	(4.95)		口縁1/9	
59	土師器	甕	SD06 3区	タタキ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内傾する体部から僅かに外反し尖る	(11.70)	(5.00)		口縁1/4	
60	土師器	甕	SD06	ハケ整形から板ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から大きく湾曲し端部丸い	(12.80)	(5.00)		口縁1/3	
61	土師器	甕	SD06	外面タタキ、内面ケズリ	尖り底で内湾する体部		(12.10)		底部完	
62	土師器	甕	SD06 3区	タタキ成形からナデ、強いヨコナデ	内傾する体部から外反する口縁部	(23.80)	(5.20)		口縁1/7	
63	土師器	甕	SD06 3区	タタキ・ケズリからハケ、口縁部ヨコナデ	球形体部から外反する口縁部	(15.80)	(12.40)		口縁3/4	
64	土師器	甕	SD06 2区	右上がりのタタキ、内面ケズリ	内湾する体部から外反する口縁部	(16.40)	(11.40)		口縁1/2	
65	土師器	甕	SD06	外面タタキ、内面ナデ・板ナデ、ヨコナデ	内湾する体部、外反する二重口縁部	(15.90)	(6.10)		口縁1/4	
66	土師器	甕	SD06	内面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	短く屈曲する二重口縁部	(18.00)	(4.50)		口縁1/3	化粧土塗布
67	土師器	甕	SD06 4区	外面タタキ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	僅かに内湾し、短い二重口縁部	(16.10)	(7.20)		口縁1/4	
68	土師器	甕	SD06 3区	外面タタキ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	直立ぎみの体部から受口に延びる	(18.60)	(6.50)		頸部1/9	
69	土師器	甕	SD06	タタキ・ユビ成形からハケ・ナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(13.85)	(6.30)		口縁1/3	

70	土師器	甕	SD06	3区	右上がりの粗いタタキ、口縁部ヨコナデ	内湾して外反し端部つまみ出す	(15.40)	(4.00)		口縁1/5	
71	土師器	甕	SD06	3区	ハケ・ナデののちヨコナデ	短い二重口縁部	(14.00)	(2.30)		口縁1/7	
72	土師器	甕	SD06		内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	頸部稜線明瞭な二重口縁部、端部丸い	(15.20)	(4.40)		口縁1/6	
73	土師器	甕	SD06		外面タタキ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	緩やかに屈曲する二重口縁部	(16.90)	(5.20)		口縁1/7	
74	土師器	甕	SD06		外面ナデ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(15.20)	(6.30)		口縁1/6	
75	土師器	甕	SD06	3区	ヨコナデ	外傾し端部大きく上方につまみ上げる	(17.60)	(2.40)		口縁1/5	
76	土師器	甕	SD06		タタキ・ケズリ成形からナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する二重口縁	(16.00)	(7.30)		口縁1/2	
77	土師器	甕	SD06	3区	タタキ・ケズリ成形からナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する二重口縁	(15.30)	(7.00)		口縁1/4	
78	土師器	甕	SD06	4区	ヨコナデ	外反し直立ぎみに外傾する	(14.80)	(2.30)		口縁1/4	化粧土塗布
79	土師器	甕	SD06	3区	ヨコナデ	緩やかな二重口縁、端部丸い	(16.80)	(2.50)		口縁1/6	
80	土師器	甕	SD06	3区	外面ハケ、口縁部ヨコナデ	外反する頸部から外反する二重口縁	(14.80)	(5.20)		口縁1/10	
81	土師器	甕	SD06	3区	外面タタキからハケ、内面板ナデ、ヨコナデ	倒卵形の体部から外傾する口縁部	11.20	15.60	復径14.50	完形	赤色顔料
82	土師器	甕	SD06	3区	タタキ・ケズリ成形からナデ、ヨコナデ	明瞭な頸部から外傾する二重口縁	(13.00)	(4.10)		口縁1/6	
83	土師器	甕	SD06	3区	外面タタキ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(15.80)	(6.30)		口縁1/7	
84	土師器	甕	SD06		外面タタキからハケ、内面ケズリから板ナデ	球形から外傾する口縁部、端部角張る	(12.6)	13.20	復径14.70	口縁3/4	
85	土師器	甕	SD06		ケズリからナデ、ヘラミガキ・ヨコナデ	球形の体部から外傾し直立する	10.40	15.30	復径14.70	ほぼ完	赤色顔料
86	土師器	甕	SD06	3区	ユビ成形からハケ・ナデ、口縁部ヨコナデ	外反する頸部で短く外反する二重口縁	(12.40)	(3.90)		口縁1/7	
87	土師器	甕	SD06	3区	内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	短い頸部から直立する口縁部		(3.40)		頸部1/8	
88	土師器	甕	SD06		ケズリからハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部から内傾し外反する	9.00	(7.50)		口縁完	丹後系
89	土師器	甕	SD06	2区	ケズリののちナデ、ヨコナデ、波状文	内湾する体部から短い頸部から外反	(11.20)	(8.60)		口縁1/10	因幡系
90	土師器	甕	SD06	2区	外面タタキ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	外傾し屈曲して直立する口縁部	(14.00)	(4.60)		口縁1/5	
91	土師器	甕	SD06		ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反し内傾する	(16.80)	(5.40)		口縁1/10	吉備？
92	土師器	甕	SD06		内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	明瞭な頸部から短く屈曲する口縁部	(13.80)	(4.30)		頸部1/5	
93	土師器	甕	SD06		内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	内湾し短い頸部から直立する口縁部		(5.50)		頸部1/5	
94	土師器	甕	SD06		タタキ・ユビ成形からハケ・ナデ、ヨコナデ	平底から内湾する体部、口縁部外傾	21.90	26.30	5.00	口縁4/5	
95	土師器	甕	SD06		内面ケズリ、端面3条沈線	外反してから直立する口縁部	(14.80)	(3.00)		口縁1/9	
96	土師器	甕	SD06	3区	内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	短い頸部から外傾する二重口縁部		(3.70)		頸部1/8	
97	土師器	甕	SD06		ケズリ・ハケからナデ、口縁部ヨコナデ	倒卵形の体部に外傾する口縁部	(11.80)	(10.00)		頸部1/4	丹波系
98	土師器	甕	SD06	3区	ハケ整形からナデ、内面ケズリからナデ	平底から倒卵形の体部、大形品		(29.30)	(6.20)	底部1/2	
99	土師器	壺	SD06		ナデ・ヨコナデ、擬凹線	外反から外傾する、下方に垂下	(19.40)	(5.40)		口縁1/6	
100	土師器	壺	SD06		ハケ整形からナデ、ヨコナデ	直立する頸部から外傾し外反する口縁	18.70	(10.40)		口縁ほぼ完	
101	土師器	甕	SD06	2区	内面ケズリ・ナデ、口縁部ヨコナデ擬凹線	内傾し直立ぎみに外反する二重口縁部	(16.00)	(5.85)		口縁1/9	
102	土師器	甕	SD06		ケズリののちナデ、ヨコナデ	内湾する体部から短い頸部から外反	(13.90)	(14.00)		頸部1/4	因幡系
103	土師器	甕	SD06		ケズリののちナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する二重口縁	(15.20)	(11.60)		口縁1/4	因幡系
104	土師器	甕	SD06		ヨコナデ	内湾する体部、短い頸部から外傾	(14.80)	(7.40)		口縁1/3	
105	土師器	甕	SD06		内面ケズリ、外面ハケ・波状文、ヨコナデ	球形の体部から短い口頸部		(7.70)		頸部1/7	
106	土師器	甕	SD06	3区	内面ヘラケズリ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する二重口縁	(14.60)	(5.80)		口縁1/2	

107	土師器	甕	SD06		内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	内傾する体部から外反する二重口縁部	(14.60)	(5.00)		口縁 1 / 7	
108	土師器	甕	SD06		内面ケズリのちナデ、口縁部ヨコナデ	内湾し頸部面になり外反、端部尖る	(15.20)	(6.20)		口縁 1 / 6	
109	土師器	甕	SD06		内面ケズリのちナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反する二重口縁部	(15.80)	(5.20)		口縁 1 / 7	
110	土師器	甕	SD06	3 区	ナデからヨコナデ	外傾する二重口縁部	(16.80)	(4.60)		口縁 1 /10	
111	土師器	甕	SD06	3 区	外面ハケ、内面ケズリ、ヨコナデ・擬凹線	外反しさらに稜線を持って外反する	(15.80)	(4.50)		口縁 1 /10	
112	土師器	甕	SD06	4 区	ケズリ、ハケ整形からナデ、ヨコナデ	肩が張り内湾する体部から外反する	(12.00)	(9.20)		口縁 1 / 5	
113	土師器	甕	SD06		内面ケズリのちナデ、口縁部ヨコナデ	内傾する体部から外反する二重口縁部	(16.80)	(5.10)		口縁 1 /12	
114	土師器	甕	SD06	3 区	外面ナデ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	短い頸部から大きく外反する口縁部	(14.80)	(4.60)		口縁 1 /10	
115	土師器	甕	SD06	3 区	内面ケズリのちナデ、口縁部ヨコナデ	内傾する体部、直立ぎみに外反する	(16.10)	(5.90)		口縁 1 /12	
116	土師器	甕	SD07		体部ナデ、口縁部ヨコナデ	屈曲し外反する二重口縁部	(12.40)	(5.30)		口縁 1 / 6	
117	土師器	甕	SD06		内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	外反し外傾する二重口縁部	(14.40)	(3.60)		口縁 1 /12	
118	土師器	甕	SD06	3 区	外面ナデ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	短い頸部から大きく外反する口縁部		(4.40)		頸部 1 / 7	
119	土師器	甕	SD06	3 区	内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(11.50)	(5.10)		口縁 1 /10	
120	土師器	甕	SD06		内面ヘラケズリ、外面ナデ、口縁部ヨコナデ	肩が張り内湾する体部から外反する		(4.90)	(14.30)	体部 1 / 7	
121	土師器	甕	SD06	3 区	内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	短く外反し稜線を持ち外傾する	(11.60)	(3.80)		口縁 1 /10	
122	土師器	甕	SD06	3 区	ユビ成形からナデ・ハケ	倒卵形の体部から外反する二重口縁部	(9.70)	12.90	1.20	口縁 1 / 2	ミニチュア？
123	土師器	甕	SD06		縦方向タタキからナデ、口縁部ヨコナデ	外反する頸部から外傾する尖る端部	(14.20)	(8.20)		口縁 1 / 2	
124	土師器	甕	SD06	2 区	ヨコナデ	短い頸部から外傾し端部僅かに肥厚	(29.60)	(6.80)		口縁 1 / 7	
125	土師器	甕	SD06		ナデ・ヨコナデ	短く外反する頸部から外傾し端部丸い	(26.00)	(5.80)		口縁 1 /18	
126	土師器	甕	SD06	3 区	内面ヘラケズリ、ヨコナデ	肩が張り短い頸部で直立する	(28.10)	(10.00)		口縁 1 / 3	
127	土師器	甕	SD06		ケズリ、外面粗いハケ後ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する二重口縁部	28.25	(20.90)		口縁 2 / 3	
128	土師器	甕	SD06		外面ハケ、内面ケズリ、ヨコナデ・擬凹線	内湾する体部から短い二重口縁部	(13.40)	(6.00)		口縁 1 / 6	吉備
129	土師器	甕	SD06	2 区	内面ケズリ、口縁部ヨコナデ 4 条擬凹線	内湾する体部、短く外反し外傾する	(15.60)	(4.90)		口縁 1 / 4	
130	土師器	甕	SD06	3 区	ユビ成形からハケ・ナデ	内湾する体部、外傾し端部立ち上がる	(12.40)	(4.90)		口縁 1 /10	
131	土師器	甕	SD06	4 区	外面タタキ、内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から短い口縁部	(15.40)	5.40	13.20	口縁 1 / 8	
132	土師器	甕	SD06		ユビ成形からハケ・ナデ、ヨコナデ	内傾し端部肥厚するバチ形の口縁部	(16.00)	(3.90)		口縁 1 /12	讃岐
133	土師器	甕	SD06		ナデ、ヨコナデ	内傾する体部、短く外傾し端部肥厚	(13.60)	(3.90)		口縁 1 / 4	讃岐
134	土師器	甕	SD06	2 区	ユビ成形からナデ、ヨコナデ	内傾し短く水平に開く口縁部	(14.90)	(6.40)		小片	讃岐
135	土師器	甕	SD06	3 区	ナデ、口縁部ヨコナデ	短く水平に開く口縁部、体部直線的	(13.80)	(5.30)		口縁 1 / 7	讃岐系
136	土師器	甕	SD06	3 区	ユビ・ケズリからハケ・ナデ、ヨコナデ	倒卵形に近い体部から短い口縁部	(15.80)	(11.80)		口縁 1 / 6	讃岐
137	土師器	甕	SD06	3 区	ヨコナデ	水平ぎみに外傾し端部短く外傾する	(14.40)	(2.00)		口縁 1 / 5	
138	土師器	甕	SD06	3 区	タタキ成形で口縁部ヨコナデ	外反し直立する端面になる、2 条沈線	(17.80)	(2.30)		口縁 1 /10	
139	土師器	甕	SD06		内面ケズリ、ヨコナデ、擬凹線	内湾する体部から外傾し直立する	(14.60)	(4.20)		口縁 1 / 8	吉備
140	土師器	甕	SD06		ナデ仕上げ、口縁部ヨコナデ	内湾し短い頸部外反し直立する口縁部	(11.40)	(3.70)		口縁 1 /10	丹塗り
141	土師器	甕	SD06	1 区	ケズリからナデ・ハケ、口縁部ヨコナデ	球形の肩が張る体部から外反し端部丸い	(11.90)	17.00	復 (16.60)	口縁 1 / 2	
142	土師器	甕	SD06		ユビ成形からナデ	器高のある小さな平底から外反する		(3.10)	2.30	底部完	
143	土師器	甕	SD06	3 区	タタキからナデ	平底から内湾する体部		(4.10)	4.00	底部完	

144	土師器	甕	SD06	3区	ユビ成形からタタキ、ナデ	突出平底から外傾する体部		(6.20)	4.50	底部完	
145	土師器	甕	SD06		タタキ、内面ユビ成形からナデ	上げ底から内湾する体部		(5.30)	3.80	底部完	
146	土師器	甕	SD06	2区	タタキ・ユビ成形からナデ・ハケ、底ケズリ	高い平底から内湾する		(6.80)	3.90	底部完	
147	土師器	甕	SD06		タタキ・ユビ成形からナデ	突出平底から反りぎみに外傾する体部		(4.90)	(6.00)	底部2/3	
148	土師器	甕	SD06	3区	タタキからナデ	上げ底から内湾する体部		(3.20)	4.40	底部完	
149	土師器	甕	SD06	3区	タタキからナデ	不安定な平底から内湾する体部		(3.50)	3.80	底部完	
150	土師器	甕	SD06		タタキからナデ、ハケ整形	平底から内湾ぎみの体部		(5.00)	3.40	底部完	
151	土師器	甕	SD06	3区	タタキからナデ、ハケ整形	平底から外傾する体部		(4.70)	2.80	底部完	
152	土師器	壺	SD06	3区	タタキからナデ	平底から外傾する		(2.90)	5.40	底部完	木葉痕
153	土師器	壺	SD06		タタキからハケ整形、ナデ仕上げ	平底から外傾する体部、器壁歪		(4.50)	5.40	底部完	
154	土師器	甕	SD06		タタキからナデ	一部窪んだ平底から内湾する		(3.30)	4.40	底部完	
155	土師器	甕	SD06		タタキからナデ	上げ底から内湾する体部		(4.00)	3.30	底部完	
156	土師器	甕	SD06		タタキののちナデ	内湾する底部に短い脚台部付く		(3.60)	(3.00)	底部1/2	
157	土師器	甕	SD06	3区	タタキ・ユビ成形からナデ・ハケ	上げ底で内湾する体部		(3.70)	3.30	底部完	
158	土師器	甕	SD06		タタキからユビ成形後ナデ	上げ底から外傾する体部		(3.70)	4.00	底部完	
159	土師器	甕	SD06	2区	タタキからユビ成形、ナデ	上げ底から内湾する体部		(4.30)	(3.70)	底部1/2	
160	土師器	甕	包含層		タタキからナデ	平底から内湾する		(4.40)	(4.00)	底部1/2	
161	土師器	甕	SD06		ユビ成形からタタキ、ハケ後ナデ仕上げ	平底から内湾する体部		(5.20)	3.50	底部完	
162	土師器	甕	SD06	2区	外面タタキ、内面ケズリから板ナデ	平底から内湾する体部		(4.90)	4.40	底部完	
163	土師器	甕	SD06	3区	タタキ・ユビ成形からナデ	平底から外傾する		(3.10)	3.00	底部完	タタキ底？
164	土師器	甕	SD06	3区	タタキからナデ、底面格子タタキ	平底から外反ぎみに開く		(2.30)	(5.40)	底部1/2	
165	土師器	甕	SD06	3区	タタキ成形、底面もタタキ	平底から内湾する体部		(3.00)	(2.80)	底部1/2	
166	土師器	甕	SD06		タタキからナデ仕上げ	平底から直線的に内湾する体部		(3.10)	3.70	底部完	
167	土師器	甕	SD06		タタキからナデ	平底から内湾する体部		(3.50)	4.20	底部完	
168	土師器	甕	SD06	4区	タタキからナデ、内面ハケ	小さな不安定な平底から内湾する体部		(5.40)	3.20	底部完	
169	土師器	甕	SD06		タタキ成形からナデ仕上げ	小さな平底から内湾する体部		(7.90)	1.50	底部完	2次焼成
170	土師器	甕	SD06		タタキからナデ	平底から内湾する体部		(3.80)	3.80	底部完	
171	土師器	甕	SD06		ユビ成形からハケ・ナデ・ミガキ	内湾する底部に粘土貼り付け丸底に		(2.45)	(3.50)	底部2/5	黒斑
172	弥生土器	甕	SD06	3区	ナデ、磨滅	平底から内湾する体部		(3.90)	4.50	底部完	
173	土師器	甕	SD06	1区	ハケ整形からナデ仕上げ	上げ底から内湾する体部		(4.50)	4.00	底部ほぼ完	
174	土師器	甕	SD06	3区	ユビ成形からハケのちナデ仕上げ	平底から外傾する体部		(4.60)	4.60	底部完	
175	土師器	甕	SD06	3区	ユビ成形からハケ、ナデ	平底から外傾する体部		(5.50)	4.00	底部完	
176	土師器	甕	SD06		ナデ	平底から外傾する		(2.90)	3.50	底部1/2	黒斑
177	土師器	甕	SD06	3区	ナデ	未貫通の孔のある平底から外反する		(3.60)	5.20	底部完	
178	土師器	甕	SD06	3区	ユビ成形からナデ	僅かな小さい上げ底から内湾する体部		(1.60)	4.20	底部完	
179	土師器	脚台	SD06		ユビ成形ののちナデ、葉脈痕	内湾する底部に短い脚台部付く		(2.20)	3.05	底部完	
180	土師器	甕	SD06	3区	ユビ成形、内面ハケ	小さな上げ底から内湾する体部		(5.40)	2.80	底部完	

181	土師器	甕	SD06	3区	タタキからナデ後ミガキ、底部ユビ成形	上げ底から外傾する体部		(4.40)	4.20	底部完	
182	土師器	甕	SD06	3区	ユビ成形からナデ	上げ底から外傾する体部		(3.30)	3.10	底部完	
183	弥生土器	甕	SD06	3区	ナデ、磨滅	上げ底		(2.50)	4.00	底部完	
184	土師器	甕	SD06	4区	ケズリからハケ整形・ナデ	僅かな平底から内湾する体部		(8.60)	6.50	底部完	
185	土師器	壺	SD06	3区	ハケ整形からナデ・ヨコナデ	直立から外反する口縁部、端部尖る	(12.60)	(6.20)		口縁1/6	
186	土師器	壺	SD06	3区	タタキ・ユビ成形からナデ・ミガキ・ヨコナデ	外反し屈曲する口縁部、端面で沈線1	(16.60)	(6.60)		口縁1/4	
187	土師器	壺	SD06	4区	ハケ整形からヨコナデ	外反し端部肥厚する	(16.80)	(6.20)		口縁1/3	
188	土師器	壺	SD06		タタキののちナデ・ヨコナデ	内傾する体部から直立、水平ぎみ開く	(15.70)	(6.70)		口縁1/5	
189	土師器	壺	SD06		ハケ整形からナデ、ヨコナデ、4条凹線	内湾する体部から短く外反し肥厚する	(14.00)	(6.80)		口縁1/3	
190	土師器	壺	SD06		内面ユビ成形・ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ	内傾する体部から外傾する口縁部	(15.40)	(5.90)		口縁1/2	
191	土師器	壺	SD06		ハケ整形からナデ・ヨコナデ	外反する口縁部で端部内外に肥厚	(16.00)	(5.20)		口縁1/4	
192	土師器	壺	SD06		内面ケズリ、口縁部ハケからヨコナデ	直立から外反し端部肥厚	(15.70)	(7.10)		口縁1/3	
193	土師器	壺	SD07		ヘラミガキ・ヨコナデ、端面竹管文	外反する口縁部で端部角張る	(21.70)	(4.40)		口縁1/4	
194	土師器	壺	SD07		ハケ整形からナデ、口縁部ヨコナデ	外反する口縁部	(20.50)	(8.70)		頸部完	
195	土師器	壺	SD06	3区	ユビ・ケズリからハケ整形	内湾する体部から外反する口縁部		(5.30)		頸部1/4	
196	土師器	壺	SD06		ハケ整形からナデ	直立する頸部から水平ぎみに開く	(25.70)	(7.90)		頸部1/3	
197	土師器	壺	SD06		ハケ整形からヘラミガキ・ヨコナデ	外反し端部つまみ上げる	(17.90)	(7.70)		口縁1/6	
198	土師器	壺	SD06		ハケ整形からナデ、口縁部ヨコナデ	球形体部から外反する口縁部、平底	9.50	18.00	1.90	完形	
199	土師器	壺	SD06		ハケ整形からナデ	小さな底から球形の体部、頸部外反		(18.00)	(17.20)	体部完	
200	土師器	壺	SD06		タタキからハケ整形・ミガキ、ヨコナデ	小さな平底から球形の体部し外傾する	11.60	21.80	腹21.80	ほぼ完	
201	土師器	壺	SD06	3区	タタキののちナデ	内湾する体部、二重口縁で外反する		(13.90)		頸部完	
202	土師器	壺	SD06		ハケ整形からナデ・ヨコナデ	内湾する体部、直立し外傾する	(13.50)	(7.10)		口縁3/4	
203	土師器	壺	SD06		ユビ成形からナデ・ヨコナデ	外反する頸部から外傾する口縁部	(17.30)	(7.20)		口縁1/10	
204	土師器	壺	SD06	3区	ハケ整形からナデ、口縁部ヨコナデ	直立する長い頸部から外反する	(17.20)	(14.40)		口縁1/5	
205	土師器	壺	SD06		タタキからハケ・ナデ、口縁部ヨコナデ	僅かに外傾する頸部から外反し肥厚	(16.50)	(11.50)		口縁1/3	
206	土師器	壺	SD06		ナデ、表面磨滅	外傾する長い頸部で端部反る	(12.80)	(10.60)		口縁1/2	
207	土師器	壺	SD06	3区	ユビ成形、ハケからナデ	内湾する体部から直立し外傾する		(11.20)		頸部1/2	
208	土師器	壺	SD06	2区	ハケ整形から板ナデ、工具痕	外傾する頸部	(13.70)	(10.30)		頸部1/6	
209	土師器	壺	SD06		ユビ成形からナデ、擬凹線	外反する頸部からさらに外反する	(23.70)	(12.20)		口縁2/3	
210	土師器	壺	SD06	4区	ユビ成形からナデ、強いヨコナデ	外反する頸部から外傾する	(19.60)	(10.00)		口縁1/2	
211	土師器	壺	SD06		ハケ整形からナデ、口縁部ヨコナデ	外反する頸部で端部内外に肥厚する	(20.50)	(10.30)		口縁1/6	
212	土師器	壺	SD06		ユビ成形ののちナデ	球形の体部から短く外反する口縁部	(14.60)	(20.50)		口縁1/3	
213	土師器	壺	SD06	3区	ユビ成形からヘラケズリ・ナデ後板ナデ	球形の体部から外傾する口縁部	(13.40)	(18.00)		口縁2/3	
214	土師器	壺	SD06	3区	ハケ整形からナデ	内傾する頸部から外反する口縁部	(13.80)	(5.50)		口縁1/2	
215	土師器	壺	SD06		ケズリ・ユビののちナデ・ハケ・ヨコナデ	内湾し外傾する口縁部、端部丸い	(16.30)	(5.90)		口縁1/3	
216	土師器	壺	SD06	3区	ユビ成形から強いヨコナデ・ナデ	内傾する頸部から水平状に外傾する	(26.10)	(8.30)		口縁1/8	讃岐産
217	土師器	壺	SD06	3区	ユビ成形からヨコナデ・ナデ	外湾ぎみの体部から外傾する	(23.00)	(8.80)		頸部1/8	讃岐産

218	土師器	壺	SD06		ハケ整形	内湾する体部から直立する、突帯１条		(6.80)		頸部１/４	讃岐産
219	土師器	壺	SD06		ナデ・ヨコナデ、擬凹線	外傾し端部上につまみ出す	(28.80)	(5.10)		口縁１/４	
220	土師器	壺	SD06		ヨコナデ	外反する頸部から稜線になり外傾	(31.60)	(7.30)		口縁１/８	
221	土師器	壺	SD06	3区	ナデ、板ナデ	上げ底から内湾する体部		(3.20)	(3.70)	底部２/３	
222	土師器	壺	SD06		タタキ・ユビ成形からナデ	突出平底から外傾する体部		(3.40)	5.40	底部完	
223	土師器	壺	SD06		タタキ・ユビ成形からナデ	突出平底から外傾する体部		(4.10)	6.30	底部完	木葉痕
224	土師器	壺	SD06		ナデからヘラミガキ	小さな平底から内湾する体部		(5.00)	3.10	底部完	
225	土師器	壺	SD06	3区	タタキからナデ、内面ハケ、底部木葉痕	平底から内湾する体部		(4.70)	4.70	底部完	
226	土師器	壺	SD06		ユビ成形からハケ・ナデ、外面ミガキ	小さな底から内湾する体部		(3.50)	3.20	底部完	
227	土師器	壺	SD06	3区	タタキからナデ、内面ハケ、底部木葉痕	平底から内湾する体部		(4.80)	4.00	底部完	
228	土師器	壺	SD06	3区	ハケ整形からナデ	突出平底から外傾する体部		(4.10)	5.60	底部完	
229	土師器	壺	SD06		タタキからナデ・ハケ	平底から外傾する		(5.50)	(6.10)	底部完	木葉痕
230	土師器	壺	SD06		タタキからナデ	平底から内湾ぎみの体部		(5.00)	(8.40)	底部１/２	
231	土師器	壺	SD06		ハケ整形からナデ・ミガキ	上げ底から外傾する体部		(6.30)	(5.70)	底部２/３	
232	土師器	壺	SD06		外面タタキからナデ、内面ハケからナデ	突出平底から内湾する体部		(9.00)	5.60	底部完	
233	土師器	壺	SD06		ユビ成形からハケ・ナデ、口縁部ヨコナデ	平底から倒卵形の体部、外傾し尖る	(9.00)	13.90	3.60	口縁１/２	
234	土師器	壺	SD06		ハケ整形、端面１条凹線	内湾する体部から大きく外反する口縁	(12.90)	(6.40)		口縁１/６	
235	土師器	壺	SD06	4区	ハケ整形からナデ	球形の体部から外傾する口縁部		(14.4)			
236	土師器	壺	SD06		ナデ・ミガキ	外傾し端部丸い				口縁部完	讃岐産
237	土師器	壺	SD06	3区	ハケ整形からナデ・ミガキ、刻み目	内傾する体部から直立する頸部		(2.75)		頸部１/４	
238	土師器	壺	SD06		ユビ成形からハケ・ナデ後ミガキ	算盤玉状の体部に内湾する脚台		(6.90)		体部完	
239	土師器	壺	SD06	3区	ハケ整形ののちナデ	球形の体部から外傾する口縁部	(10.40)	16.90		口縁１/４	
240	土師器	鉢	SD06	3区	外面タタキからナデ、内面ハケからナデ	内湾する扁平な杯部で短い口縁部	(13.00)	(7.70)		口縁１/３	赤色顔料塗布
241	土師器	鉢	SD06	3区	縦方向タタキからナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(12.80)	(5.20)		口縁１/12	
242	土師器	壺	SD06	3区	タタキ成形からハケ・ナデ整形、ヨコナデ	球形の体部から短く外反する口縁部	(13.80)	12.10		口縁３/４	
243	土師器	壺	SD06		ユビ成形からハケ・ナデ、ヨコナデ	球形の体部から内湾気味の口縁部	(6.50)	8.50		口縁１/２	
244	土師器	鉢	SD06		タタキ・ユビ成形からナデ	小さな平底から内湾し口縁部外傾	(8.50)	6.60	(8.10)	口縁１/２	
245	土師器	鉢	SD06		ユビ成形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(9.80)	8.00		口縁１/２	
246	土師器	ミニチュア	SD06	3区	ユビ成形ののちナデ	算盤玉状の体部から外反する口縁部	4.50	5.30		口縁１/２	
247	土師器	鉢	SD06	3区	ハケ整形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から小さく外傾する	(9.20)	(6.80)		口縁１/２	
248	土師器	鉢	SD06	3区	ユビ成形からケズリ・ナデ、端部ヨコナデ	僅かに屈曲して頸部とする、端部丸い	(10.40)	(4.50)		口縁１/３	
249	弥生土器	鉢	SD06	3区	ナデ、沈線・刻み目	直線的に開き端部尖る	(10.10)	(6.35)		口縁１/７	
250	土師器	鉢	SD06	3区	ハケ整形から板ナデ	内湾する体部で端部尖る	(10.80)	(4.70)		口縁１/３	
251	土師器	鉢	SD06	3区	ハケ整形ののちナデ、口縁部ヨコナデ	小さな平底から内湾する	10.25	6.85	1.50	ほぼ完	黒斑
252	土師器	鉢	SD06	3区	ナデ・ヨコナデ、擬凹線	内湾する体部、口縁部外傾しつまむ	(20.00)	(3.00)		口縁１/12	
253	土師器	鉢	SD06	3区	ハケ整形から口縁部ヨコナデ	扁平で内湾する体部、屈曲して外反	16.25	5.70		口縁１/２	
254	土師器	鉢	SD06		外面タタキ、内面ハケ整形、端部ヨコナデ	僅かに内湾し、端部丸い	(18.20)	(9.60)		口縁１/３	

255	土師器	鉢	SD06	3区	タタキののちハケ・ナデ、端部ヨコナデ	僅かな平底から内湾する、端部丸い	(14.30)	6.90	2.80	ほぼ完	
256	土師器	鉢	SD06		タタキののちハケ・ナデ、端部ヨコナデ	僅かな平底から内湾し、端部尖る	(14.80)	7.40	3.10	底部完	化粧土塗布
257	土師器	鉢	SD06	3区	タタキからナデ、内面ハケ整形	平底から内湾し口縁部反る		(4.60)	(4.50)	底部2/3	
258	土師器	鉢	SD06	3区	タタキからナデ・ハケ整形	平底から内湾し端部丸い	9.45	6.35	2.80	ほぼ完	黒斑、木葉痕
259	土師器	鉢	SD06		ケズリからハケ・ナデ	上げ底から内湾し端部丸い	(11.90)	6.25	3.75	口縁1/2	
260	土師器	鉢	SD06	3区	タタキ、くもの巣状ハケ、ナデ	小さな平底から内湾し端部丸い	(10.50)	6.00	3.00	ほぼ完	
261	土師器	鉢	SD06		タタキののちナデ・ヨコナデミガキ、ヨコナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(30.90)	(6.35)		口縁1/12	
262	土師器	鉢	SD06	2区	ハケ整形からミガキ、口縁部ヨコナデ	平底で内湾する体部から外傾	(40.50)	(21.40)	8.10	口縁1/2	
263	土師器	鉢	SD06	3区	内外ケズリ、ハケ整形後ミガキ、凹線状	不安定な平底から内湾する体部で直立	(44.00)	(18.80)	7.50	口縁1/4	
264	土師器	低脚杯	SD06		ユビ成形からナデ・ミガキ	外反する脚部から内湾する杯部	(12.10)	5.80	(5.90)	口縁1/2	
265	土師器	鉢	SD06	3区	ケズリからハケ・ナデ	内湾する体部で端部尖る	(11.00)	(6.80)		口縁1/6	
266	土師器	製塩	SD06	3区	ユビ・ケズリからハケ整形・ナデ	外反する脚台に内湾する体部		(5.80)	5.55	裾部4/5	脚台Ⅳ
267	土師器	鉢	SD06	3区	ケズリからハケ整形、ミガキ	裾部外傾し角張る、体部内湾する		(6.35)	(6.80)	裾部1/4	
268	土師器	甕	SD06	2区	ユビ成形からナデ	低い脚台から内湾する体部		(3.05)	(4.95)	底部1/3	
269	土師器	甕	SD06		ケズリ・ユビ成形ののちナデ	外反する脚部から内湾する体部		(8.45)	(7.60)	裾部ほぼ完	
270	土師器	脚台	SD06	3区	ケズリ・ユビ成形ののちナデ	低く僅かに外傾する脚台		(4.20)	(11.60)	裾部1/3	
271	土師器	脚台	SD06	3区	ハケ整形からナデ・ミガキ	外反する裾部で端部尖る		(7.90)	14.60	裾部1/5	
272	土師器	甕	SD06	3区	ナデ調整、内面はミガキ	上げ底から内湾する体部		(6.10)	4.15	底部完	
273	土師器	脚台	SD06	3区	ハケ整形からナデ・ヘラミガキ	外傾する下台部で端部丸い		(6.10)	(8.50)	裾部1/4	
274	土師器	脚台	SD06		ケズリ・タタキからハケ整形、ナデ仕上げ	上下とも外傾する		(6.65)	(9.90)	裾部1/2	
275	土師器	甑	SD06		ユビ・ハケ整形からナデ	尖り底で内湾する体部		(4.00)		底部完	黒斑
276	土師器	甑	SD06		ユビ・ハケ整形からナデ	丸底で内湾する、円孔		(4.00)		底部完	
277	土師器	甑	SD06		ユビ・タタキ・ヘラケズリからナデ	丸底で内湾する		(4.50)		底部完	
278	土師器	甑	SD06		タタキからユビ・ハケ整形後ナデ	不安定な平底から内湾する体部	11.80	10.50	4.30	ほぼ完	
279	土師器	蓋	SD06		ハケからナデ・ミガキ、つまみ部ユビ成形	中央窪むつまみ部から外反する体部	(3.40)	(3.80)	(8.40)	体部1/4	
280	土師器	蓋	SD06	3区	ハケからナデ、つまみ部ユビ成形	中央窪むつまみ部から外反する体部	(2.80)	5.30	(8.70)	体部1/4	
281	土師器	蓋	SD06		ハケ整形から板ナデ、底部ユビ成形	上げ底から外傾する体部、端部尖る	(3.10)	(5.10)	(11.60)	つまみ部完	
282	土師器	蓋	SD06	3区	ハケからナデ、つまみ部ユビ成形	中央窪むつまみ部から外傾する体部	3.40	(5.10)		つまみ部完	
283	土師器	蓋	SD06	4区	ハケからナデ、つまみ部ユビ成形	中央窪むつまみ部から外傾する体部	2.50	(4.10)		つまみ部完	
284	土師器	蓋	SD06		ハケからナデ、つまみ部ユビ成形	中央窪むつまみ部から外傾する体部	3.40	(4.20)		つまみ3/4	
285	土師器	蓋	SD06		ナデののちミガキ、つまみ部ユビ成形	中央窪むつまみ部から外傾する体部	3.80	(4.40)		つまみ部完	
286	土師器	蓋	SD06		ハケからナデ、つまみ部ユビ成形	中央窪むつまみ部から外傾する体部	3.50	4.60	(12.80)	体部1/2	
287	土師器	蓋	SD06		ハケ整形からナデ、つまみ部ユビ成形	外傾し端部丸い、つまみ上面窪む	3.40	(5.40)	(13.00)	体部2/3	
288	土師器	蓋	SD06		ハケ整形からナデ	小さなつまみ部で外反する	(4.00)	(5.60)	(12.20)	裾部1/8	
289	土師器	蓋	SD06	4区	ハケからナデ、つまみ部ユビ成形	中央窪むつまみ部から外反する体部	(3.80)	6.40	(12.50)	体部1/4	
290	土師器	蓋	SD06		ナデののちミガキ、つまみ部ユビ成形	裾広がりの体部で端部尖る、内反	(5.30)	4.40	(11.70)	裾部1/3	
291	土師器	高杯	SD06		ナデミガキ、口縁部ヨコナデ	外傾する筒部から外傾し外反する	(20.00)	(12.70)		口縁ほぼ完	丹塗

292	土師器	高杯	SD06	4区	ケズリからナデ・ミガキ	外傾から裾開く、外傾から外反する杯	(22.80)	(12.40)		口縁1/8	
293	土師器	高杯	SD06		タタキ・ケズリから板ナデ・ナデ	外傾する通部から内湾ぎみの裾部		(7.50)		筒部完	
294	土師器	高杯	SD06	3区	内面絞り目・ケズリ、外面ミガキ	外反する裾部		(4.60)	腹 (2.80)	脚部ほぼ完	
295	土師器	高杯	SD06	2区	タタキから板ナデ	直立する筒部		(7.20)		筒部完	
296	土師器	高杯	SD06		ケズリからナデ・ミガキ	外傾する脚部、水平に開く杯部		(8.50)		脚部ほぼ完	讃岐産
297	土師器	高杯	SD06		ハケ整形からミガキ、4方円孔	内湾し外反する杯部、裾は外反する		(11.30)	12.50	裾ほぼ完	丹塗
298	土師器	高杯	SD06		タタキからハケ整形、内面ケズリ、4方孔	外反する裾部		(9.40)	(16.90)	小片	
299	土師器	高杯	SD06	2区	ナデ・ミガキ、外面に山形文	内湾する体部から外反する	(14.60)	(4.90)		口縁1/3	
300	土師器	高杯	SD06	4区	ケズリからナデ、外面はヘラミガキ	外傾してから大きく開く		(9.20)		脚部ほぼ完	
301	土師器	高杯	SD06		ユビ・ケズリからナデ	内湾する裾部で筒部直立		(9.70)	11.20	裾部1/6	
302	土師器	高杯	SD06		ケズリからハケのちナデ、3方孔	外反し端部近く直線的で端部尖る		(9.35)	(15.10)	裾部1/5	
303	土師器	高杯	SD06		ケズリからハケのちナデ、4方孔	外反する裾部に浅く内湾する杯部下半	(12.70)	(9.50)	(13.00)	裾部1/2	
304	土師器	高杯	SD06		ケズリののちナデ・ハケからミガキ	内湾する裾部で筒部直立で短い		(5.85)	11.40	筒部完	
305	土師器	高杯	SD06		タタキからハケ整形・ナデ	外反する裾部で端部丸い		(5.70)	11.30	底部3/5	
306	土師器	高杯	SD06		内面ケズリからナデ、外面ミガキ	外傾する筒部から内湾ぎみの裾部		(9.70)	(5.90)	頸部1/2	
307	土師器	器台	SD06		内面ケズリ、ナデ・板ナデ、穿孔4方	直立する筒部から外方に延びる下台		(8.95)	(15.20)	裾部3/4	
308	土師器	器台	SD06		タタキからハケ整形、内面ケズリ、4方孔	外反する下台、端部角張る		(9.25)	(14.90)	裾部1/3	赤色顔料塗布
309	土師器	器台	SD06		ケズリののちナデ・ハケ、凹線3条	短い筒部から外傾し端部も外傾	21.65	(14.10)		口縁ほぼ完	
310	土師器	器台	SD06		端面4条凹線、ヨコナデ	外傾し端部肥厚端面	20.10	(5.10)		口縁5/6	赤色顔料塗布
311	土師器	器台	SD06	3区	ナデからミガキ、端面3条凹線	外傾し端部肥厚	(19.80)	(4.30)		口縁1/10	
312	土師器	器台	SD06	4区	ヨコナデ、擬凹線	内湾する口縁部で端面となり垂下する	(16.50)	(2.70)		口縁1/12	
313	土師器	器台	SD06		ケズリ・ユビののちナデ・ハケ	外反する筒部から変化して外反する	20.95	(14.20)		口縁完	
314	土師器	器台	SD06		ナデ・ハケからミガキ、口縁部ヨコナデ	筒形に外反し端部肥厚	(18.70)	(11.80)		口縁1/2	
315	土師器	器台	SD06	3区	ヨコナデ、凹線2条	外傾し端部肥厚	(21.20)	(1.60)		口縁1/6	
316	土師器	器台	SD06	3区	ケズリ・ナデからヨコナデ	外傾ぎみの上台部で端部外反する	(21.60)	(11.30)		口縁1/2	丹塗
317	土師器	器台	SD06		ケズリからナデ・ミガキ、刻み目、籾痕	外反する筒部からさらに外反、		(13.10)		筒部完	丹塗
318	土師器	器台	SD06		ケズリののちナデ・ハケ、ミガキ	外傾する上下台		(10.05)		筒部完	
319	土師器	器台	SD06	3区	タタキからナデ・ミガキ、内面ケズリ	筒部直立から外反する裾部に		(7.55)			
320	土師器	器台	SD06	3区	ケズリからナデ・ミガキ	外反する		(12.00)		筒部完	
321	土師器	器台	SD06	3区	ケズリののちナデ・ハケ、ミガキ3方孔	外傾する上下台		(9.15)		筒部完	
322	土師器	器台	SD06	3区	ケズリ、ハケ整形、ナデ・ミガキ	外反する下台		(6.60)	(9.90)	裾部1/2	丹塗
323	土師器	器台	SD06		ケズリ、ハケ整形からナデ	小形で直立する筒部から外反する下台		(6.10)	(8.60)	裾部完	
324	土師器	器台	SD06	3区	ケズリののちナデ・ハケ、ミガキ、凹線	外反しさらに稜線垂下し外反する	(13.50)	(7.75)		口縁1/6	
325	土師器	器台	SD06	3区	ケズリののちナデ・ハケ、ミガキ	外反する筒部から外傾する裾部		(10.20)		筒部完	
326	土師器	器台	SD06		ケズリののちナデ・ハケ	外反する裾部で端部角張る		(10.50)	(14.40)	裾部1/9	
327	土師器	脚台	SD06	3区	ケズリからハケのちナデ、3方孔	外反し端部丸い		(4.50)	8.00	脚部ほぼ完	
328	土師器	器台	SD06		ヨコナデ	僅かに外反し端部肥厚		(1.80)	(14.60)	裾部1/7	

329	土師器	器台	SD06	4区	内面ハケ整形、外面ミガキ・ナデ	外反する下台		(6.80)	10.60	裾部完	
330	土師器	高杯	SD06		ハケ整形からナデ	外傾する細い筒部、水平ぎみに開く杯		(8.20)			
331	土師器	高杯	SD06		ケズリからハケナデ	外反する裾部		(4.80)	(9.20)	底部1/2	
332	土師器	器台	SD06		ナデからヘラミガキ、凹線1条	直立する筒部から外方に延びる下台		(5.00)	9.10	裾部完	
333	土師器	器台	SD06		内面ケズリからナデ、外面ハケからミガキ	大きく外反し端部下方につまみ出す		(7.20)	8.50	裾部完	
334	土師器	器台	SD06		ケズリ、ハケ整形からナデ	直立する筒部から外方に延びる下台		(7.00)	10.10	裾部完	丹塗
335	土師器	器台	SD06		ケズリからナデ・ミガキ、4方孔	内湾する上台部で下台は外反する	(7.80)	(6.20)		口縁1/4	
336	土師器	器台	SD06	3区	ケズリののちナデ・ハケ、4方孔	内湾する上台と外傾する低めの下台	9.60	7.50	(11.20)	口縁3/4	
337	土師器	器台	SD06	3区	ケズリののちナデ・ハケ、3方孔	内湾する上台と外傾する下台	8.35	8.05	(9.35)	口縁完	丹塗
338	土師器	脚台	SD06	3区	ユビ成形からケズリ・ナデ	平底で外傾する、底部歪		(3.90)	3.80	底部完	製塩土器？
339	土師器	製塩	SD06		ユビ成形からナデ	外傾する脚台部に直立の筒部		(3.80)	(5.85)	底部1/6	脚台Ⅲ
340	土師器	製塩	SD06	4区	ユビ成形からナデ	脚台で内湾ぎみに延びる		(2.30)	(4.30)	脚台1/3	脚台Ⅲ
341	土師器	製塩	SD06		ユビ成形からナデ	小さく外反する脚部、体部内湾		(3.60)	(4.10)	脚台完	脚台Ⅳ
342	土師器	製塩	SD06	3区	ユビ成形からナデ	小さな脚台で外傾し端部丸い		(1.45)	(4.70)	脚台1/4	脚台Ⅳ
343	土師器	製塩	SD06		ユビ成形からナデ	小さな脚台で外傾する		(1.35)	(3.70)	脚台1/3	脚台Ⅳ
344	土師器	製塩	SD06	3区	タタキ・ユビ成形からナデ・ハケ	平たい脚台から内湾する		(3.10)	4.15	底部2/3	
345	土師器	ミニチュア	SD06		ハケ整形ののちナデ	小さな平底が突起状に延びる		(1.95)	0.75	底部ほぼ完	黒斑
346	土師器	ミニチュア	SD06	3区	ユビ成形からナデ	尖底で内湾する、端部丸い	(4.05)	2.95		底部完	黒斑
347	土師器	ミニチュア	SD06	3区	ユビ成形からハケ・ナデ、手捏ね	平底から歪に内湾		(4.80)	(5.20)	底部1/2	
348	土師器	ミニチュア	SD06		ユビ・ケズリののちナデ・ハケ	平底から僅かに内湾する口縁部	(4.90)	2.75	1.70	底部完	黒斑
349	土師器	ミニチュア	SD06	3区	ケズリからハケ・ナデ、ミガキ	平底から外反する特殊な器形		(3.80)	2.00	底部完	高杯脚転用
350	土師器	ミニチュア	SD06	3区	ユビ・ケズリ成形からハケ・ナデ・ミガキ	直立ぎみの脚台に浅い内湾する上台	5.20	4.80	(4.65)	ほぼ完	
351	土製品	丸玉	SD06	3区	ナデ	球形に両側から穿孔	幅1.90	長1.65	厚0.90	完形	
352	ガラス	玉	SD06	2区		断面円形	幅0.60	長0.85	厚0.20	一部欠	
353	弥生土器	壺	SD06	3区	ナデ、突帯3条	内湾		(4.75)		破片	
354	弥生土器	壺	SD06	3区	ナデ、突帯5条	僅かに内湾		(5.65)		破片	
355	弥生土器	壺	SD06	3区	ナデ、端面に半円形の竹管文	水平に近く開く		(1.70)		破片	
356	弥生土器	壺	SD06	3区	ヨコナデ、櫛描き文	外傾し端部角張る		(1.50)		破片	
357	弥生土器	壺	SD06	3区	ヨコナデ・ナデ、端部と内面に波状文	外傾し端部肥厚する		(3.50)		破片	
358	弥生土器	壺	SD06	4区	ナデ・ハケ	直線的に延びる		(4.95)		破片	
359	須恵器	壺	SD06	4区	ロクロナデ	僅かに内湾し突帯、方形の穿孔		(3.55)		破片	
360	弥生土器	甕	SD06		ユビ成形からナデ	直立ぎみに延び、端部外側に肥厚	(13.00)	(4.10)		口縁1/8	
361	弥生土器	甕	SD06	3区	ハケ整形からナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から短く開く口縁部	(15.00)	(4.95)		口縁1/5	
362	弥生土器	甕	SD06	3区	ユビ成形からハケ・ナデ、口縁部ヨコナデ	内傾し短く外傾する	(15.80)	(5.50)		口縁1/6	
363	弥生土器	壺	SD06	3区	ナデ・ヨコナデ、4条凹線に円形浮文	外傾し端部下方に肥厚	(14.80)	(2.80)		口縁1/10	河内産
364	弥生土器	甕	SD06	2区	ナデ、ヨコナデ、沈線・刻み目	内傾しL字形に水平に開く口縁部	(27.20)	(3.10)		口縁1/12	
365	弥生土器	甕	包含層		ナデ・ヨコナデ・沈線	逆L字で端部尖る	(25.90)	(5.80)		口縁1/10	

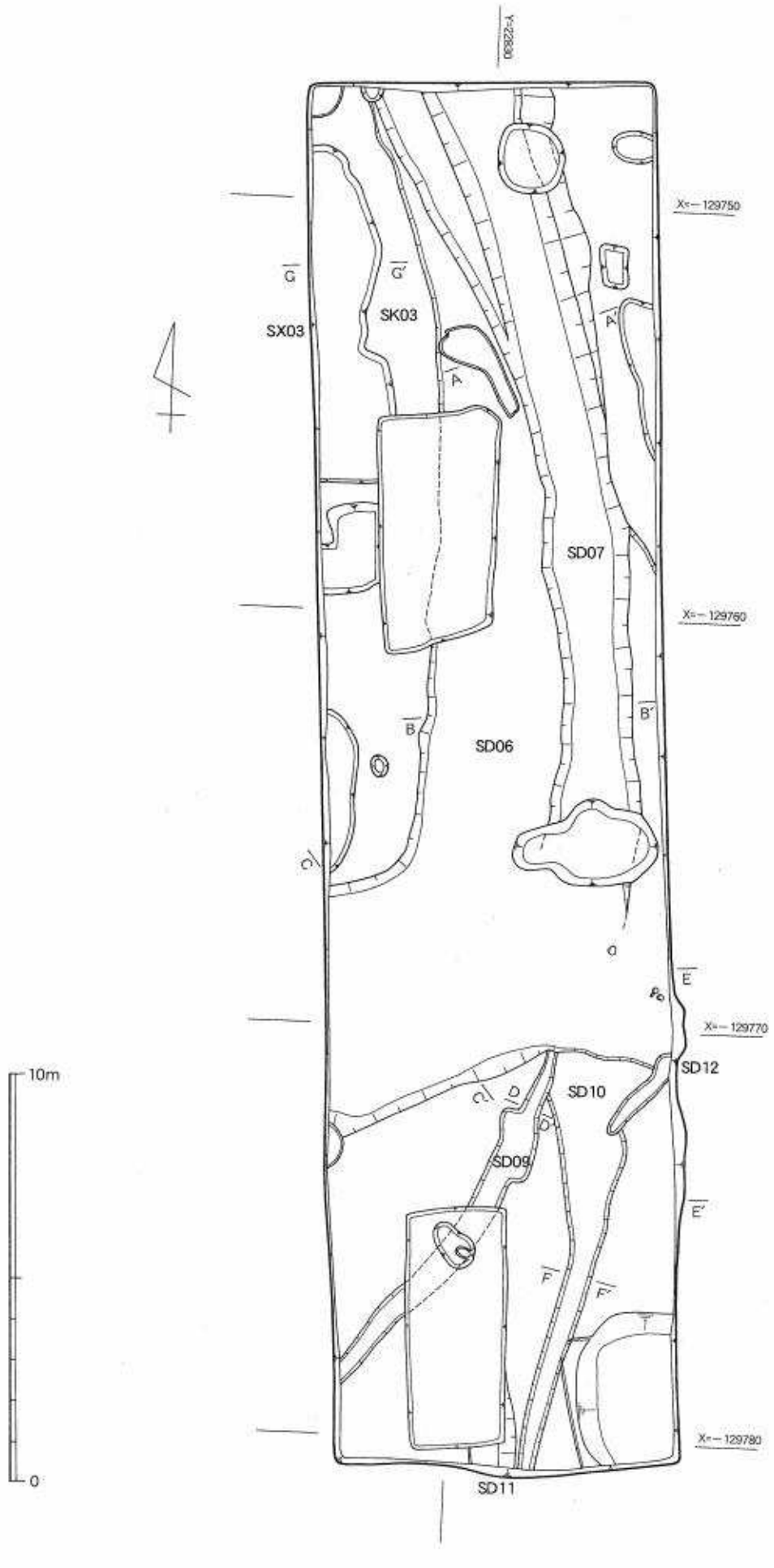
366	弥生土器	甕	SD06	ハケ整形からナデ、口縁部ヨコナデ	直線的な体部、短く外傾し端部肥厚	(22.60)	(7.20)		口縁1/10	
367	弥生土器	甕	SD06	ナデ	径の大きい上げ底から外傾する		(4.00)	(7.80)	底部1/4	
368	弥生土器	甕	SD06 3区	ナデ、板ナデ	平底から外反ぎみに開く		(5.00)	(5.40)	底部1/3	
369	弥生土器	甑	SD06	ユビ成形からナデ	平底から外傾する		(4.40)	(6.00)	底部1/2	
370	弥生土器	鉢	SD07	ナデ・ヨコナデ	僅かに内湾、短く水平に逆L字になる	(22.80)	(4.50)		口縁1/16	
371	土師器	甕	SD07	内面ケズリ、外面ハケからナデ、ヨコナデ	内湾する体部から外反する口縁部	(21.60)	(6.40)		口縁1/12	
372	土師器	製塩	SD07 2区	ユビ成形からナデ	内湾する体部に外傾する脚台		(3.80)	(5.30)	脚台1/2	
373	土師器	製塩	SD07	ユビ成形からナデ	外反する脚台		(1.50)	3.50	脚台完	讃岐産
374	土師器	甕	SD07	ナデ・ヘラミガキ、底面木葉痕	平底から内湾する		(4.90)	3.90	底部完	
375	土師器	甕	SX03	タタキからナデ	内湾する体部に突出平底付加		(2.30)	(3.20)	底部完	
376	須恵器	杯	SX03	ロクロナデ	内湾し端部丸い	(16.00)	(5.70)		口縁1/7	
377	須恵器	椀	撹乱	ロクロナデ	外傾し屈曲する	(15.80)	(3.00)		口縁1/8	
378	土師器	壺	撹乱	ヨコナデ	外傾し水平ぎみになり端部肥厚	(22.80)	(4.60)		口縁1/10	
379	土師器	甕	確認調査	ヘラケズリからハケ・ナデ・ヨコナデ	内傾する体部、外反し端部薄くなる	(16.70)	(5.30)		口縁1/9	
380	土師器	底部	確認調査	ユビ・ケズリののちナデ	平底から内湾する体部		(3.50)	3.25	底部ほぼ完	ミニチュア？
381	土師器	甕	確認調査	タタキののちナデ	平底から外傾する		(4.55)	3.50	底部完	
382	土師器	底部	確認調査	ケズリからハケ・ナデ	上げ底で内湾する体部		(5.60)	4.35	底部完	
383	土師器	底部	確認調査	ユビ成形・ケズリからナデ	僅かに上げ底で内湾する体部		(3.55)	4.10	底部完	
384	土師器	製塩	確認調査	ユビ成形し板状で面取りののちナデ	支脚状になる		(5.55)	1.45	脚完	
385	土師器	甕	旧流路	タタキ・ケズリののちナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部に外反し端部肥厚する	(13.25)	(9.50)		口縁1/3	
386	土師器	甕	旧流路	ナデ・ヨコナデ	内傾する体部から外反する口縁部	(11.90)	(4.00)		口縁1/6	マダコ壺？
387	土師器	甕	旧流路	タタキののちハケ・ナデ、口縁部ヨコナデ	内湾する体部から短く外傾する	(10.85)	(4.40)		口縁1/6	
388	土師器	甕	旧流路	ケズリからハケ・ナデ、ヨコナデ	内湾する体部から内湾し端部尖る	12.20	(6.30)		口縁完	
389	土師器	甕	旧流路	ケズリののちナデ・ハケ、口縁部ヨコナデ	外反し端部丸い	(15.40)	(4.10)		口縁1/12	搬入品
390	土師器	甕	旧流路	ケズリからハケ整形、ナデ	内湾する体部から外傾する口縁部	(13.80)	(6.65)		口縁1/4	
391	土師器	壺	旧流路	ケズリからハケ・ナデ、ヨコナデ	内湾する体部に外傾する口縁部	(12.90)	(11.50)		口縁2/3	
392	土師器	甕	旧流路	ケズリ・タタキからナデ、ヨコナデ	内傾する体部で口縁部外傾、端部角	(16.90)	(6.10)		口縁1/3	
393	土師器	壺	旧流路	ケズリからハケ整形、ナデ	内傾する体部から短く外反し端部肥厚	(17.60)	(6.25)		口縁1/9	
394	土師器	甕	旧流路	ケズリからナデ、ヨコナデ	内傾する体部から短く屈曲する	(14.00)	(3.20)		口縁1/2	
395	土師器	甕	旧流路	タタキ・ケズリからハケ整形、ヨコナデ	内湾する体部に短い二重口縁部	(14.40)	(6.80)		口縁1/4	
396	土師器	壺	旧流路	ケズリ、ヨコナデ、擬凹線？	外傾し直立ぎみの二重口縁部	(13.70)	(3.50)		口縁1/8	
397	土師器	甕	旧流路	ケズリののちナデ、強いヨコナデ	内傾する体部から外反する二重口縁部	(14.30)	(6.30)		口縁1/9	
398	土師器	甕	旧流路	体部内面ケズリ、口縁部ヨコナデ	短く外反し直立ぎみの二重口縁	(18.90)	(4.20)		口縁1/10	
399	土師器	甕	旧流路	タタキからナデ・ヨコナデ	内湾する体部、口縁部外傾しつまむ	(24.80)	(6.50)		口縁1/10	
400	土師器	甕	旧流路	ケズリからハケ整形、ヨコナデ	緩く外反する頸部から外傾し面となる	29.70	(4.60)		口縁1/9	
401	土師器	甕	旧流路	タタキののちハケ・ナデ	平底から外傾する		(2.90)	3.20	底部完	
402	土師器	甕	旧流路	タタキからナデ、タタキ底	小さな平底から外傾する		(2.20)	(3.20)	底部完	

403	土師器	甕	旧流路	外面タタキ、内面ハケ、底部木葉痕	平底から内湾する		(3.40)	(3.60)	底部1/2	
404	土師器	甕	旧流路	タタキからナデ、底面木葉痕	上げ底から外反する		(2.10)	5.00	底部完	
405	土師器	壺	旧流路	タタキののちナデ・ハケ	突出平底から外反する		(2.50)	6.00	底部完	
406	土師器	甕	旧流路	タタキののちナデ、木葉痕	平底から外反する		(4.35)	(4.95)	底部1/2	
407	土師器	甕	旧流路	タタキ・ユビ成形からナデ、木葉痕	上げ底から内湾する		(4.80)	3.80	底部完	
408	土師器	甕	旧流路	タタキ・ユビ成形ののちナデ	丸底に短く垂下する脚台が付く		(5.00)	3.00	底部完	
409	土師器	壺	旧流路	タタキからナデ、内面ハケ整形	平底から内湾する		(4.00)	(5.90)	底部3/7	
410	土師器	甕	旧流路	板ナデ	小さな平底から内湾する		(5.80)	2.20	底部完	
411	土師器	甕	旧流路	外面タタキ、内面ハケのちナデ	小さな平底から内湾する		(11.00)	2.80	底部1/3	
412	土師器	甕	旧流路	タタキ（底面も）、ハケ・ナデ	平底から内湾する体部		(7.30)	3.50	底部完	
413	土師器	甕	旧流路	タタキ（底面も）、ナデ	平底から内湾する体部		(7.60)	5.30	底部完	
414	土師器	壺	旧流路	ハケ整形ののちナデ、内外面ともミガキ	平底から僅かに外反する		(5.85)	7.45	底部ほぼ完	
415	土師器	壺	旧流路	ヨコナデ	外反する頸部で端部上方につまむ	(15.50)	(5.40)		口縁1/3	
416	土師器	壺	旧流路	ハケ整形ののちナデ	内傾する肩部から直立ぎみに外反する	14.10	(5.20)		口縁3/4	
417	土師器	壺	旧流路	タタキののちハケ・ナデ、口縁部ヨコナデ	外反する口縁部で端部肥厚する	(17.60)	(4.95)		口縁1/12	
418	土師器	壺	旧流路	ヨコナデ、凹線2条	直立する頸部から水平に開き端部肥厚	(21.80)	(5.50)		口縁1/5	
419	土師器	壺	旧流路	ユビ成形からナデ・ハケ	内湾する体部に外反し端部肥厚する	(12.00)	(6.50)		口縁1/2	
420	土師器	壺	旧流路	ナデ、ヨコナデ	外反する口縁部で端部角張る	(16.80)	(7.70)		口縁1/4	
421	土師器	壺	旧流路	タタキからナデ・ハケ、ミガキ	平底から内湾する体部、外反する頸部	(11.90)	(25.80)	(6.60)	底部ほぼ完	
422	土師器	壺	旧流路	ハケからナデ、底部木葉痕	平底から球形の体部		(41.70)	10.20	底部完	
423	土師器	壺	旧流路	ハケ整形からナデ、ヨコナデ	直立する頸部から外傾し立ち上がる	(18.50)	(7.20)		口縁1/6	
424	土師器	壺	旧流路	ヨコナデ	短い頸部から外反する二重口縁部	(12.80)	(5.30)		口縁1/2	
425	土師器	壺	旧流路	ヨコナデ	外反する頸部		(4.00)		頸部1/8	搬入品
426	土師器	壺	旧流路	ナデ	外傾し端部丸く肥厚する	(5.30)	(6.85)		口縁1/3	
427	土師器	壺	旧流路	ユビ成形からナデ、口縁部2孔	球形の体部に直立の短い口縁部、脚台	(3.00)	(8.60)		口縁1/3	
428	土師器	甕	旧流路	ヨコナデ	頸部短く外反し大きく外傾し端部丸い	(31.60)	(6.25)		口縁1/12	
429	土師器	壺	旧流路	ユビ成形からケズリ・ナデ、ヨコナデ	内湾する肩部から短く外反し内傾する		(10.30)		頸部2/7	
430	土師器	壺	旧流路	タタキののちナデ、底面もタタキからナデ	突出平底から内湾する		(5.10)	5.60	底部完	
431	土師器	壺	旧流路	ヘラケズリからハケ・ナデ	平底から外傾する体部		(3.80)	(6.80)	底部1/2	
432	土師器	鉢	旧流路	ユビ成形の脚台接合部、ナデ	内湾する体部で端部丸い	(10.10)	(6.80)		体部ほぼ完	
433	土師器	鉢	旧流路	ユビ成形からナデ	内湾する鉢に内湾する脚台が付く	(8.00)	(7.50)		口縁1/5	
434	土師器	脚台	旧流路	タタキ・ケズリからナデ	内湾する丸底に外反する脚台がつく		(5.35)	9.70	裾部ほぼ完	
435	土師器	甕	旧流路	タタキ・ユビ成形からナデ	丸底に短く外反する脚台が付く		(5.30)	(5.80)	底部1/2	
436	土師器	器台	旧流路	ハケからミガキ・ナデ	僅かに外反する下台、上台は外傾		(7.20)	(11.50)	脚部完	
437	土師器	甕	旧流路	ケズリ・ユビ成形からハケ・ナデ・ミガキ	高い平底から僅かに内湾する体部		(5.70)	(4.80)	底部3/5	
438	土師器	鉢	旧流路	ユビ成形からナデ	平底から内湾ぎみの体部、端部丸い	(6.65)	4.40	3.70	口縁1/4	
439	土師器	鉢	旧流路	ナデ	平底から内湾する体部で端部丸い	(8.40)	5.40	(3.50)	底部1/2	

440	土師器	脚台	旧流路	ユビ成形からハケ・ナデ	外傾する体部に上げ底の脚台付く		(4.60)	4.00	底部完	
441	土師器	底部	旧流路	ナデ	高い平底から内湾する体部		(4.80)	(4.90)	底部1/3	
442	土師器	甕	旧流路	ユビ成形からナデ	器壁厚く、上げ底から外傾		(3.50)	4.00	底部完	
443	土師器	甕	旧流路	ハケ整形ののちナデ	内湾する体部から尖底、底に円孔		(4.05)	(1.40)	底部3/4	
444	土師器	甕	旧流路	タタキ・ユビ成形からナデ	穿孔のある尖り底で内湾する体部		(5.50)	2.00	底部完	
445	土師器	鉢	旧流路	ハケ整形ののちナデ、ヨコナデ	内湾する体部から短く水平に開く	(25.20)	(5.20)		口縁1/13	2次焼成
446	土師器	鉢	旧流路	ナデ、ヨコナデ	内湾する浅い体部に外反し端部肥厚	(30.00)	(13.00)		口縁1/7	
447	土師器	杯	旧流路	ナデ・ヨコナデ	内湾する体部で端部尖る	(12.80)	4.50		口縁1/4	
448	土師器	杯	包含層	ナデ、ヨコナデ、磨滅	内湾する体部で端部僅かに反る	15.00	4.90		ほぼ完	
449	土師器	高杯	旧流路	ケズリからナデ・ミガキ、ヨコナデ	内湾するつき杯部、外反する裾部	(11.90)	(8.80)		口縁1/6	
450	土師器	高杯	旧流路	ハケ整形からナデ・ヨコナデ	外傾し屈曲して開く	(18.80)	(5.10)		口縁1/10	
451	土師器	高杯	旧流路	ユビ成形ののちナデ・ミガキ、ヨコナデ	外反し端部肥厚する、円孔6箇所		(7.50)	(17.80)	裾部1/9	
452	土師器	器台	旧流路	ナデ・ヨコナデ・沈線・波状文	水平に開き端部上下とも外反	(24.60)	(3.25)		口縁1/6	
453	土師器	器台	旧流路	ケズリからナデ・ミガキ、ヨコナデ、凹線	外反し端部近くで変化する	(17.00)	(6.20)		口縁1/4	
454	土師器	壺	旧流路	ヨコナデ、擬凹線	肥厚する端部	(15.80)	(1.80)		口縁1/10	
455	土師器	器台	旧流路	ケズリ・絞り目、ハケのちナデ・ミガキ	外反する		(10.80)		脚部ほぼ完	
456	土師器	器台	旧流路	ナデ・ヘラミガキ、ヨコナデ	外反する脚台・下台、外反し端部上方	8.90	(8.80)	(10.80)	口縁完	
457	土師器	器台	旧流路	ナデのち強いヨコナデ	器壁厚く屈曲する下台部		(4.65)	9.55	下台3/7	
458	弥生土器	壺	旧流路	ナデ、沈線12条	外反する頸部		(11.10)		頸部ほぼ完	
459	弥生土器	細頸壺	旧流路	ユビ成形からナデ、波状文	直線的に開き端部角張る	(7.00)	(9.30)		口縁1/2	
460	弥生土器	甕	旧流路	ユビ成形からナデ	如意状の短い口縁部	(17.00)	(6.00)		口縁1/9	
461	弥生土器	甕	旧流路	ハケ整形ののちナデ、ヨコナデ	内傾する体部から短く外反する	(19.00)	(4.10)		口縁1/7	
462	弥生土器	甕	旧流路	ナデ	平底で器壁厚い		(3.40)	6.70	底部完	
463	弥生土器	甕	SD01	ハケ整形からナデ	平底から外反する体部		(5.80)	7.20	底部完	
464	須恵器	杯蓋	包含層	ロクロナデ	内湾し端部外側につまみ出す	(11.50)	(2.90)		口縁1/6	
465	須恵器	杯蓋	包含層	ロクロナデ	湾曲する天井部から内湾し端部つまむ	(12.20)	(5.90)		口縁1/12	
466	須恵器	ハソウ	旧流路	タタキ・ケズリののちナデ	球形の体部		(7.70)		体部完	生焼け
467	須恵器	甕	包含層	ロクロナデ	外傾し端部付近で屈曲し肥厚する	(22.30)	(5.80)		口縁1/8	
468	須恵器	ハソウ	包含層	ロクロナデ、波状文	内湾する		(3.20)		破片	
469	須恵器	器台	包含層	ロクロナデ、波状文	内湾する		(3.70)		破片	

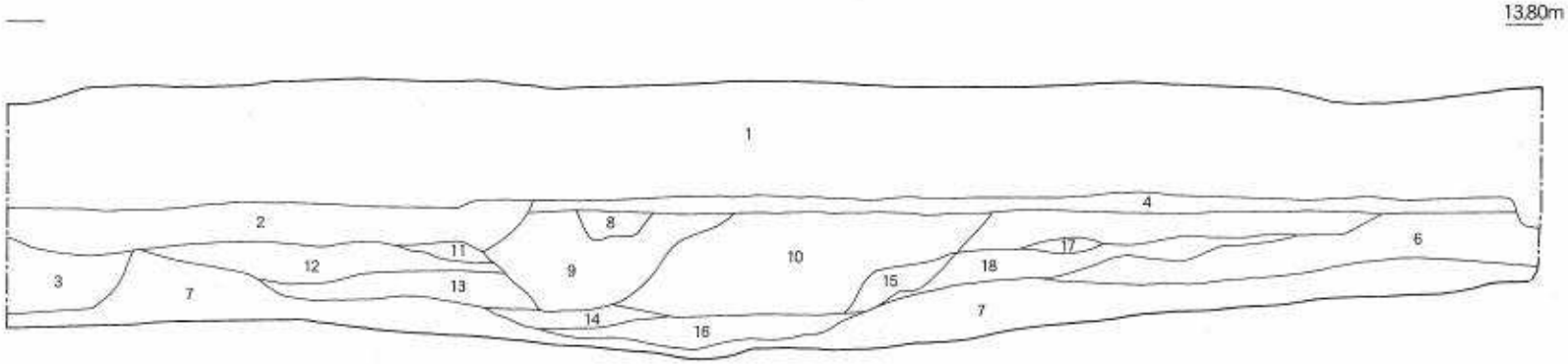
図　　版

図版 1
13年度調査区平面図



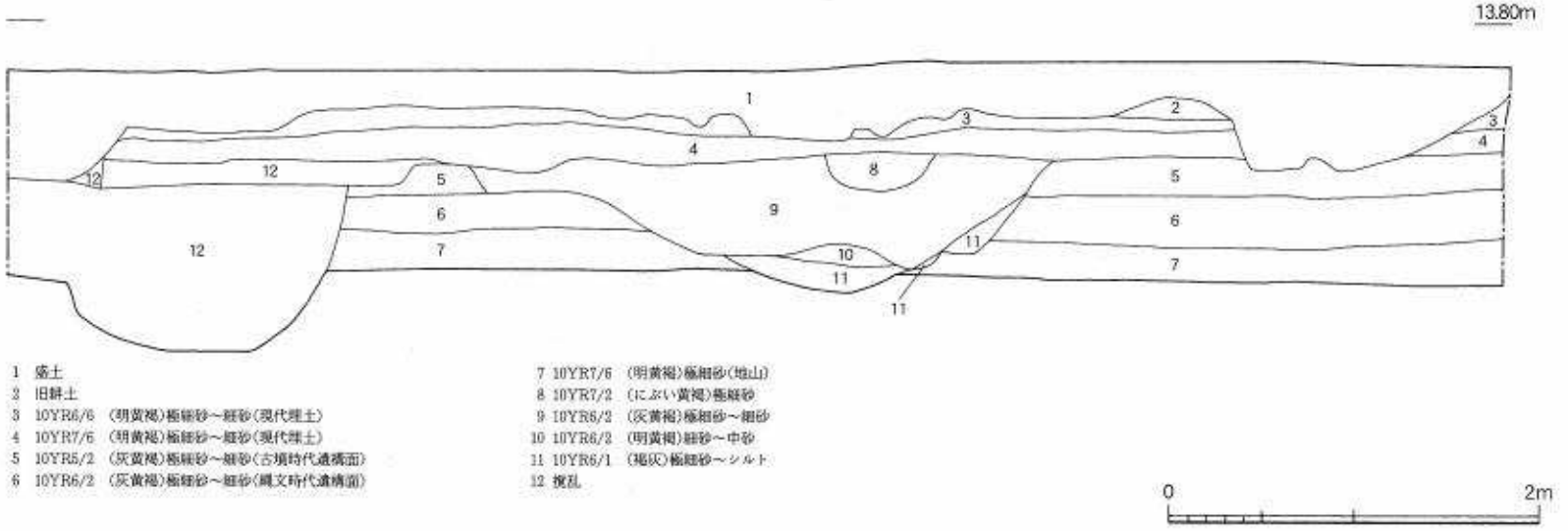
図版 2
13年度調査区土層断面図

北壁



1 盛土
2 撹乱(近代廃棄土坑)
3 撹乱
4 10YR7/1 (灰白)極細砂～シルト(近世水田)
6 10YR6/2 (灰黄褐)極細砂～細砂(古墳・縄文時代遺構面)
7 10YR7/6 (明黄褐)極細砂(地山)
8 10YR7/2 (にぶい黄褐)極細砂
9 10YR7/3 (にぶい黄橙)極細砂
10 10YR6/2 (灰黄褐)極細砂～細砂
11 10YR6/2 (灰黄褐)細砂
12 10YR7/6 (明黄褐)細砂～中砂(土器多く含む)
13 10YR6/3 (灰黄褐)極細砂～細砂
14 10YR6/2 (灰黄褐)極細砂
15 10YR5/3 (灰黄褐)極細砂
16 10YR6/2 (にぶい黄褐)極細砂～細砂
17 10YR5/2 (灰黄褐)細砂～中砂
18 10YR5/2 (灰黄褐)細砂

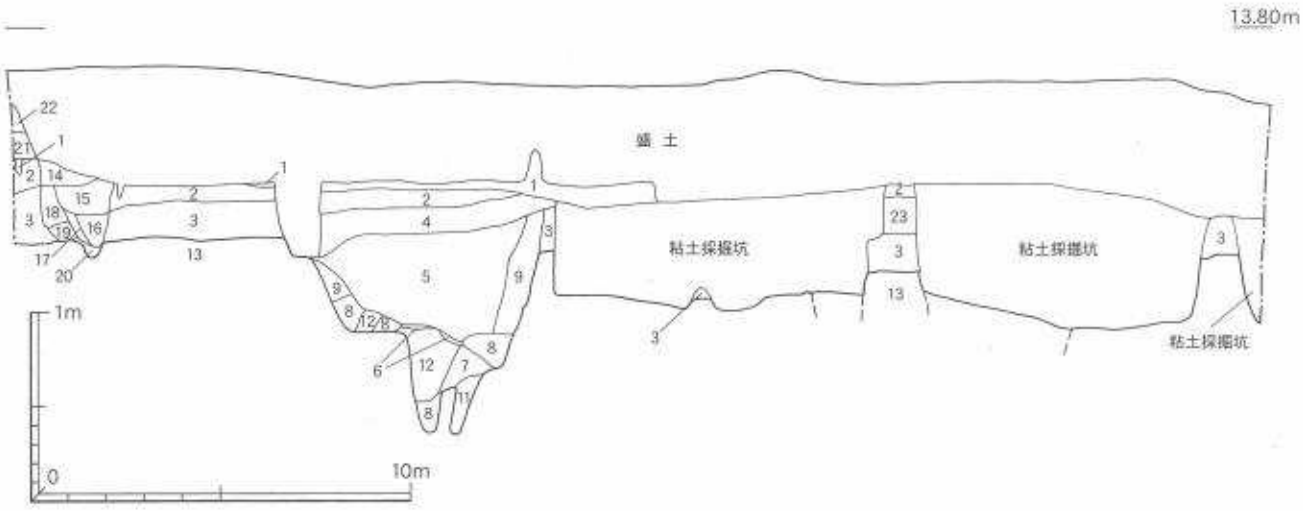
南壁



1 盛土
2 旧耕土
3 10YR6/6 (明黄褐)極細砂～細砂(現代畦土)
4 10YR7/6 (明黄褐)極細砂～細砂(現代畦土)
5 10YR5/2 (灰黄褐)極細砂～細砂(古墳時代遺構面)
6 10YR6/2 (灰黄褐)極細砂～細砂(縄文時代遺構面)
7 10YR7/6 (明黄褐)極細砂(地山)
8 10YR7/2 (にぶい黄褐)極細砂
9 10YR6/2 (灰黄褐)極細砂～細砂
10 10YR6/2 (明黄褐)細砂～中砂
11 10YR6/1 (褐灰)極細砂～シルト
12 撹乱

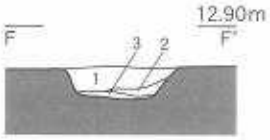
西壁遺構土層断面図

西壁土層断面図



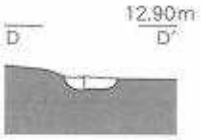
1 10YR7/1 (灰白)極細砂～シルト(旧耕土)
2 10YR5/3 (灰黄褐)極細砂～シルト(古墳時代遺構面・縄文後期包含層)
3 10YR6/2 (灰黄褐)極細砂～シルト
4 10YR5/3 (にぶい黄褐)極細砂～シルト(土器含む)
5 10YR6/2 (灰黄褐)極細砂
6 10YR6/3 (灰黄褐)細砂(小礫含む、土器多量に含む)
7 10YR6/1 (褐灰)極細砂
8 10YR6/2 (灰黄褐)極細砂～シルト(土器含む)
9 10YR6/3 (にぶい黄橙)極細砂～細砂
10 10YR6/1 (褐灰)細砂～中砂(土器多量に含む)
11 10YR6/1 (褐灰)細砂(土器含む)
12 10YR6/2 (灰黄褐)極細砂～シルト
13 10YR7/6 (明黄褐)極細砂(地山)
14 10YR6/2 (灰黄褐)細砂(小礫含む)
15 10YR7/3 (にぶい黄橙)極細砂～細砂
16 10YR7/3 (にぶい黄橙)極細砂
17 10YR6/2 (灰黄褐)細砂
18 10YR7/3 (にぶい黄橙)極細砂～細砂
19 10YR7/4 (にぶい黄橙)極細砂
20 10YR7/1 (灰白)極細砂～シルト
21 10YR7/6 (明黄褐)極細砂～細砂(盛土)
22 10YR6/6 (明黄褐)極細砂～細砂(盛土)
23 10YR6/4 (にぶい黄橙)極細砂

SD10



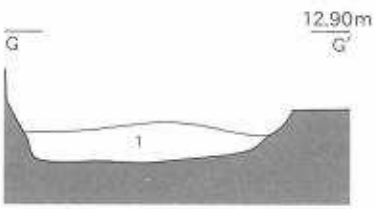
1 10YR4/3 シルト質細砂(マンガン含む)
2 10YR4/4 シルト
3 10YR3/2 小礫層(円礫)

SD09



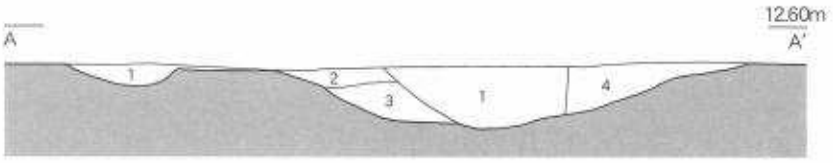
1 10YR3/2 シルト質細砂(マンガン含む)

SX03

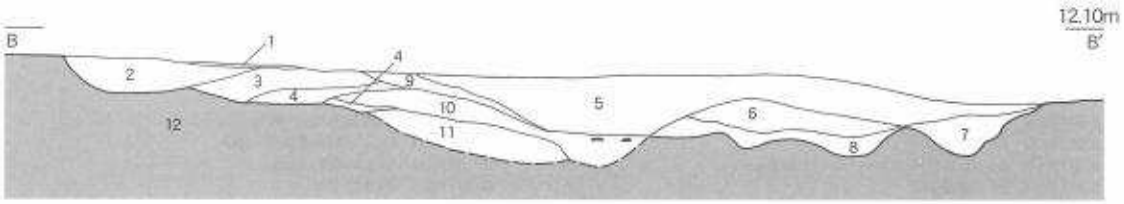


1 10YR5/3 (にぶい黄褐)極細砂(黄褐ブロック入る)

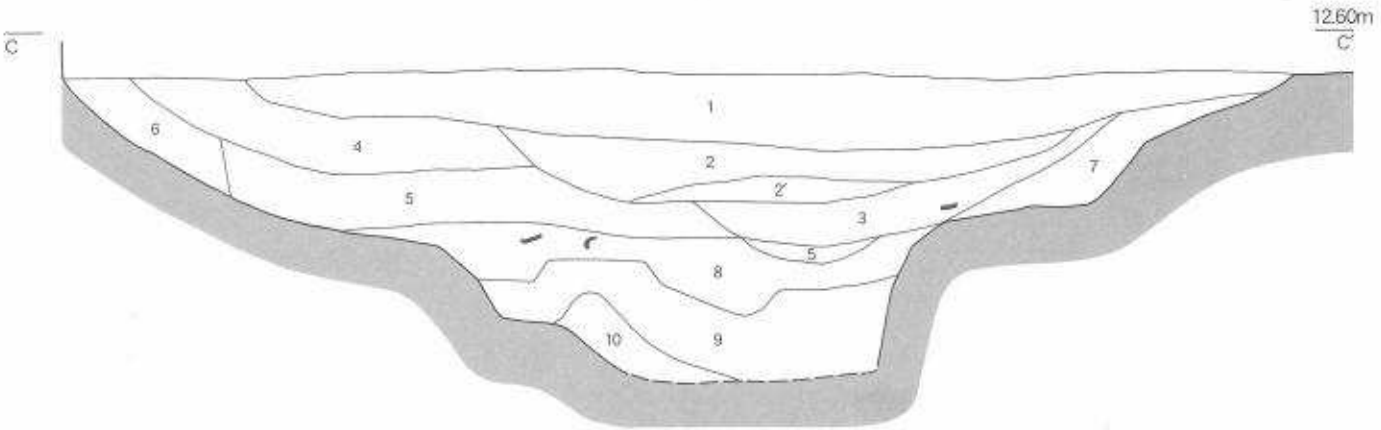
図版 4
SD06土層断面図



1 10YR7/2 （にぶい黄橙）極細砂～細砂
2 10YR6/2 （灰黄褐）細砂
3 10YR6/2 （灰黄褐）極細砂～細砂
4 10YR5/2 （にぶい黄褐）極細砂

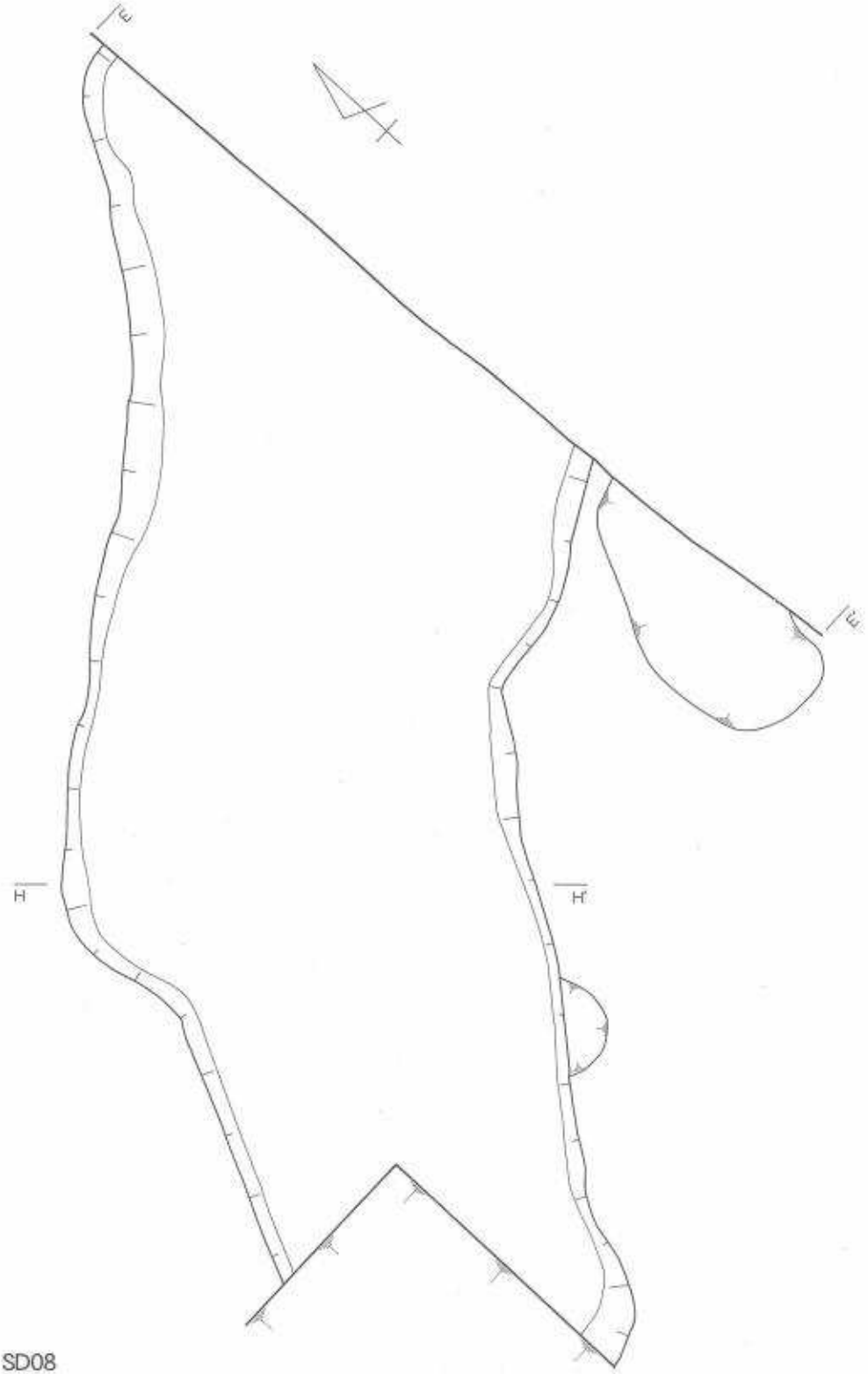


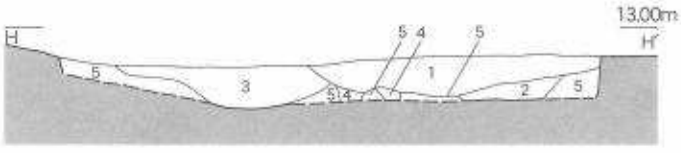
1 10YR2/2 （黒褐）極細砂～細砂
2 10YR4/3 （にぶい黄褐）中砂～細砂
3 10YR5/2 （灰黄褐）小礫～粗砂
4 礫層
5 2.5Y5/3～5/4 （黄褐）中砂～細砂
6 2.5Y4/2 （暗灰黄）中砂～細砂（炭・礫含む）
7 2.5Y4/2 （暗灰黄）極細砂～細砂（地山土含む）
8 2.5Y4/3 （オリーブ褐）細砂
9 2.5Y4/2 （暗灰黄）中砂
10 10YR4/2 （灰黄褐）中砂（底に土器含む）
11 10YR3/3 （暗褐）小礫～粗砂
12 10YR5/6 （黄褐）極細砂（地山）



1 10YR7/4 （にぶい黄橙）極細砂～シルト
2 10YR6/2 （灰黄褐）極細砂（土器少量含む）
2' 10YR6/2 （灰黄褐）極細砂～細砂（土器多量に含む）
3 10YR5/3 （にぶい黄褐）極細砂～細砂（土器多量に含む）
4 10YR7/2 （にぶい黄橙）極細砂
5 10YR5/3 （にぶい黄褐）極細砂
6 10YR5/3 （にぶい黄褐）極細砂～粗砂
7 10YR7/2 （にぶい黄橙）極細砂
8 10YR6/1 （褐灰）細砂（土器多量に含む）
9 10YR6/2 （灰黄褐）極細砂～シルト
10 10YR6/2 （灰黄褐）極細砂

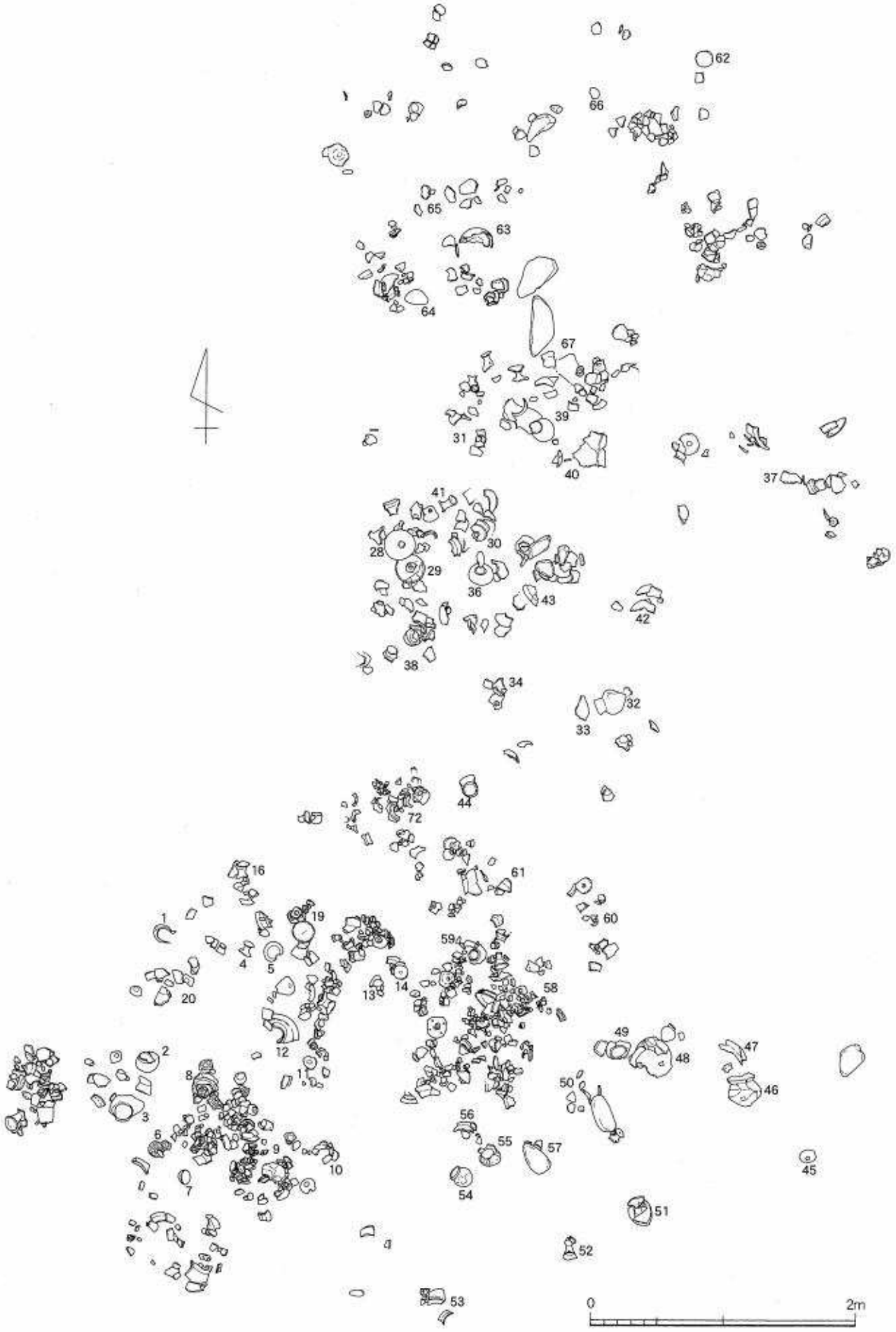
図版 5
SD08実測図



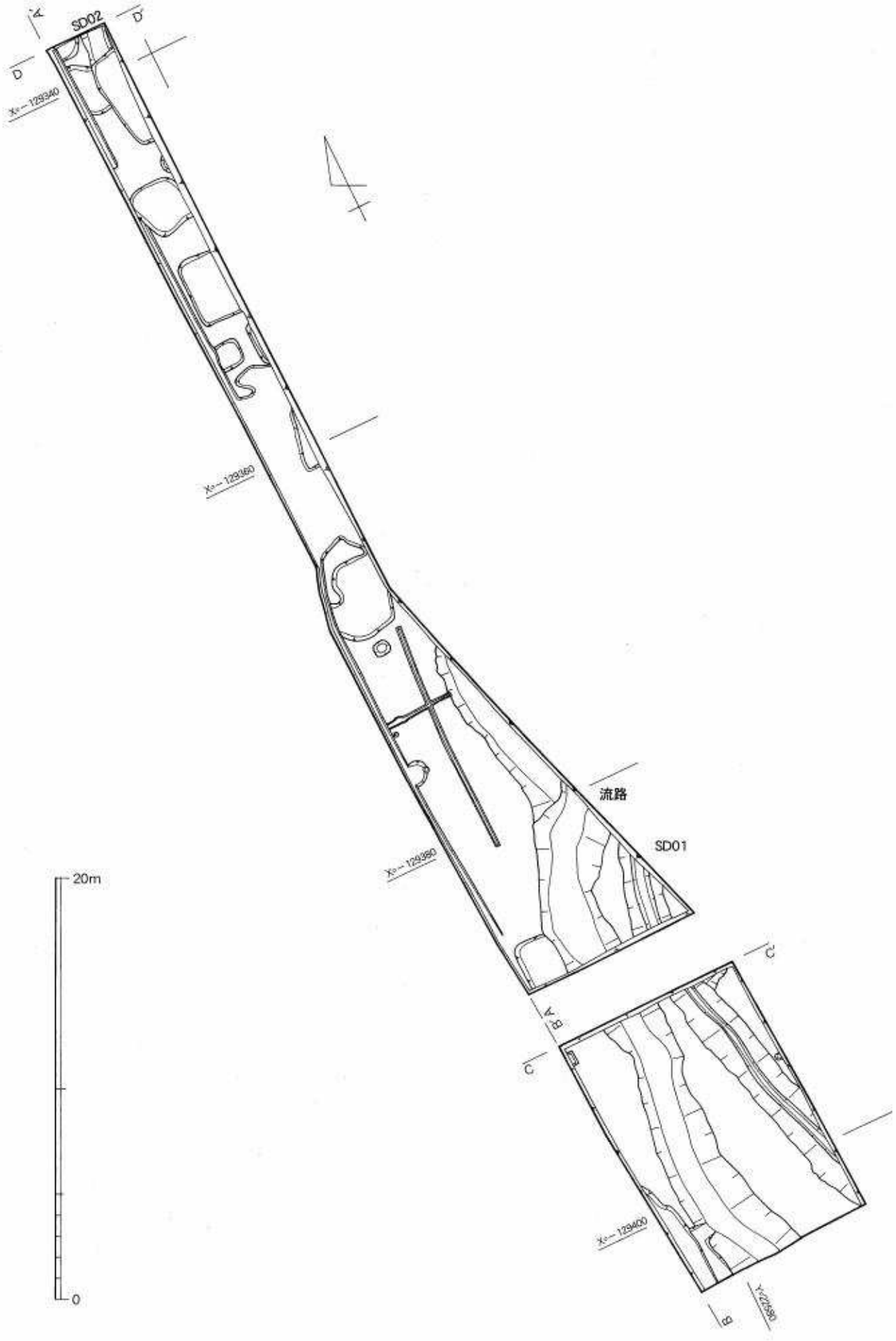


1 10YR7/3 （にぶい黄橙）極細砂（下層に小礫堆積）
2 10YR7/3 （にぶい黄橙）極細砂
3 10YR6/4 （にぶい黄橙）極細砂～細砂
4 10YR5/4 （にぶい黄褐）極細砂
5 10YR5/2 （灰黄褐）極細砂（古墳時代遺構面・縄文時代包含層）

図版 6
SD06土器出土状態実測図

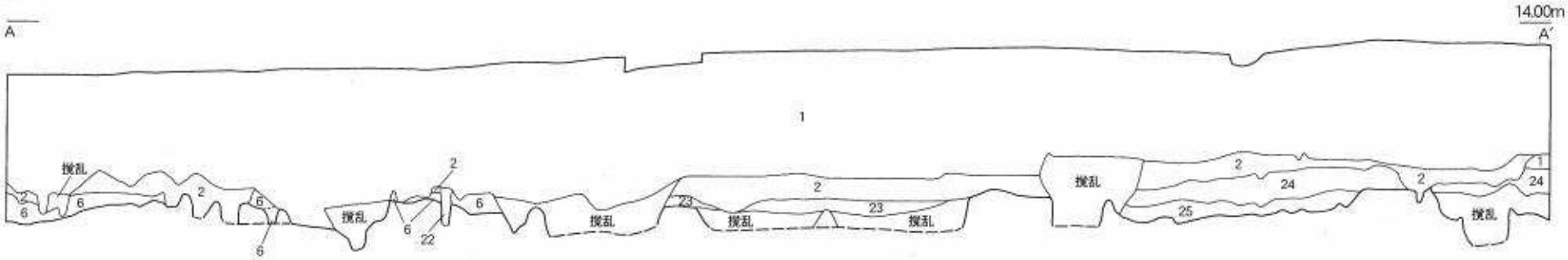


図版 7
14年度調査区平面図

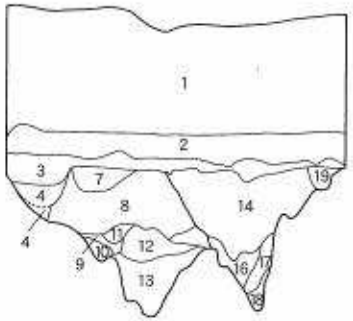


図版8
14年度調査区土層断面図

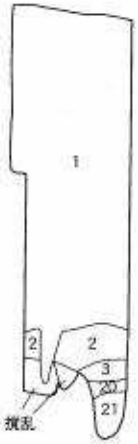
西壁



南半区北壁土層



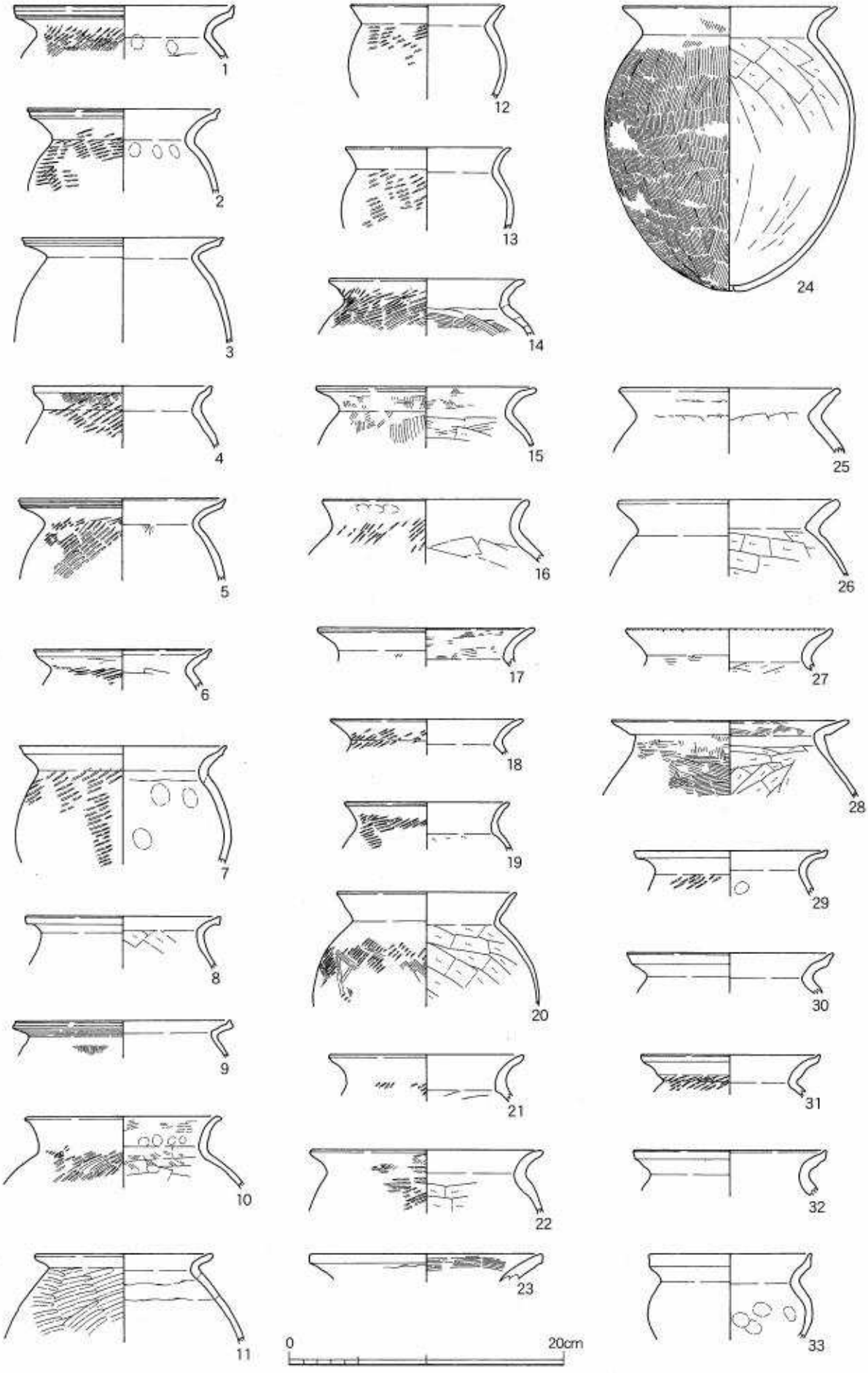
北壁



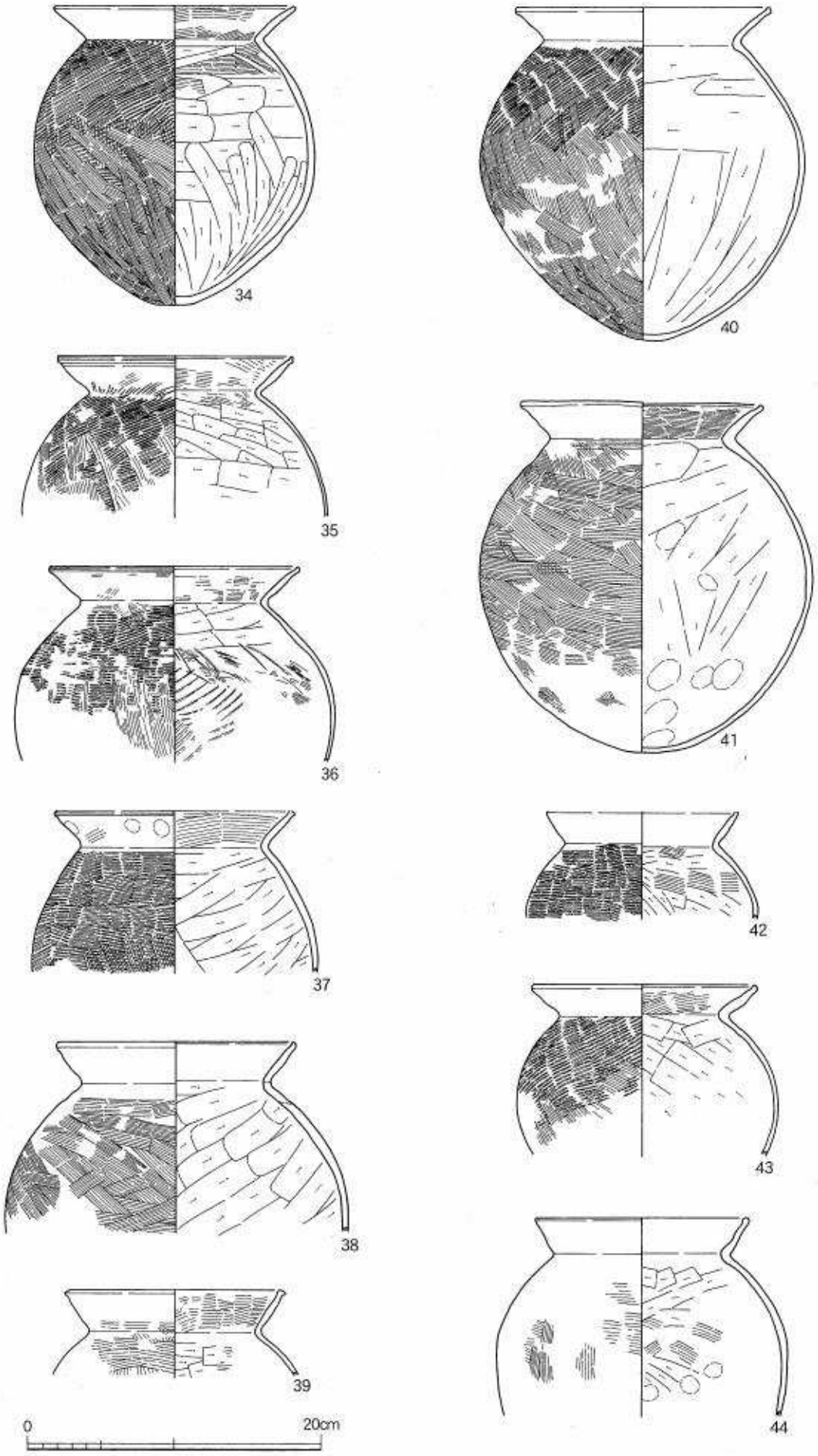
西壁

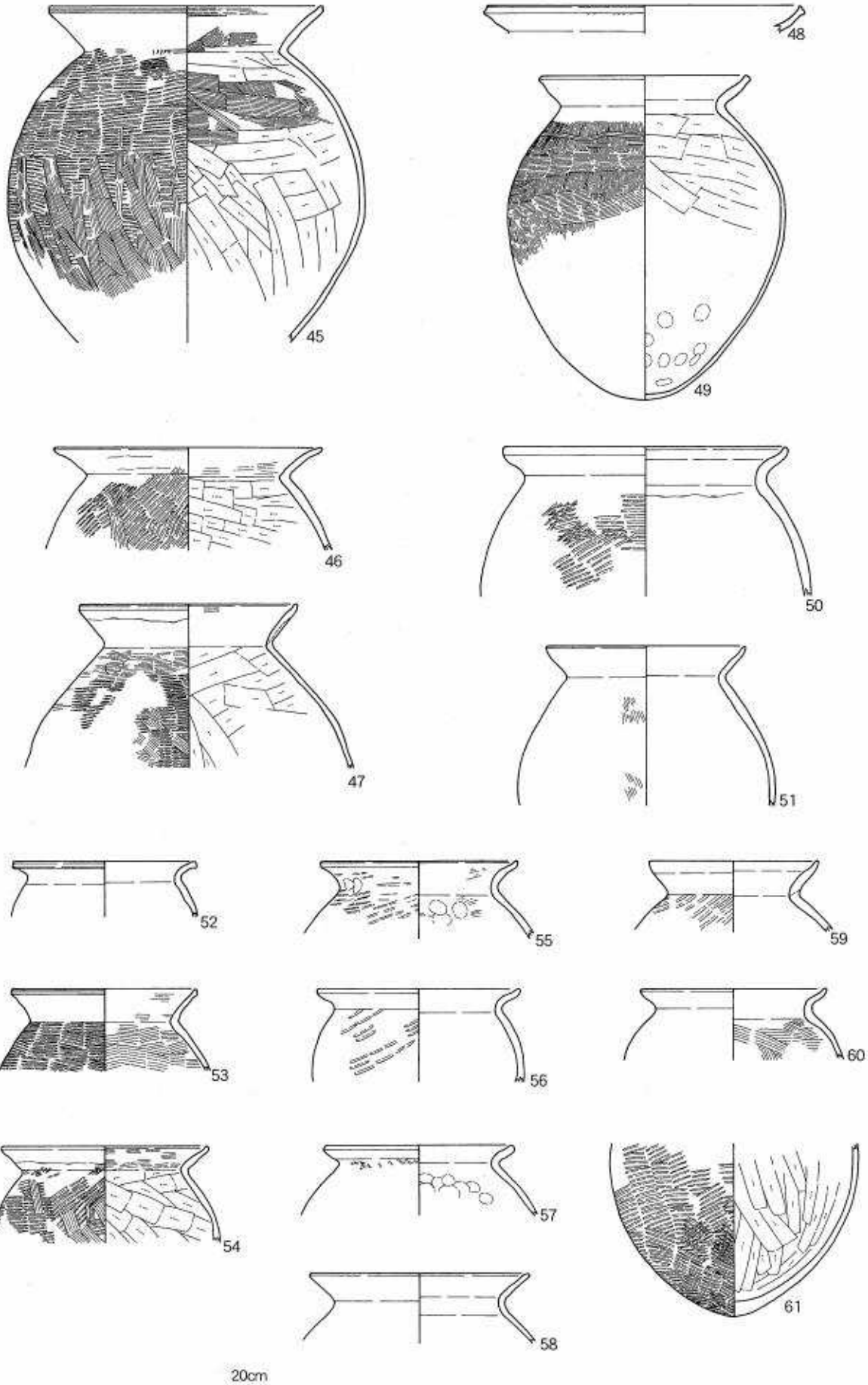
1 盛土
2 旧耕土
3 2.5Y6/1 (黄灰)シルト～中砂(若干ラミナ状)
4 2.5Y7/2 (灰黄)シルト～細砂(若干ラミナ状)
5 10YR6/1 (褐灰)シルト～極細砂(マンガン粒を多量に含む)
6 2.5Y6/3 (にぶい黄)極細砂
7 5Y7/2 (灰白)極細砂～中砂
8 10YR7/3 (にぶい黄橙)極細砂～細砂
9 11層に5cm以下の礫が混じる
10 10YR6/2 (灰黄褐)細砂～中砂
11 10YR6/1 (褐灰)シルト～極細砂
12 2.5Y7/2 (灰黄)極細砂～細砂
13 2.5Y7/2 (灰黄)細砂～粗砂
14 2.5Y7/2 (灰黄)極細砂～極粗砂(ラミナ状)
15 17層に3cm以下の礫少量混じる
16 10YR6/1 (褐灰)シルト
17 5Y7/2 (灰白)粗砂
18 2.5Y5/2 (暗灰黄)極粗砂
19 2.5Y5/1 (黄灰)シルト～中砂
20 10YR5/1 (褐灰)極細砂～粗砂(土器片多く含む)
21 10YR6/3 (にぶい黄橙)極細砂～細砂(φ2cmの礫を微量含む)
22 10YR6/1 (褐灰)極細砂
23 2.5Y7/2 (灰黄)シルト～細砂(マンガン粒を少量含む)
24 5Y6/1 (灰)シルト～細砂
25 2.5Y6/2 (黄灰)シルト～細砂(マンガン粒を少量含む)

図版 9
土器実測図（1）

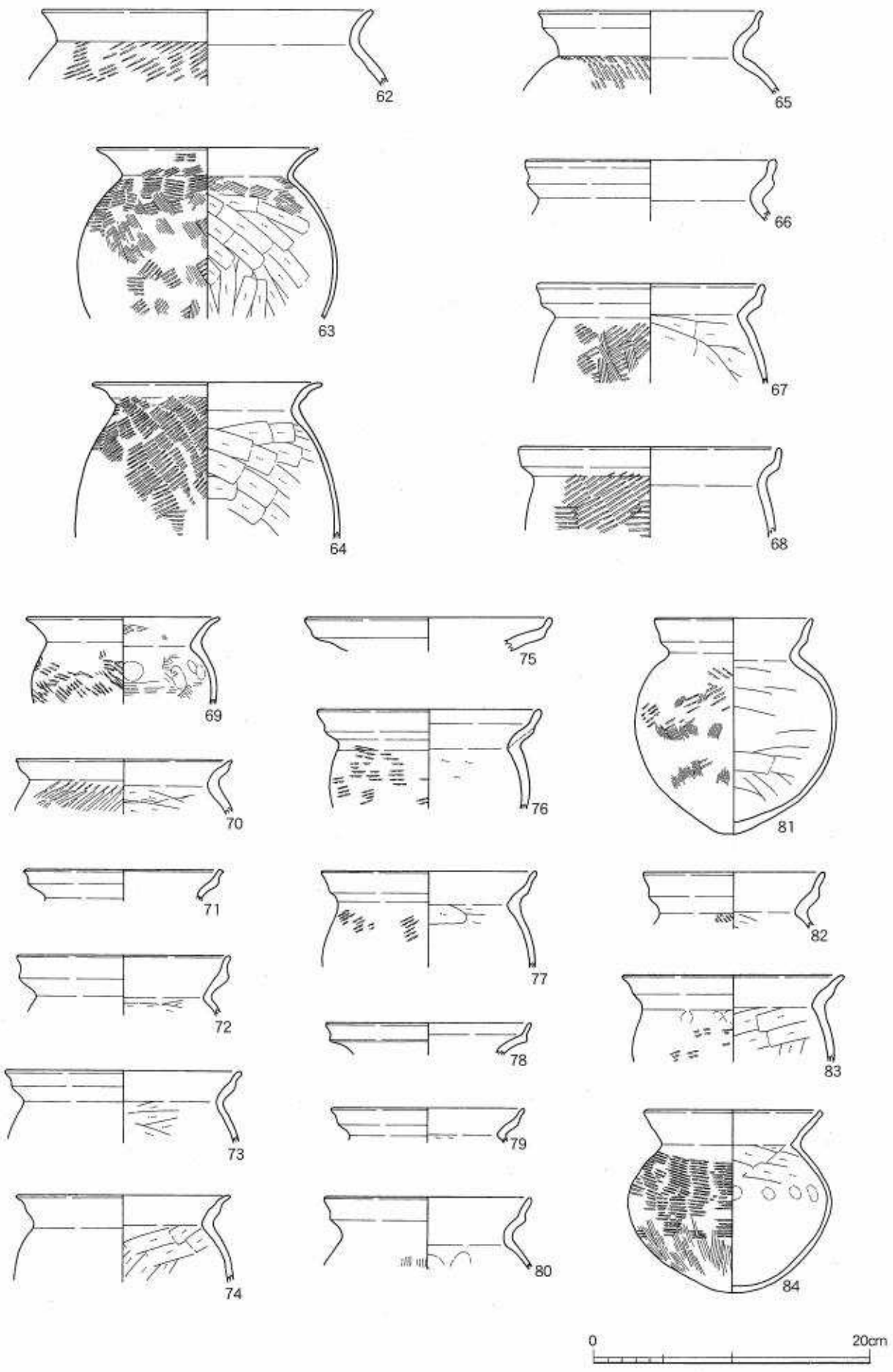

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
20cm

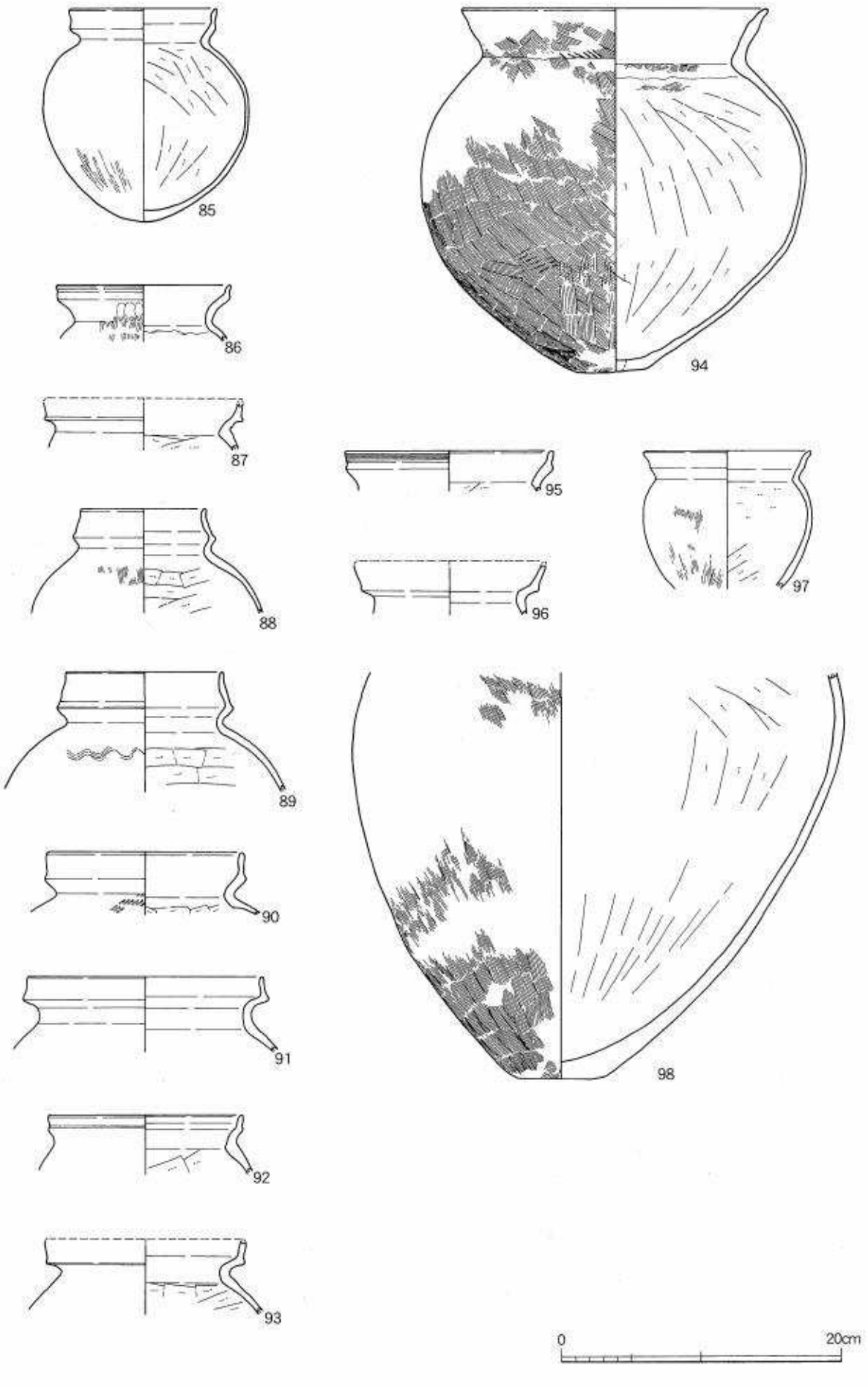
図版10
土器実測図（２）



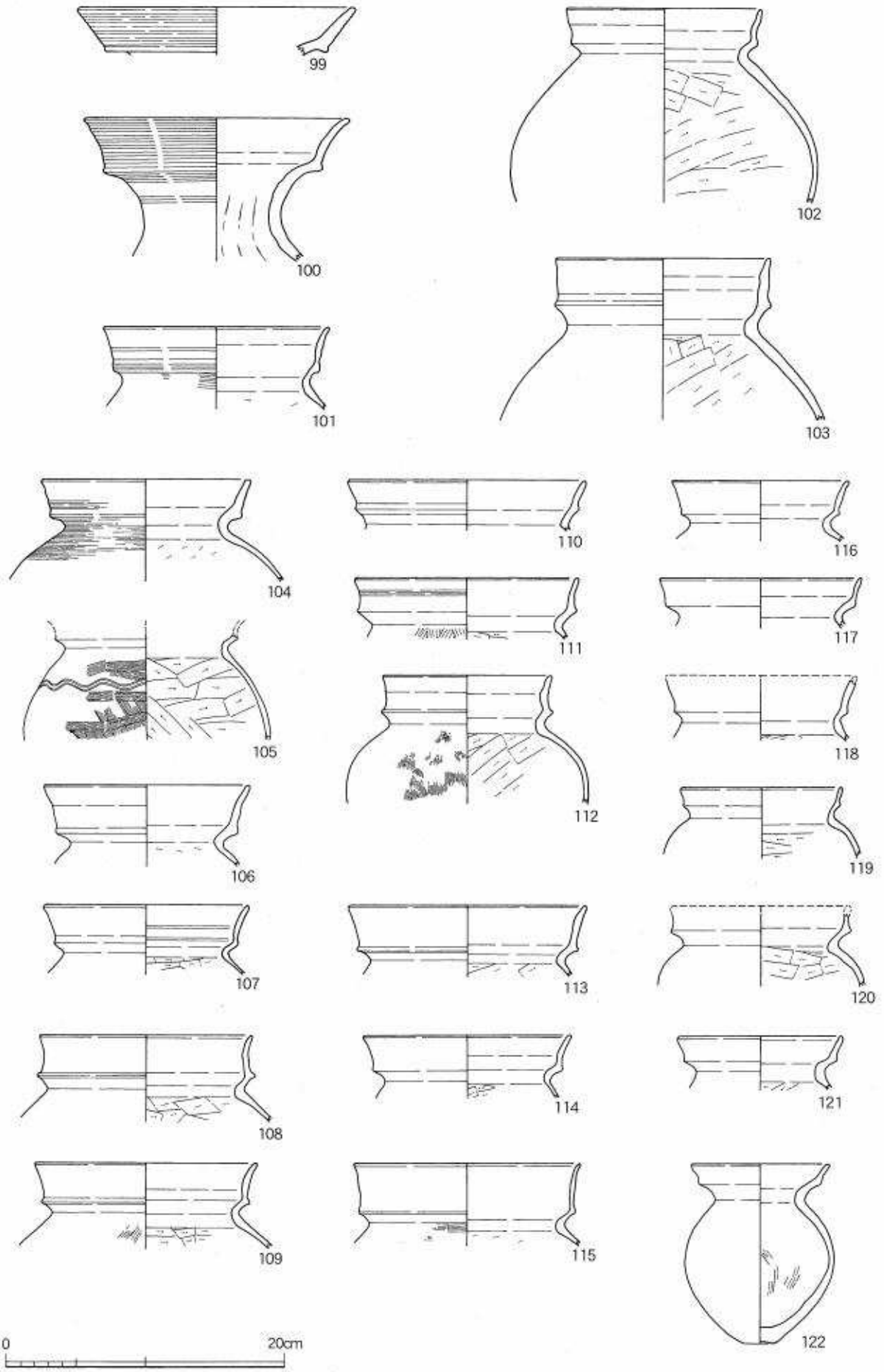

45
48
49
46
50
47
51
52
55
59
53
56
60
54
57
61
58
0
20cm

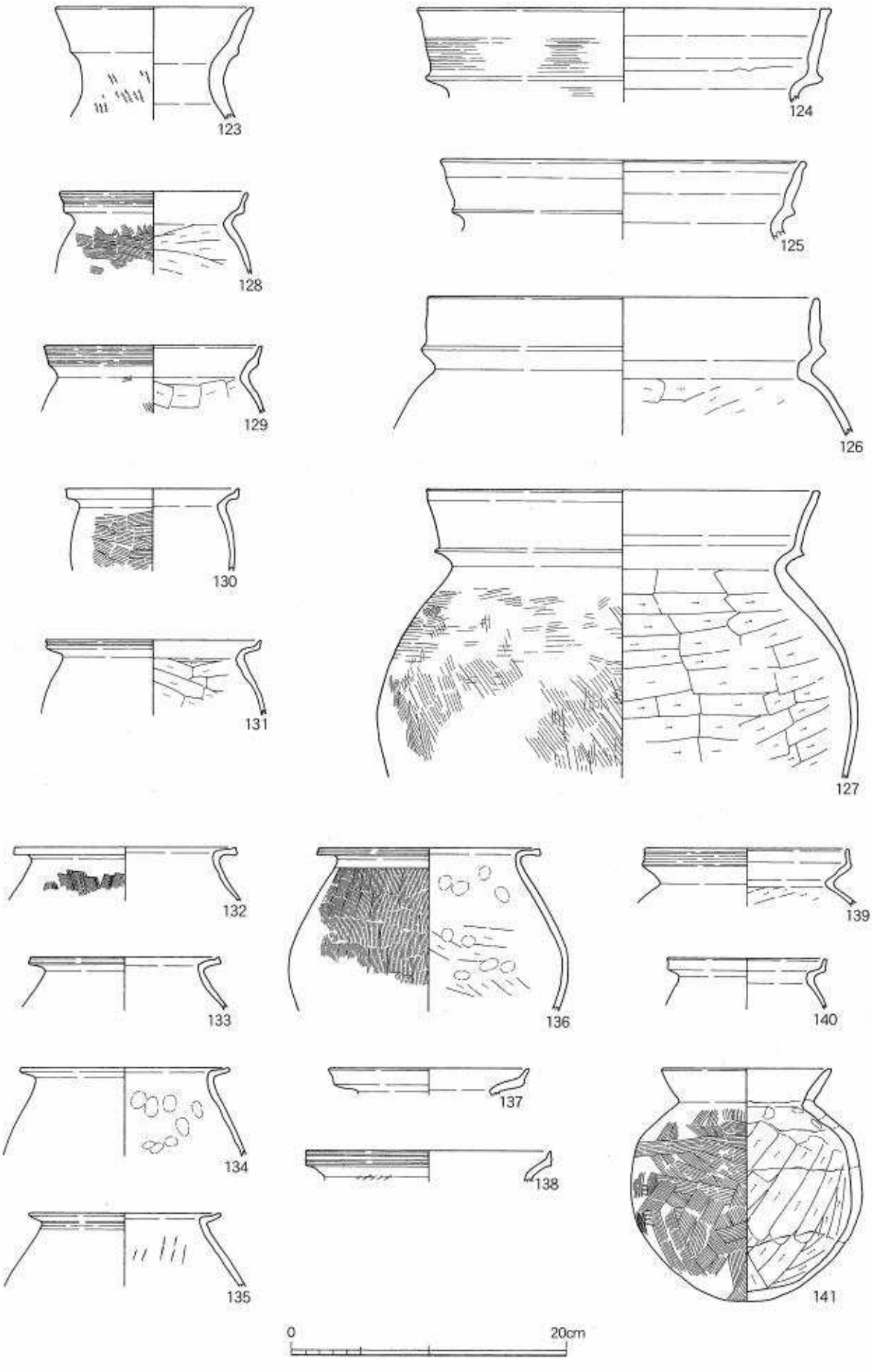
図版12
土器実測図（4）


62
65
63
66
67
64
68
69
75
76
81
70
71
77
82
72
78
83
73
79
74
80
84
0
20cm

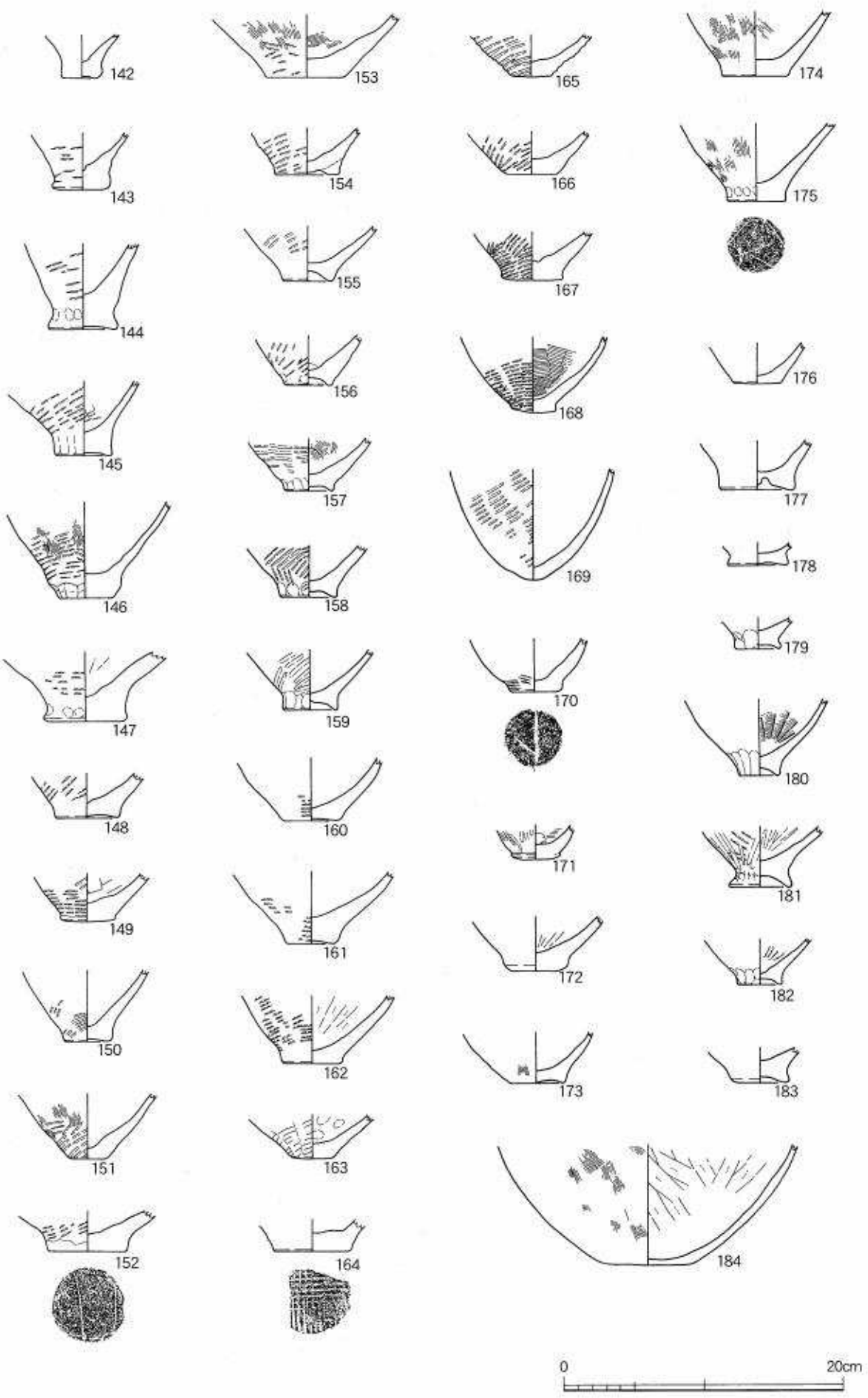

85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
0
20cm

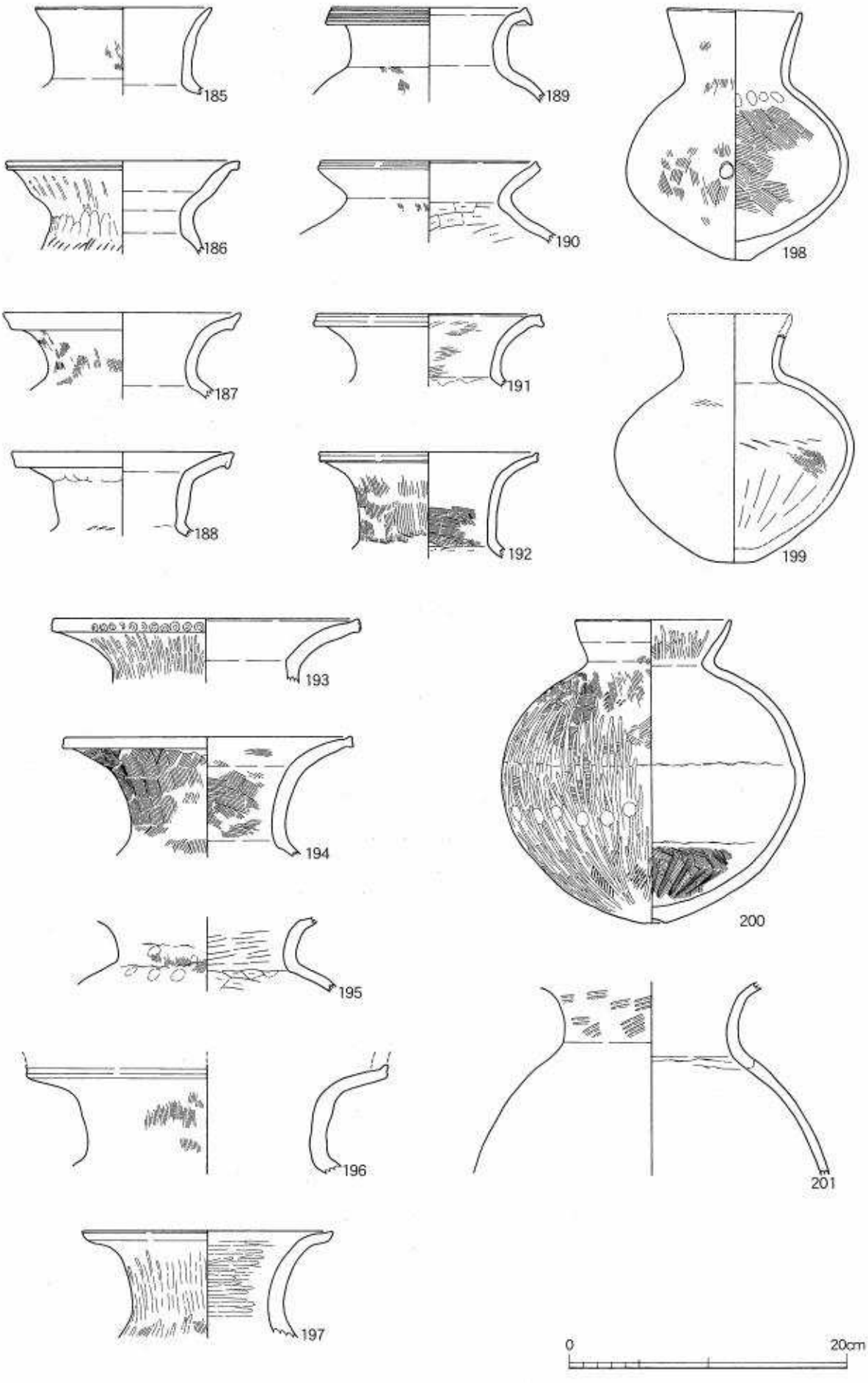
図版14
土器実測図（6）


99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
0
20cm

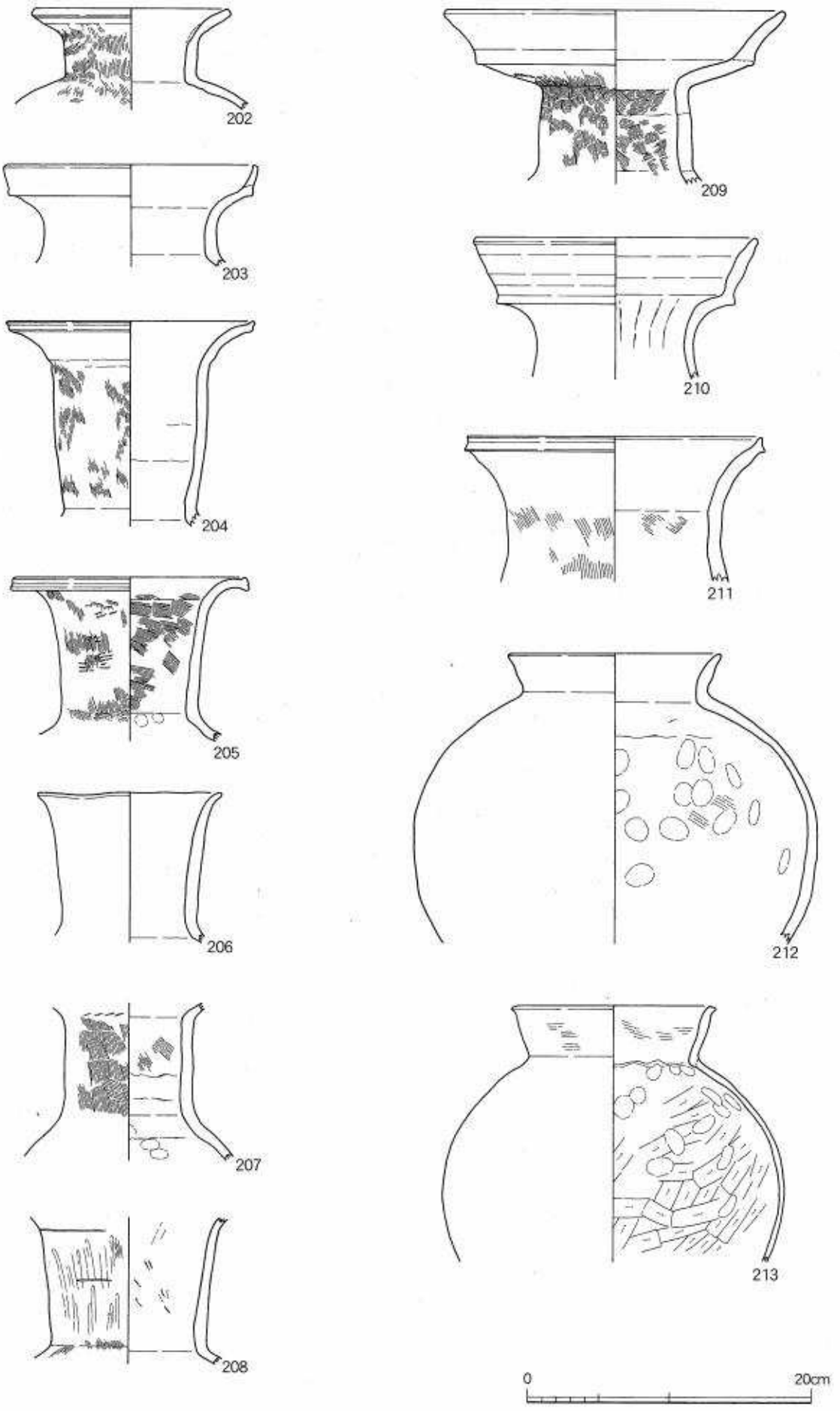

123
124
125
128
129
126
130
131
127
132
133
136
139
140
134
137
138
135
141
0
20cm

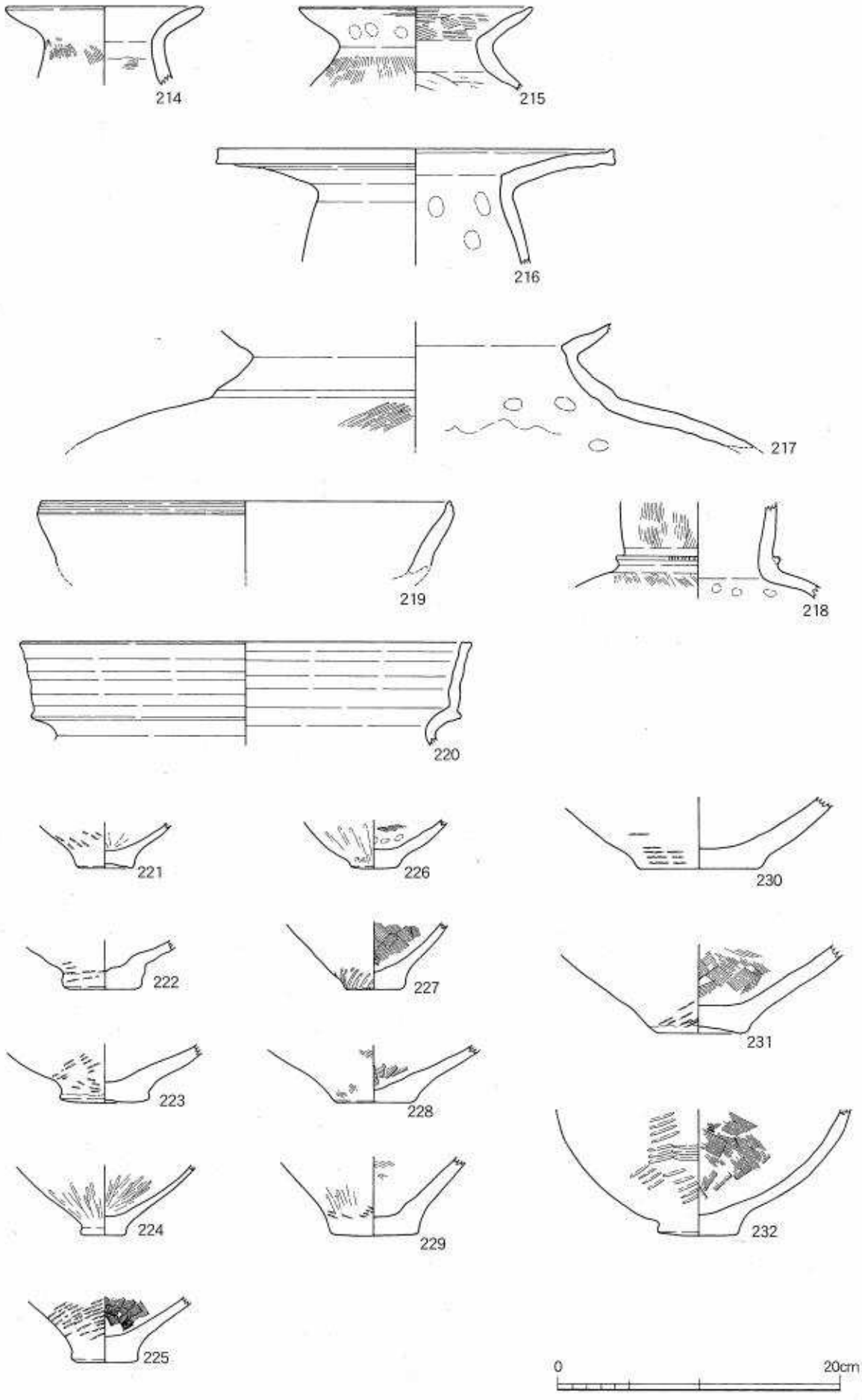
図版16
土器実測図（8）


142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
0
20cm

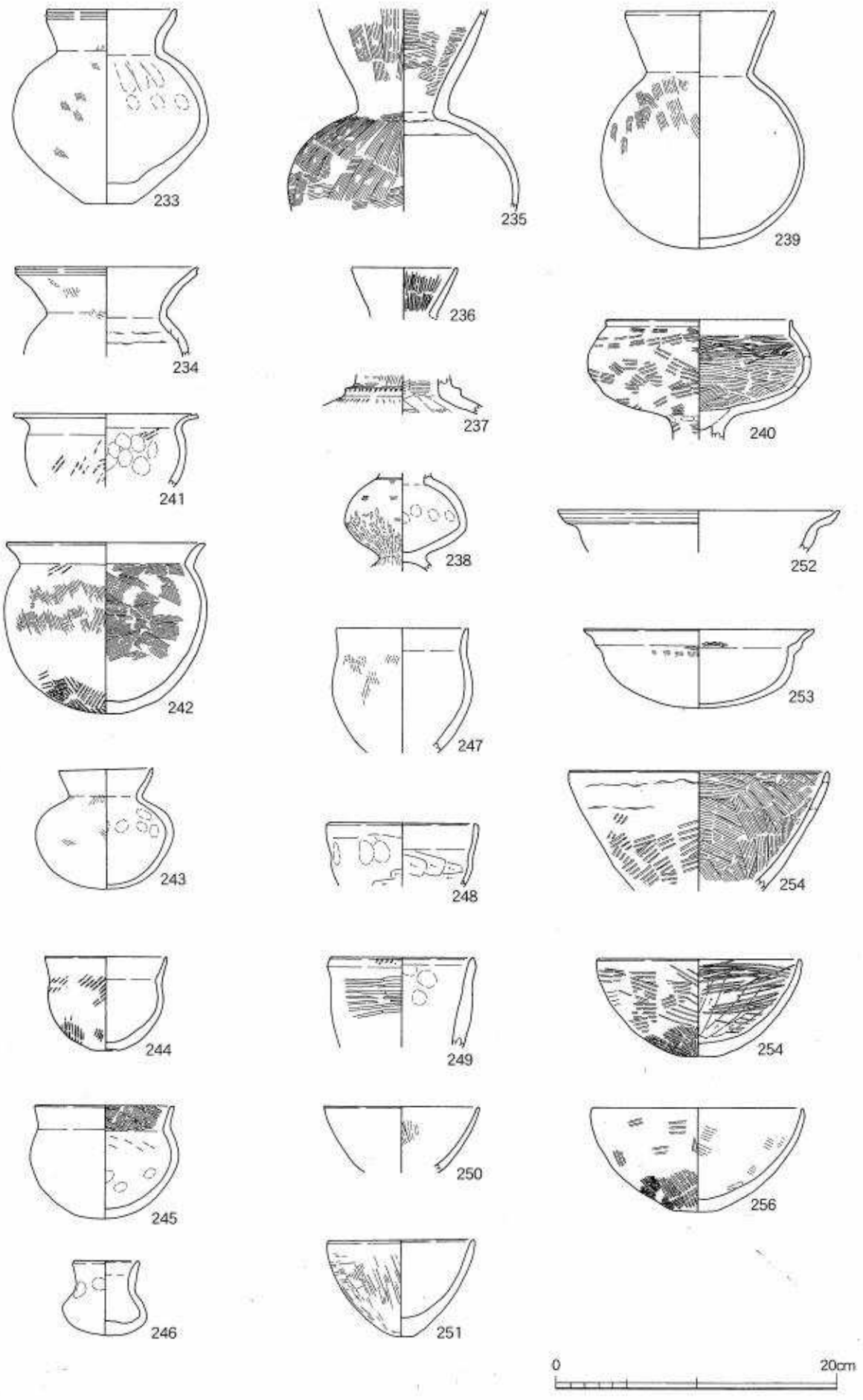

185
189
198
186
190
187
191
188
192
199
193
194
200
195
196
201
197
0
20cm

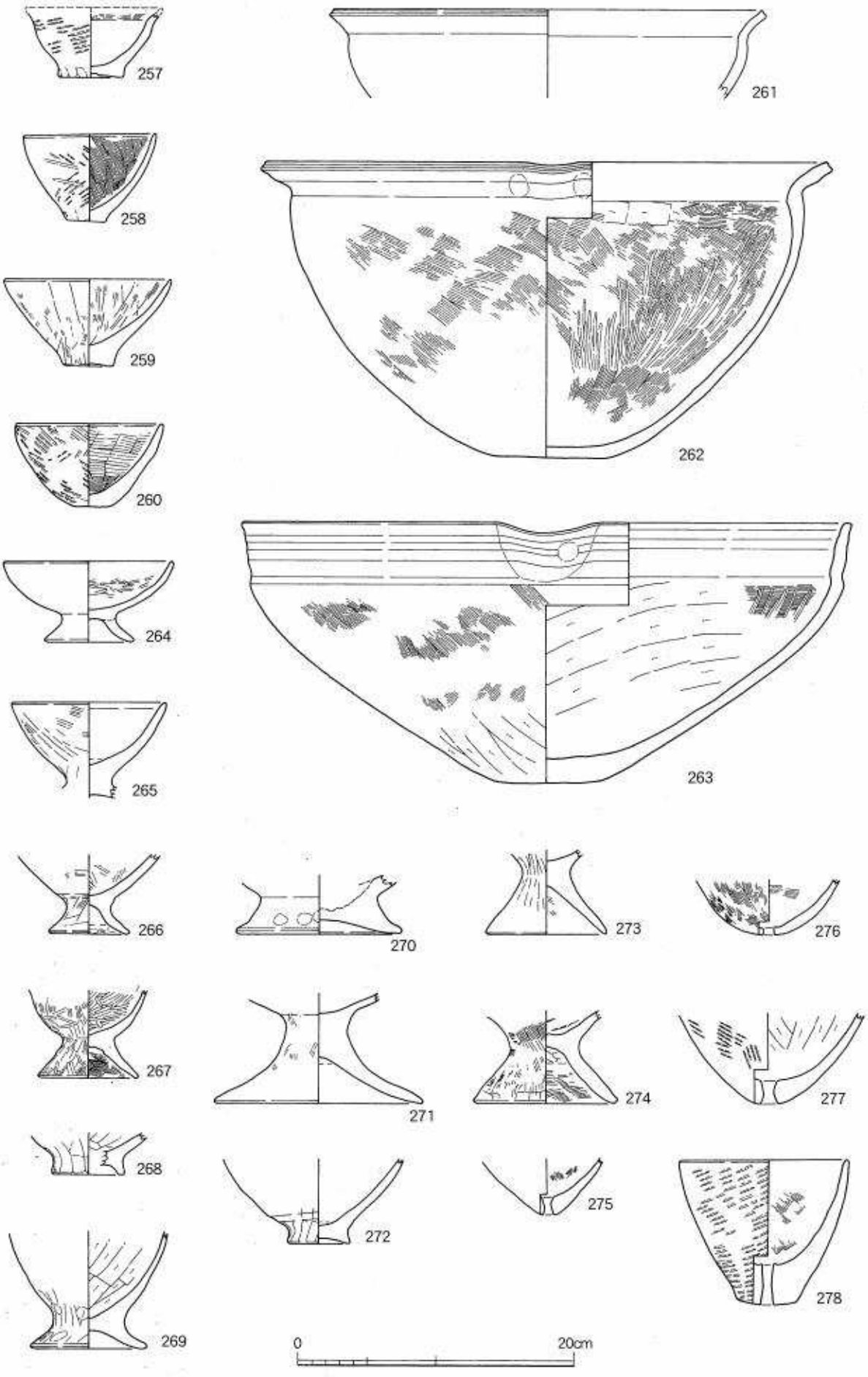
図版18
土器実測図（10）



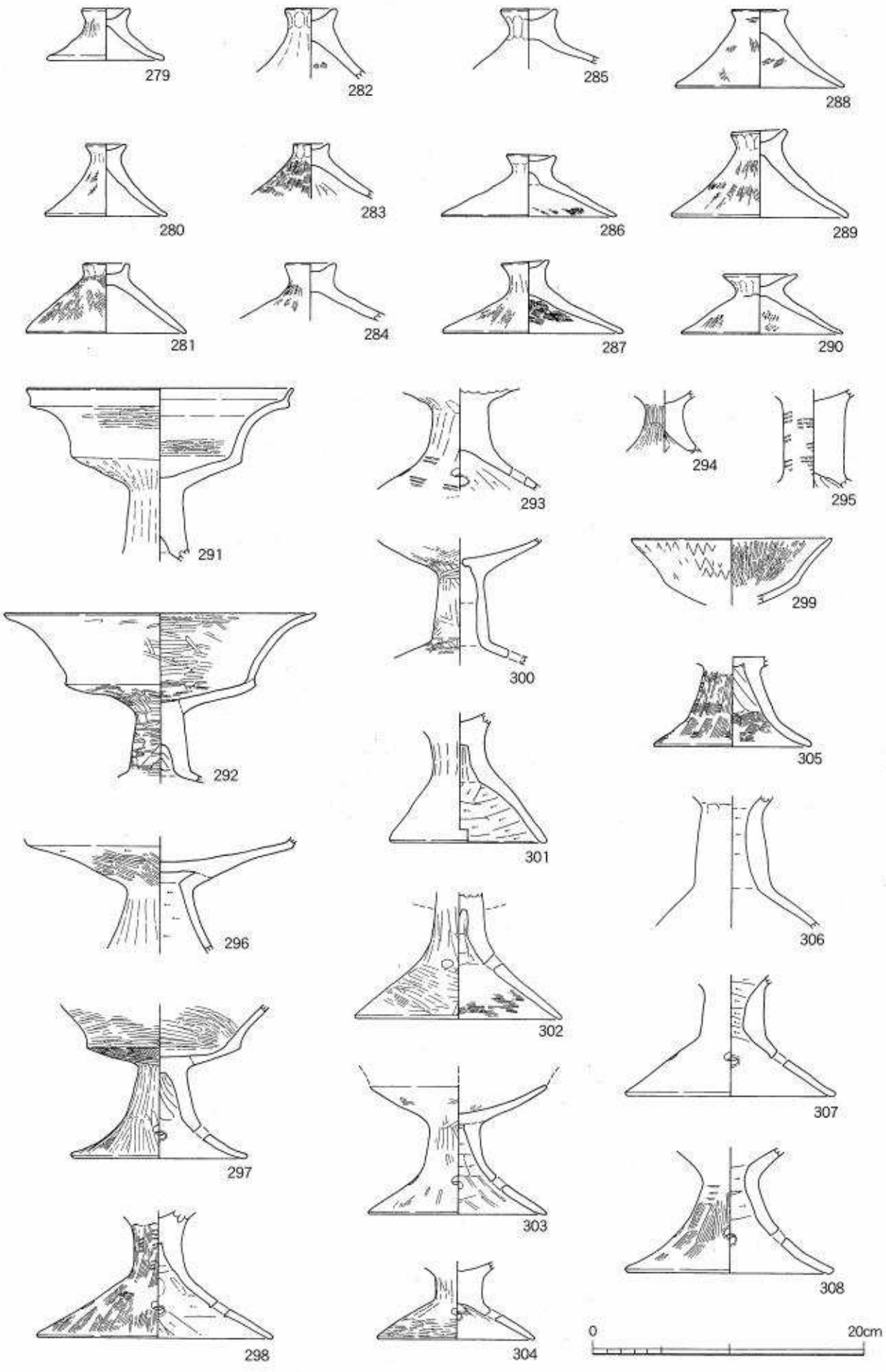

214
215
216
217
219
218
220
221
226
230
222
227
231
223
228
232
224
229
225
0
20cm

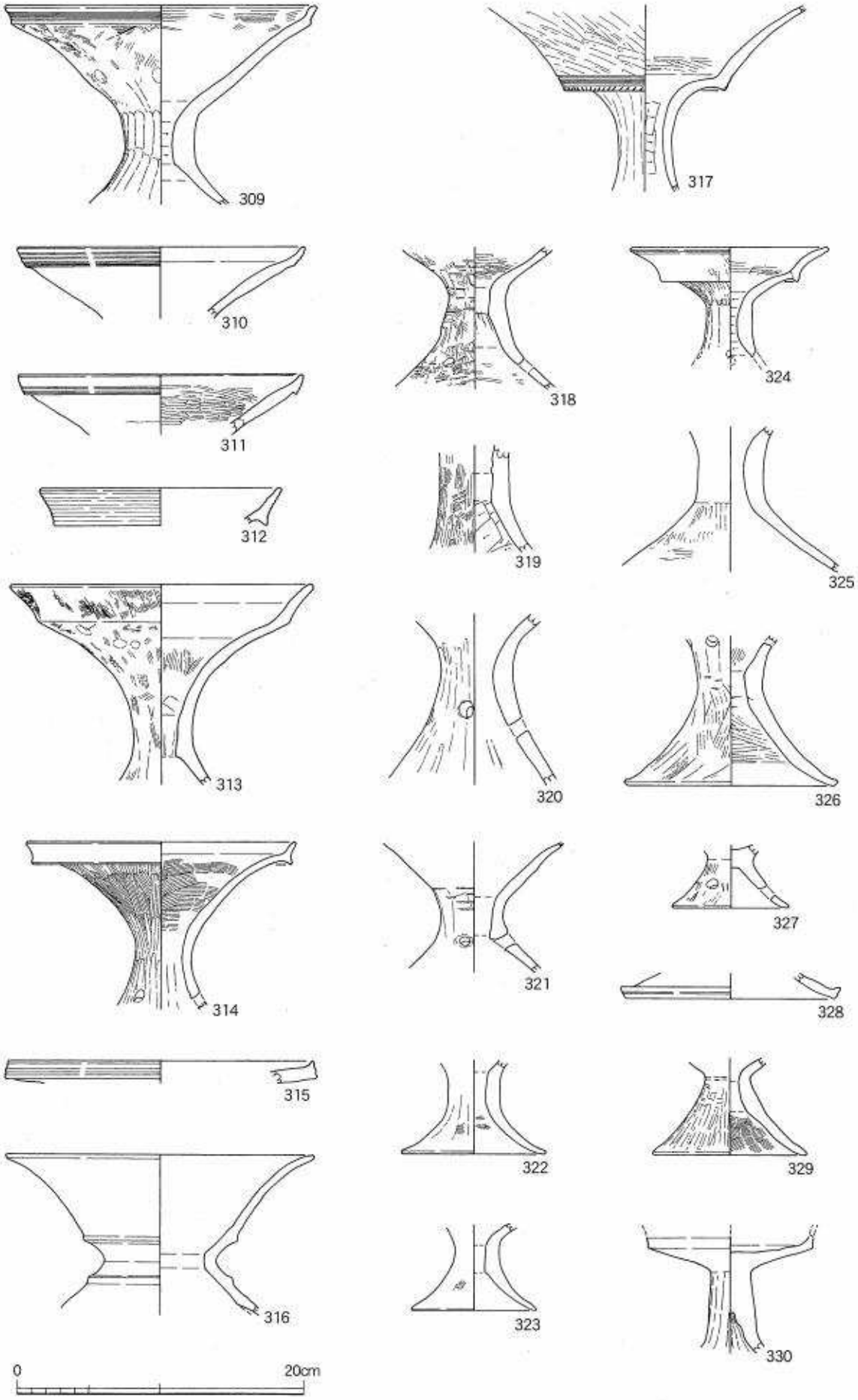
図版20
土器実測図（12）



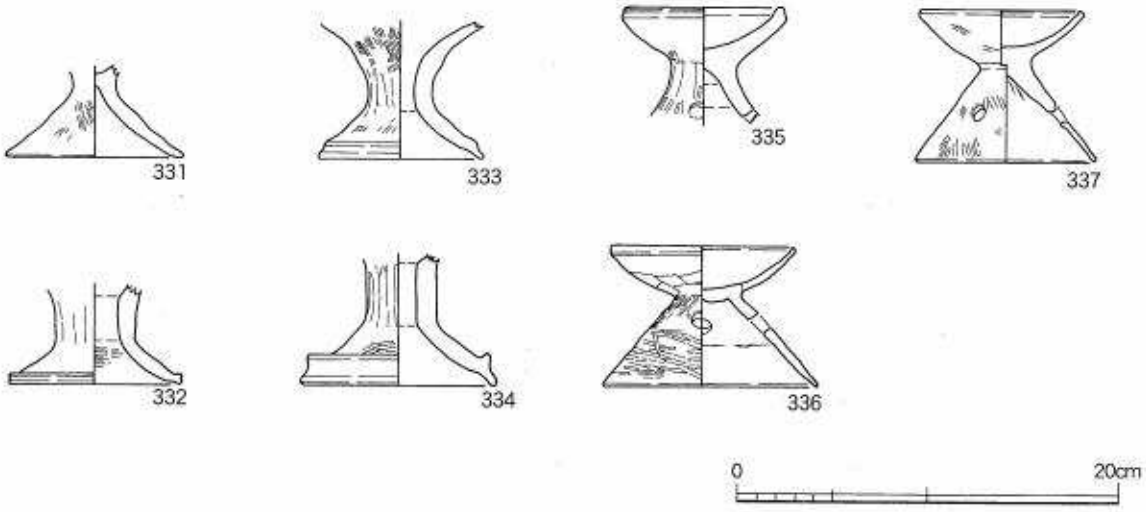

257
258
259
260
264
265
266
267
268
269
261
262
263
270
271
272
273
274
275
276
277
278
0
20cm

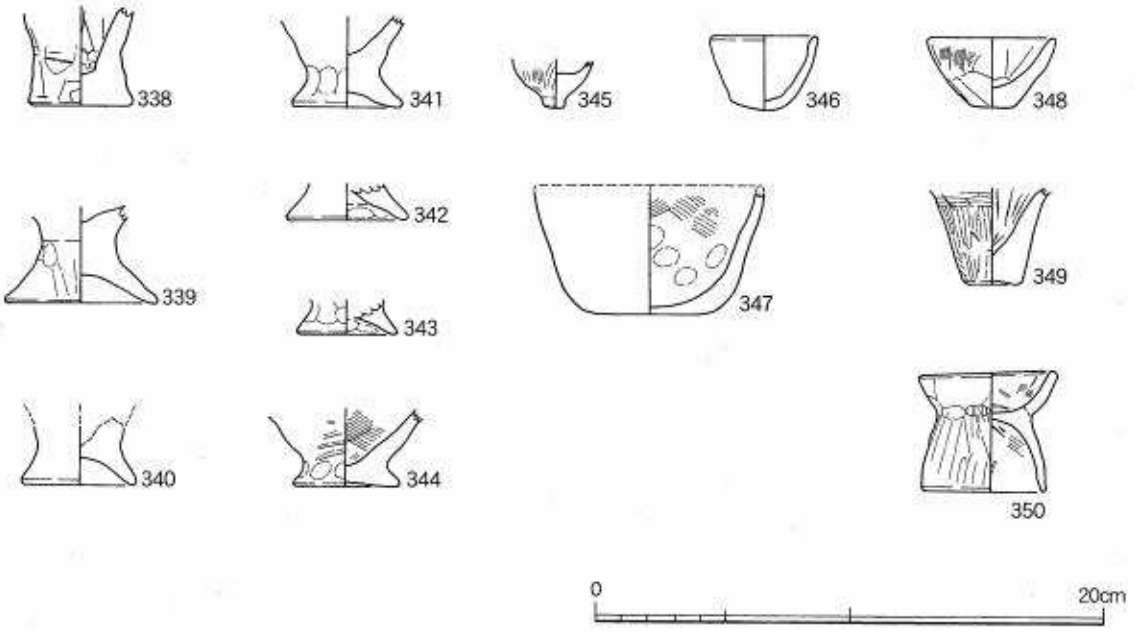
図版22
土器実測図（14）

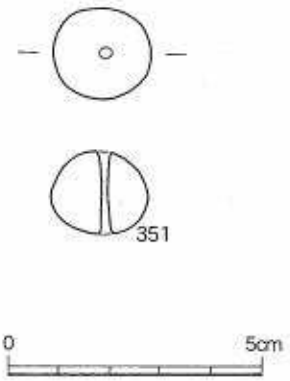



309
317
310
318
324
311
319
325
312
313
320
326
314
321
327
328
315
322
329
316
323
330
0
20cm

図版24
土器実測図（16）







353
354

355
356
357

358
359

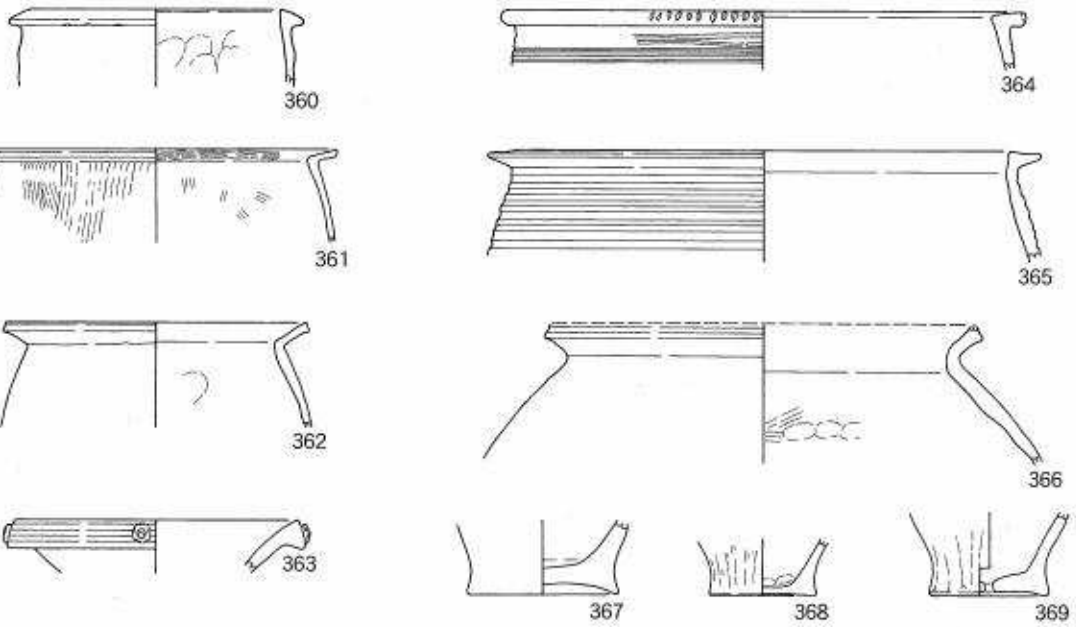
152
164
170

175
229
258

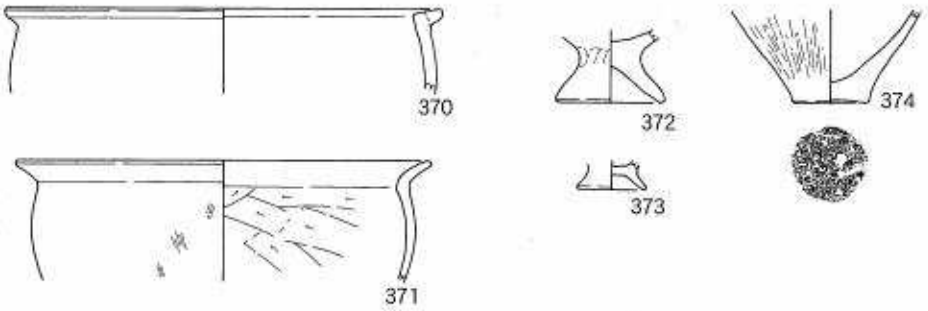
0
20cm

図版26
土器実測図（18）

弥生土器

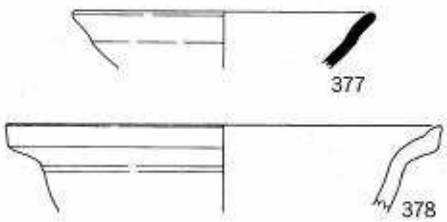


SD07

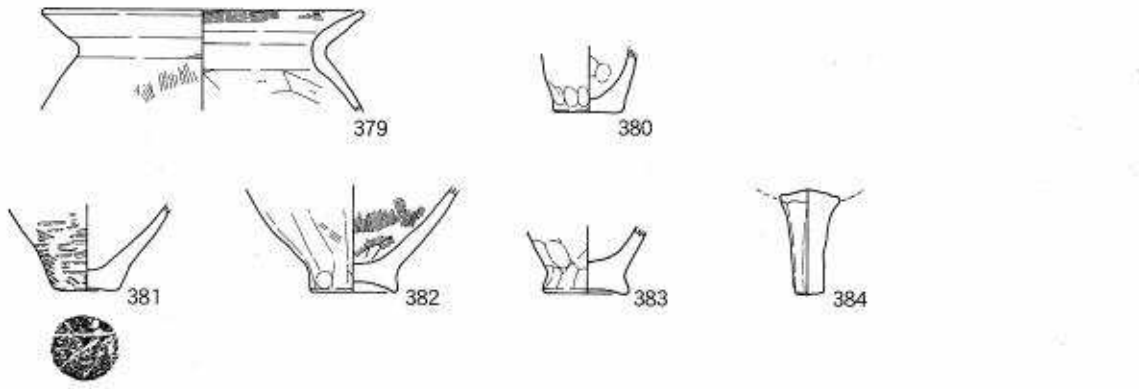


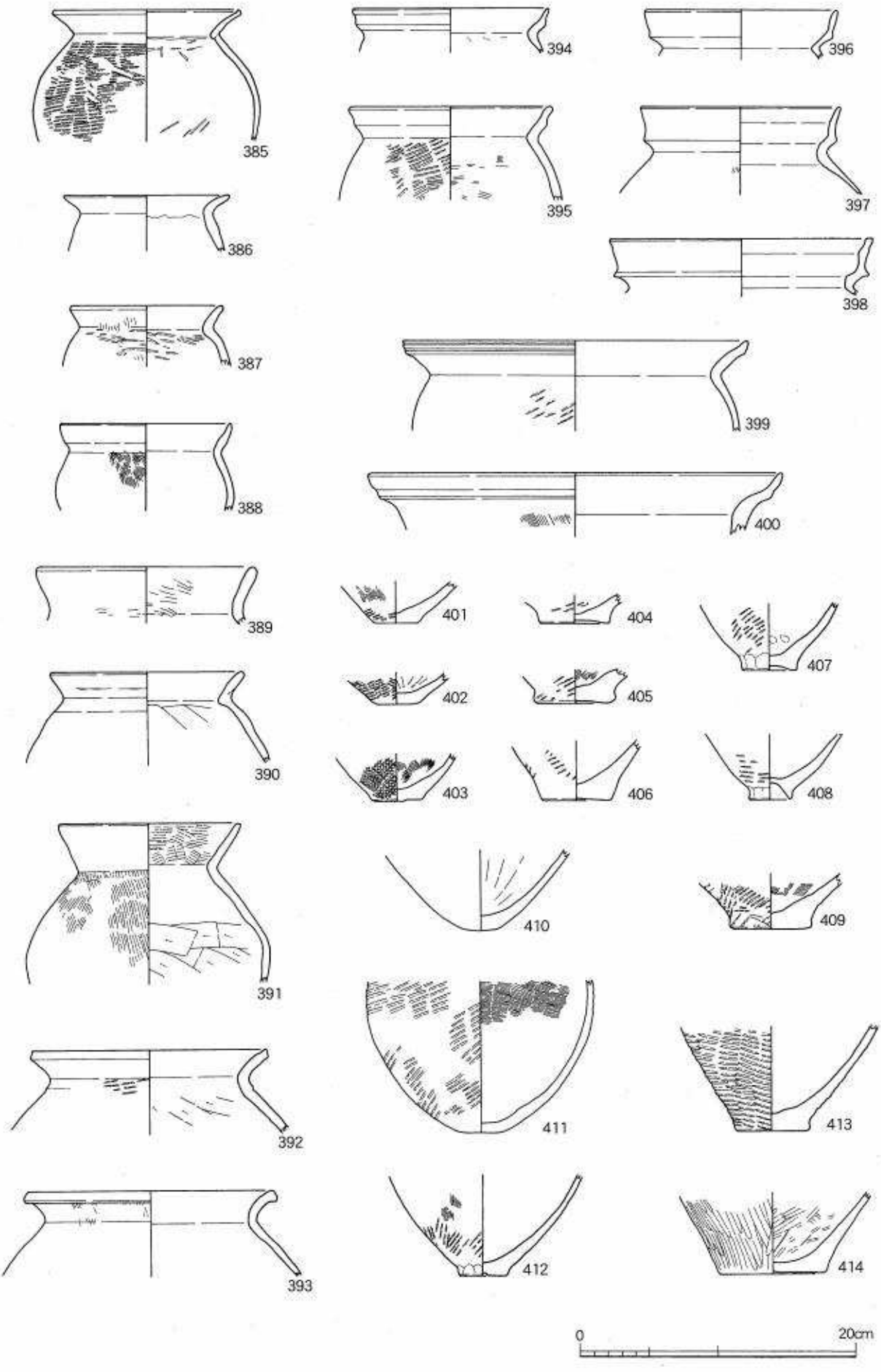
SX03

撹乱

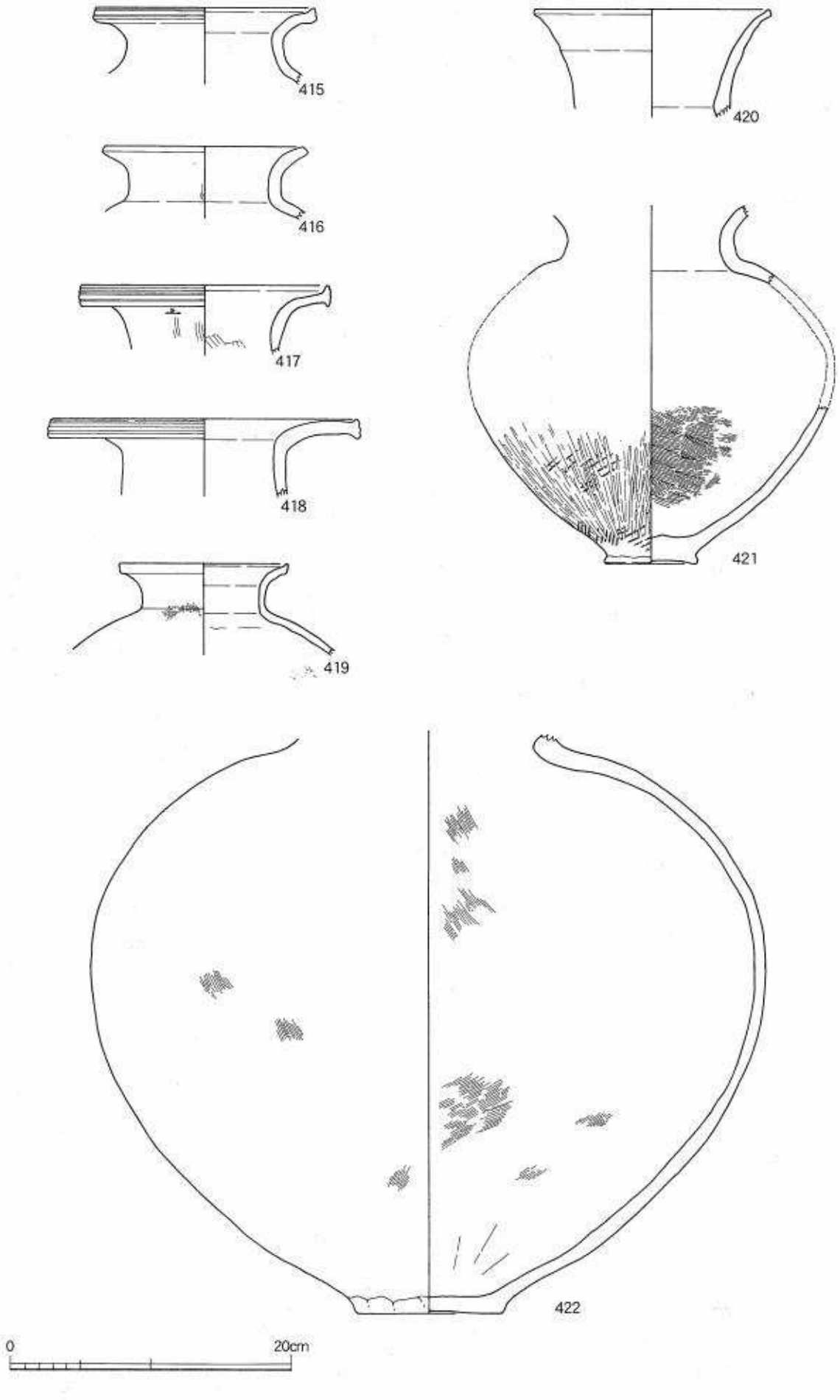


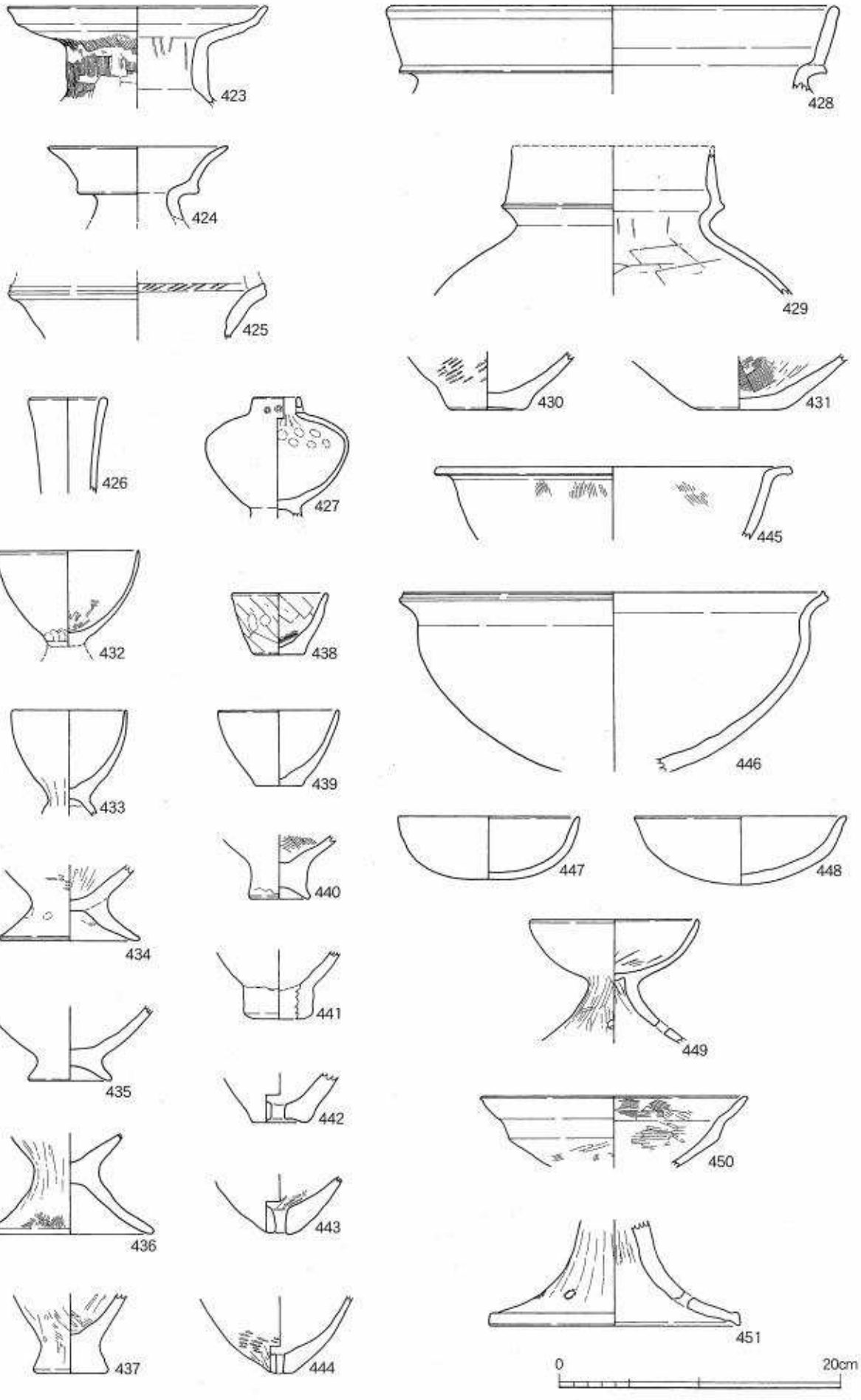
確認調査



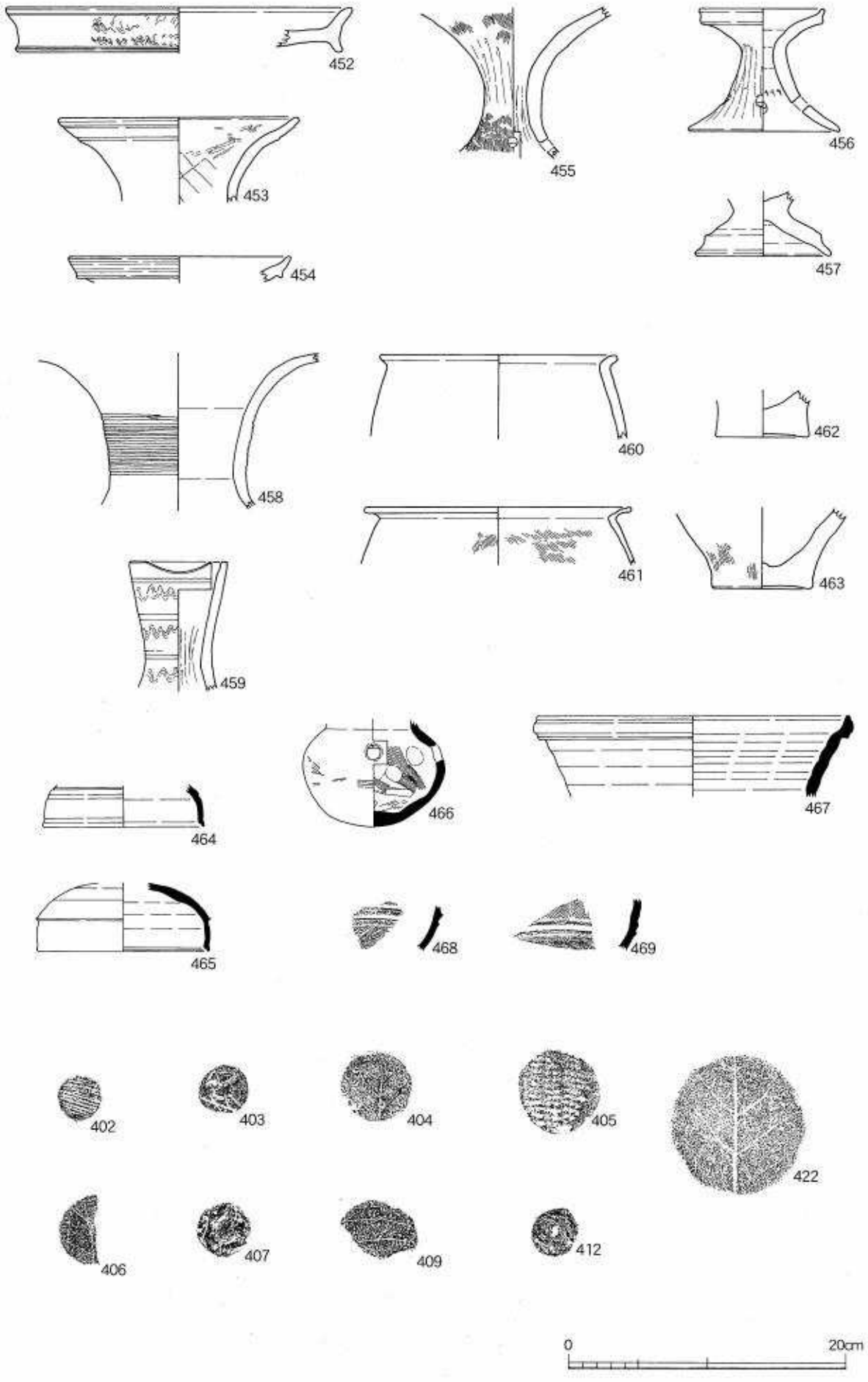

385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
0
20cm

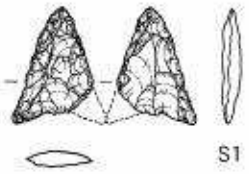
図版28
土器実測図（20）

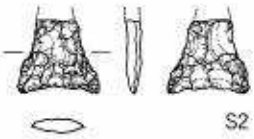


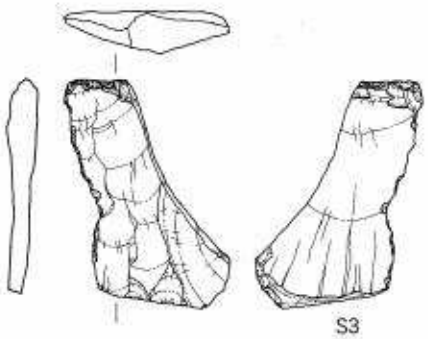

423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
438
433
439
440
434
441
435
442
436
443
437
444
445
446
447
448
449
450
451
0
20cm

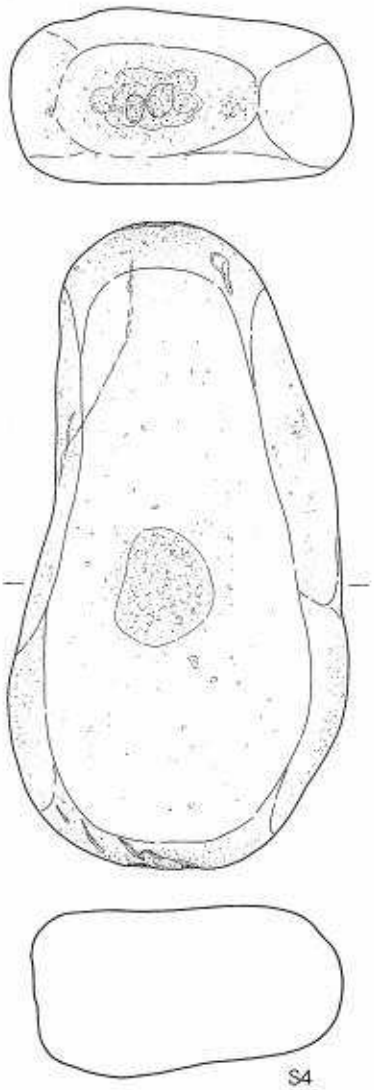
図版30
土器実測図（22）




S1


S2

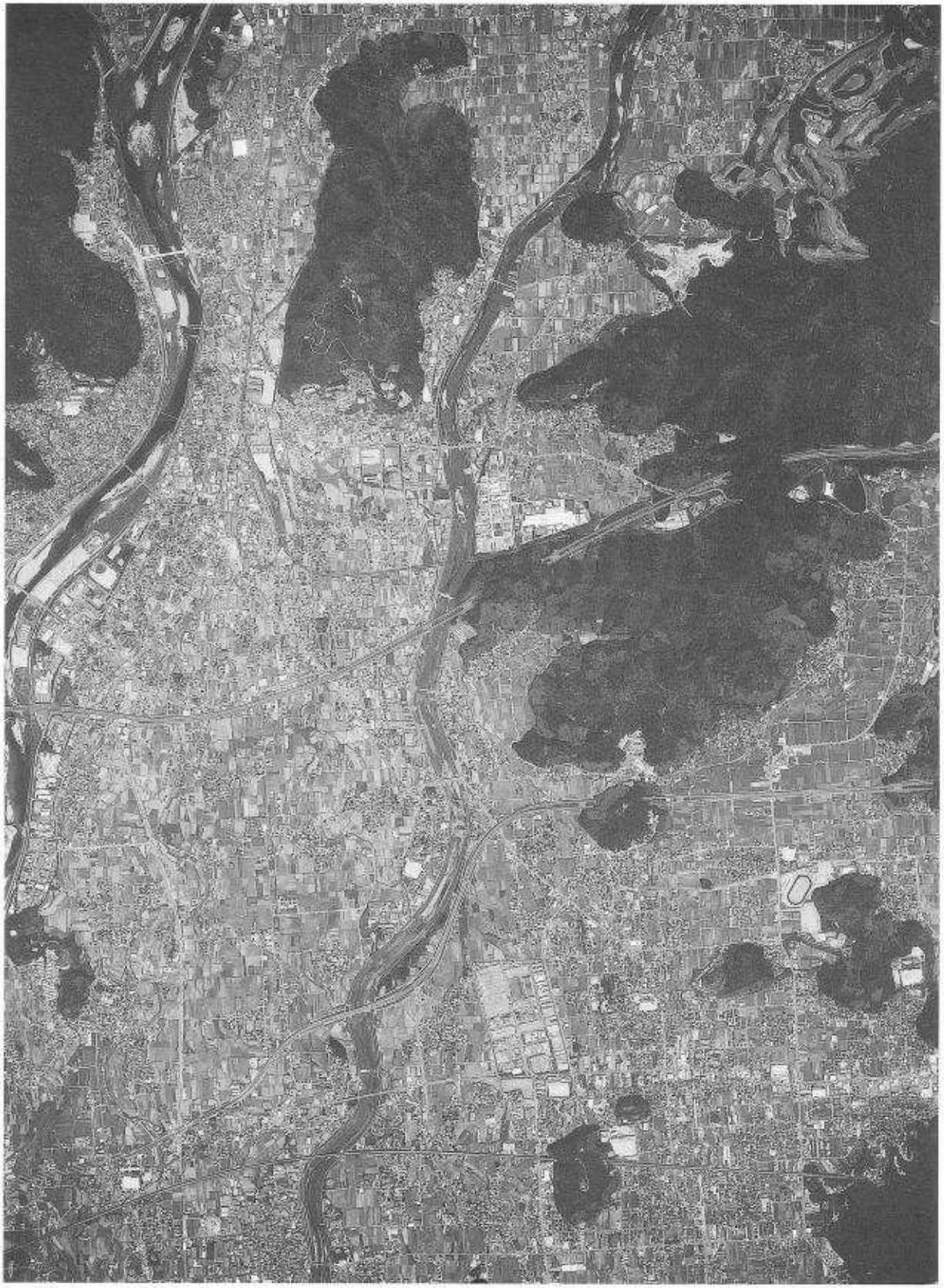

S3


S4

0
5cm

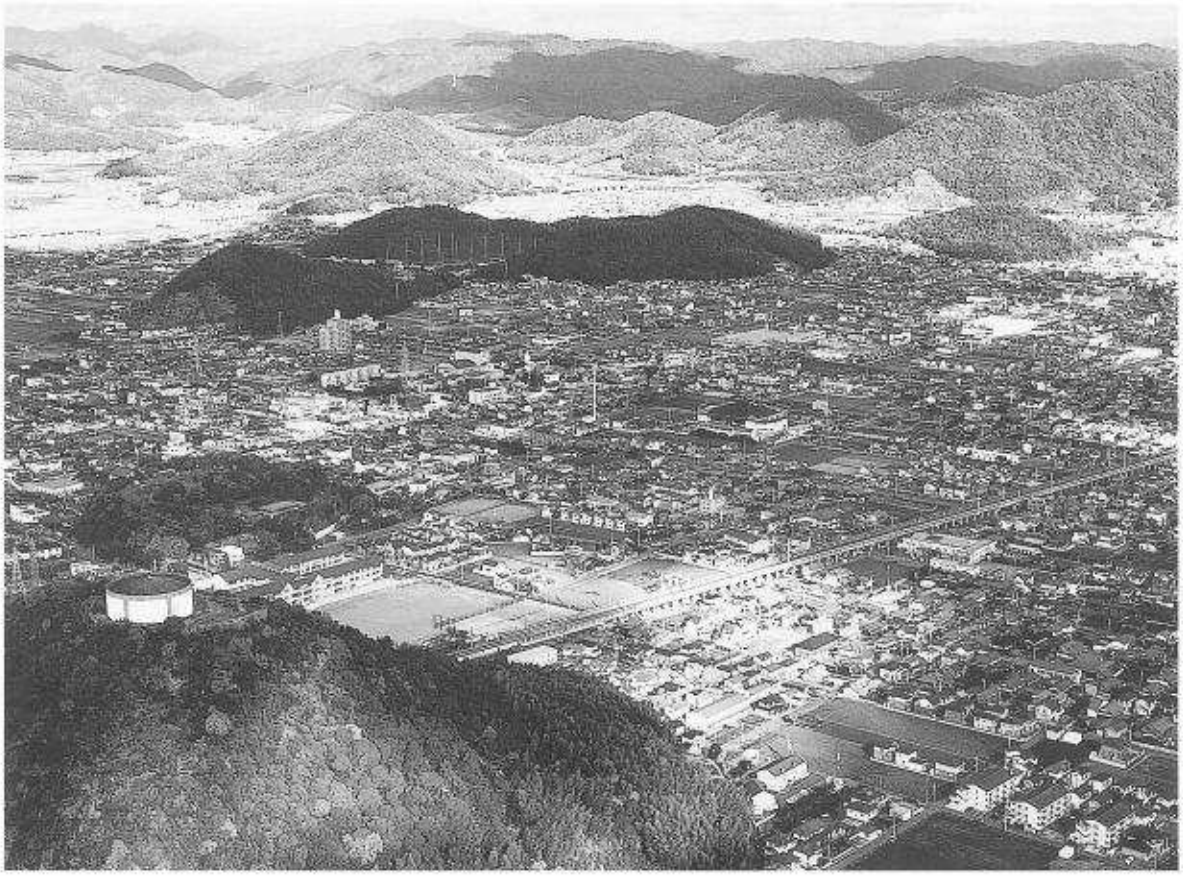
0
20cm

写真図版



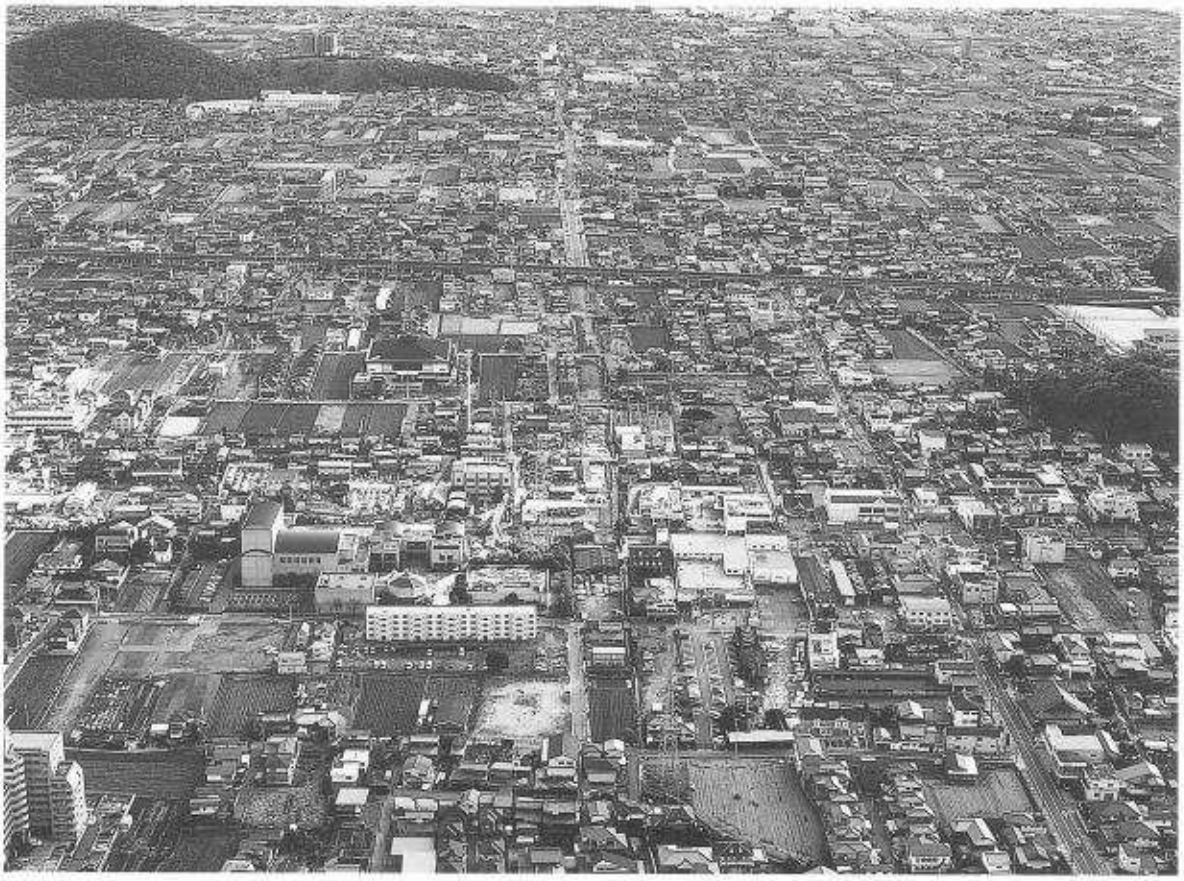
空中写真（国土地理院撮影）

鵤石田遺跡空中写真（平成13年度調査地区）



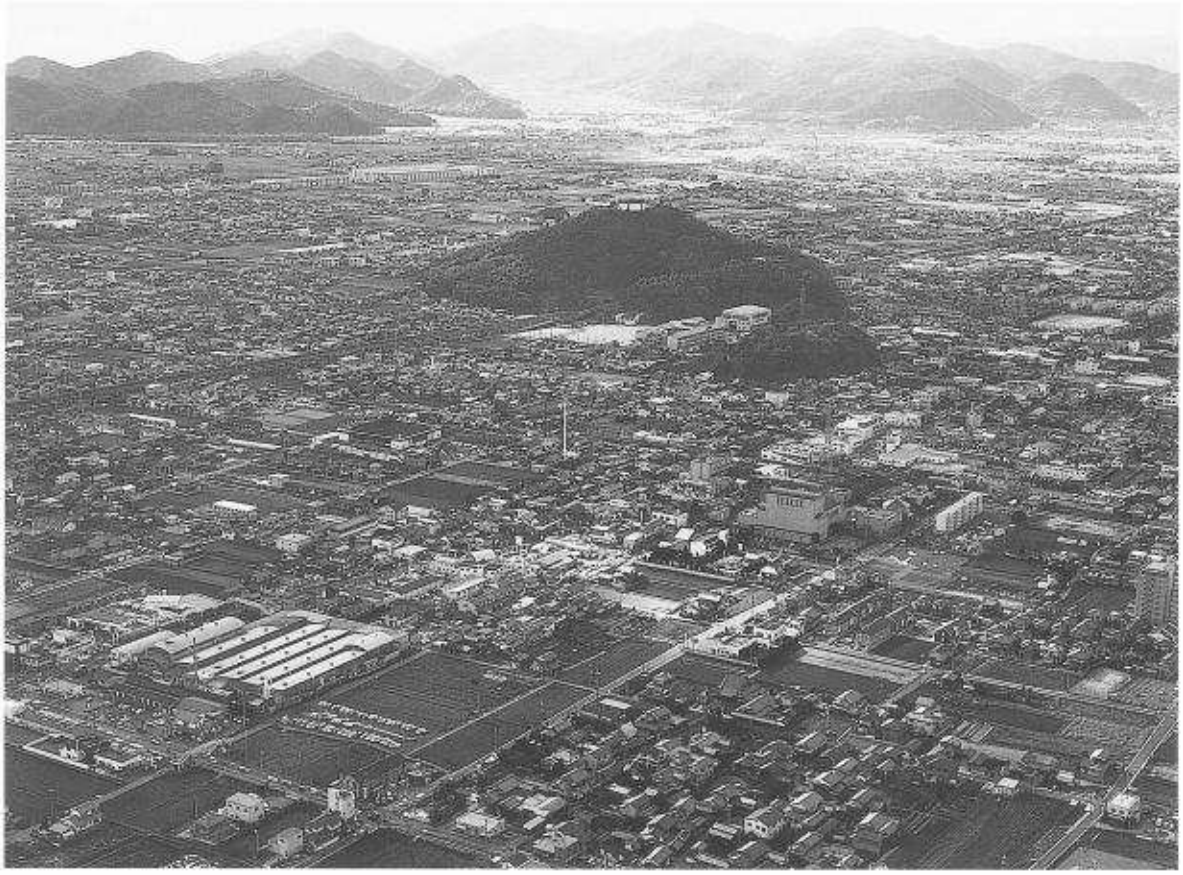
遺跡遠景（南西から）

遺跡遠景（北東から）



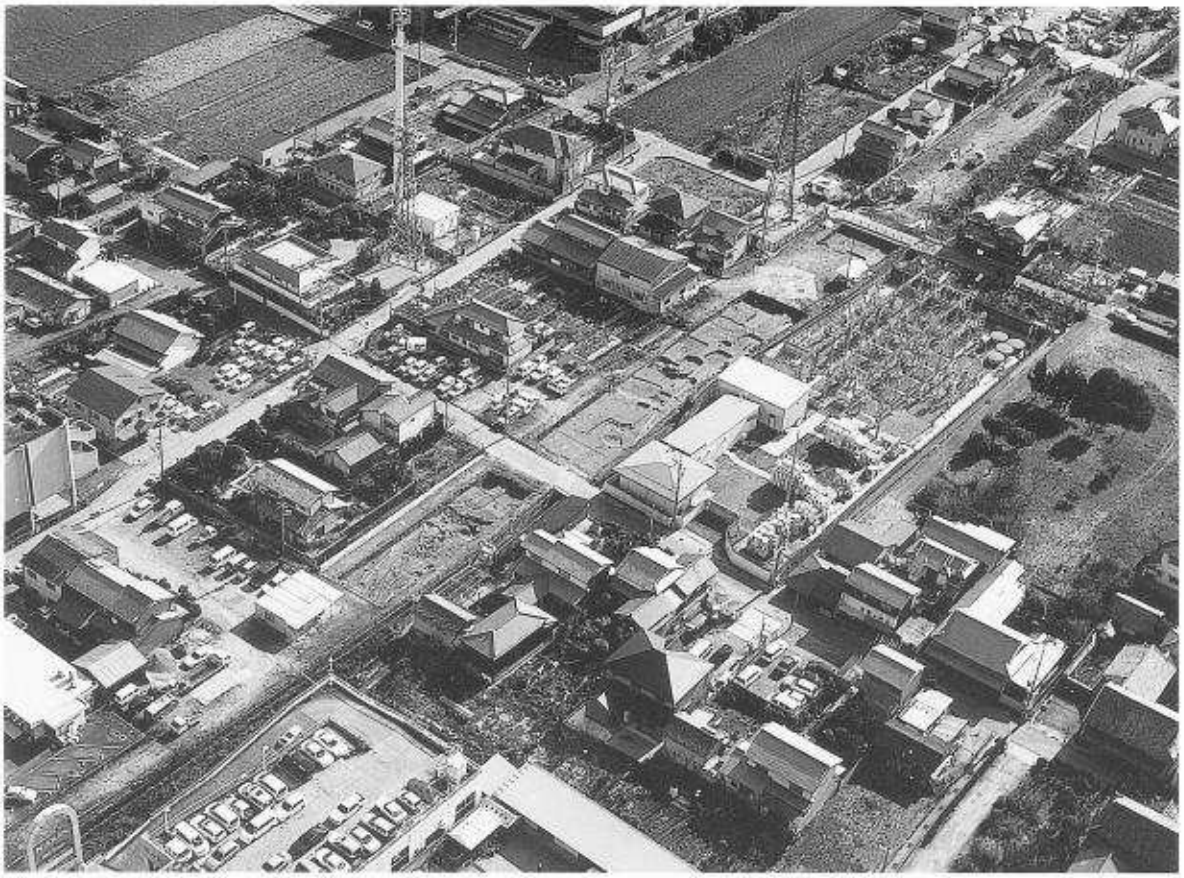
遺跡遠景（北から）

遺跡遠景（南から）

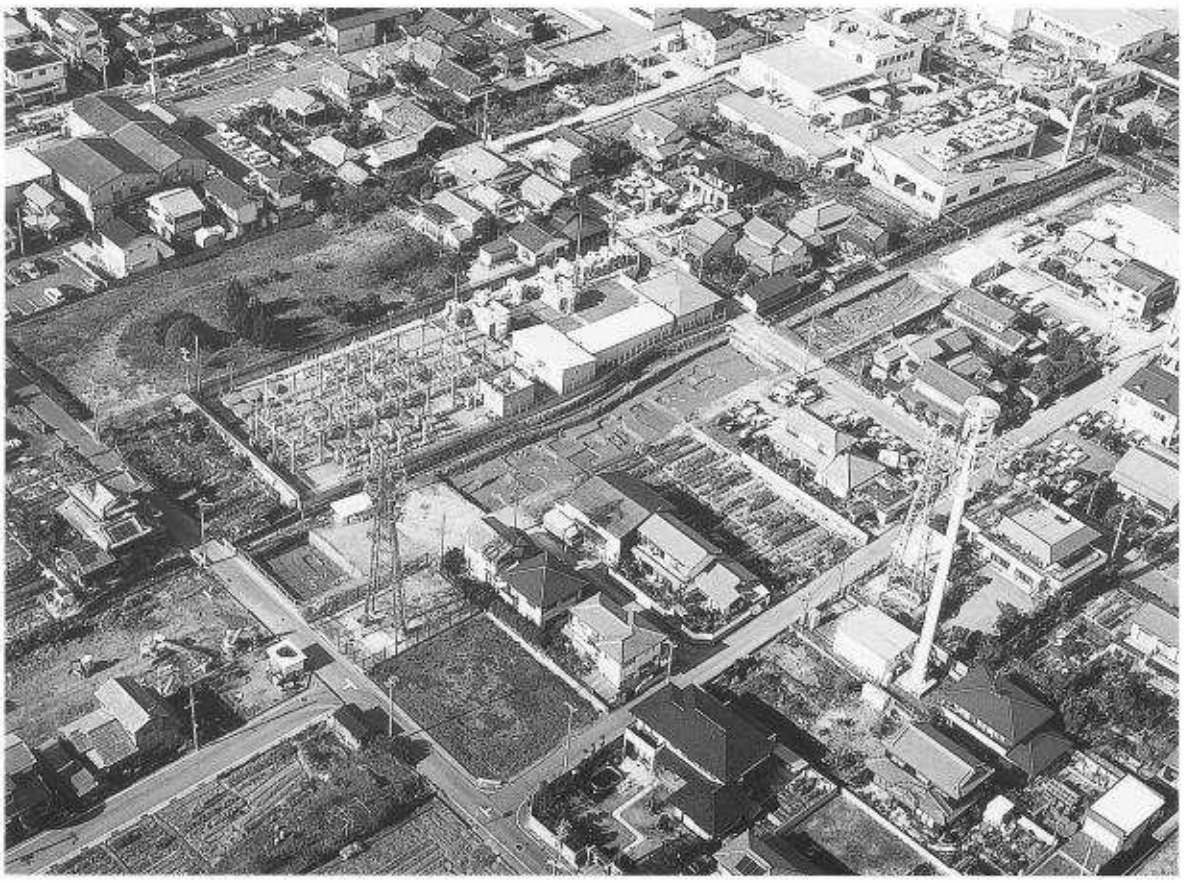


遺跡遠景（南西から）

遺跡遠景（北西から）



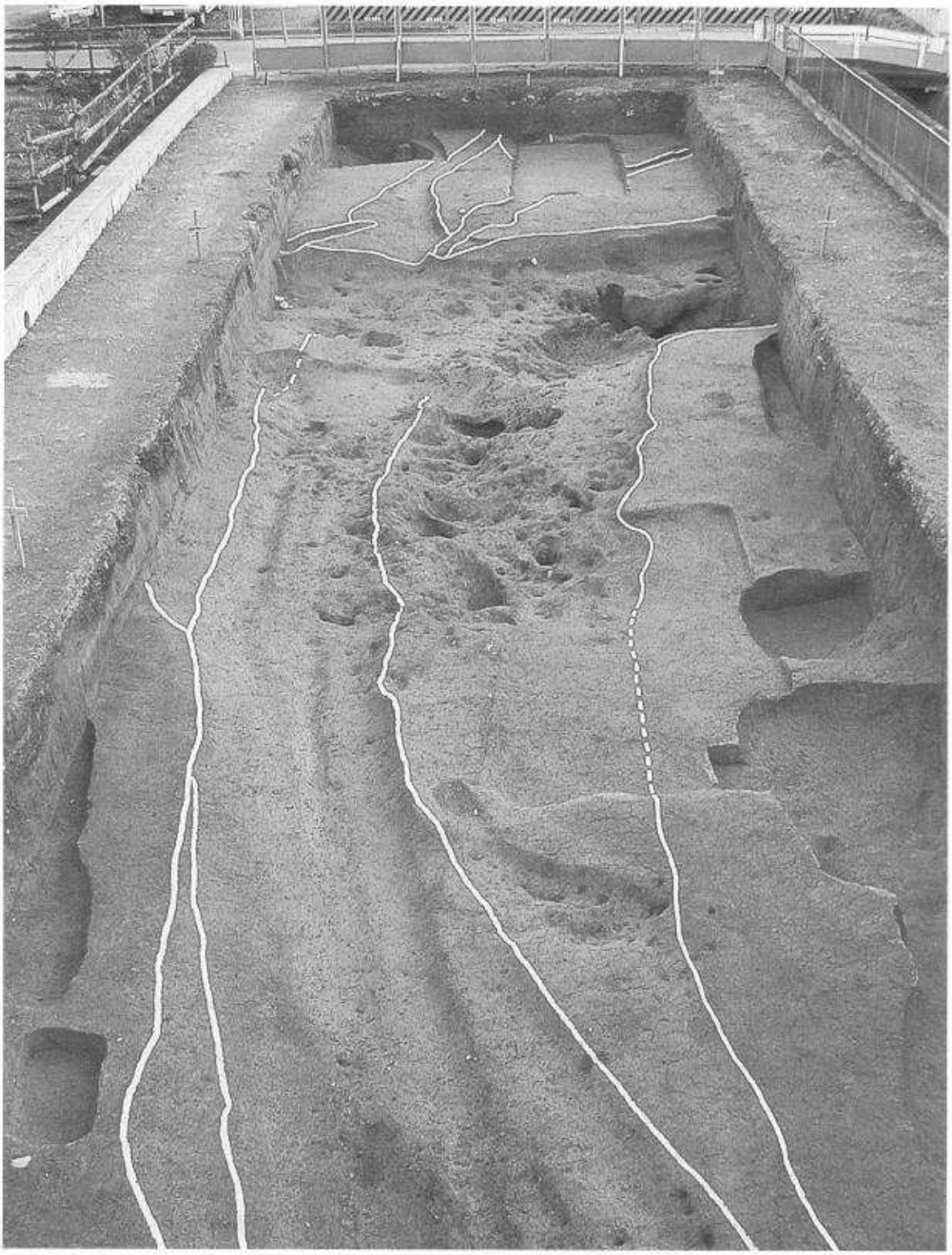
遺跡空中写真（北西上空から）



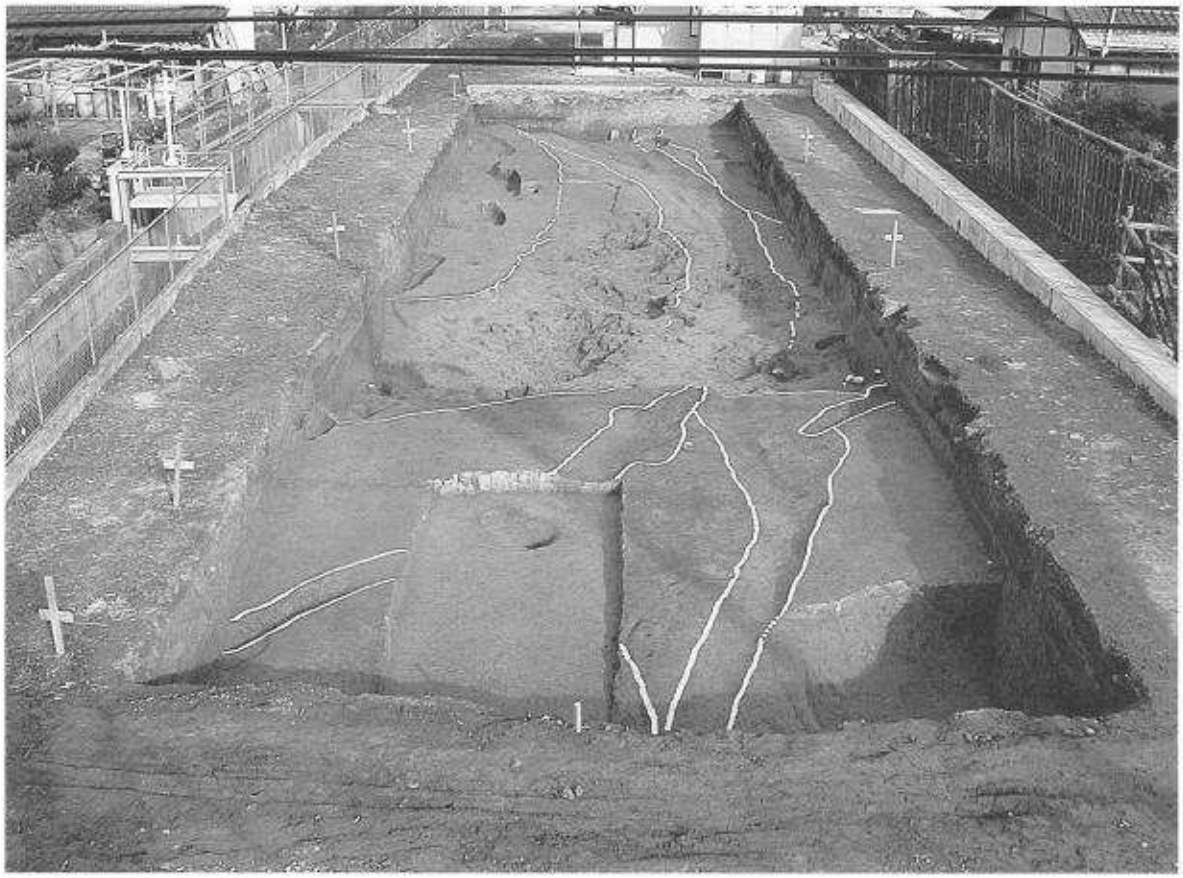
遺跡空中写真（南東上空から）

1区全景（南、東南遺跡から）

1区全景（北から）

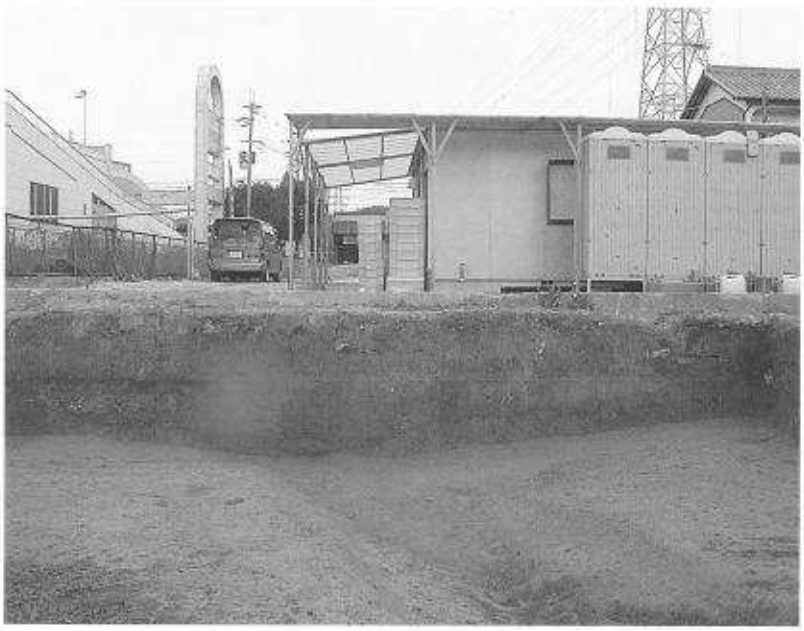


1区全景（北から）



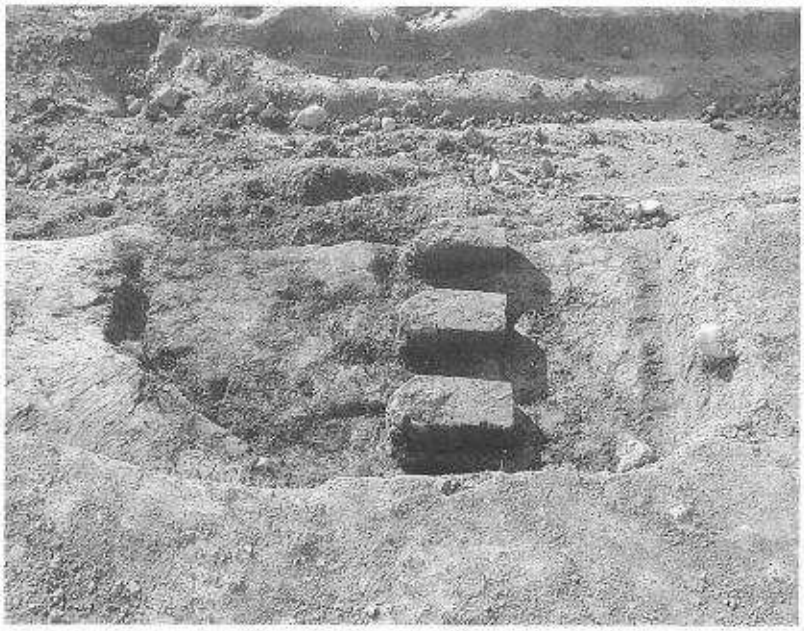
1 区全景（南から）

1 区全景（北から）

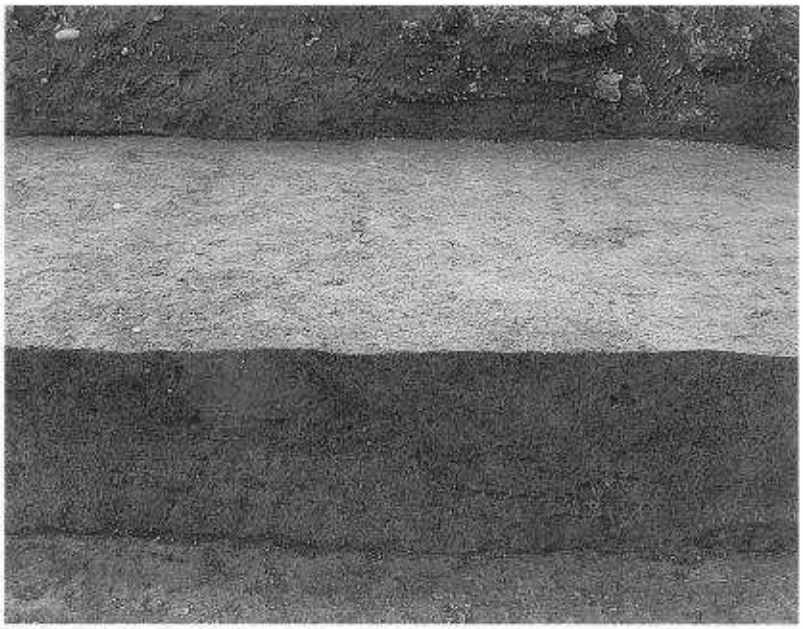


調査区北壁

瓦窯跡（南から）

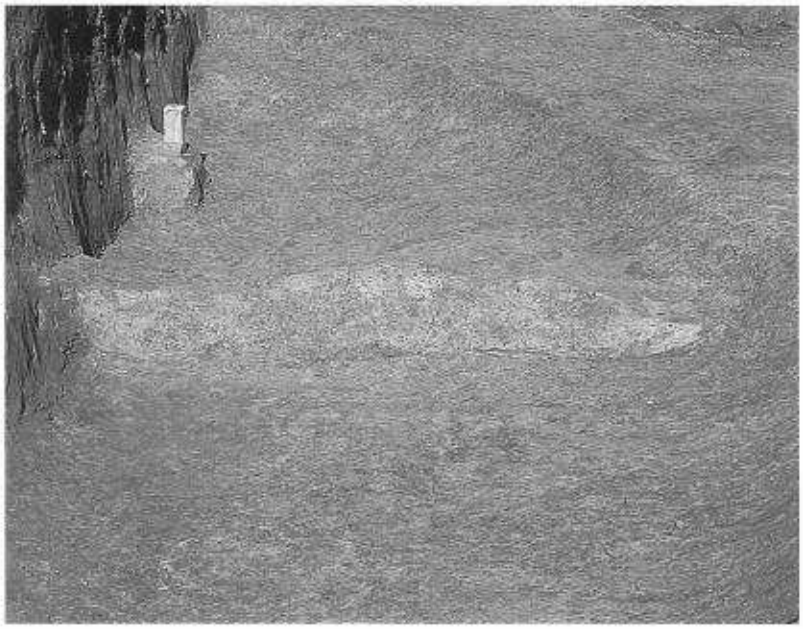


瓦窯跡（東から）



SK02断面（東から）

SK03（南から）



SX03アゼ（南から）

SD06　1-2区間アゼ（南から）

SD06　2-3区間アゼ（南から）

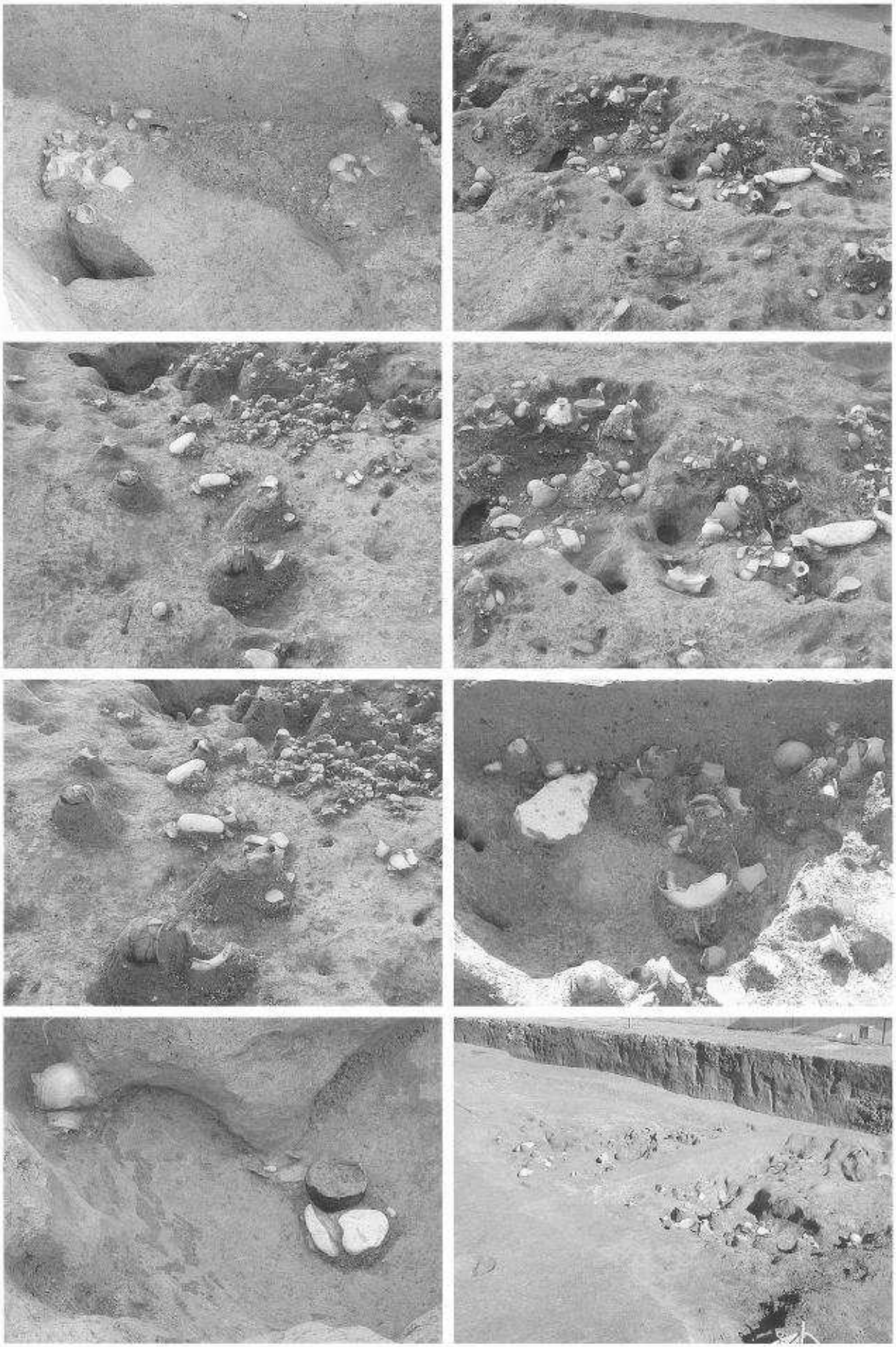
SD06西壁

SD06全景（南から）

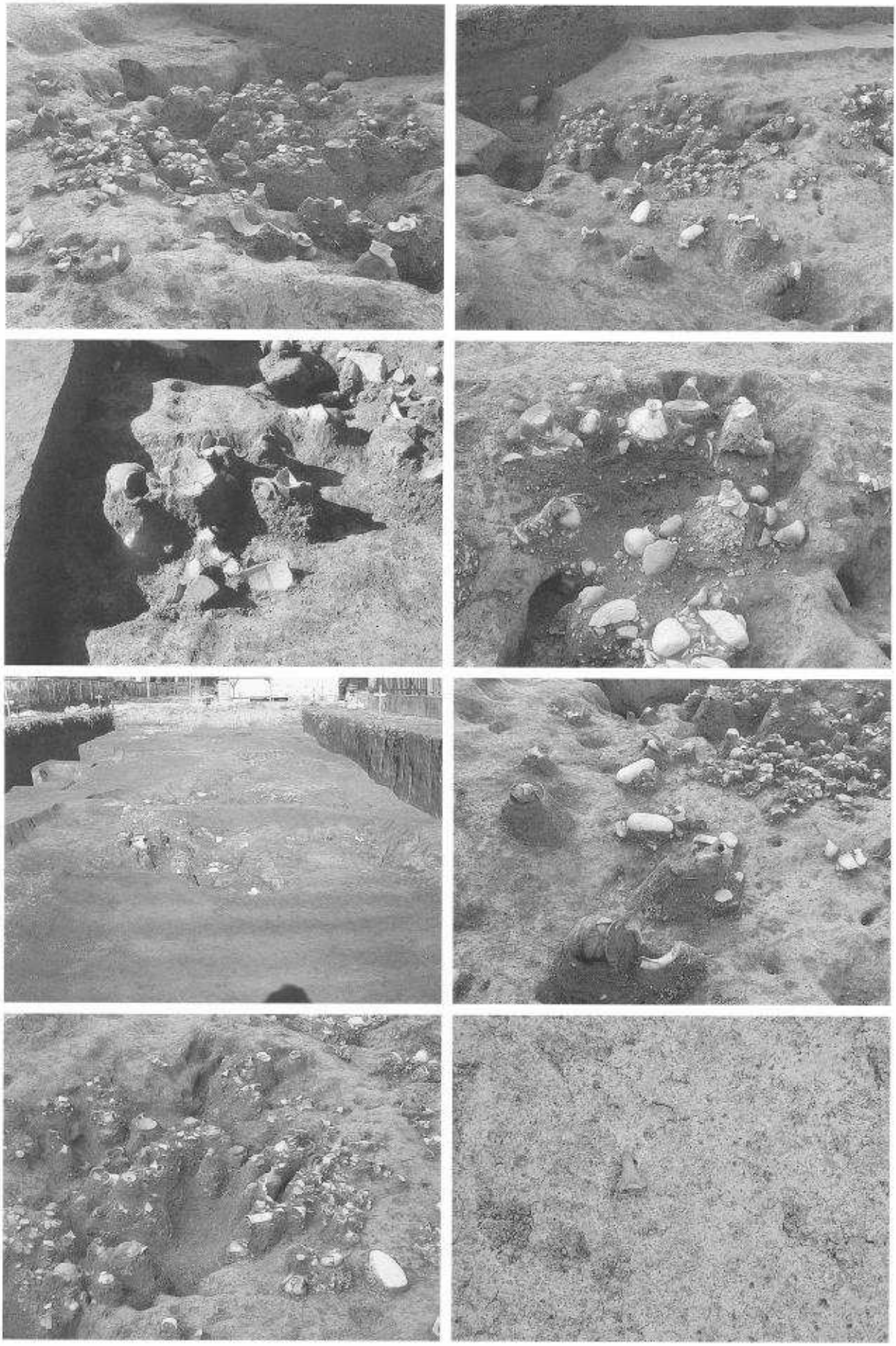
SD06全景（北から）

SD06土器出土状態（南から）

SD06土器出土状態（北東から）



SD06遺物出土状態

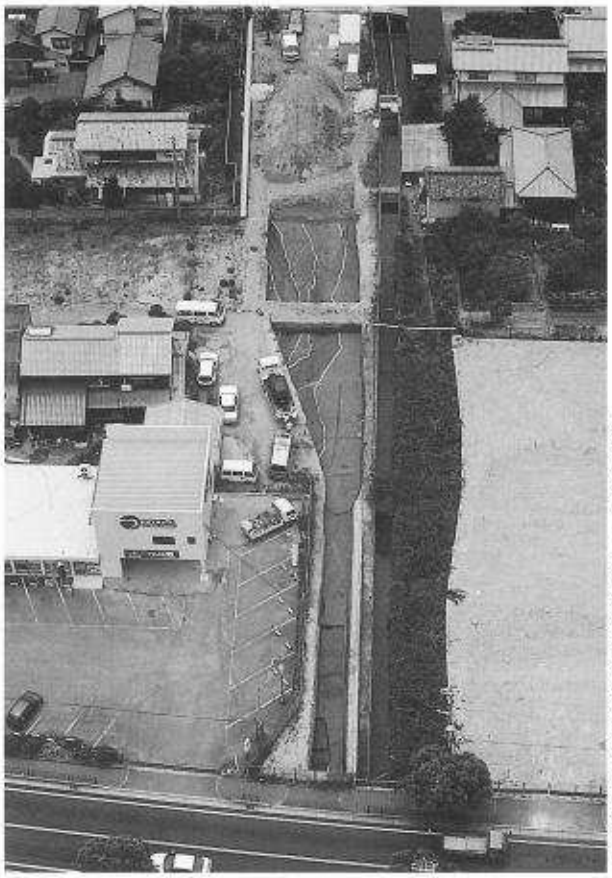


SD06遺物出土状態

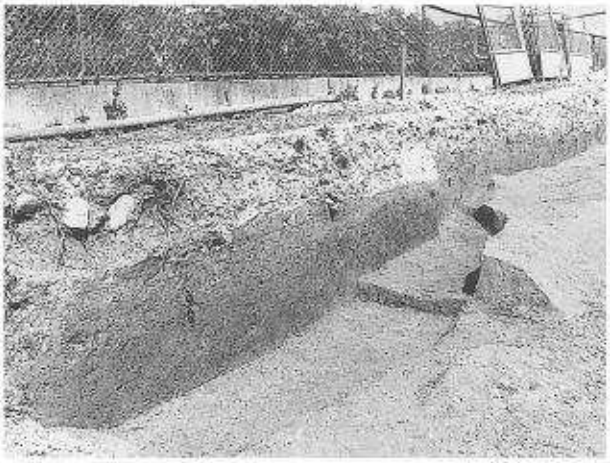
SD08（南西から）

SD12（南から）

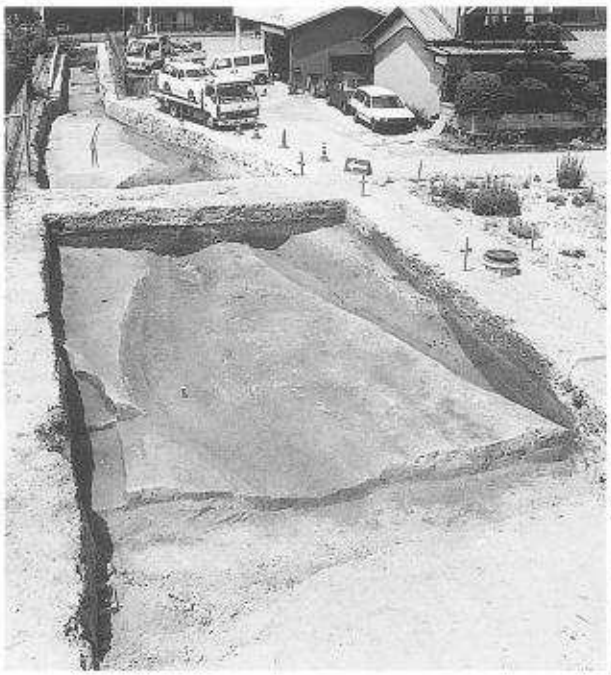
調査風景



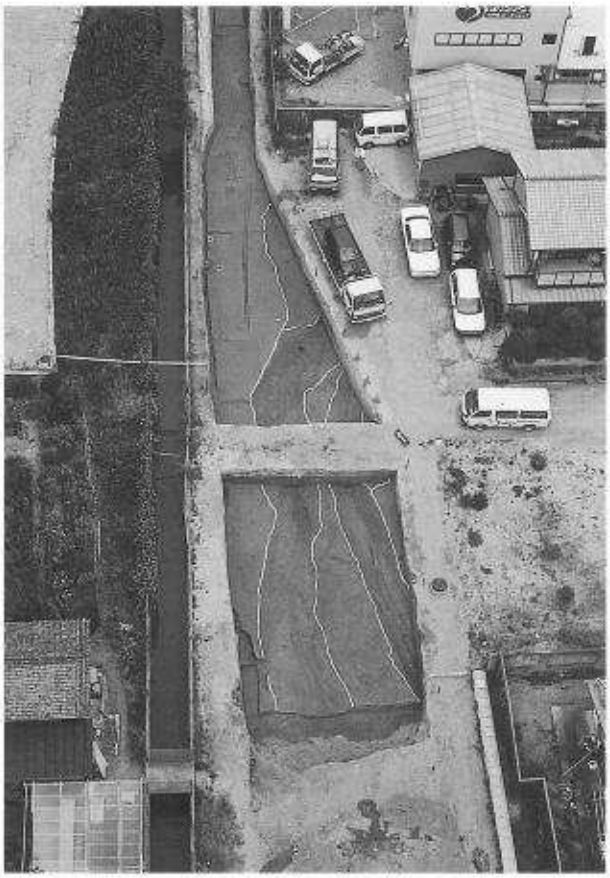
調査区全景（1）（北から）



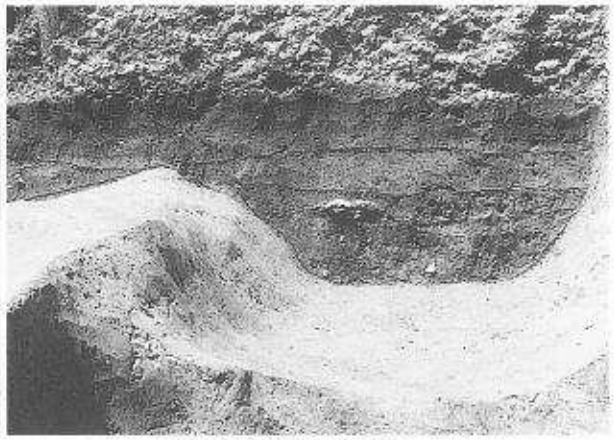
調査区西壁（南東から）



調査区全景（2）（南から）

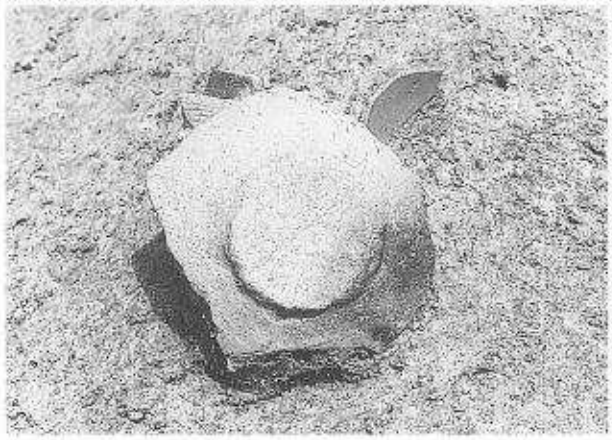


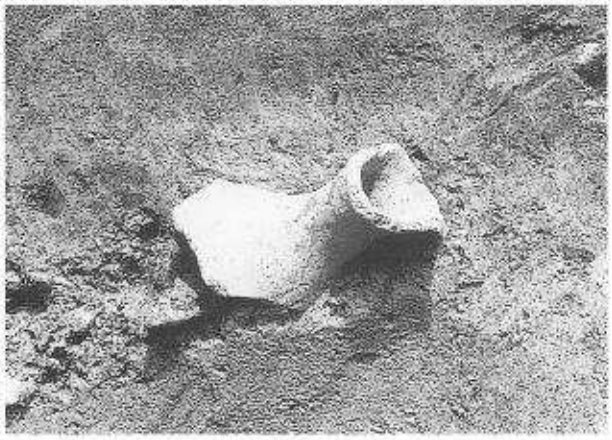
流路とSD01（1）（南から）



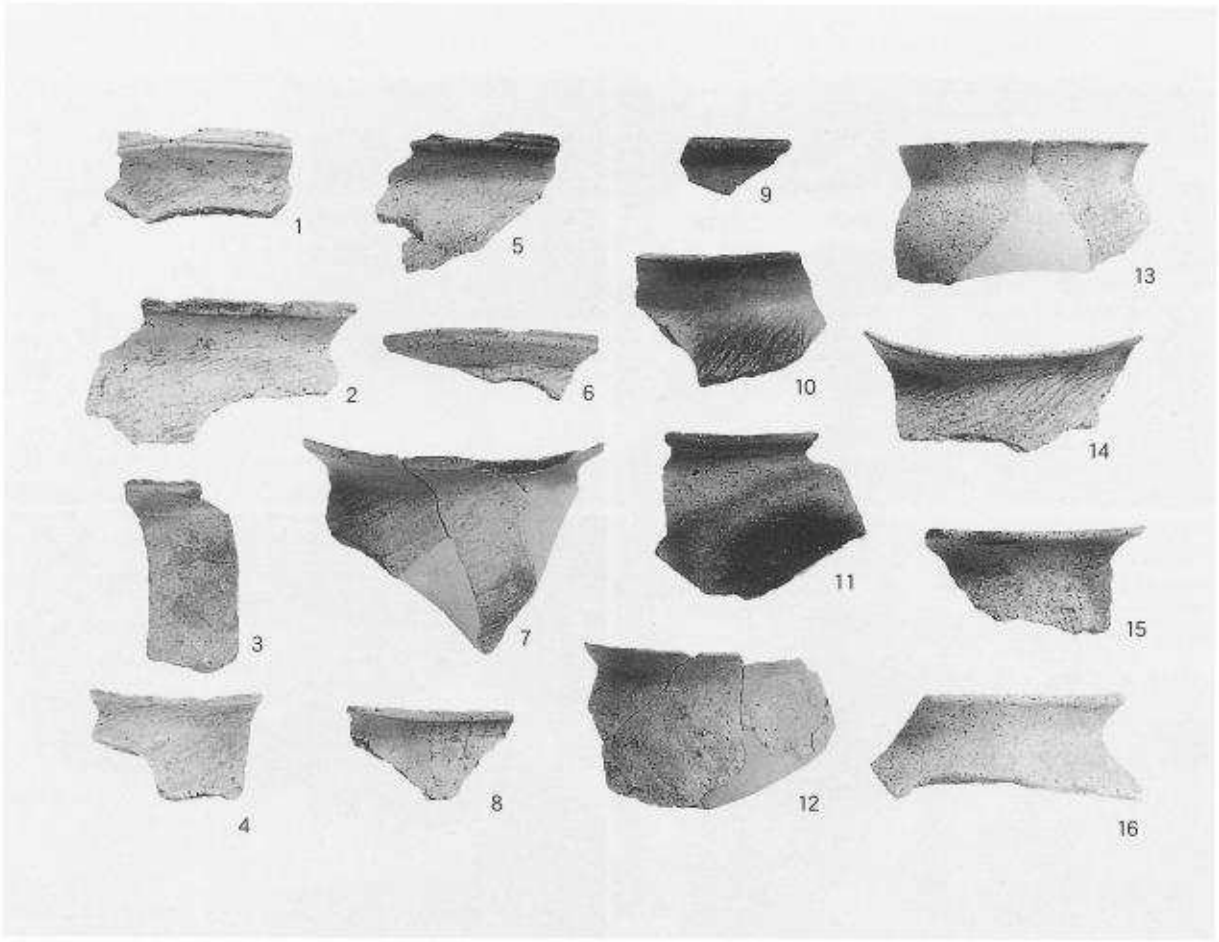
上）流路とSD01（２）（南から）
下）流路・SD01断面（南から）

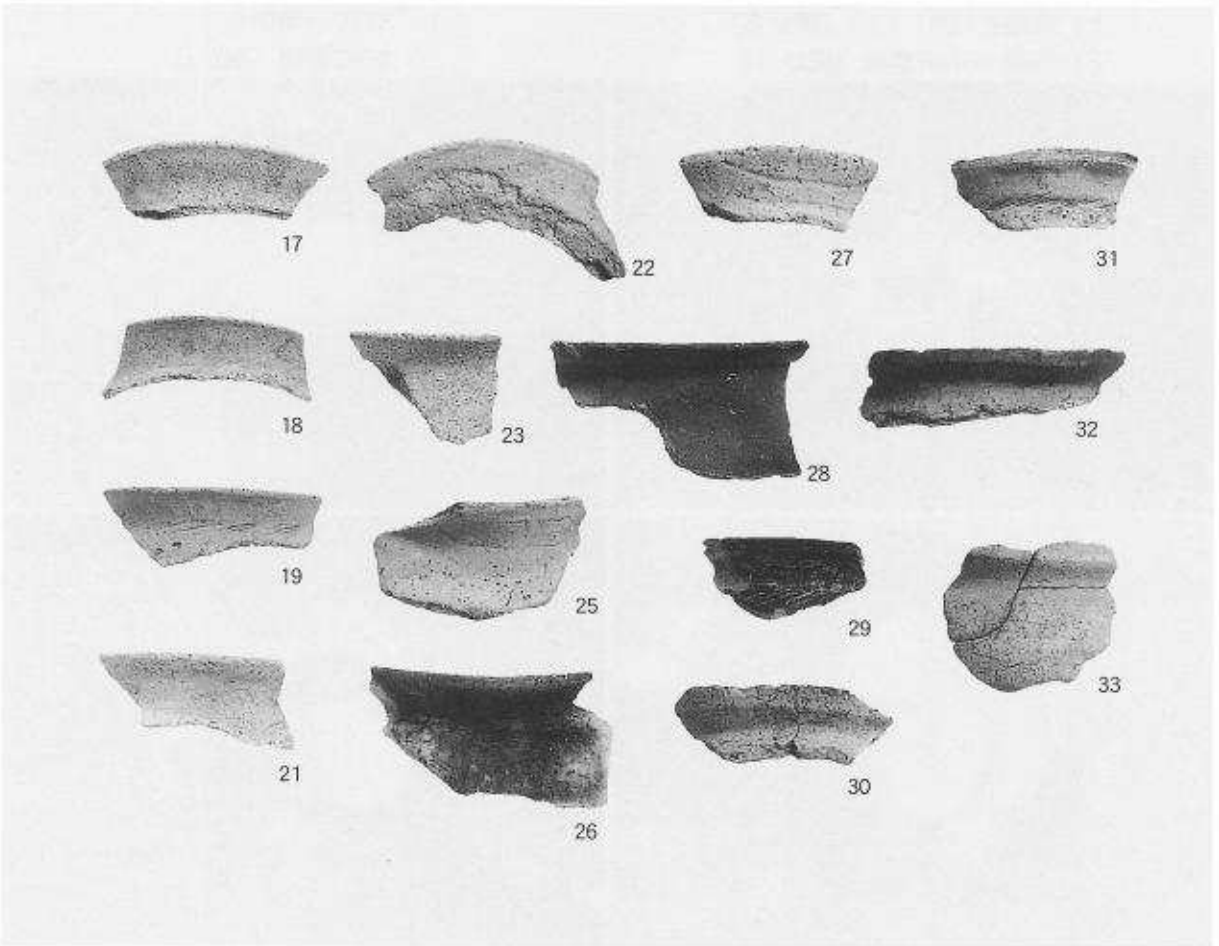
上）SD02（南から）
下）SD02断面（南から）



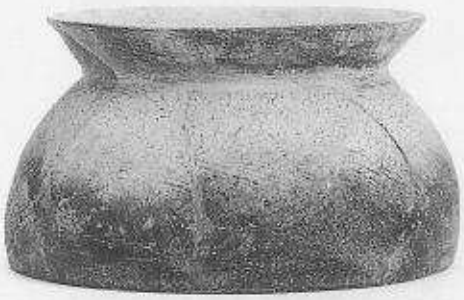


流路内土器出土状況


1
5
9
13
2
6
10
14
3
7
11
15
4
8
12
16

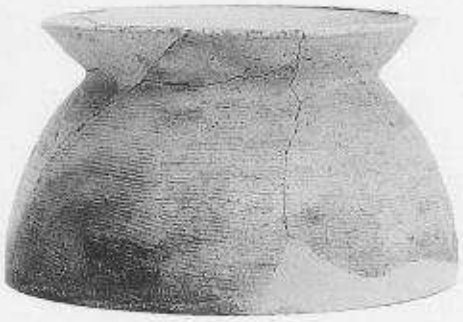

17
22
27
31
18
23
28
32
19
25
29
33
21
26
30

出土土器（1）



20

34



37

24

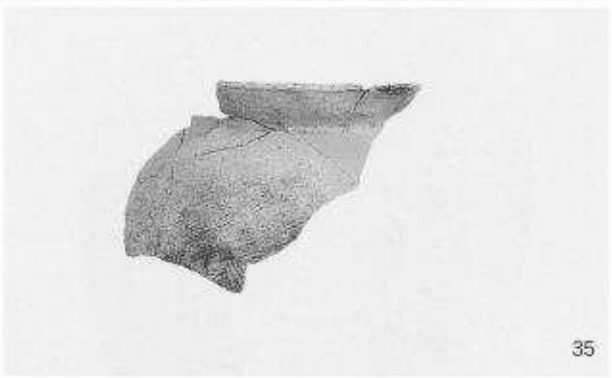
38

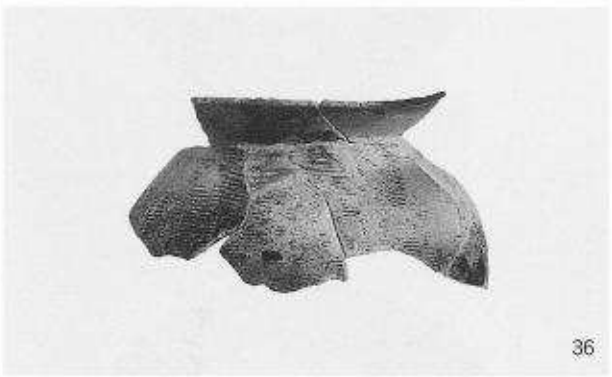
出土土器（2）

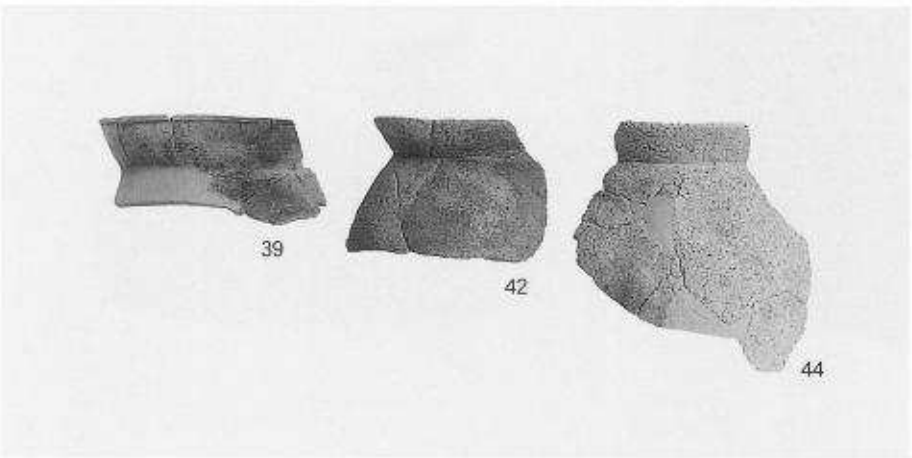
40

41

43


35


36



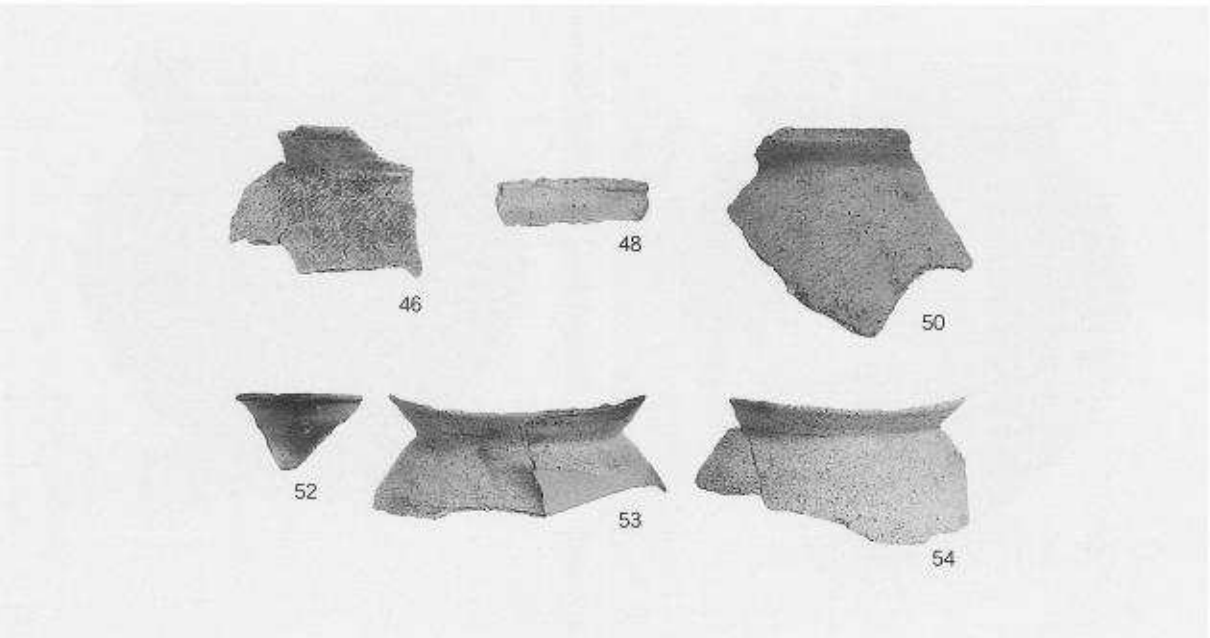
出土土器（3）

45

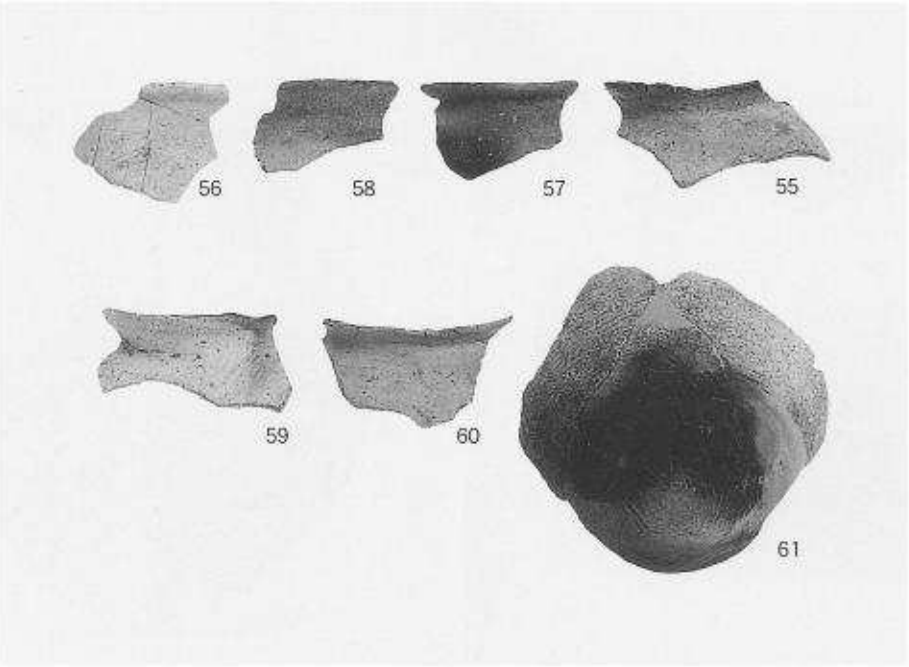
49

47

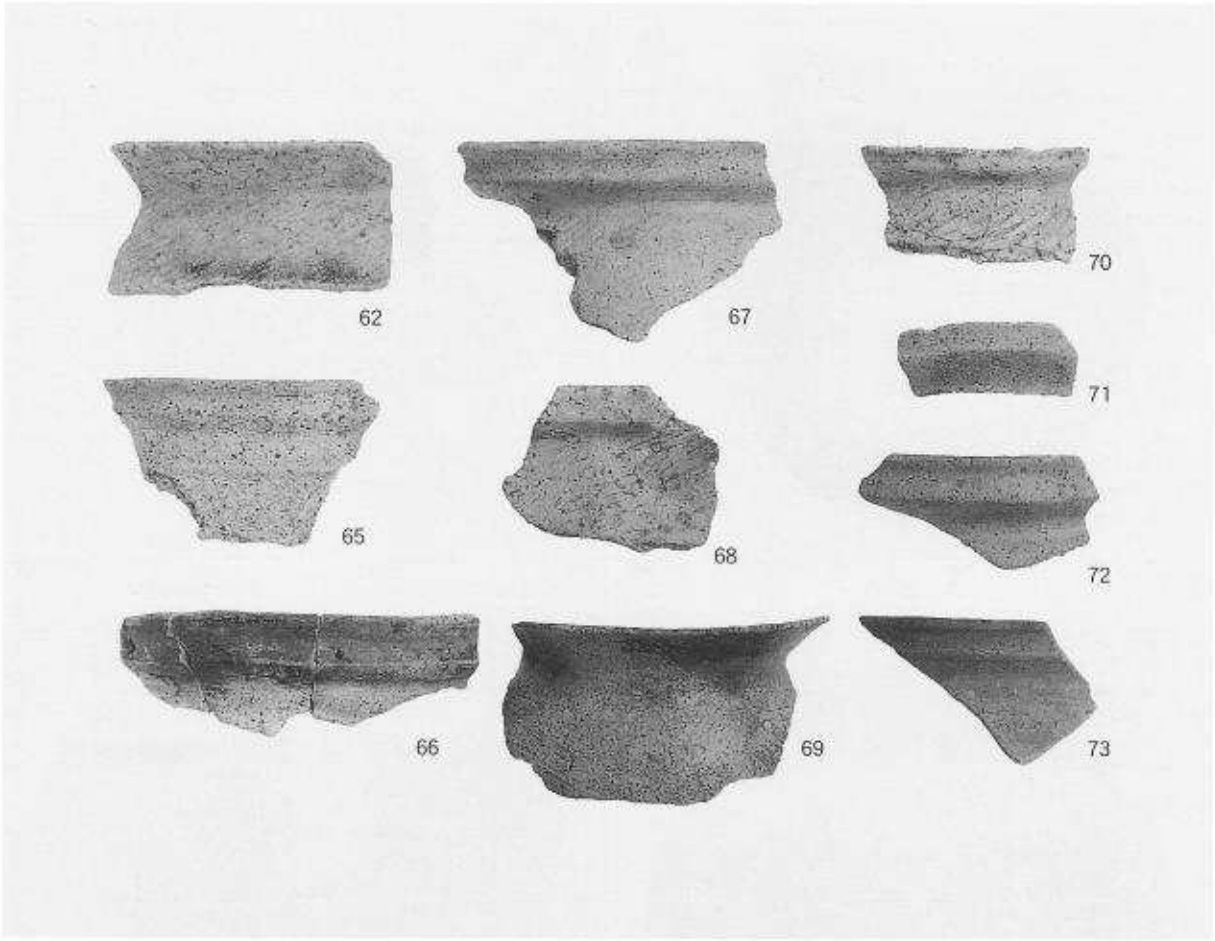
51

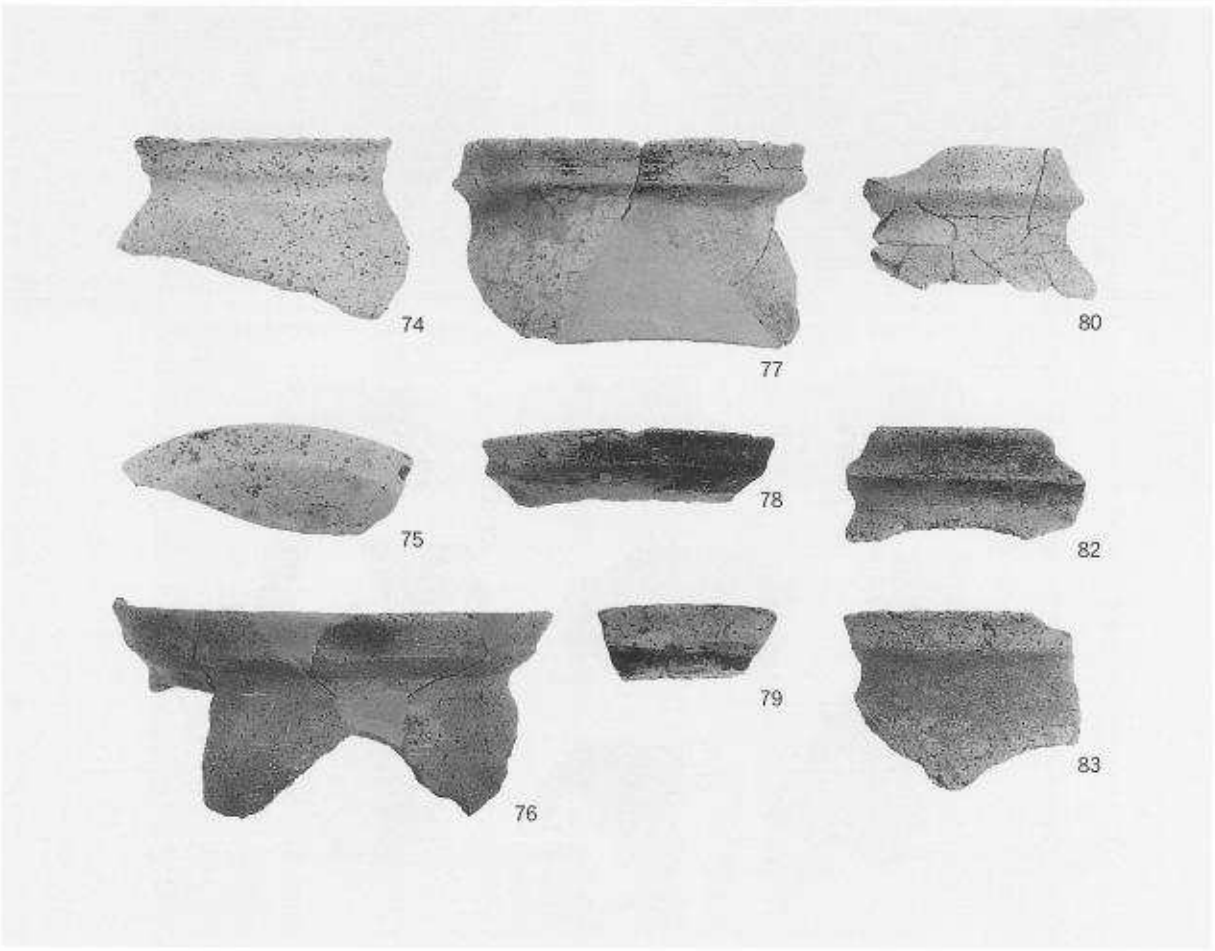


出土土器（4）



出土土器（5）





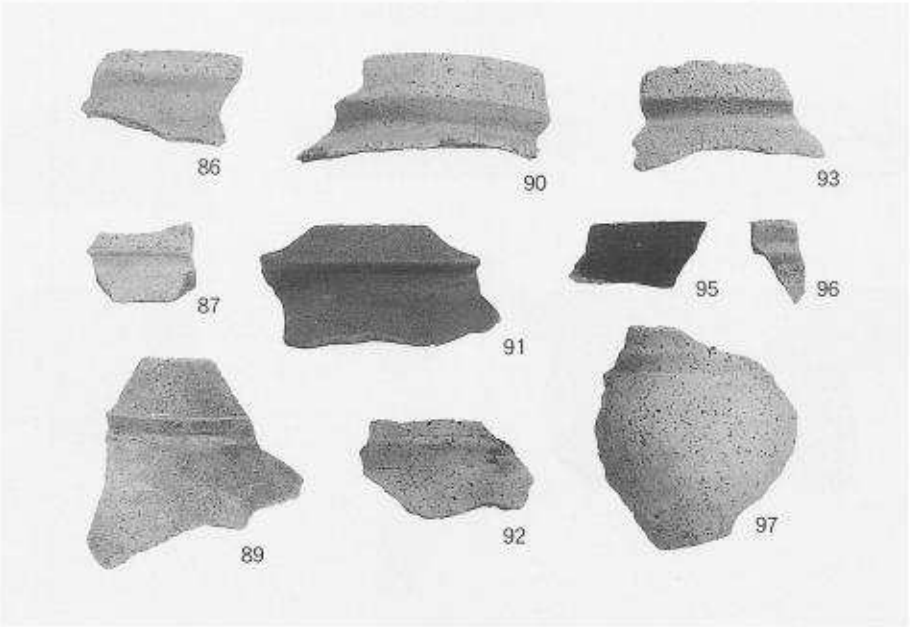
出土土器（6）

85

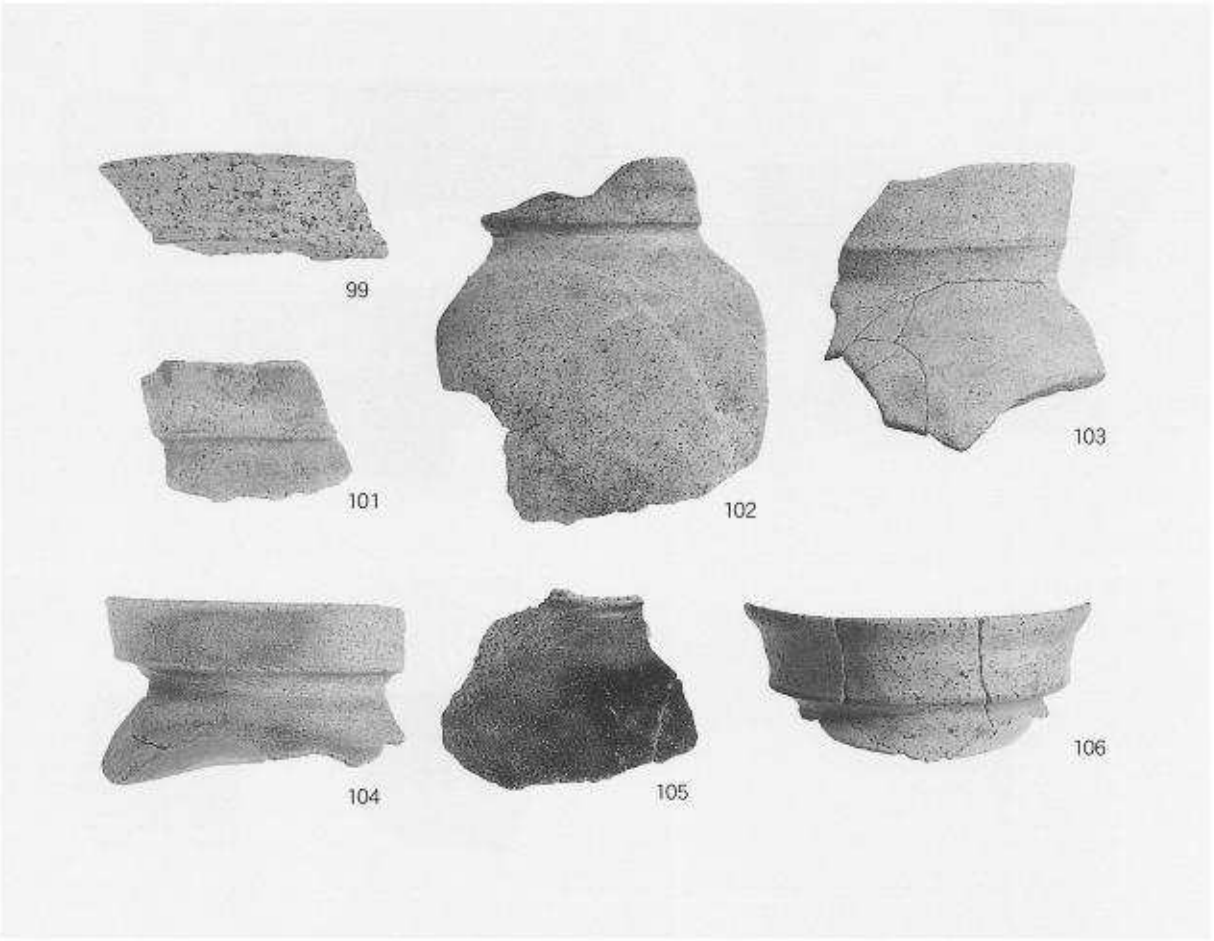
88

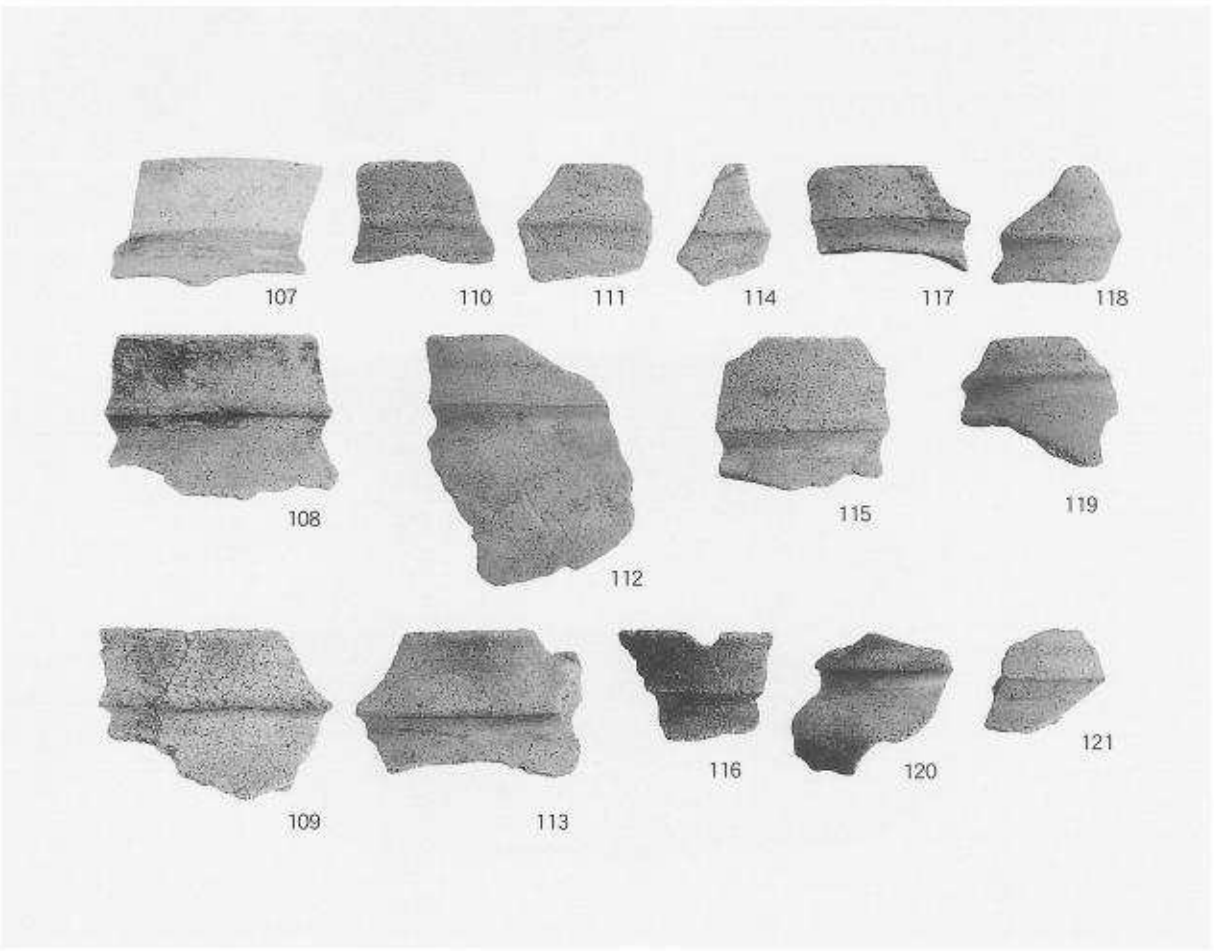
94

98



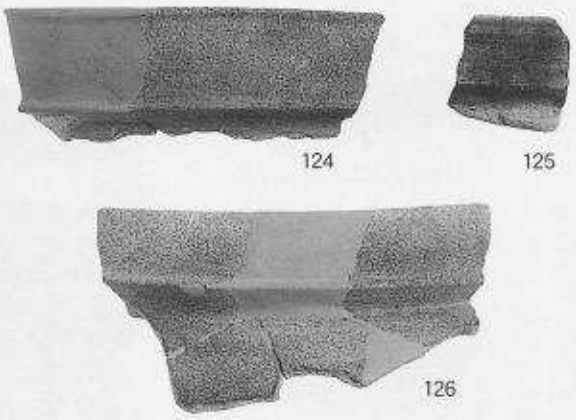
出土土器（7）


99
101
102
103
104
105
106


107
110
111
114
117
118
108
112
115
119
109
113
116
120
121

出土土器（8）

100


124

125

126

122

128

130

129

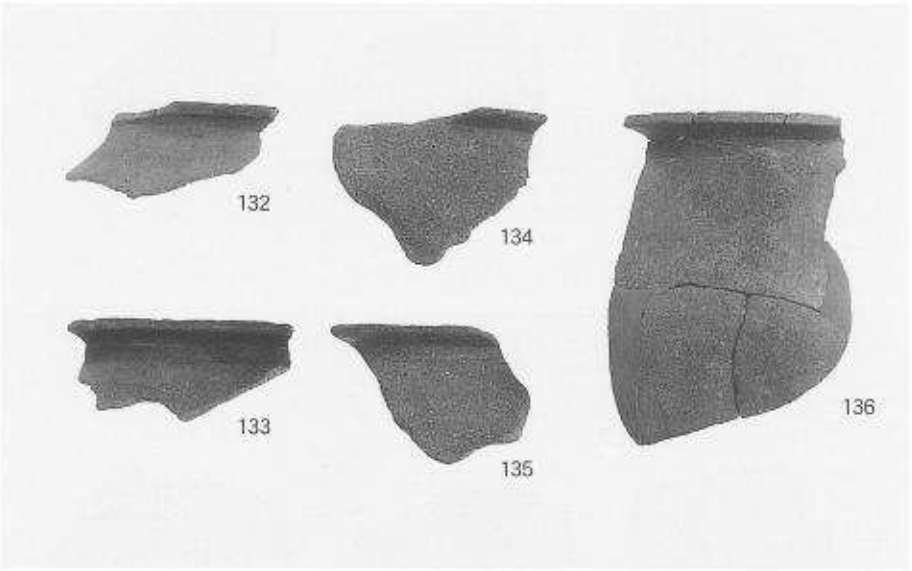
131

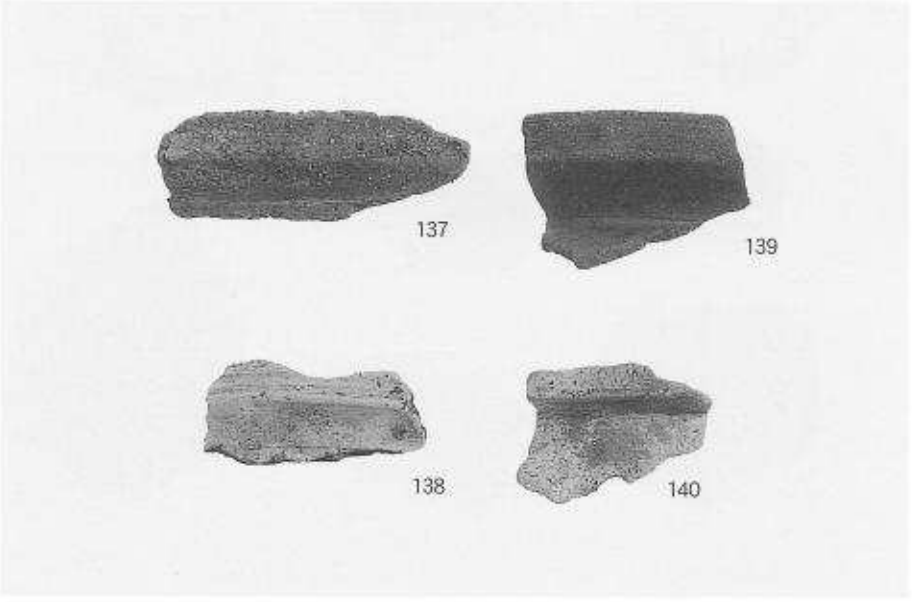
127

出土土器（9）

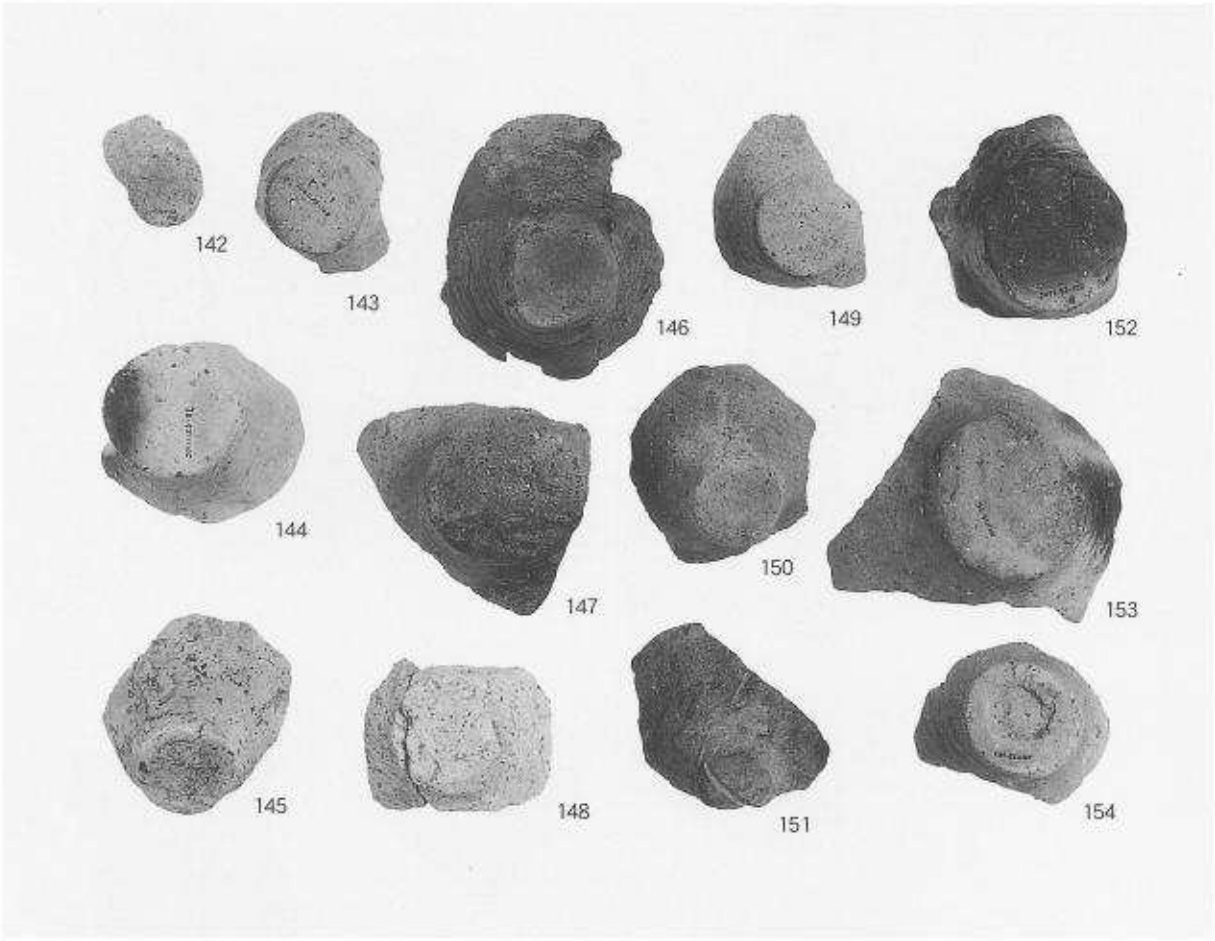
123

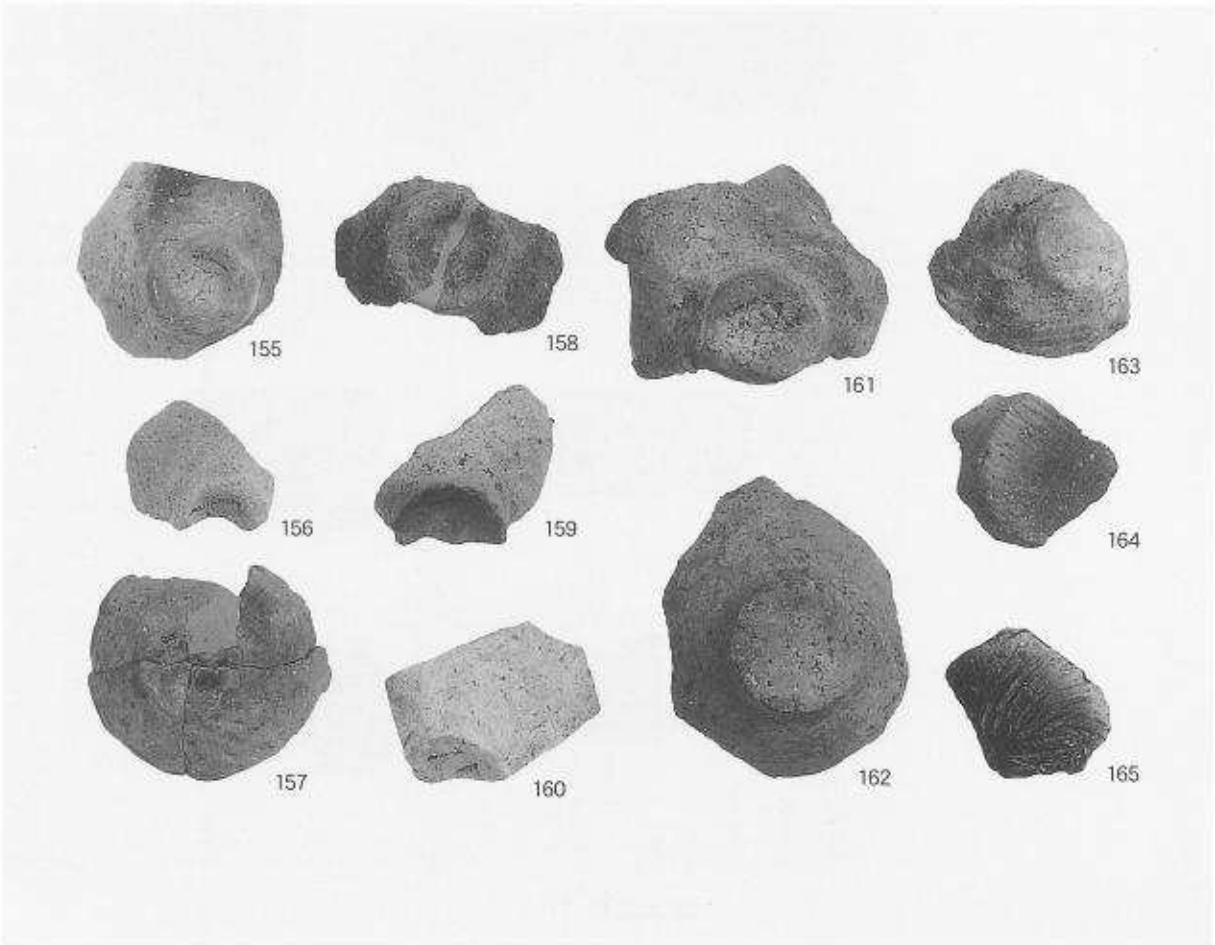
141


132
134
133
135
136

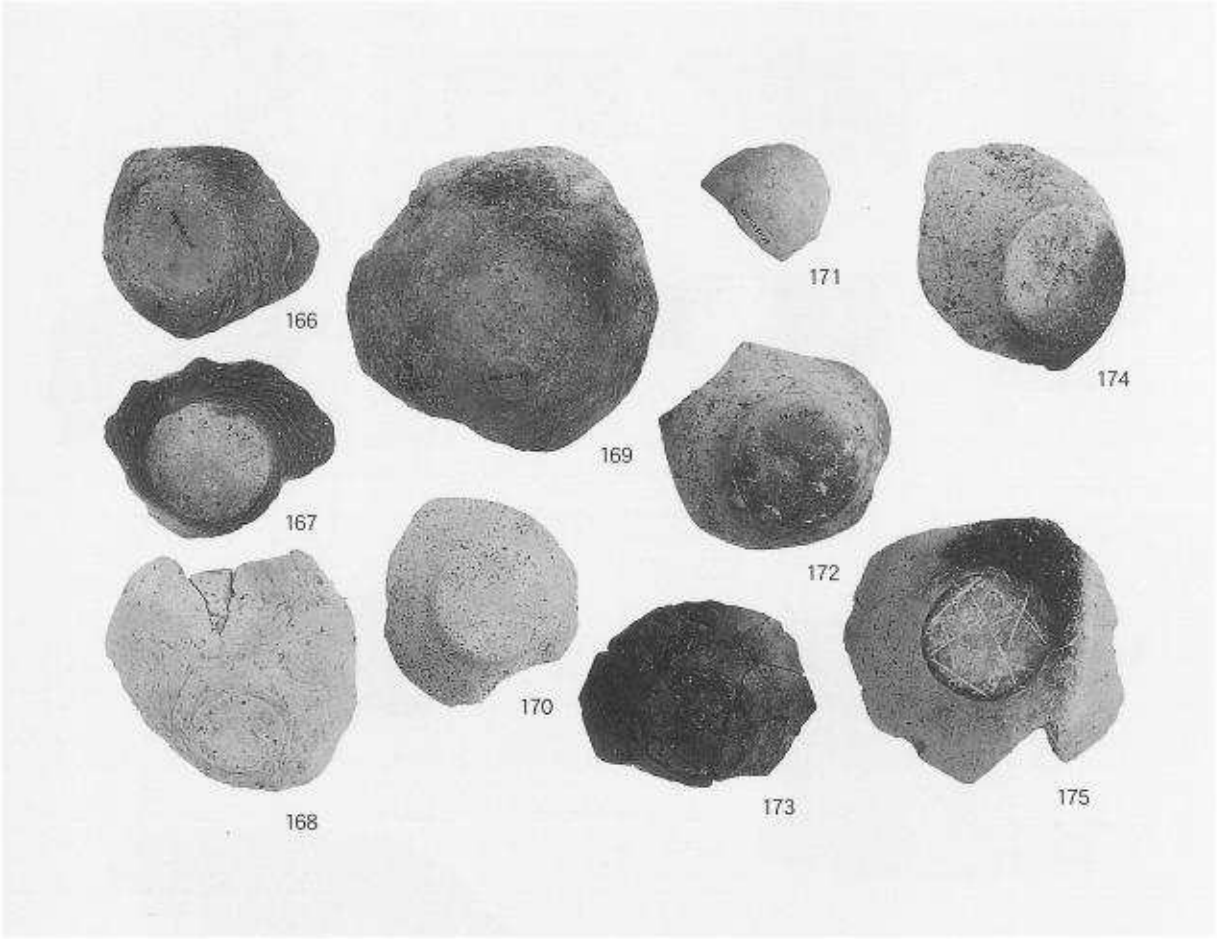

137
139
138
140

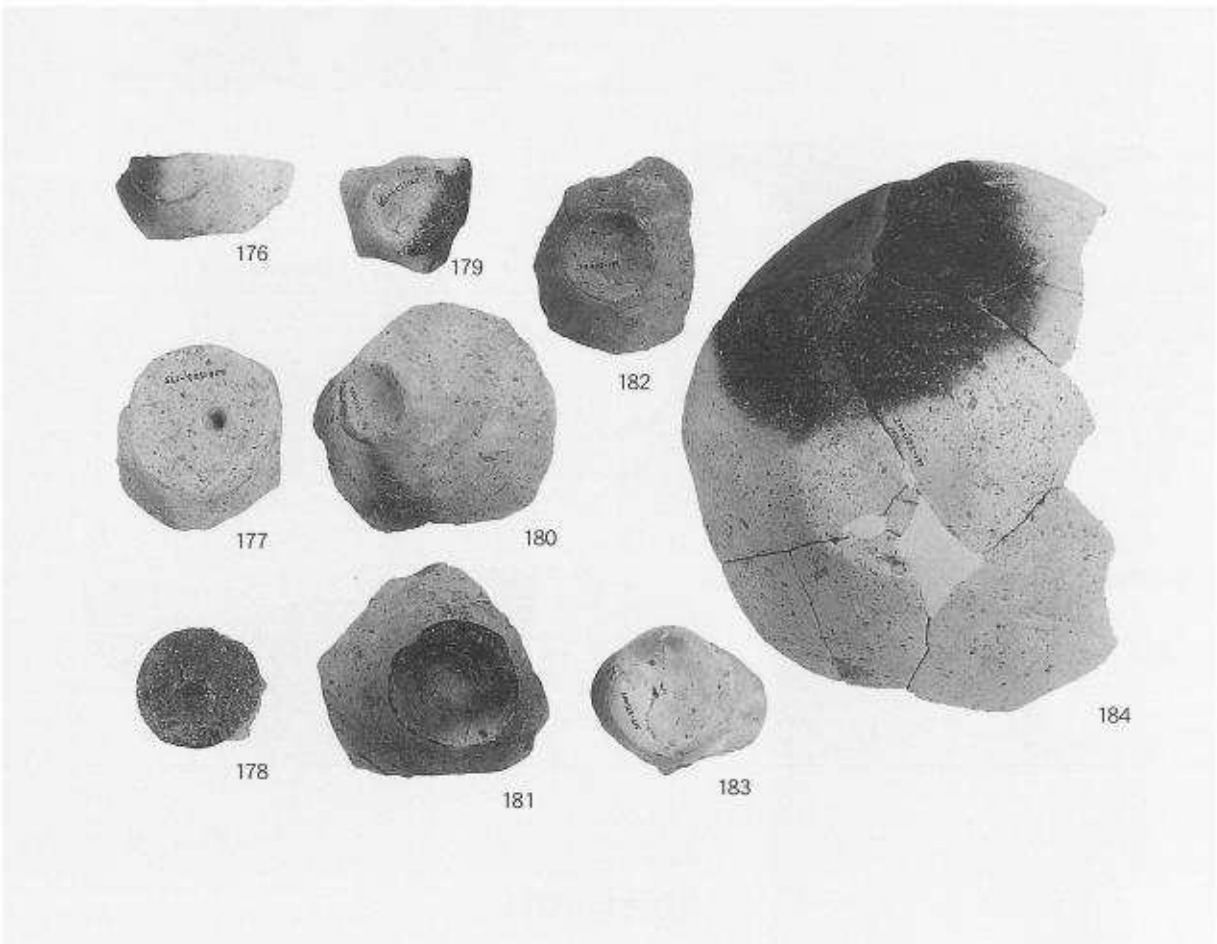
出土土器（10）


142
143
146
149
152
144
147
150
153
145
148
151
154

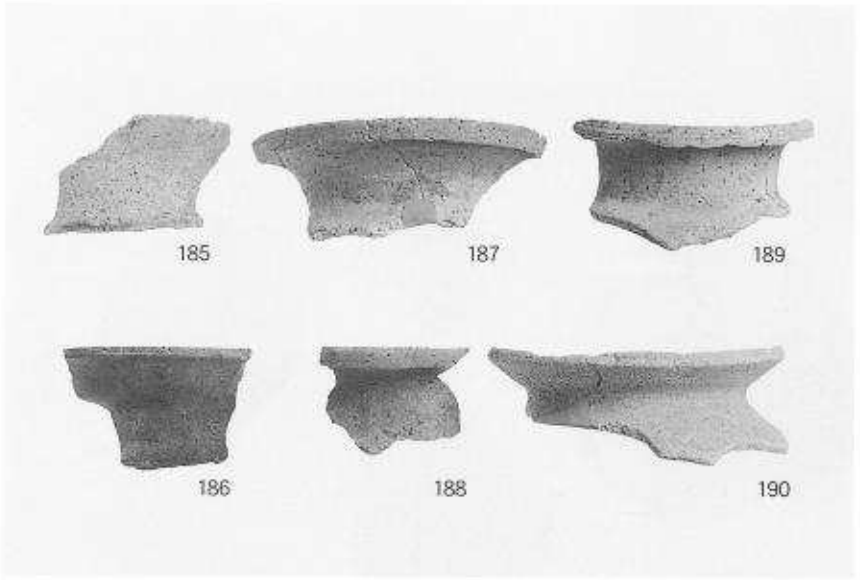

155
158
161
163
156
159
164
157
160
162
165

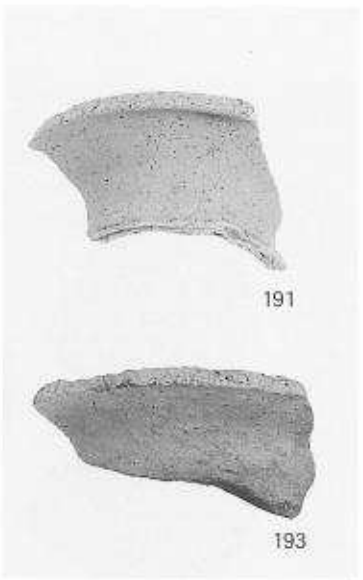
出土土器（11）

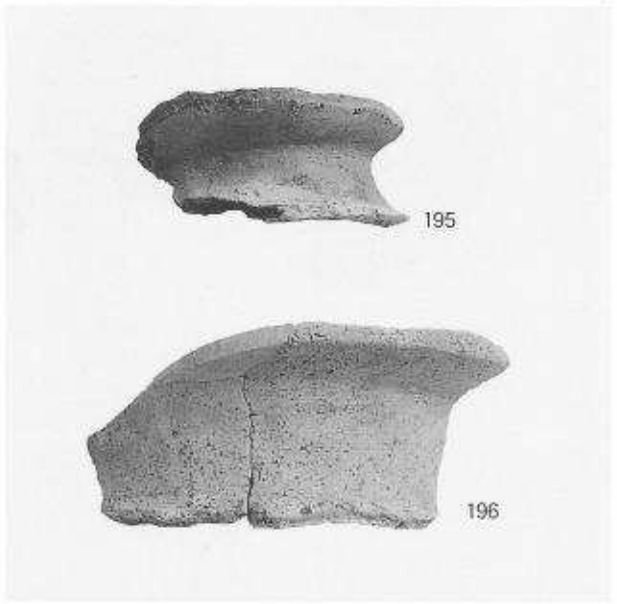

166
169
171
174
167
172
170
168
173
175


176
179
182
177
180
184
178
181
183

出土土器（12）







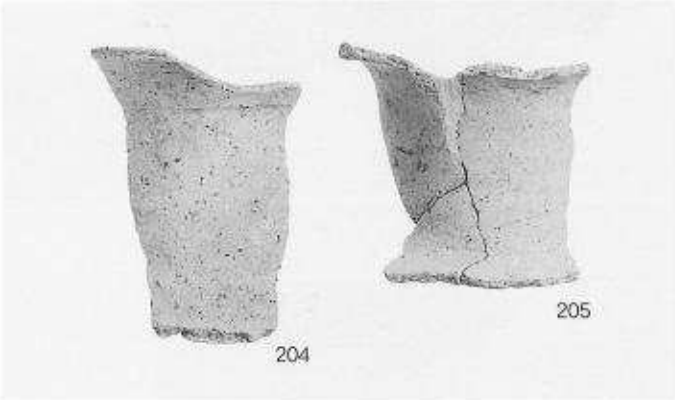
出土土器（13）

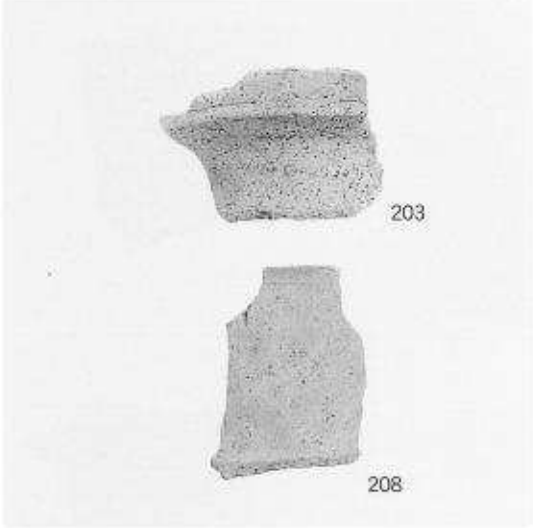
199

200

201

202


204 205


203 208

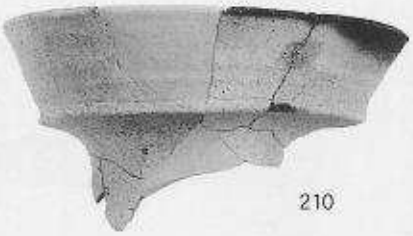
206

207

出土土器（14）

209

213


210

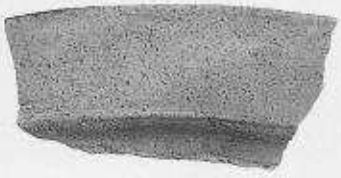
211

212

214

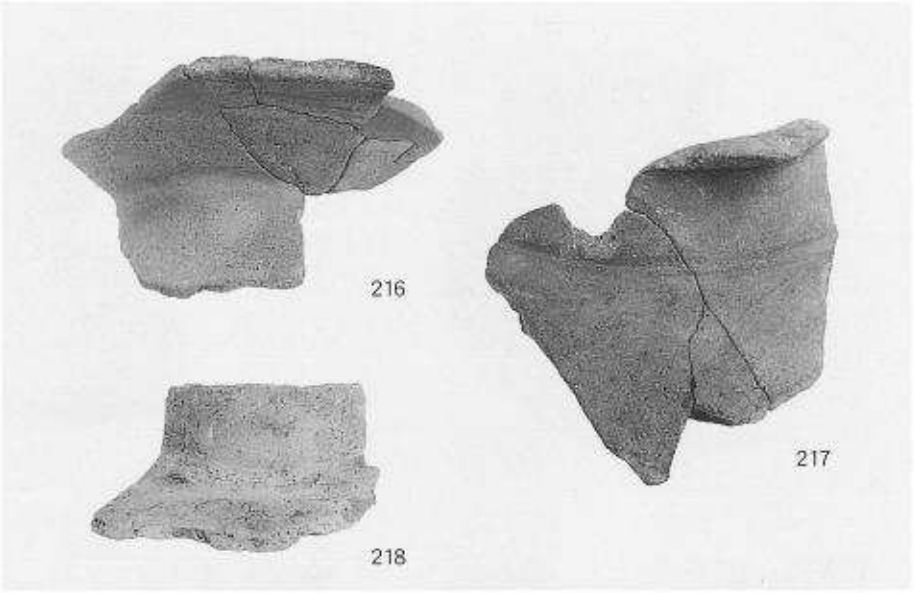
215

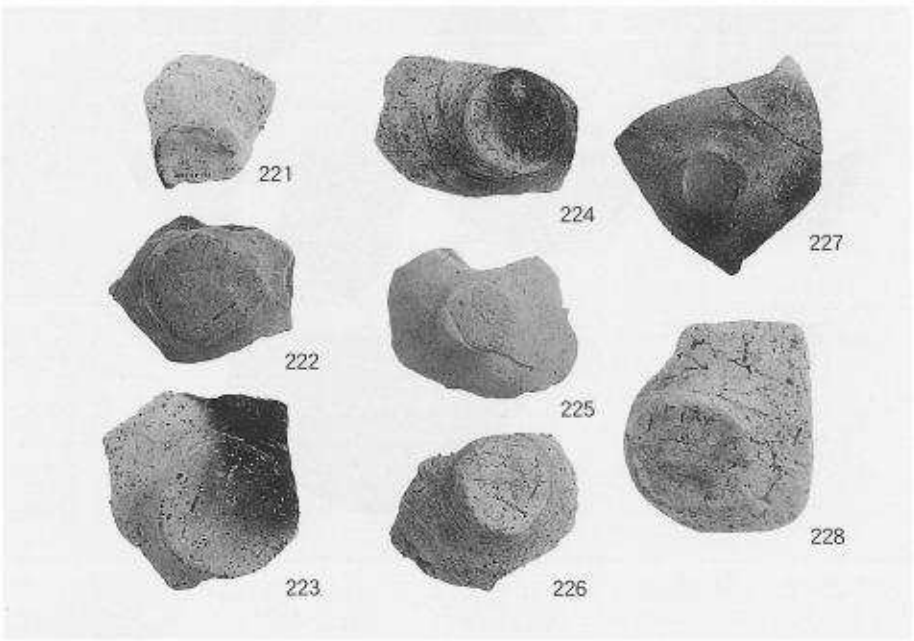
219

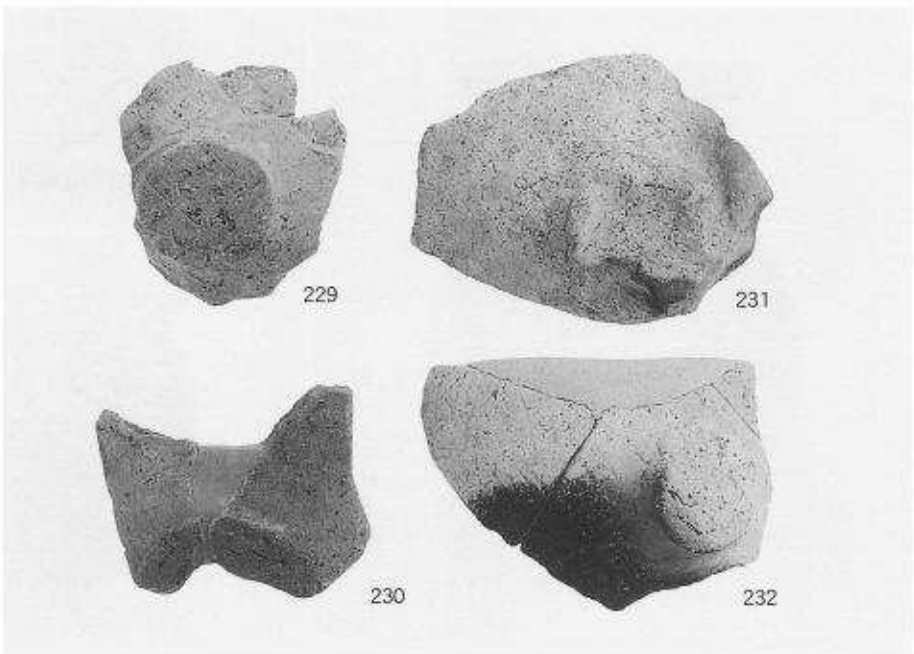

220

220

出土土器（15）

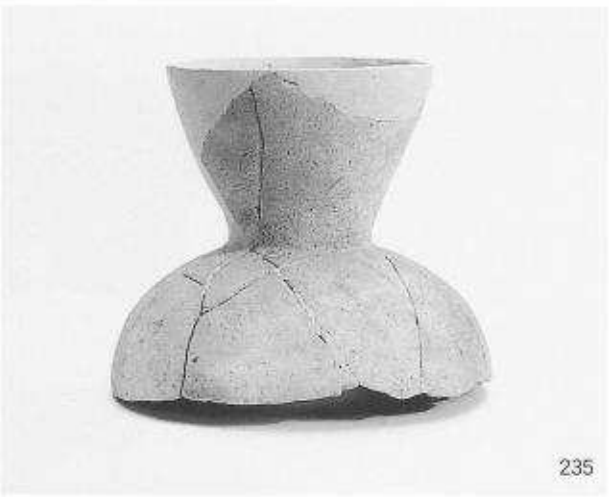


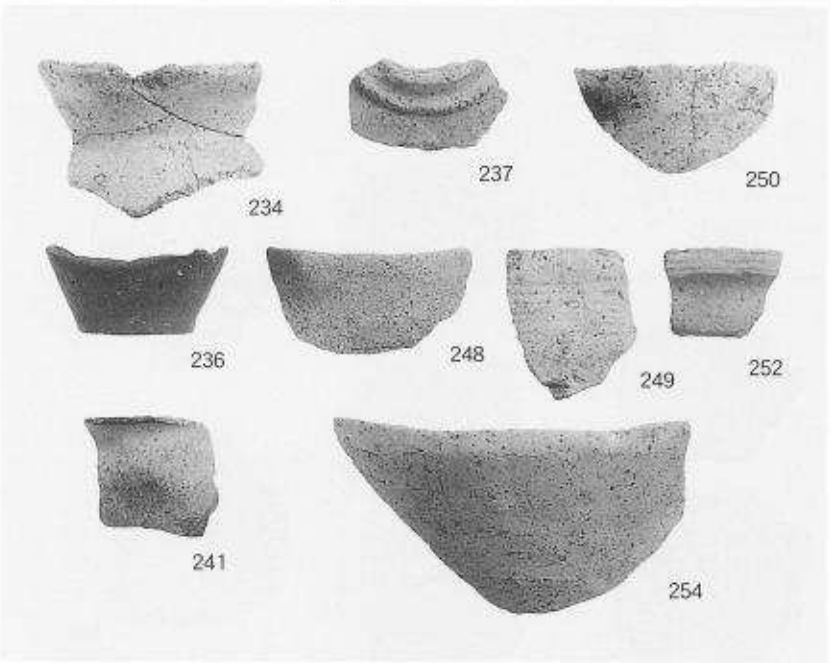




出土土器（16）

233


235


234
237
250
236
248
249
252
241
254

238

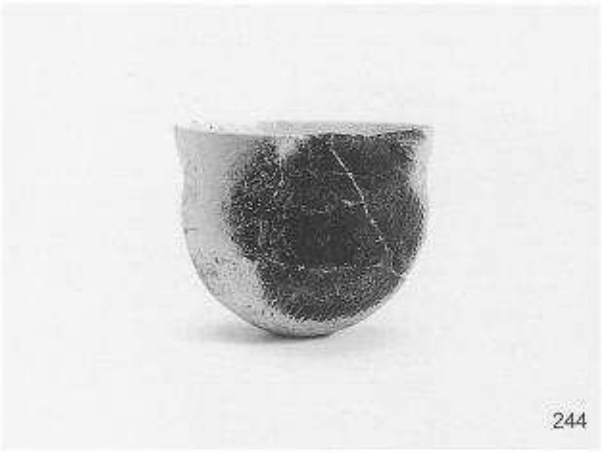
239

240

242

出土土器（17）

243


244

245

246

247

251

253

255

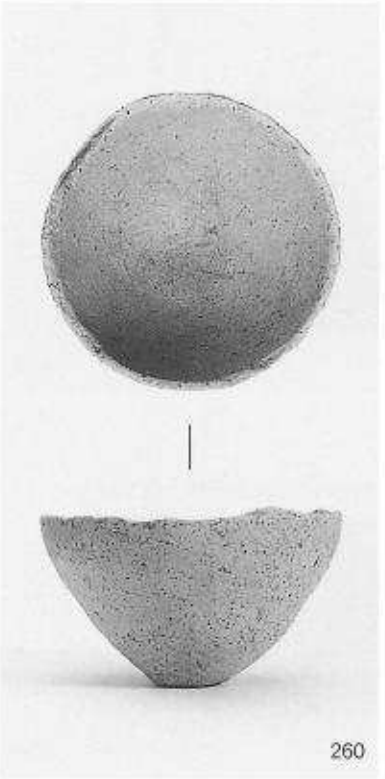
256

出土土器（18）

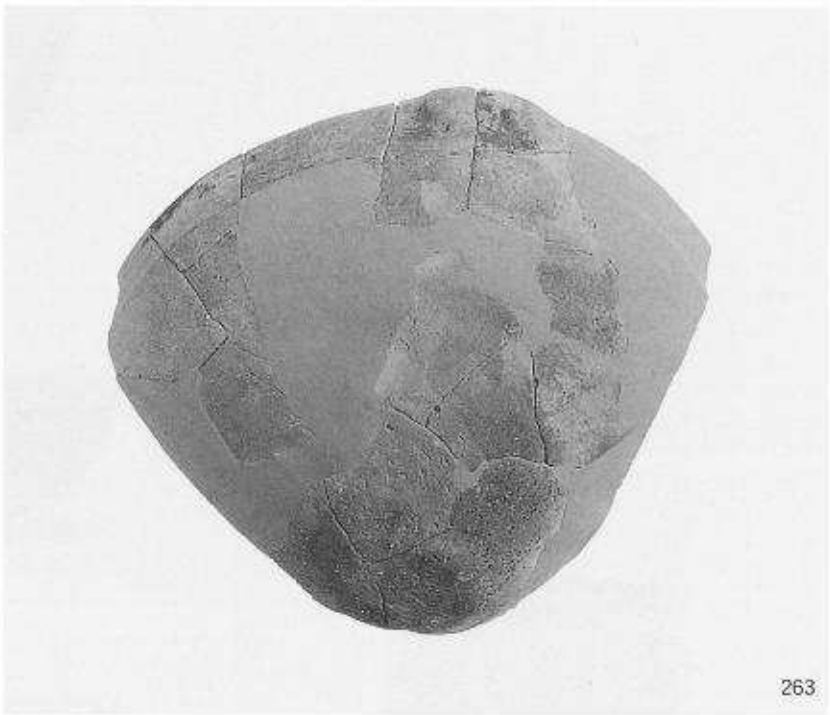
257

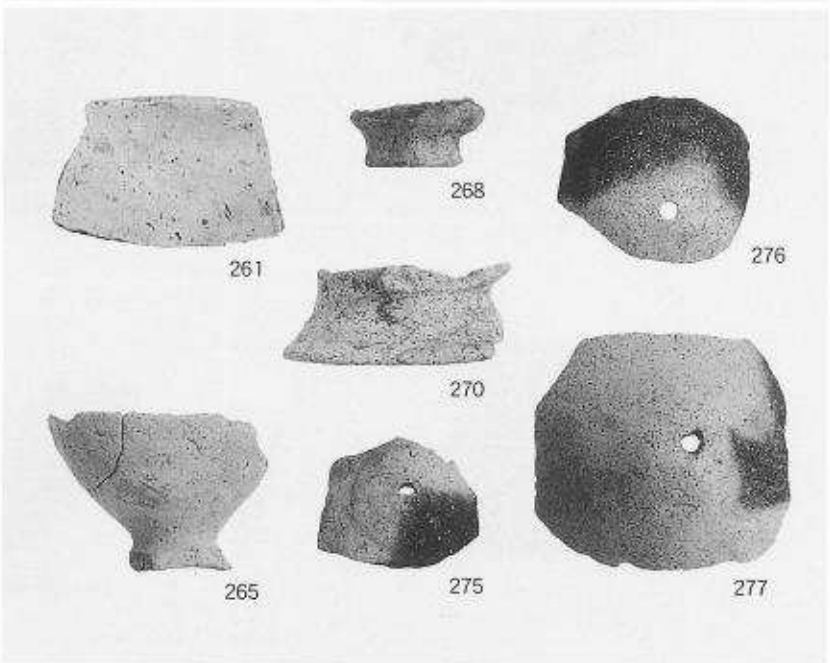
258

259


260

262


263



出土土器（19）

264

272

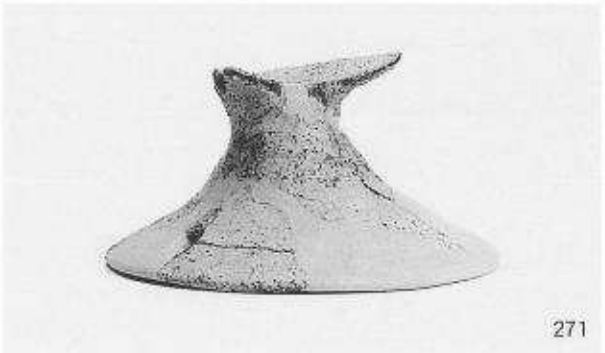
266

273

267

274

269


271

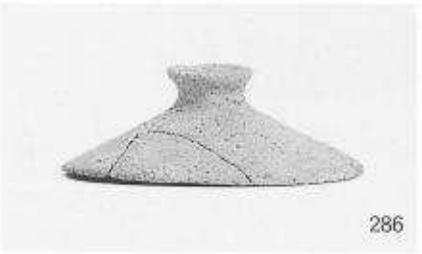
278

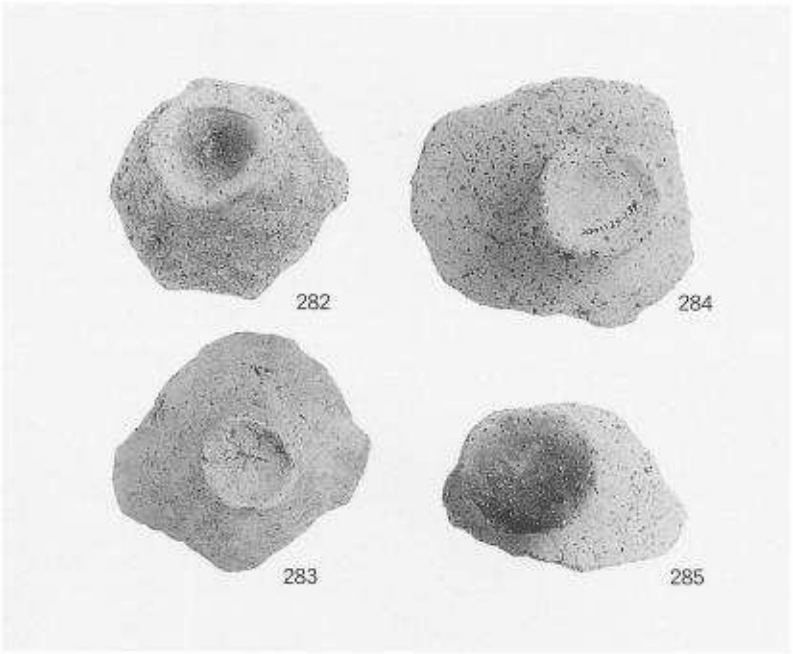
出土土器（20）

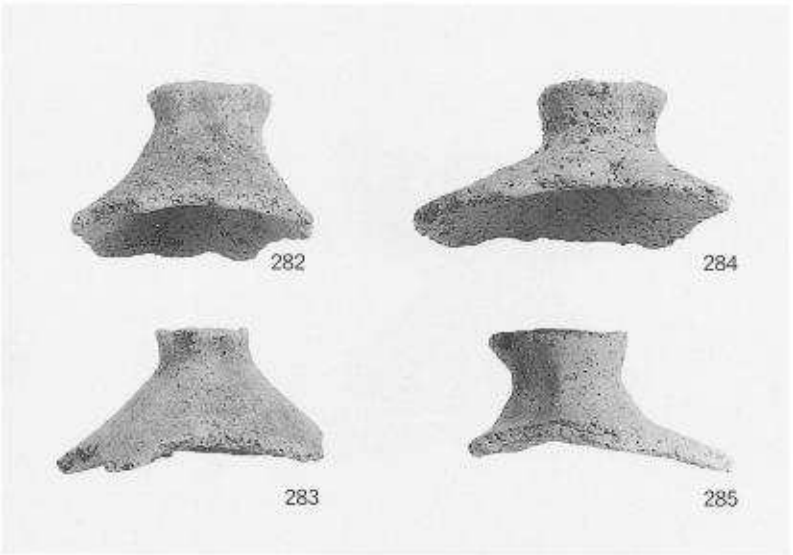
279

280

281


286


282 284 283 285


282 284 283 285

287

289

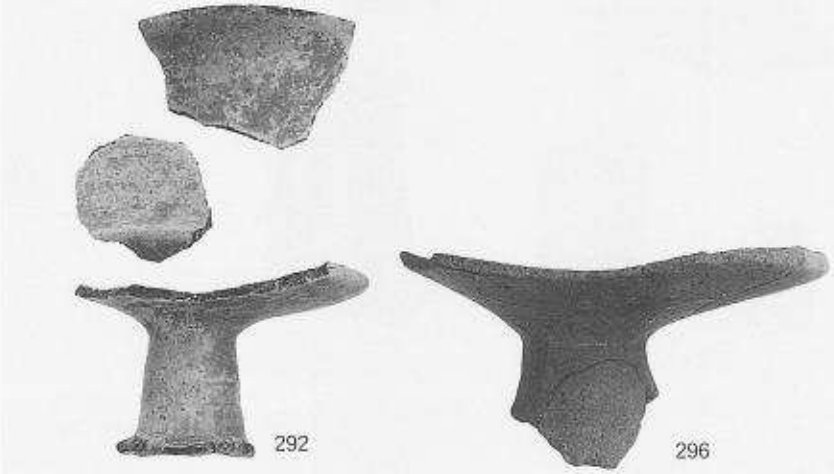
288

290

出土土器（21）

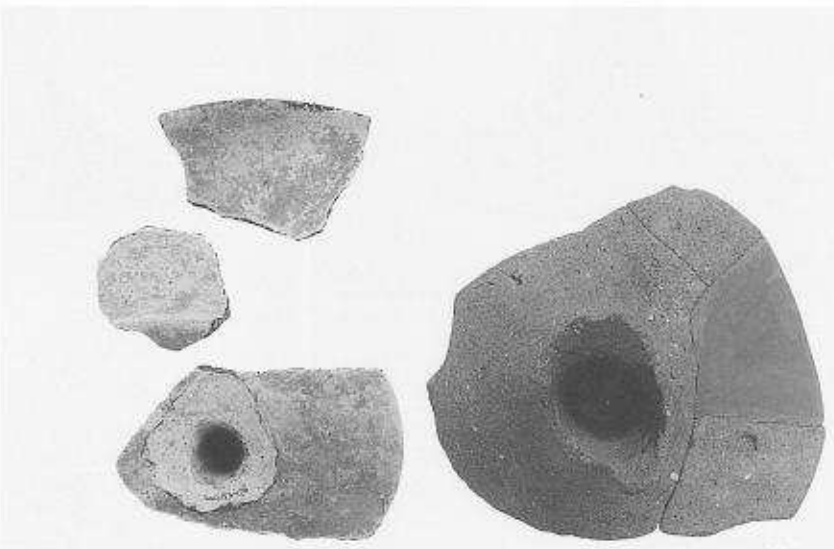
291

297



292

296



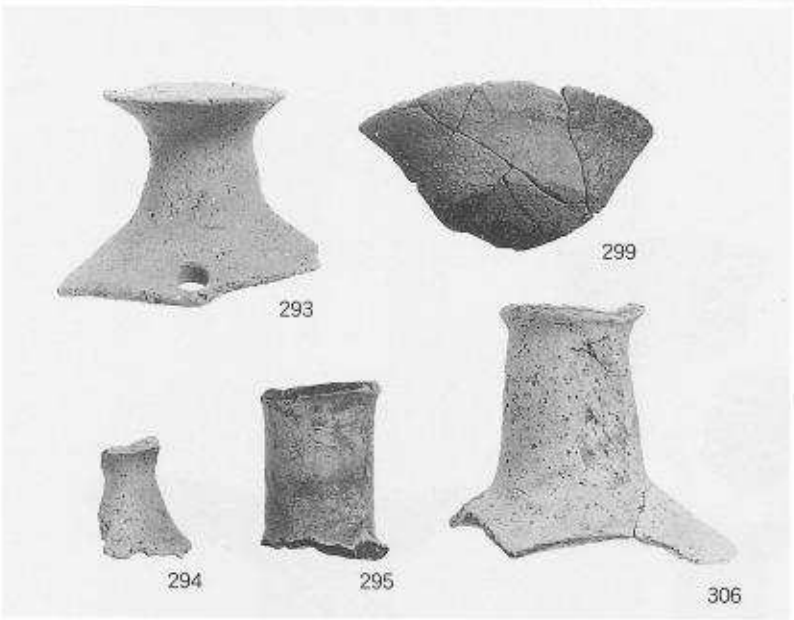
292

296

出土土器（22）

298

300


293
299
294
295
306

301

302

303

304

305

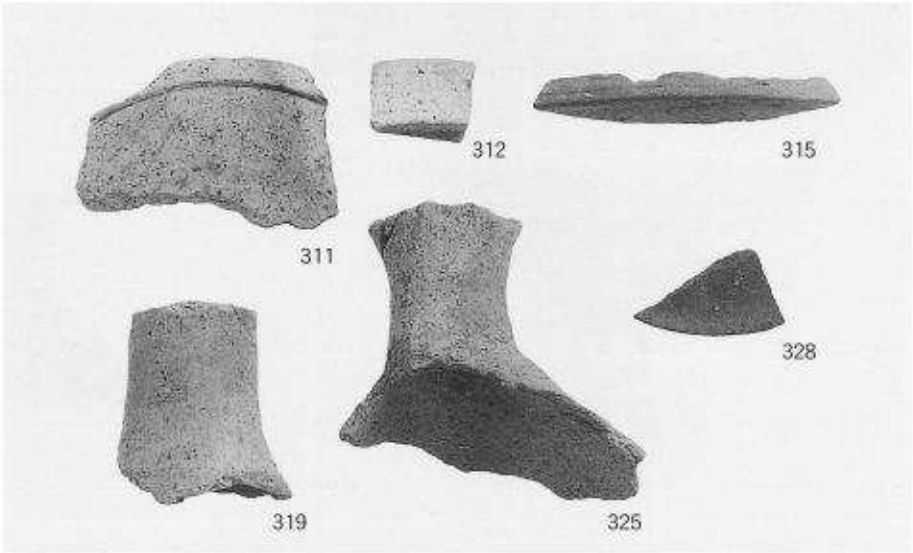
出土土器（23）

307

308

309

310



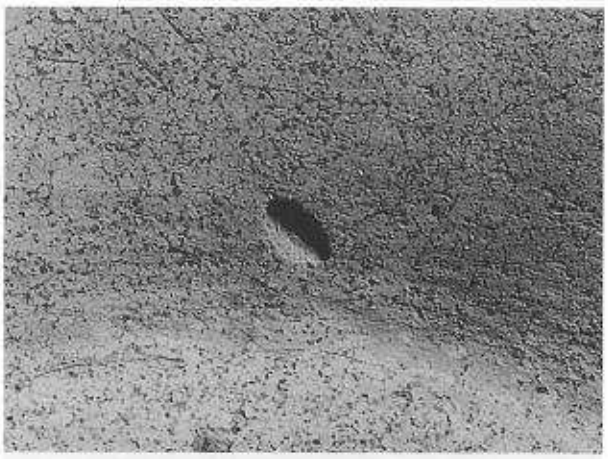
313

314

出土土器（24）

316

320



321

317

322

318

323

出土土器（25）

324

331

326

332

333

327

329

334

330

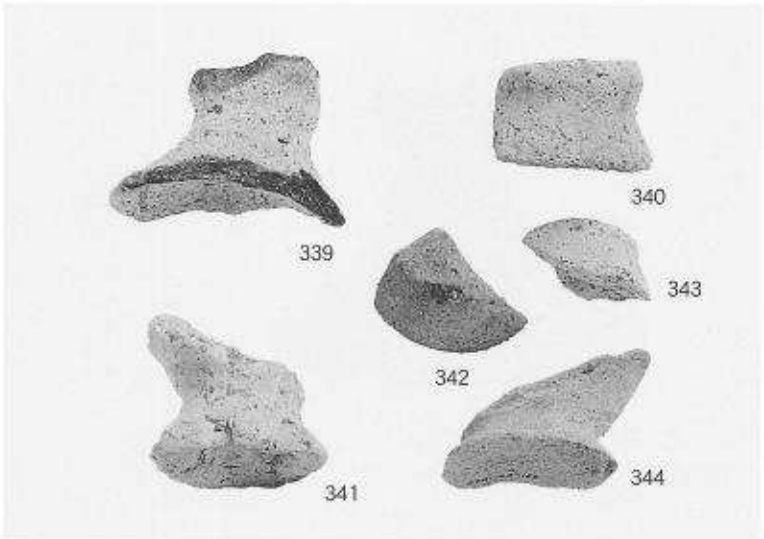
335

出土土器（26）

336

337

338


339

340

343

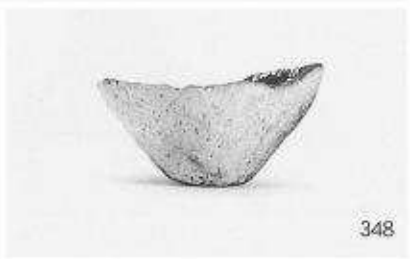
342

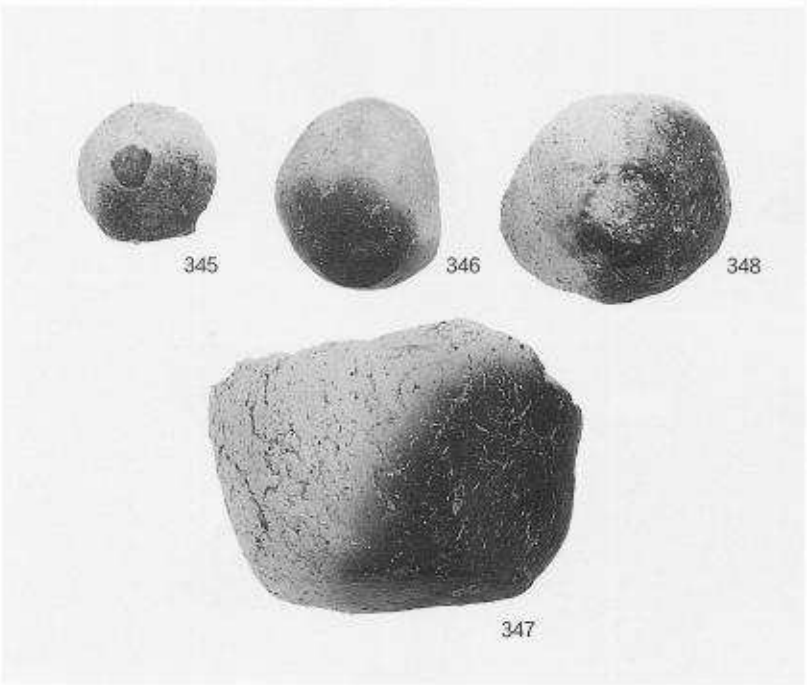
341

344

345

346


348


345

346

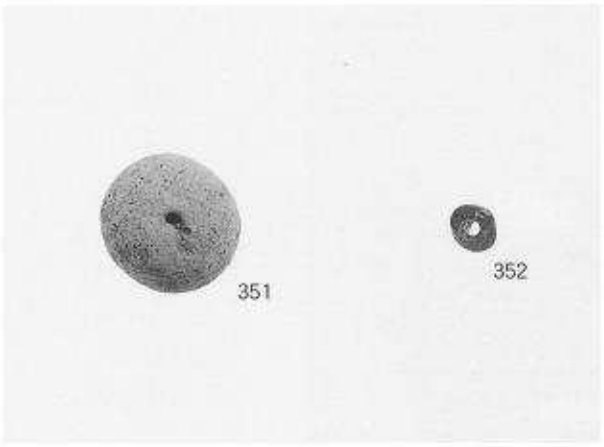
348

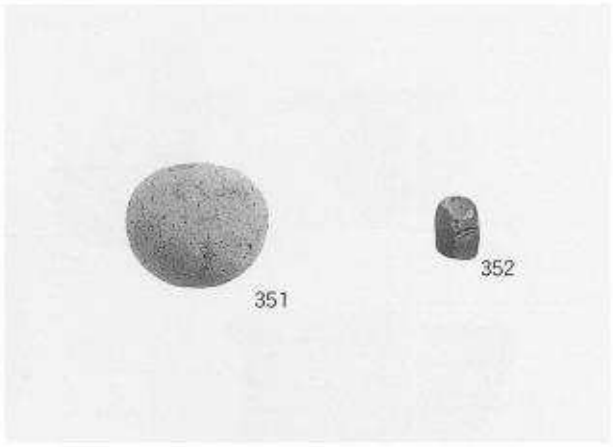
347

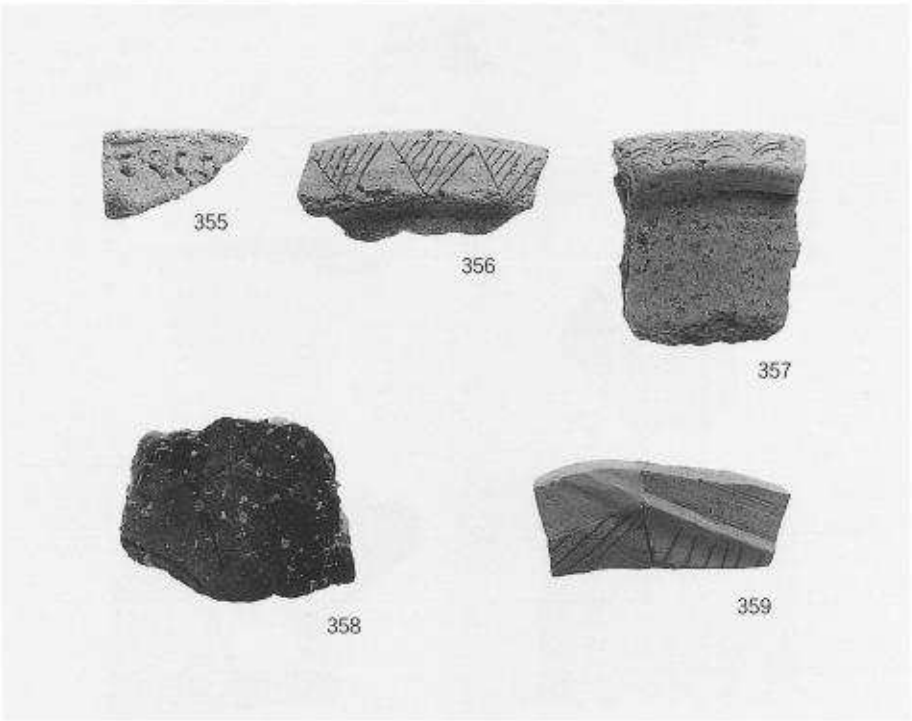
349

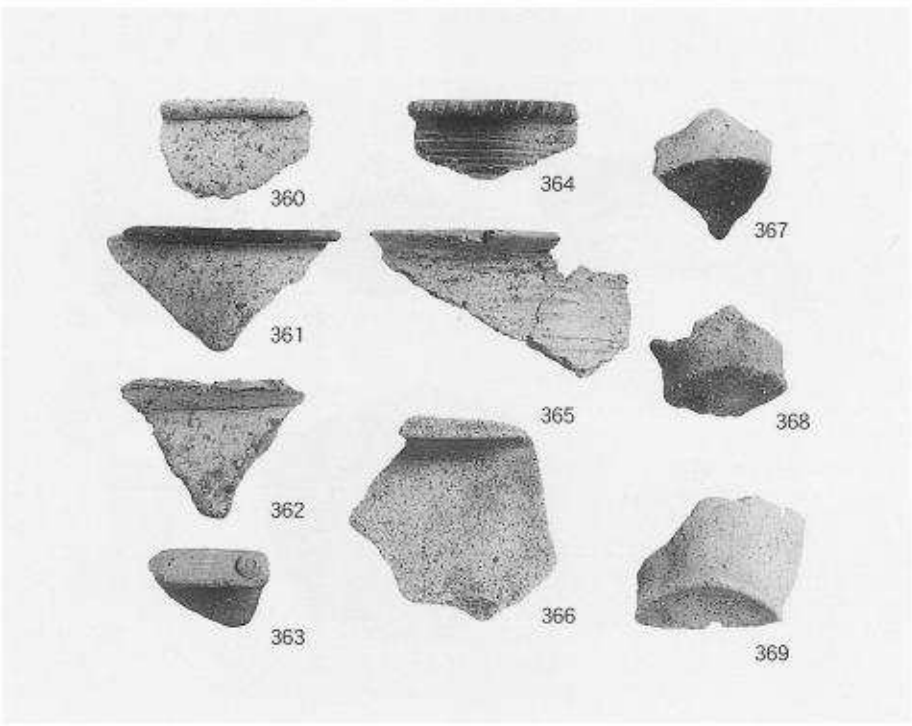
350

出土土器（27）

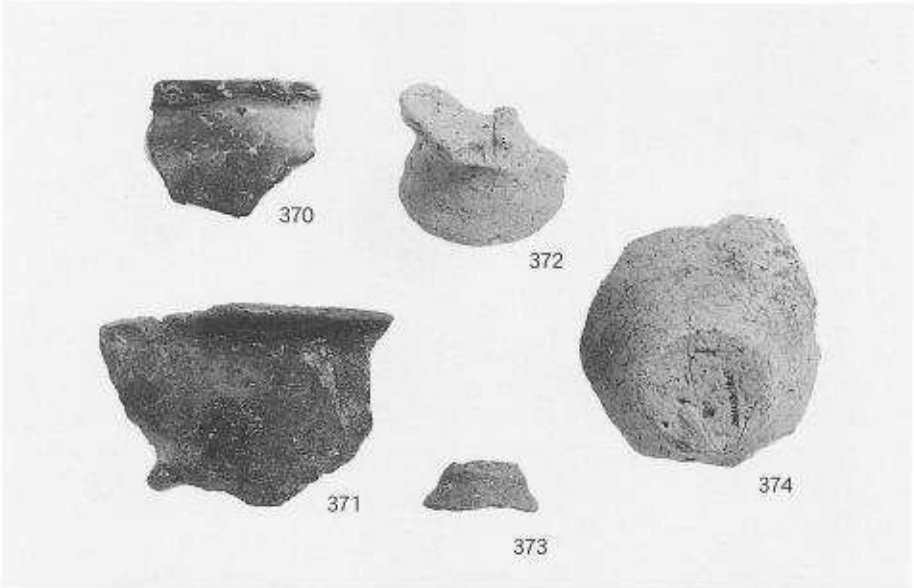

351
352

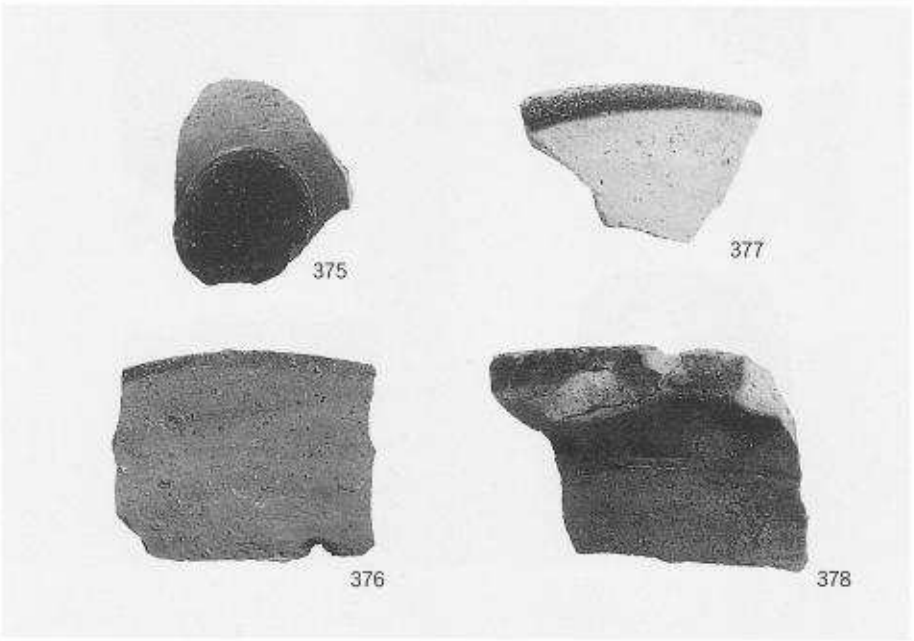

351
352

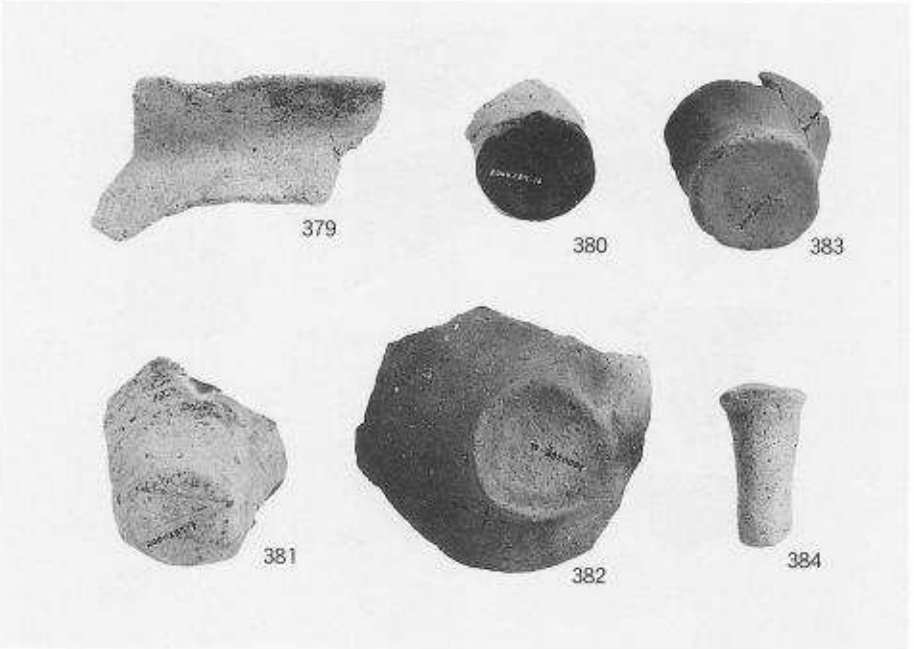

355
356
357
358
359


360
364
367
361
365
368
362
366
363
369

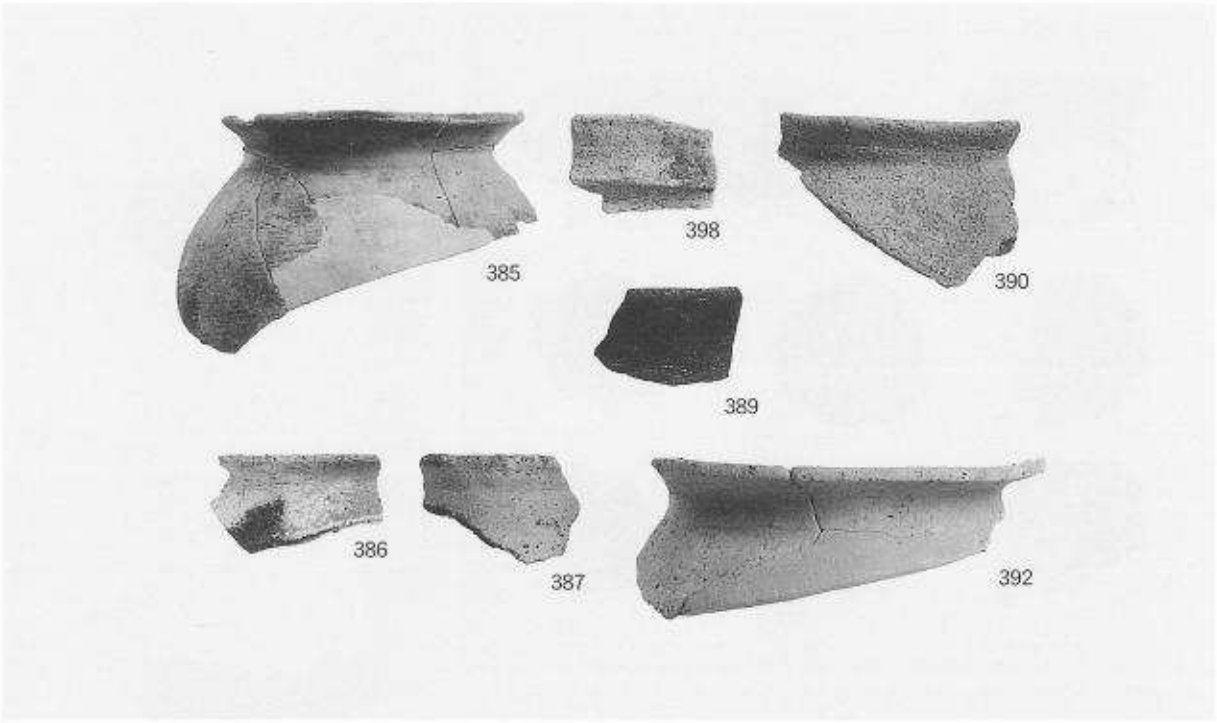
出土土器（28）

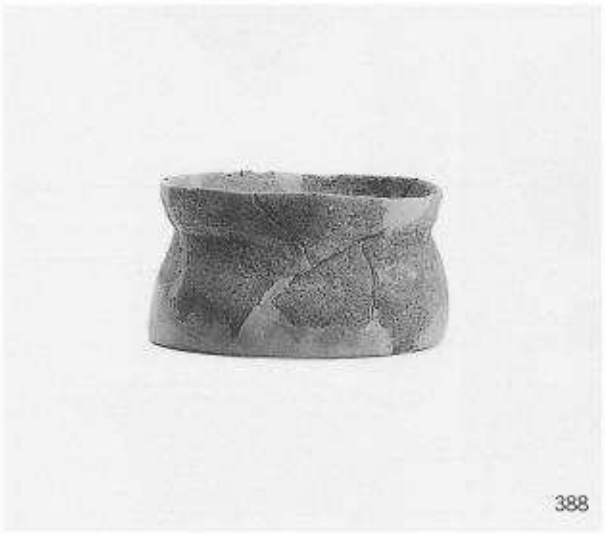


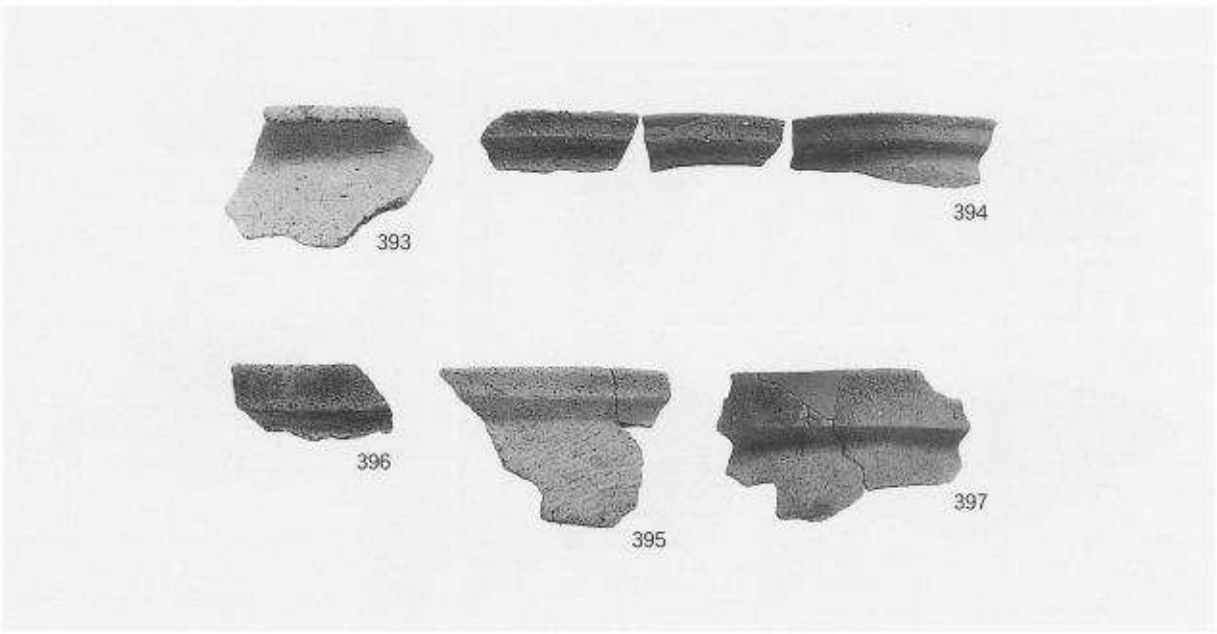




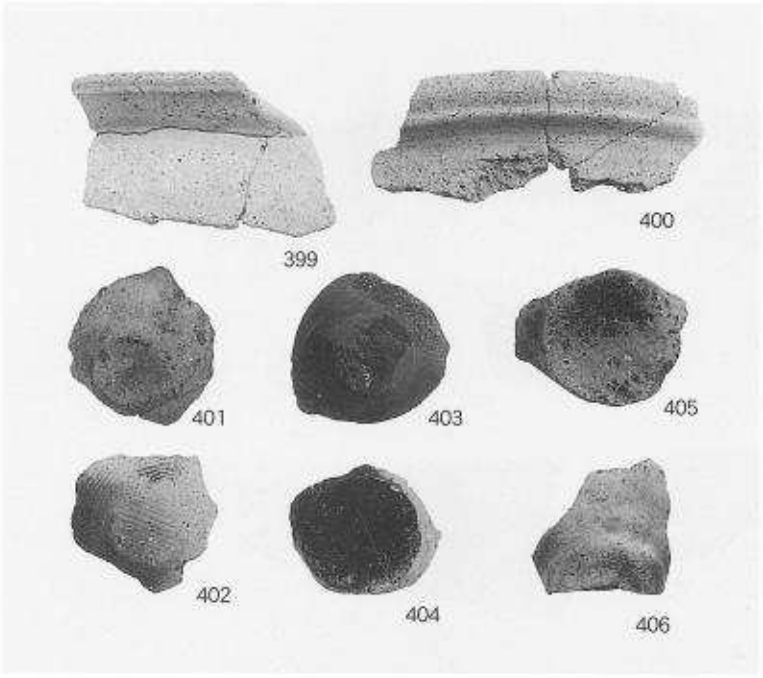
出土土器（29）



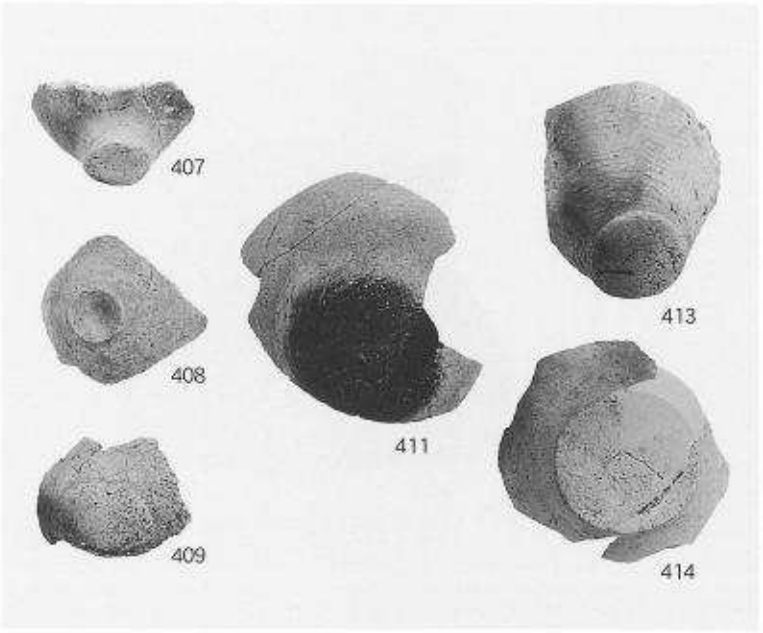




出土土器（30）

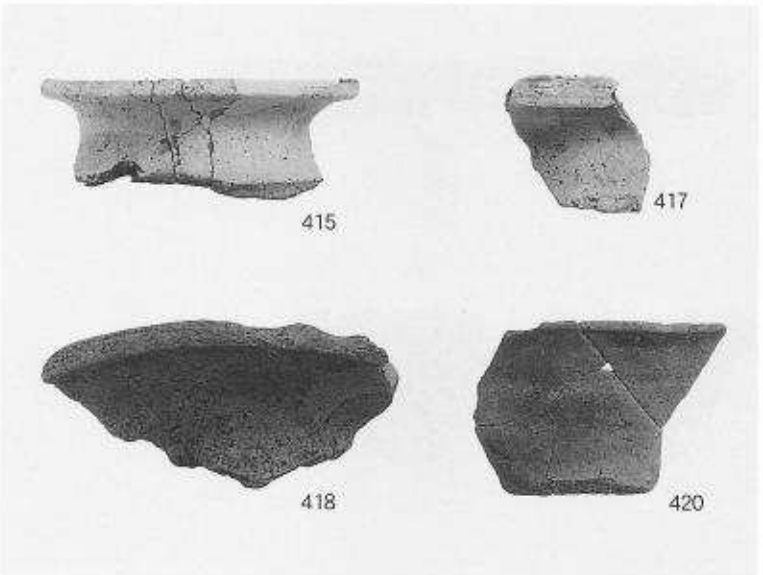

399
400
401
403
405
402
404
406

410


407
408
409
411
413
414

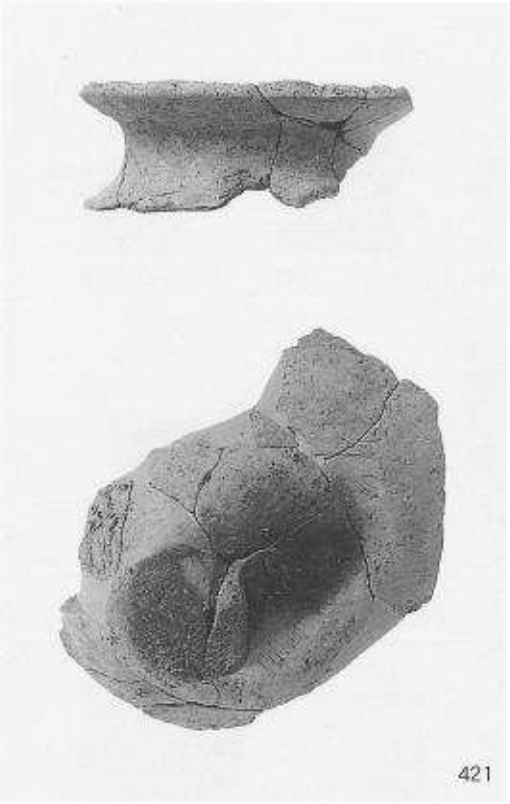
412

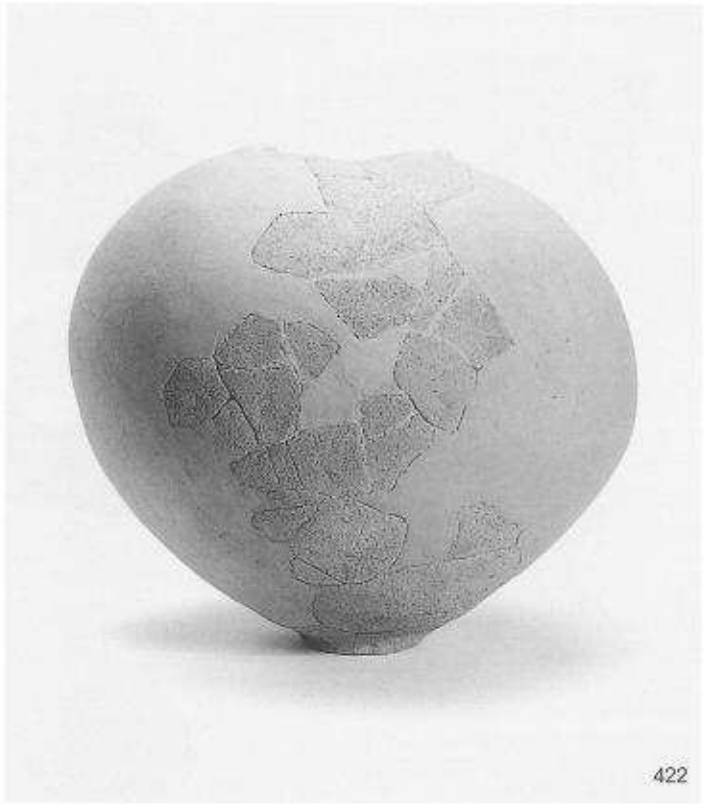
416


415
417
418
420

419

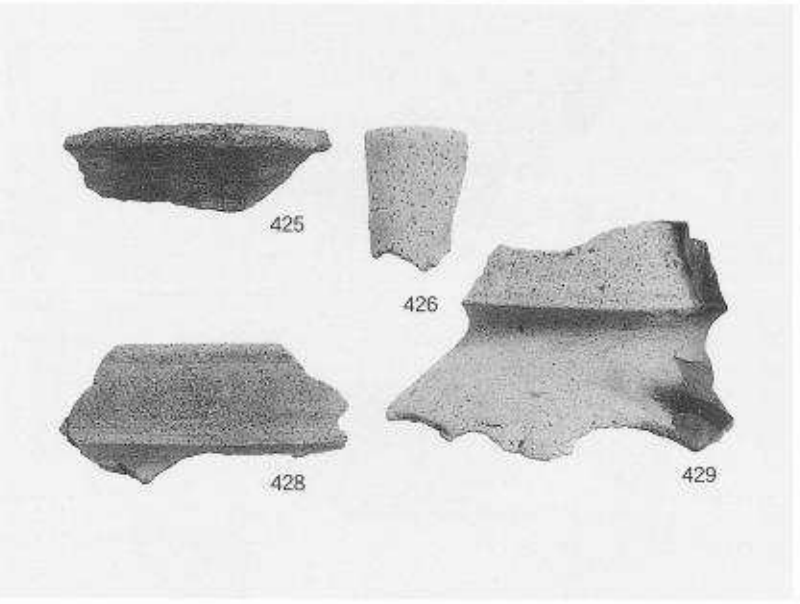
出土土器（31）


421


422

423

424


425
426
428
429

427

432

出土土器（32）

433

434

435

436

438

439

430

437

440

431

441

442

443

445

444

447

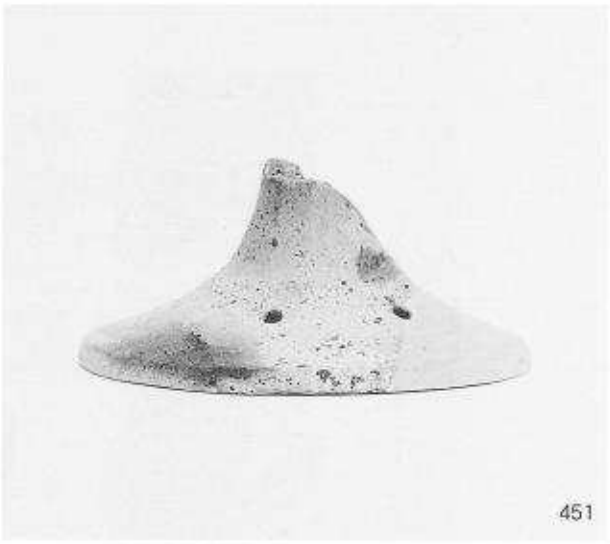
450

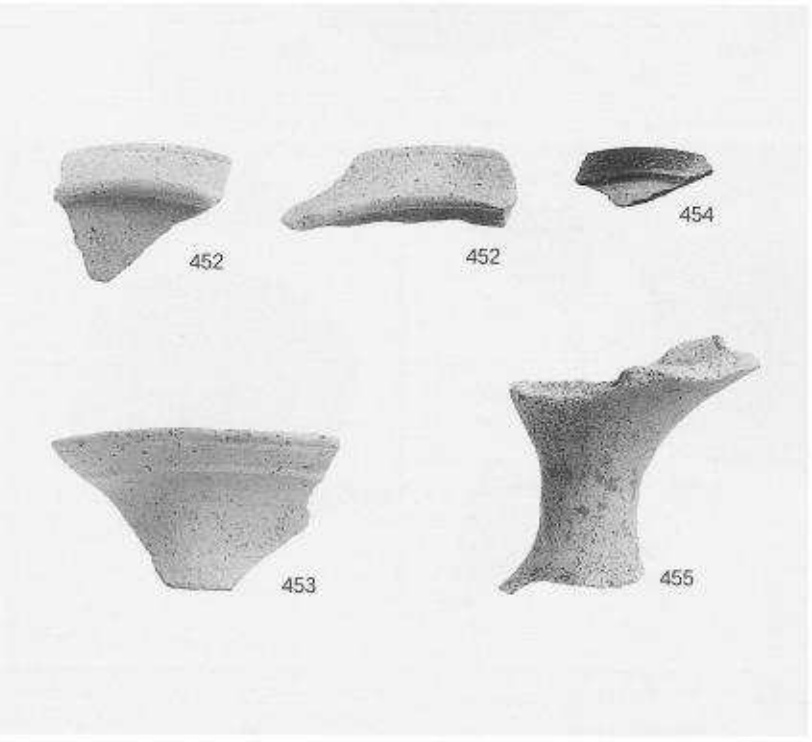
446

448

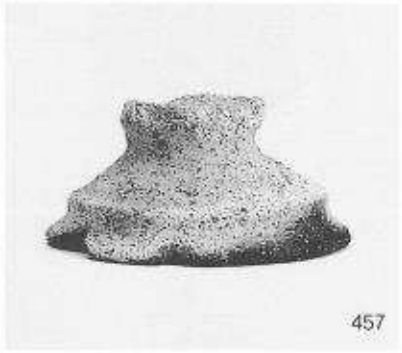
出土土器（33）

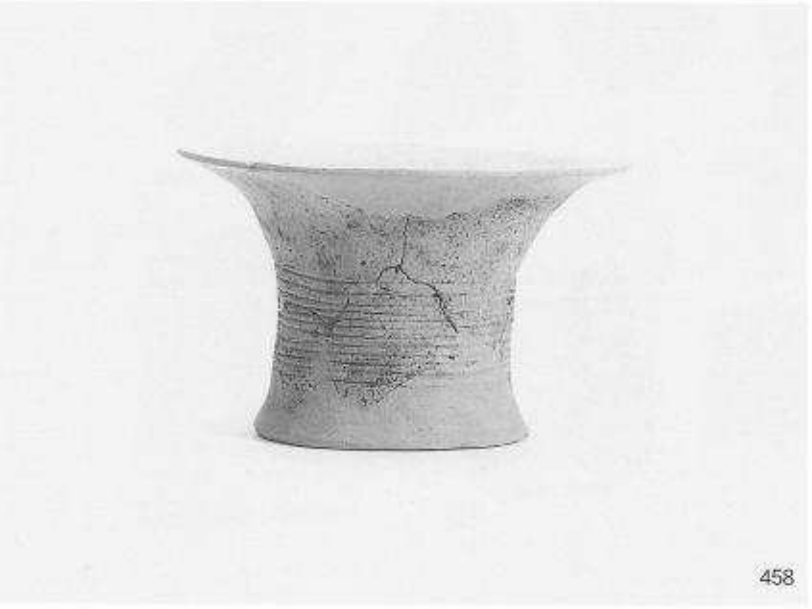
449


451


452
452
454
453
455

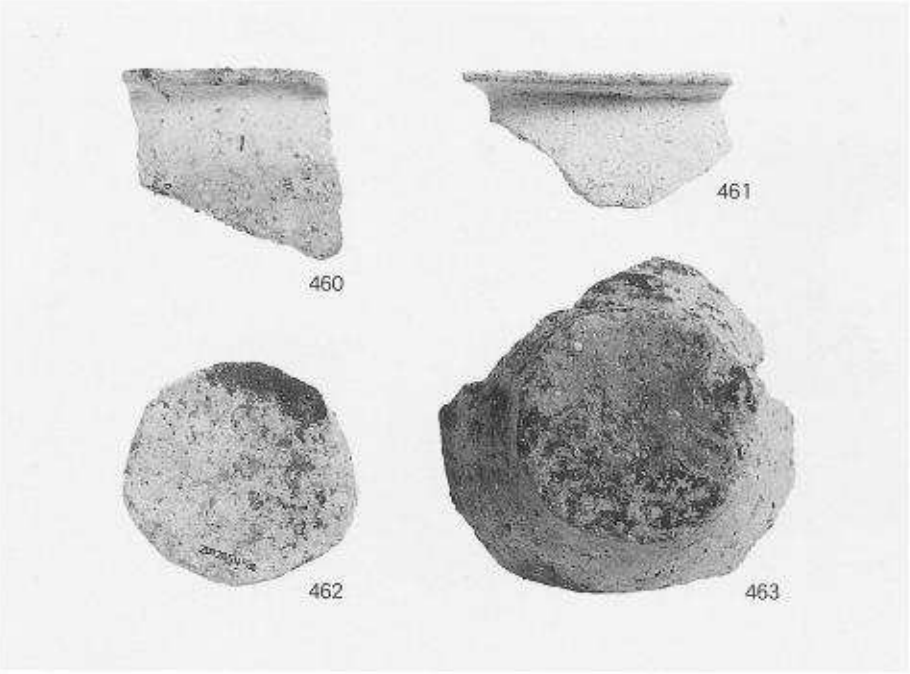
456

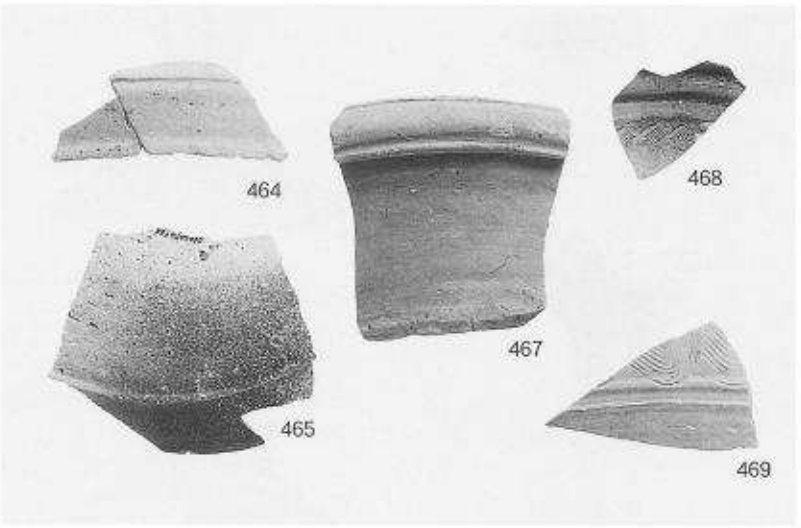

457


458

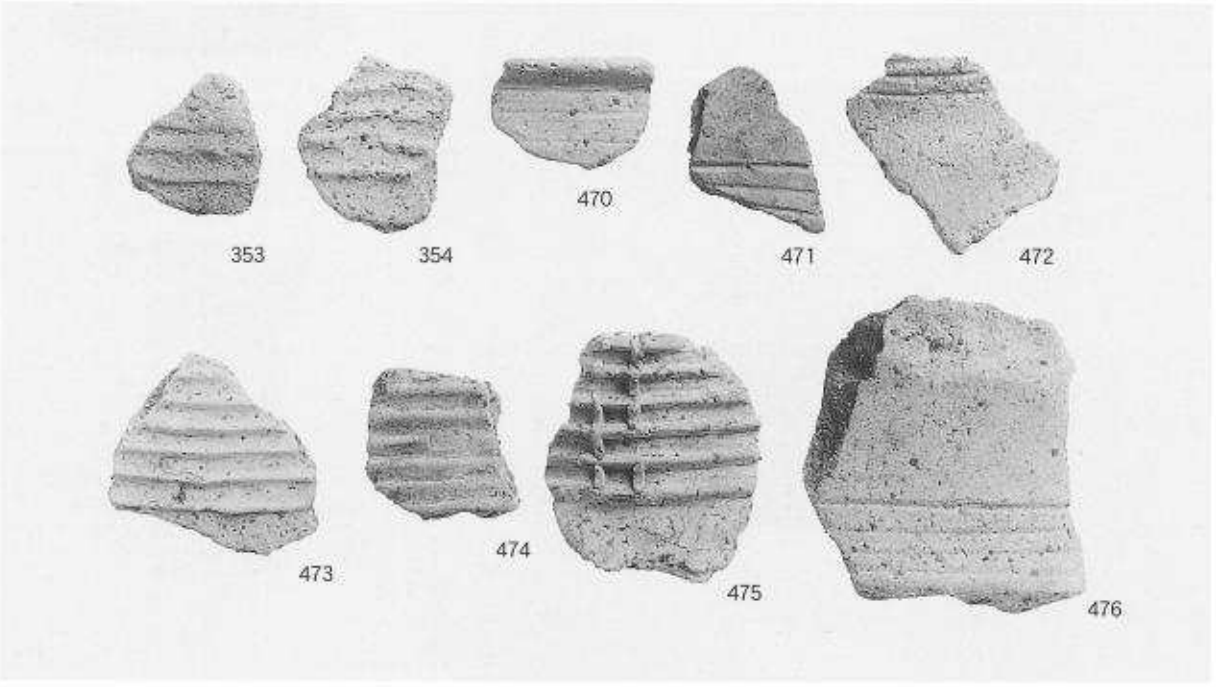
459

出土土器（34）

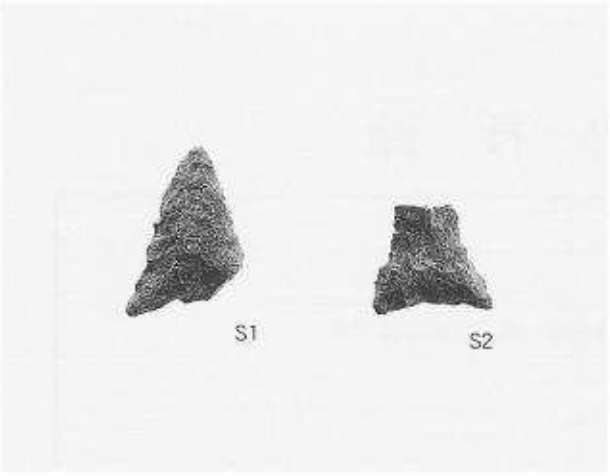

460
461
462
463

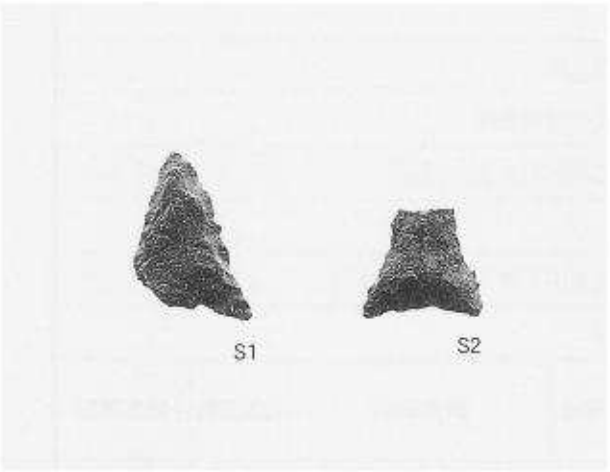

464
465
467
468
469

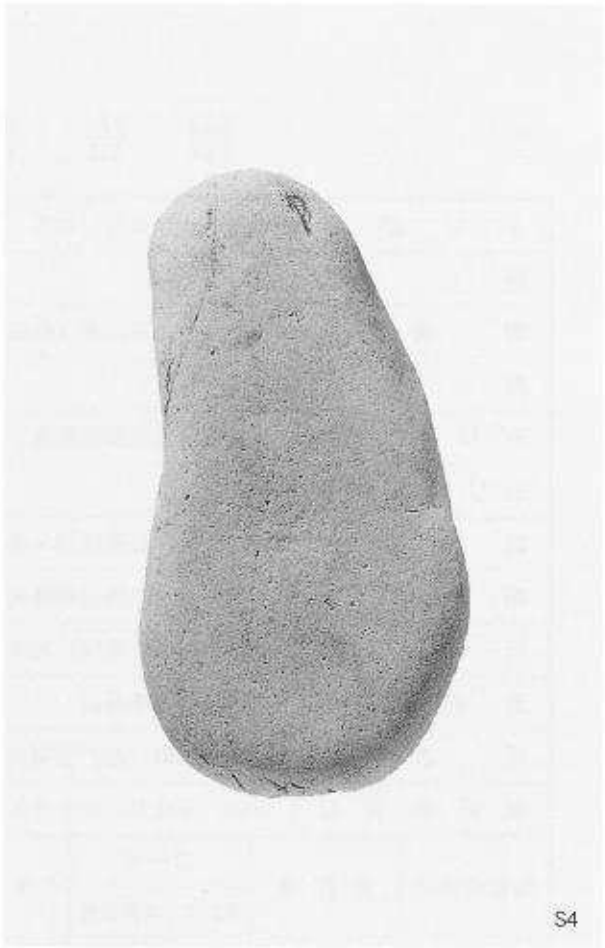
466

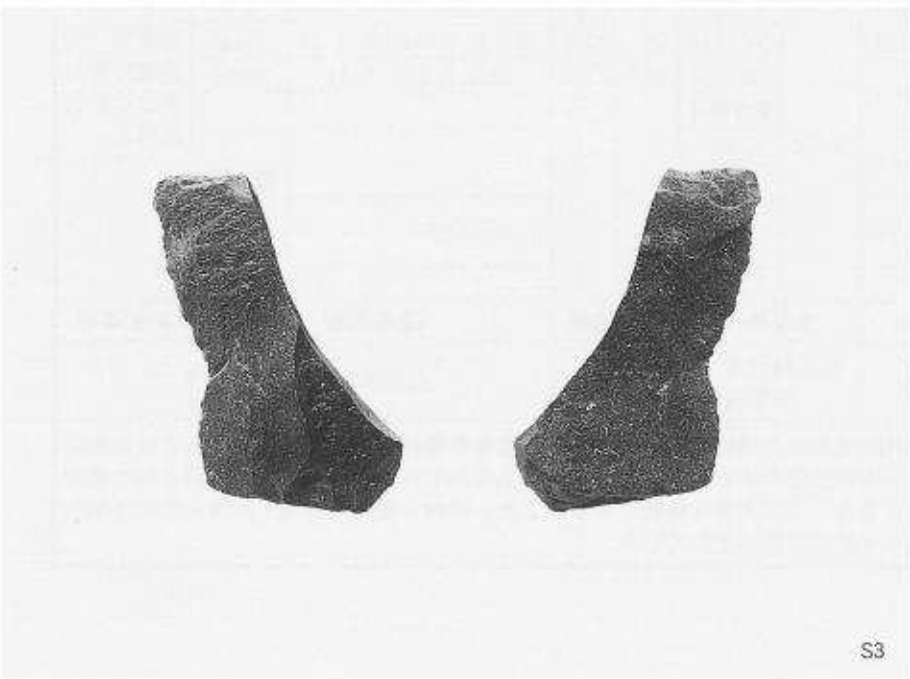

353
354
470
471
472
473
474
475
476

出土土器（35）









出土土器（36）

報告書抄録

ふりがな	いかるがいしだいせき
書名	鵤石田遺跡
副書名	（主）太子御津線（街路龍野線）都市計画街路事業
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第363冊
編著者名	渡辺　昇・長濱誠司・奥田　尚
編集機関	兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中500番地　　TEL　079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号
発行年月日	2009（平成21）年３月20日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 調査番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
確認調査	兵庫県揖保		2000287	34°	134°	2000.7.13～8.17	62㎡	（主）太子御津線（街路龍野線）都市計画街路事業
本発掘調査	郡太子町鵤		2001124	50′	34′5	2001.11.22～2002.1.10	264㎡	
			2002074	01″	6″	2002.5.21～6.11	260㎡	
			遺跡番号					
		28464	450016					
							確認	
							62㎡	
							本発掘	
							524㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鵤石田遺跡	集落跡	弥生時代末～古墳時代	溝	古式土師器	

要約

弥生時代終末から古墳時代初頭の庄内式土器を多量に出土する遺跡であることが確認された。庄内式土器の中には河内からの搬入品もあるが、多くは地元で焼成された播磨産のものであることが大きな特徴である。また、河内・讃岐・吉備・山陰・丹波各地から運ばれた土器が多数出土している。

兵庫県文化財調査報告 第363冊

揖保郡太子町

鵤石田遺跡

－（主）太子御津線（街路龍野線）都市計画街路事業に伴う
発掘調査報告書Ⅱ－

平成21年3月20日発行

編　集　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
〒675-0142　加古郡播磨町大中500
TEL 079-437-5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通5丁目10－1

印　刷　株式会社ソーエイ
〒673-0898　明石市樽屋町6－6